鹿角市文化財調査資料33

大湯環状列石

周辺遺跡発掘調査報告書(4)

1988－3

秋田県鹿角市教育委員会

財政課

序

特別史跡「大湯環状列石」及びその周辺の解明を目的に継続してきました大湯環状列石周辺遺跡の発掘調査も、本年で4年目となりました。

本年度は二ヵ所を調査しましたが、万座環状列石北西側隣接地からは、類例の少ない環状配石遺構、環状壁柱穴列を有する建物跡、竪穴遺構他多数の遺構が検出され、多量の遺物の出土がありました。同区南東側より検出された建物跡、フラスコ状土壙等は、万座環状列石と密接な関連を有する規則的な配列となっており、環状列石の性格、構造を考える上での貴重な資料と言えます。

本書は、これらの調査結果をまとめたものであります。今後の大湯環状列石の保存と活用、学術研究の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査に関しまして御指導、御協力いただいた関係機関、各位に厚く御礼申し上げます。

昭和63年3月

鹿角市教育委員会

教育長 柳 沢 源 一

例　　言

1．本報告書は、昭和62年度に国庫補助金を得て実施した大湯環状列石周辺遺跡第4次発掘調査の報告書である。本調査概要については機会あるごとに発表してきたが、本報告書を正式なものとする。

2．本報告書の執筆は、調査員、調査補助員が分担し、文責は各々の文末に明記した。

3．資料の鑑定並びに同定等は下記のとおり依頼した。

火山灰の螢光X線分析	奈良教育大学教授	三辻利一
胎土分析	奈良教育大学教授	三辻利一
樹種同定	奈良国立文化財研究所	光谷拓実
黒色漆膜及び赤色顔料の分析	岩手県立博物館	赤沼英男
放射性炭素年代測定	日本アイソトープ協会	
種子同定	鹿角市立尾去沢中学校	成田典彦
石器類石質鑑定	秋田県立十和田高等学校	鎌田健一

4．土層、土器などの色調の記載には「新版　標準土色帖」(日本色彩研究所) を使用した。

5．遺物の実測・採拓・トレース等の整理作業は調査員、調査補助員が行なった。

6．本報告書に収載した図版のスケールについては各々に示した。なお、写真図版は任意の縮尺とした。

7．本報告書の文中において用語の主たるものは統一するように努めたが、数度にわたり使用しているものは簡略している場合もある。

8．図版・表等で下記のような記号やスクリーン・トーンを使用した。

ＳＩ…竪穴住居跡　ＳＴ…竪穴遺構　ＳＢ…建物跡　ＳＫ(F)…フラスコ状土壙
ＳＫ(T)…Ｔピット　ＳＫ…土壙　ＳＸ(S)…配石遺構、集石遺構　ＳＸ(O)…石囲炉
ＳＸ(G)…礫群　ＳＸ(U)…埋設土器遺構　ＳＸ(F)…焼土遺構
…遺構確認面以下の土層　…焼土　…柱痕　…石の熱変部分

9．発掘調査・報告書作成にあたっては、下記の方々から御指導・御助言をいただきました。記して感謝の意を表します。（敬称略、順不同）

河原純之、佐久間豊（文化庁記念物課）、佐原　眞（奈良国立文化財研究所）、加納　博（秋田大学）、村越　潔（弘前大学）、中野益男（帯広畜産大学）、鈴木克彦（青森県教育庁文化課）、三宅徹也、成田滋彦（青森県埋蔵文化財センター）、葛西　勵、高橋　潤（青森山田高等学校）、本堂寿一（北上市立博物館）、岩見誠夫、大野憲司、桜田　隆（秋田県埋蔵文化財センター）、板橋芳範（大館市史編さん室）

本　文　目　次

序

例言

本文目次

図版・PL・表目次

第Ⅰ章　遺跡の環境

1．遺跡の位置と立地 …… 1

2．遺跡の層序 …… 1

第Ⅱ章　調査の概要

1．調査要項 …… 2

2．調査の方法 …… 5

3．調査の経過 …… 5

第Ⅲ章　D区の検出遺構と出土遺物

（縄文時代）

1．配石遺構 …… 7

(1) 環状配石遺構 …… 7

(2) 立石遺構 …… 10

(3) その他の配石遺構 …… 11

2．集石遺構 …… 19

3．礫　群 …… 20

4．建物跡(柱穴状ピット群) …… 23

(1) 北西部の建物跡と
柱穴状ピット群 … 23

(2) 南東部の建物跡と
柱穴状ピット群 … 29

5．石囲炉 …… 56

6．焼土遺構 …… 58

7．竪穴遺構 …… 65

8．土　壙 …… 70

(1) Tピット …… 70

(2) フラスコ状土壙 …… 71

(3) 土　壙 …… 87

9．埋設土器遺構 …… 109

10．遺構外出土遺物 …… 113

(1) 土　器 …… 113

(2) 石　器 …… 130

(3) 土製品・石製品 …… 141

第Ⅳ章　D区の検出遺構と出土遺物

（歴史時代）

1．竪穴住居跡 …… 148

2．土　壙 …… 152

3．遺構外出土遺物 …… 152

第Ⅴ章　E区の検出遺構と出土遺物

1．土　壙 …… 153

2．遺構外出土遺物 …… 153

(1) 土　器 …… 153

(2) 石　器 …… 154

第Ⅵ章　自然科学的調査

1．火山灰、粘土、縄文土器の
蛍光X線分析 … 155

2．赤色顔料並びに樹脂状凝固物に
ついて … 157

3．植物遺体について …… 160

第Ⅶ章　分析と考察

1．環状配石遺構について …… 163

2．建物跡（柱穴状ピット群）
について … 164

第Ⅷ章　調査のまとめ …… 171

図版・PL・表目次

図版目次

第1図　調査区と周辺の地形 …… 3
第2図　調査区基本層序図 …… 4
第3図　D区遺構配置図 …… 6
第4図　環状配石遺構実測図(1) …… 8
第5図　環状配石遺構実測図(2) …… 9
第6図　立石遺構実測図 …… 11
第7図　配石遺構実測図(1) …… 12
第8図　配石遺構実測図(2) …… 14
第9図　配石遺構出土土器実測図 …… 16
第10図　環状配石遺構出土土器拓影図 …… 16
第11図　配石遺構出土土器拓影図 …… 17
第12図　環状配石、配石遺構出土石器実測図 … 18
第13図　配石遺構出土土製品・石製品実測図 … 19
第14図　集石遺構実測図 …… 20
第15図　集石遺構出土土器拓影図 …… 20
第16図　礫群実測図(1) …… 21
第17図　集石遺構出土石器、土製品実測図 … 22
第18図　礫群実測図(2) …… 22
第19図　建物跡実測図(1) …… 24
第20図　建物跡柱穴状ピット断面図(1) …… 25
第21図　建物跡出土土器拓影図(1) …… 27
第22図　建物跡出土土器拓影図(2) …… 28
第23図　建物跡出土石器(1)、土製品・石製品実測図(1) …… 28
第24図　建物跡実測図(2) …… 29
第25図　南東部建物跡柱穴状ピット配置図 … 30
第26図　建物跡実測図(3) …… 37
第27図　建物跡実測図(4) …… 38
第28図　建物跡実測図(5) …… 41
第29図　建物跡実測図(6) …… 42
第30図　建物跡柱穴状ピット断面図(2) …… 43
第31図　建物跡柱穴状ピット断面図(3) …… 44
第32図　建物跡柱穴状ピット断面図(4) …… 45
第33図　建物跡柱穴状ピット断面図(5) …… 46
第34図　建物跡出土土器実測図 …… 49
第35図　建物跡出土土器拓影図(3) …… 50
第36図　建物跡出土土器拓影図(4) …… 51
第37図　建物跡出土土器拓影図(5) …… 52
第38図　建物跡出土土器拓影図(6) …… 53
第39図　建物跡出土土器拓影図(7) …… 54
第40図　建物跡出土土器拓影図(8)、石器実測図(2) … 55
第41図　建物跡出土土製品・石製品実測図(2) … 56
第42図　石囲炉実測図 …… 57
第43図　石囲炉出土土器実測図 …… 57
第44図　焼土遺構実測図(1) …… 59
第45図　焼土遺構実測図(2) …… 60
第46図　焼土遺構出土土器実測図 …… 62
第47図　焼土遺構出土土器拓影図 …… 63
第48図　焼土遺構出土石器、土製品実測図 … 64
第49図　竪穴遺構実測図 …… 65
第50図　竪穴遺構出土土器実測図 …… 66
第51図　竪穴遺構出土土器拓影図(1) …… 67
第52図　竪穴遺構出土土器拓影図(2) …… 68
第53図　竪穴遺構出土石器実測図 …… 69
第54図　竪穴遺構出土土製品・石製品実測図 … 70
第55図　Tピット、フラスコ状土壙実測図(1) 72
第56図　フラスコ状土壙実測図(2) …… 74
第57図　Tピット出土土器拓影図 …… 78
第58図　フラスコ状土壙出土土器実測図(1) … 78
第59図　フラスコ状土壙出土土器実測図(2) … 79
第60図　フラスコ状土壙出土土器実測図(3) … 80
第61図　フラスコ状土壙出土土器拓影図(1) … 81
第62図　フラスコ状土壙出土土器拓影図(2) … 82
第63図　フラスコ状土壙出土土器拓影図(3) … 83
第64図　フラスコ状土壙出土土器拓影図(4) … 84
第65図　フラスコ状土壙出土石器実測図(1) … 84
第66図　フラスコ状土壙出土石器実測図(2) … 85
第67図　フラスコ状土壙出土土製品・石製品実測図(1) … 85
第68図　フラスコ状土壙出土土製品・石製品実測図(2) … 86
第69図　土壙実測図(1) …… 91
第70図　土壙実測図(2) …… 96
第71図　土壙実測図(3) …… 98
第72図　土壙出土土器実測図(1) …… 99
第73図　土壙出土土器実測図(2) …… 100
第74図　土壙出土土器実測図(3) …… 101
第75図　土壙出土土器拓影図(1) …… 102
第76図　土壙出土土器拓影図(2) …… 103
第77図　土壙出土土器拓影図(3) …… 104
第78図　土壙出土土器拓影図(4) …… 105
第79図　土壙出土土器拓影図(5) …… 106
第80図　土壙出土石器実測図(1) …… 107

PL目次

PL1　D区全景、南東部遺構群 …… 174
PL2　D区北西部遺構群、第202号環状配石遺構 … 175
PL3　第207、220号環状配石遺構 …… 176
PL4　第216、217号立石遺構、第204、206、219号配石遺構 … 177
PL5　第214、215号集石遺構、第201号礫群、第201、202、204号石囲炉 …… 178
PL6　第201～220号建物跡 …… 179
PL7　第203～214、216、217号建物跡、ピット断面、作業風景 …… 180
PL8　第209、210号焼土遺構、第201、202号竪穴遺構 … 181
PL9　第210、235号Tピット、第217号フラスコ状土壙、第207、208、216号土壙 …… 182
PL10　第220、223、229、231、255、258号土壙、第201、202号埋設土器遺構 …… 183
PL11　第205～207号埋設土器遺構、第201号竪穴住居跡 …… 184
PL12　E区の調査 …… 185
PL13　D区遺構内出土土器(1) …… 186
PL14　D区遺構内出土土器(2) …… 187
PL15　D区遺構内出土土器(3) …… 188
PL16　D区遺構外出土土器(1) …… 189
PL17　D区遺構外出土土器(2) …… 190
PL18　D区遺構外出土土器(3) …… 191
PL19　D区遺構外出土土器(4) …… 192
PL20　D区遺構外出土土器(5) …… 193
PL21　D区遺構内・外出土石器(1) …… 194
PL22　D区遺構内・外出土石器(2) …… 195
PL23　D区遺構内・外出土石器(3) …… 196
PL24　D区遺構内・外出土石器(4)、土製品・石製品(1) …… 197
PL25　D区遺構内・外出土土製品・石製品(2) …… 198
PL26　D区遺構内・外出土土製品・石製品(3) …… 199
PL27　D区遺構内・外出土土製品・石製品(4)、歴史時代の遺物、E区石器 … 200
PL28　土器内付着凝固物、黒色樹脂塊 … 201
PL29　遺構内出土堅果類 …… 202

表　目次

第1表　第201、202号建物跡柱穴状ピット一覧表 …… 26
第2表　柱穴状ピット一覧表 …… 31～34
第3表　南東部の建物跡一覧表 …… 47・48
第4表　出土石器一覧表 …… 130
第5表　出土土製品一覧表 …… 141
第6表　出土石製品一覧表 …… 141
第7表　赤色顔料・樹脂状凝固物分析試料 … 157
第8表　植物遺体の出土数 …… 160

第81図　土壙出土石器実測図(2) …… 108
第82図　土壙出土土製品・石製品実測図 … 109
第83図　埋設土器遺構実測図 …… 110
第84図　埋設土器実測図(1) …… 111
第85図　埋設土器実測図(2) …… 112
第86図　遺構外出土土器実測図(1) …… 120
第87図　遺構外出土土器実測図(2) …… 121
第88図　遺構外出土土器実測図(3) …… 122
第89図　遺構外出土土器実測図(4) …… 123
第90図　遺構外出土土器実測図(5) …… 124
第91図　遺構外出土土器実測図(6) …… 125
第92図　遺構外出土土器拓影図(1) …… 126
第93図　遺構外出土土器拓影図(2) …… 127
第94図　遺構外出土土器拓影図(3) …… 128
第95図　遺構外出土土器拓影図(4) …… 129
第96図　遺構外出土石器実測図(1) …… 134
第97図　遺構外出土石器実測図(2) …… 135
第98図　遺構外出土石器実測図(3) …… 136
第99図　遺構外出土石器実測図(4) …… 137
第100図　遺構外出土石器実測図(5) …… 138
第101図　遺構外出土石器実測図(6) …… 139
第102図　遺構外出土石器実測図(7) …… 140
第103図　遺構外出土土製品実測図(1) …… 144
第104図　遺構外出土土製品実測図(2) …… 145
第105図　遺構外出土石製品実測図(1) …… 147
第106図　遺構外出土石製品実測図(2) …… 148
第107図　竪穴住居跡実測図(1) …… 150
第108図　竪穴住居跡カマド実測図 …… 150
第109図　竪穴住居跡実測図(2) …… 151
第110図　土壙実測図 …… 152
第111図　竪穴住居跡出土土器、遺構外出土遺物実測図 … 153
第112図　E区グリッド配置図、遺構配置図 … 154
第113図　土壙実測図 …… 154
第114図　遺構外出土土器拓影図 …… 154
第115図　遺構外出土石器実測図 …… 154
第116図　大湯環状列石周辺遺跡出土火山灰のRb－Sr分布図 … 155
第117図　大湯環状列石周辺遺跡出土火山灰のK－Ca分布図 … 155
第118図　大湯環状列石周辺遺跡出土火山灰のFe量 …… 156
第119図　大湯環状列石周辺遺跡の粘土、縄文土器のRb－Sr分布図 … 156
第120図　大湯環状列石周辺遺跡の粘土、縄文土器のK－Ca分布図 … 156
第121図　大湯環状列石周辺遺跡の粘土、縄文土器のFe量 … 157
第122図　赤色顔料のX線回析像 …… 158
第123図　土器内付着樹脂状炭化物質の赤外吸収スペクトル … 159

付図1　土器分布区 …… 113
付図2　環状配石遺構規模・方位比較図 …… 163
付図3　建物跡柱列模式図 …… 167

第Ⅰ章　遺跡の環境

1．遺跡の位置と立地

大湯環状列石は、秋田県鹿角市十和田大湯字野中堂、字万座に所在する。同遺跡およびその周辺遺跡ののる台地は、大湯川と豊真木沢川によってつくられた南西方向に延びる長さ5.6km幅0.5～1km、標高144～183mの舌状台地で、通称「風張台地」と呼ばれている。遺跡は、この台地のほぼ中央、一本木、寺坂両集落の中間に位置し、ＪＲ花輪線十和田南駅の北東約3kmの地点である。

本年度の調査区の一つであるＤ区は、万座環状列石の北西側隣接地で、列石外帯際から北西側台地縁辺まで延ばした細長い発掘区である。現地表面はほぼ平坦で、栗、桐畑として利用されている。Ｅ区は周辺遺跡の北東端で、万座環状列石外帯から270～470mを測る。野中堂環状列石東側の小沢がＥ区にまで延びており、現地表面でも本発掘区南部にその痕跡を残している。本発掘区は畑地として利用されている。

2．遺跡の層序

従来どおり、基本的にはⅠ～Ⅴ層に分層、各層の細分にあたってはＤ区、Ｅ区別個のものとした。

第Ⅰ層は大湯浮石層までの堆積層で、Ｄ区では16～32cmを測る。Ｅ区はかなりの深浅がありＥ区中央部のＺＫ－21グリッドでは104cmを測る。東部ＺＤ－31グリッド付近において、Ⅰ層中に火山灰層を確認したが、これは大湯浮石の二次堆積物と考えられる（第Ⅵ章1参照）。

第Ⅱ層の大湯浮石層は、Ｄ区北西端、Ｅ区西端の微高地を除くほぼ全域で観察された。5～20cmの層厚があり、粒子の粗細、色調、浮石の含有量から3層（Ⅱa、Ⅱb、Ⅱc層）に細分された。歴史時代の遺構は本層前後において検出されている。

第Ⅲ層は大湯浮石層下から地山直上の暗褐色土層までの黒色または黒褐色を呈する土層である。Ｄ、Ｅ区とも本層は4層（Ⅲa～Ⅲd層）に細分される。Ｄ区の配石遺構はⅡ～Ⅲb層において露頭、その全容及び下部土壙はⅢb層下位において確認されている。また、焼土遺構はⅢb～Ⅲd層上面、建物跡はⅢc層下位～Ⅲd層上面、土壙、竪穴遺構はⅢd層上面にて検出されている。本層は遺物包含層で、特にⅢb層からの出土が多い。

第Ⅳ層は地山（下位火山灰）直上の層で、暗褐色を呈し、若干粘性があり、しまりのある層である。

第Ⅴ層は申ヶ野（さるがの）火山灰と考えられる黄褐色を呈する火山灰層である。Ｄ区の遺構のほとんどは、本層まで掘り込み、底面としている。なお、本報告書では、本層をⅤ層以外に下位火山灰、地山と表現している。

（秋元信夫）

第Ⅱ章　調査の概要

1．調査要項

1．遺 跡 名　　大湯環状列石周辺遺跡

2．調査目的　　万座環状列石近傍の遺構の配置の解明（D区）及び周辺遺跡北東部の遺構の有無の確認（E区）を主目的とする。

3．調査地、発掘面積

D区	鹿角市十和田大湯字万座26他	1,172㎡
E区	鹿角市十和田大湯字万座45他	1,175㎡

4．調査期間

発掘調査	昭和62年５月６日～62年10月17日
整理・報告書作成	昭和62年10月19日～63年３月31日

5．調査主体者　　鹿角市教育委員会

6．調査担当者　　社会教育課（主任　秋元信夫）

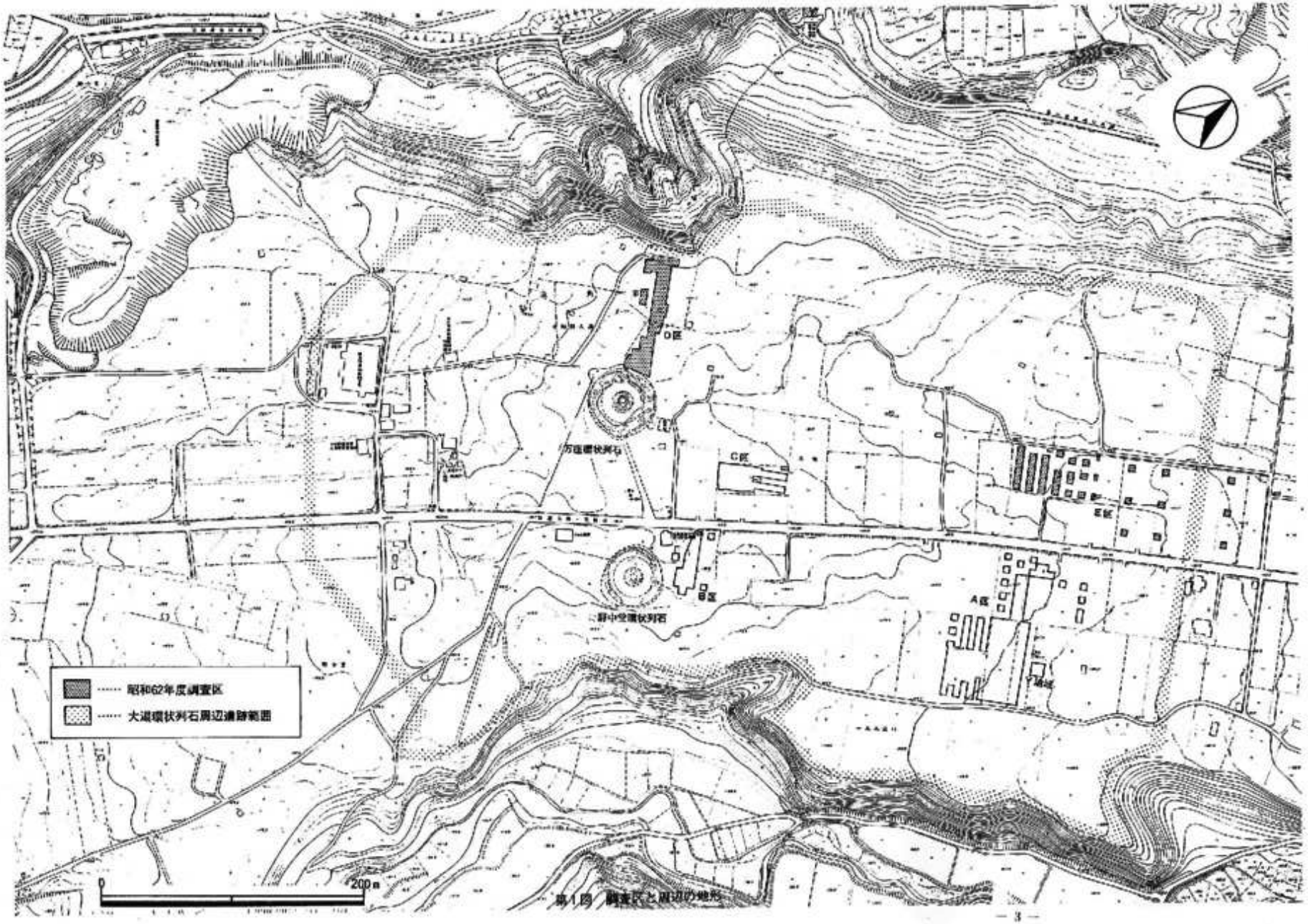
7．調査参加者

調査指導員	宮埜泰時（秋田県教育庁文化課　学芸主事）
調 査 員	鎌田健一（秋田県立十和田高等学校　教諭）
	成田典彦（鹿角市立尾去沢中学校　教諭）
	三ヶ田俊明（小坂町立七滝小学校　教諭）
	藤井安正（鹿角市教育委員会埋蔵文化財調査員）
調査補助員	佐藤　樹、馬渕正弘、藤井富久子、立山ゆり子、大里敦子
	泉沢由美子（昭和62年５月退職）、月時キミ子（昭和62年８月退職）
作 業 員	木村千鶴江、木村ヒロ、千葉ヨリ、苗代沢ノブ、苗代沢静子
	宮沢キヨ、宮沢トミエ、柳沢勝江、柳沢栄子、柳沢恵美子
	柳沢ヤス

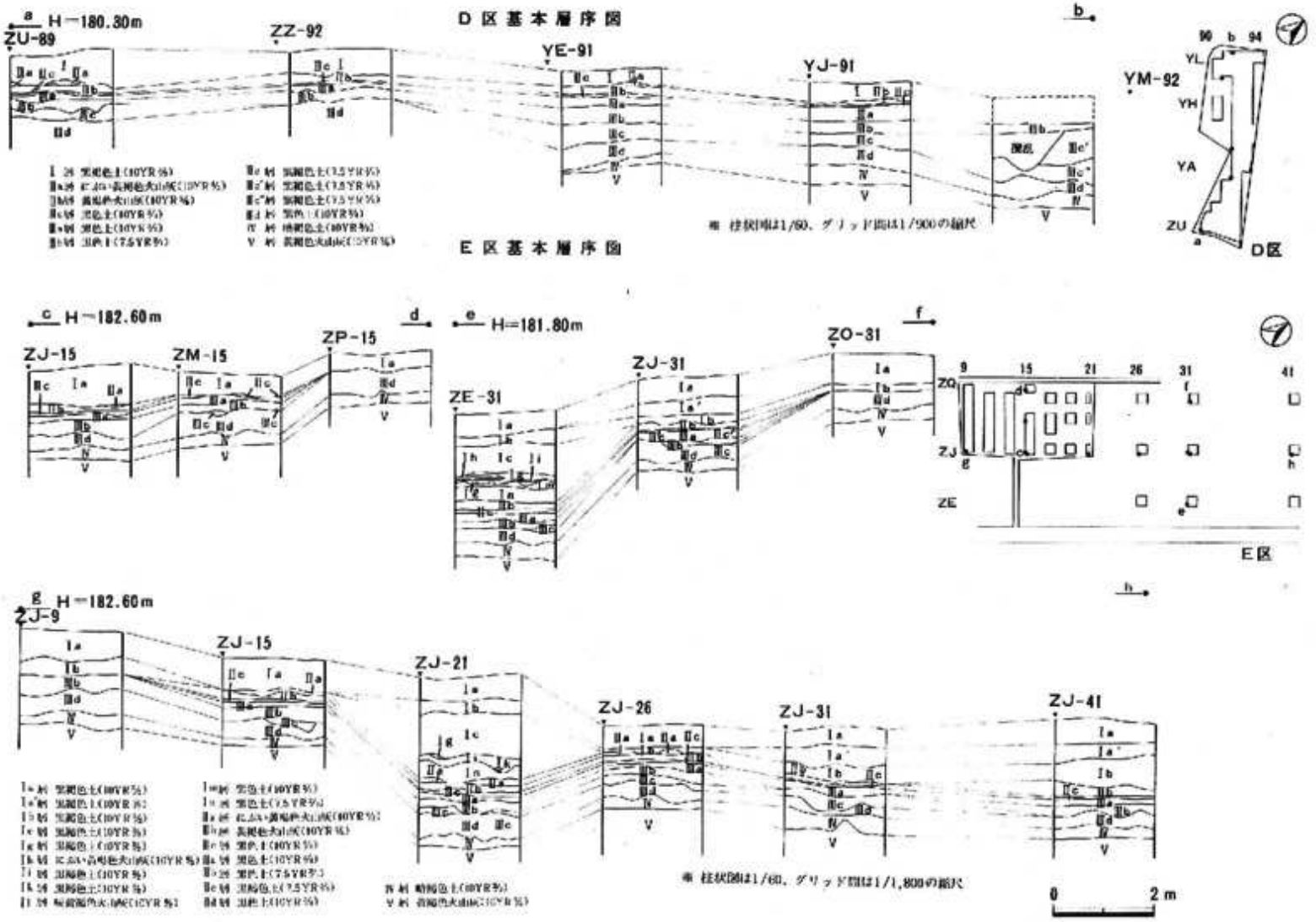
8．社会教育課

課　　長	安田孝司
課長補佐	湯沢　勉
文化財係長	柳沢悦郎（庶務担当）
主　　任	秋元信夫（調査担当）
臨事職員	須田匡人（庶　　務）

9．協力機関・協力者



第1図　調査区と周辺の地形



第2図　調査区基本層序図

文化庁記念物課、奈良国立文化財研究所、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、岩手県立博物館、奈良教育大学

松宮　貫、谷地　勲（土地所有者）、古川孝政、下村正志、馬渕義久、馬渕順次

花海義人

2．調査の方法

環状列石とその周囲に存在する遺構の位置関係を把握するため、D区は万座環状列石外帯から台地縁辺部まで細長く設定、グリッド発掘とした。またE区は遺構の有無の確認が目的であり、その対象面積も広範囲であるため、5m幅のトレンチ発掘と5×5mの坪掘りを併用した。

グリッドは第1次調査以来のN－49°－Wを基準線とする5m単位のグリッドとし、D区はC区から、E区はA区から延長した。杭番号はアルファベット（北西～南東方向）と算用数字（北東～南西方向）で付し、西隅の杭を以てグリッドを呼称した。

表土からの除去作業は全て手掘りに依る分層発掘とし、できるだけ上面での遺構確認に努めた。遺構の番号は、種類別に発見順に付したが、A、B区の遺構との混同を避けるため、D区は201号、E区は301号より用いた。ただし、調査後、配石遺構から石囲炉、建物跡柱穴状ピットから土壙へと訂正した遺構が数基あり、また整理作業段階で配石遺構、土壙を形態別に細分したので、調査時と本報告書の遺構番号には多少の異同がある。

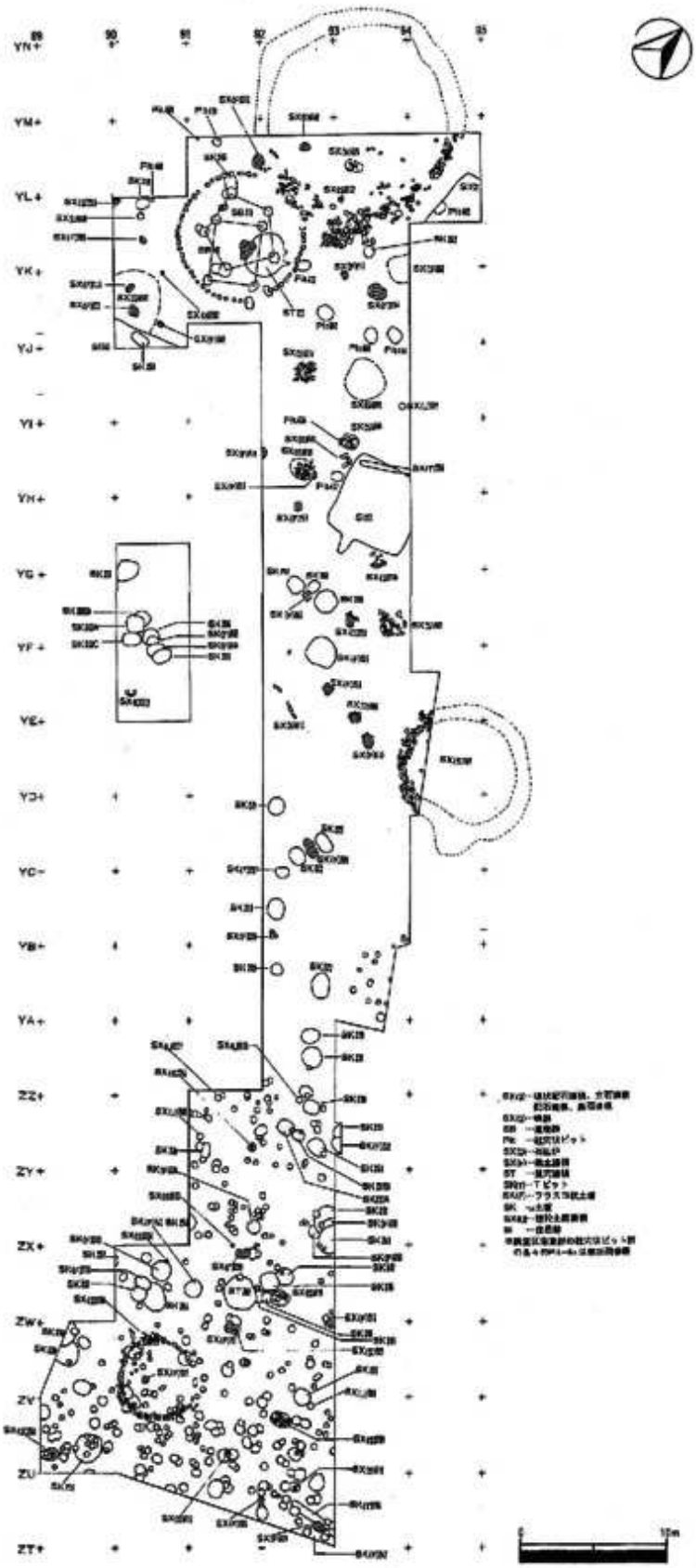
遺構精査は、竪穴住居跡、竪穴遺構については四分割法、その他の遺構は二分割法を原則とした。遺構等の実測には簡易遣り方測量を用い、配石遺構、埋設土器遺構、焼土遺構、遺物の微細図は1／10、その他は1／20の縮尺で図化した。写真は白黒、リバーサルに収めた。

3．調査の経過

5月6日、作業員への作業説明の後、E区南西端トレンチより調査を開始する。19日からは弦張部坪掘りに着手、6月13日にE区の調査を終了する。

D区の調査は6月15日より開始された。土置場の確保、調査計画作成のため、西端の2グリッドから調査を始め、以後北西端から南東端に向かって調査が続けられた。7月末には中央部までの粗掘り、遺構確認を終了、2基の環状配石遺構、建物跡他34基の遺構が確認された。8月末には粗掘をほぼ終了、北西部から中央部にかけて確認された66基中46基の遺構の精査を完了、以後中央部から南東部の遺構の精査に移行する。この間、8月10日には報道関係への中間発表、9月5日には現地説明会を開催した。9月30日、遺構再確認、実測を残し、ほとんどの作業が終了したため、予定通り作業員を打ち切り、以後担当者、調査員、補助員で残った作業を継続した。新たに確認された遺構の精査、実測、D区全体写真撮影、基本層序図作成などの全ての調査、作業が終了したのは10月17日であった。

（秋元信夫）



第3図 DK区遺構配置図

第Ⅲ章　D区の縄文時代の遺構と出土遺物

第４次調査において、D区で検出された縄文時代の遺構は多種に及んでいる。その内訳と検出数は、環状配石遺構３基、立石遺構７基、配石遺構10基、集石遺構２基、礫群３カ所、建物跡19棟、柱穴状ピット239個、石囲炉４基、焼土遺構22基、竪穴遺構２基、Ｔピット２基、フラスコ状土壙12基、土壙38基、埋設土器遺構６基である。これらに伴って遺構内、外より出土した遺物は膨大な量で、復元・図化土器159点の他に縄文土器片ダンボール箱41箱、石器871点、土製品537点、石製品64点である。このほか自然遺物として遺構内より炭化した堅果種子423点、黒色樹脂塊２点が出土した。なお、細長の石の長軸方向を繋いで環帯をなし、一部に張り出し部を有する配石遺構を環状配石遺構とした。

１．配石遺構

(1)　環状配石遺構

第202号環状配石遺構（第４図、12図１、ＰＬ２、21）

発掘区北西端のＹＩ、ＹＭ－92～94グリッドに位置し、Ⅲb層を構築面とする。構築面で一部地山が露出している箇所があるが、これは地山がマウンド状になっている為である。201号建物跡、212号焼土遺構と重複し、本遺構はいずれよりも新しい。

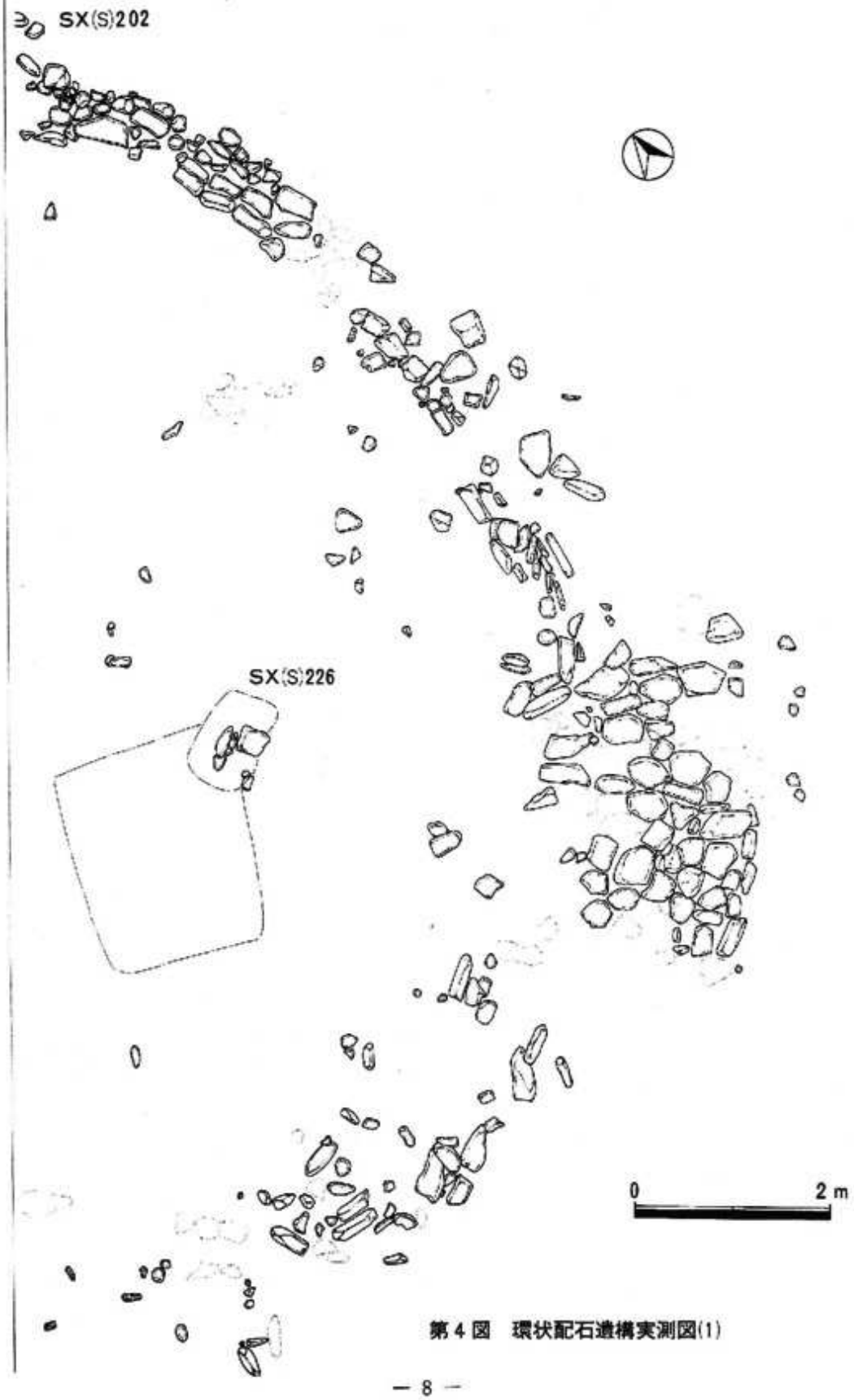
確認された石の総数は約260個を数え、49個の抜き取り痕が確認された。配石は15～55cmの細長の石の長軸方向を繋いで、３～５列に敷き並べた帯幅70～120cmの半円状を呈する。遺構北西側は未発掘であるが、ボーリング調査の結果、環状を呈すると考えられ、推定径は約14.0mを測る。遺構南東部に30～50cmの扁平な石を敷きつめた楕円形を呈する3.6×2.6ｍの張り出し部を有する。張り出し部外縁は細長の石を繋いで縁どりをするかのように配置されている。配石は石英閃緑砕岩、石英安山岩、流紋岩、凝灰岩などで構成され、石英閃緑砕岩が約75%を占め、石英安山岩がこれに次ぐ。また熱変質しているものが10%弱見られる。これらの石はある部分に集中するのではなく、全体に分散している。

環内部に226号配石遺構、202号石囲炉が存在する。またＹＭ－92、93グリッドに220×180cmの地山粒を含む黒褐色土の方形プランを確認した。新旧関係は226号配石遺構が新しい。これらの遺構が本遺構に伴うかどうかは不明である。なお、構築面下は未調査である。環帯部分より石鏃１点を出土した。

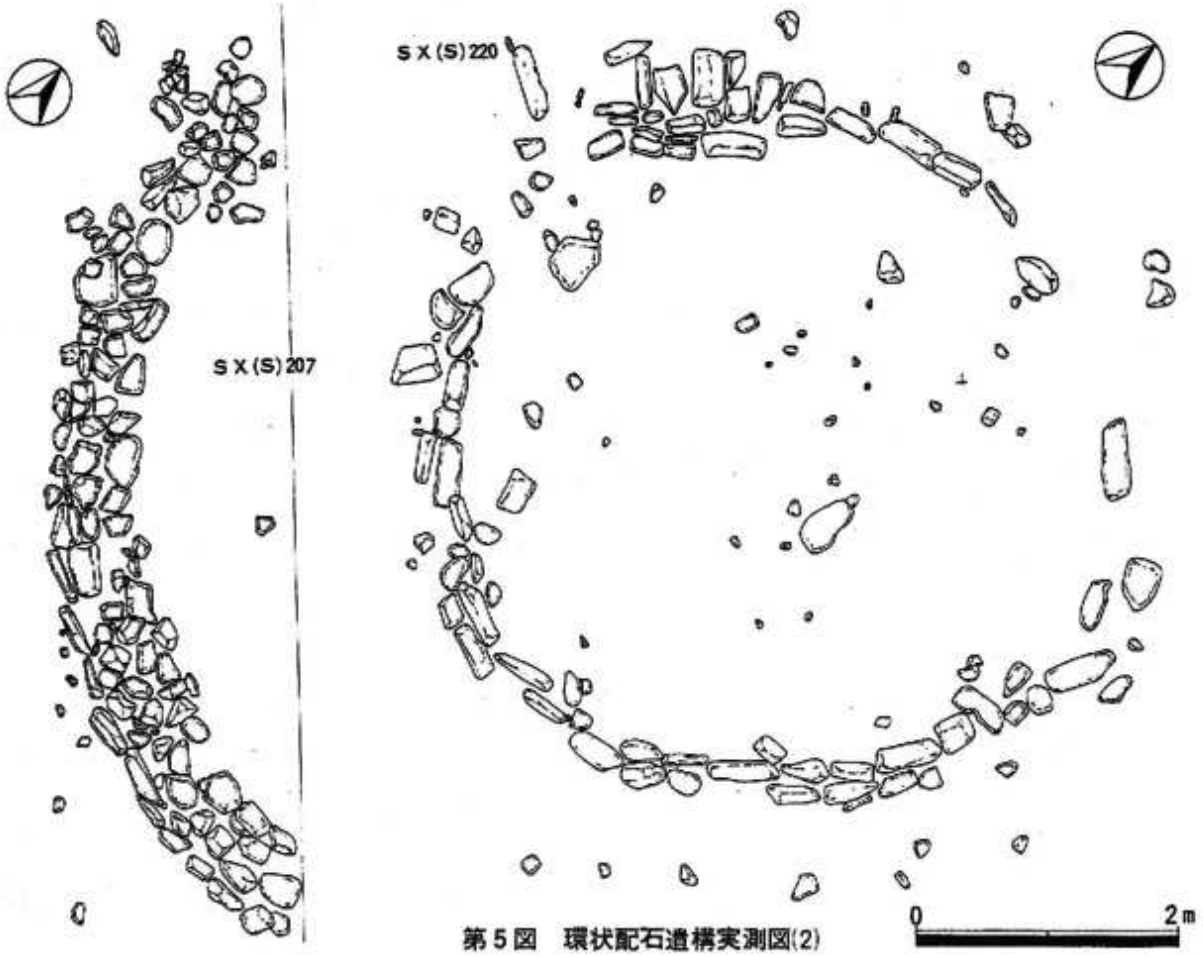
新旧関係及び周辺の出土遺物より、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉～中葉と考えられる。

第207号環状配石遺構（第５図、ＰＬ７）

発掘区中央のＹＤ～ＹＦ－93、94グリッドに位置し、Ⅲb層を構築面とする。確認された石の総数は約130個を数える。配石は15～50cmの細長の石の長軸方向を繋いで、３～４列に敷き並



第4図　環状配石遺構実測図(1)



第５図　環状配石遺構実測図(2)

べた帯幅約80cmの弧状を呈する。遺構東部は未発掘であるが、ボーリング調査の結果、202号環状配石遺構と同様に環状を呈し、遺構南東部に推定2.6×2.5ｍの張り出し部を有すると考えられる。推定径は 8.9 ｍを測る。配石は、石英閃緑玢岩、石英安山岩、流紋岩、凝灰岩などで構成され、石英閃緑玢岩が約50％を占め、石英安山岩がこれに次ぐ。また熱変質しているものが約32％見られ、202号環状配石遺構よりその割合は高くなる。なお、構築面下は未調査である。

第 220 号環状配石遺構（第５図、10図１～32、12図５、12～17、21、22、26、PL7、22～24）

発掘区南東端のＺＶ、ＺＷ－90、91グリッドに位置し、Ⅱb層を構築面とする。210～212号建物跡、222号焼土遺構と重複し、本遺構がいずれよりも新しい。確認された石の総数は約100個を数える。配石は15～60cmの細長の石の長軸方向を揃いで環状に配し、径は 5.4 ｍを測る。202、207号環状配石遺構が３～５列の配列により環帯を構成するのに対し、本遺構は１～２列となる。遺構北西部に 1.4 × 0.9 ｍの方形を呈する張り出し部を有する。202、207号環状配石遺構が遺構南東に張り出しをもつのに対し、本遺構の張り出し部はこれらの環状配石遺構と逆方向に位置し、向い合う。張り出し部の石は環帯の石と長軸方向を直交している。配石の大部分は石英閃緑玢岩で構成され、石英安山岩がこれに次ぐ。また熱変質しているものが15％

程見られる。環内部及び外部付近を精査したが、本遺構に伴うような施設は確認されなかった。ただし、配石直下は未調査である。

配石構築面より、掻器、磨製石斧、石皿、凹石、磨石、敲石をそれぞれ1点、石鏃4点を出土した。また10図は配石構築面環内より出土した土器片である。

新旧関係及び周辺の出土遺物より、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉～中葉と考えられる。

(2) 立石遺構

第212号立石遺構（第6図）

発掘区北西端のＹＫ－90グリッドに位置し、構築面はⅢc′層上面である。長さ30cmの細長の石を利用し、やや斜めに立てている。ピットの平面形は23×20cmの円形を呈し、深さは推定30cmを測る。堆積土は黒色土の単一層で、人為堆積を呈する。遺物は出土しなかった。

第216号立石遺構（第6図、ＰＬ4）

発掘区南東端のＺＵ－92グリッドに位置し、構築面はⅢd層上面である。ピット5と重複し、本遺構が新しい。長さ42cmの細長の石を利用し、ほぼ垂直に立てている。ピットの平面形は56×56cmの円形を呈し、深さ52cmを測る。堆積土は5ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。遺物は出土しなかったが、新旧関係より構築時期は縄文時代後期と考えられる。

第217号立石遺構（第6図、ＰＬ4）

発掘区南東端のＺＶ－91グリッドに位置し、構築面はⅢd層上面である。ピット15と重複し、本遺構が新しい。長さ28cmの細長の石を利用し、やや斜めに立てている。ピットの平面形は23×20cmの隅丸方形を呈し、深さ14cmを測る。堆積土は2ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。遺物は出土しなかったが、新旧関係より構築時期は縄文時代後期と考えられる。

第222号立石遺構（第6図）

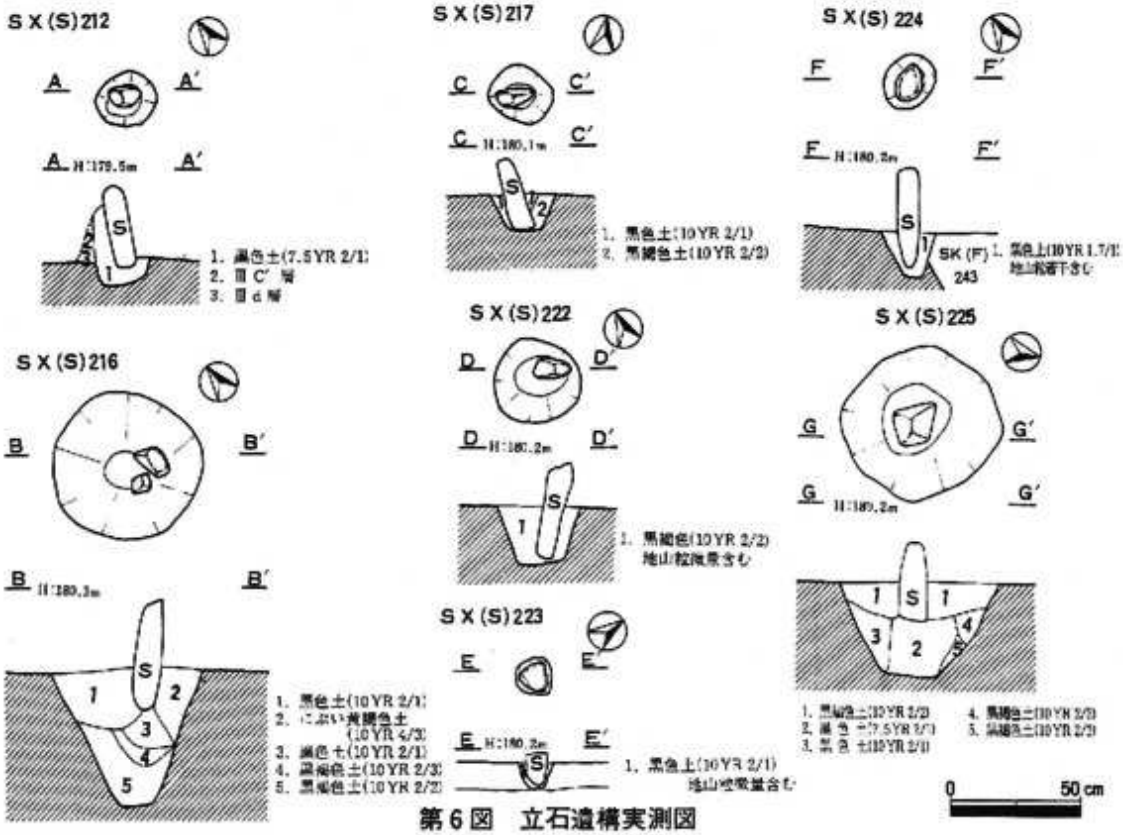
発掘区南東側のＺＷ－91グリッドに位置し、構築面はⅢd層上面である。221号焼土遺構、ピット91と重複し、本遺構が新しい。長さ36cmの細長の石を利用し、やや斜めに立てている。ピトの平面形は32×30cmの円形を呈し、深さ22cmを測る。堆積土は黒褐色土の単一層で、人為堆積を呈する。遺物は出土しなかったが、新旧関係より構築時期は縄文時代後期と考えられる。

第223号立石遺構（第6図）

発掘区南東側のＺＹ－91グリッドに位置し、構築面はⅢd層上面である。長さ12cmの紐長の石を利用し、ほぼ垂直に立てている。ピットは14×14cmの隅丸方形を呈し、深さ10cmを測る。堆積土は黒色土の単一層で、人為堆積を呈する。遺物は出土しなかった。

第224号立石遺構（第6図）

発掘区南東側のＺＸ－90グリッドに位置し、構築面はⅢd層上面である。243号フラスコ状土



第6図　立石遺構実測図

壊と重複し、本遺構が新しい。長さ37cmの細長の石を利用し、ほぼ垂直に立てている。ピットの平面形は22×18cmの円形を呈し、深さ17cmを測る。堆積土は黒色土の単一層で、人為堆積を呈する。遺物は出土しなかったが、新旧関係より構築時期は縄文時代後期と考えられる。

第225号立石遺構（第6図）

発掘区南東側のＺＺ－91グリッドに位置し、構築面はⅡd層上面である。長さ29cmの細長の石を利用し、ほぼ垂直に立てている。ピットの平面形は60×59cmの円形を呈し、深さ36cmを測る。堆積土は5ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。遺物は出土しなかった。

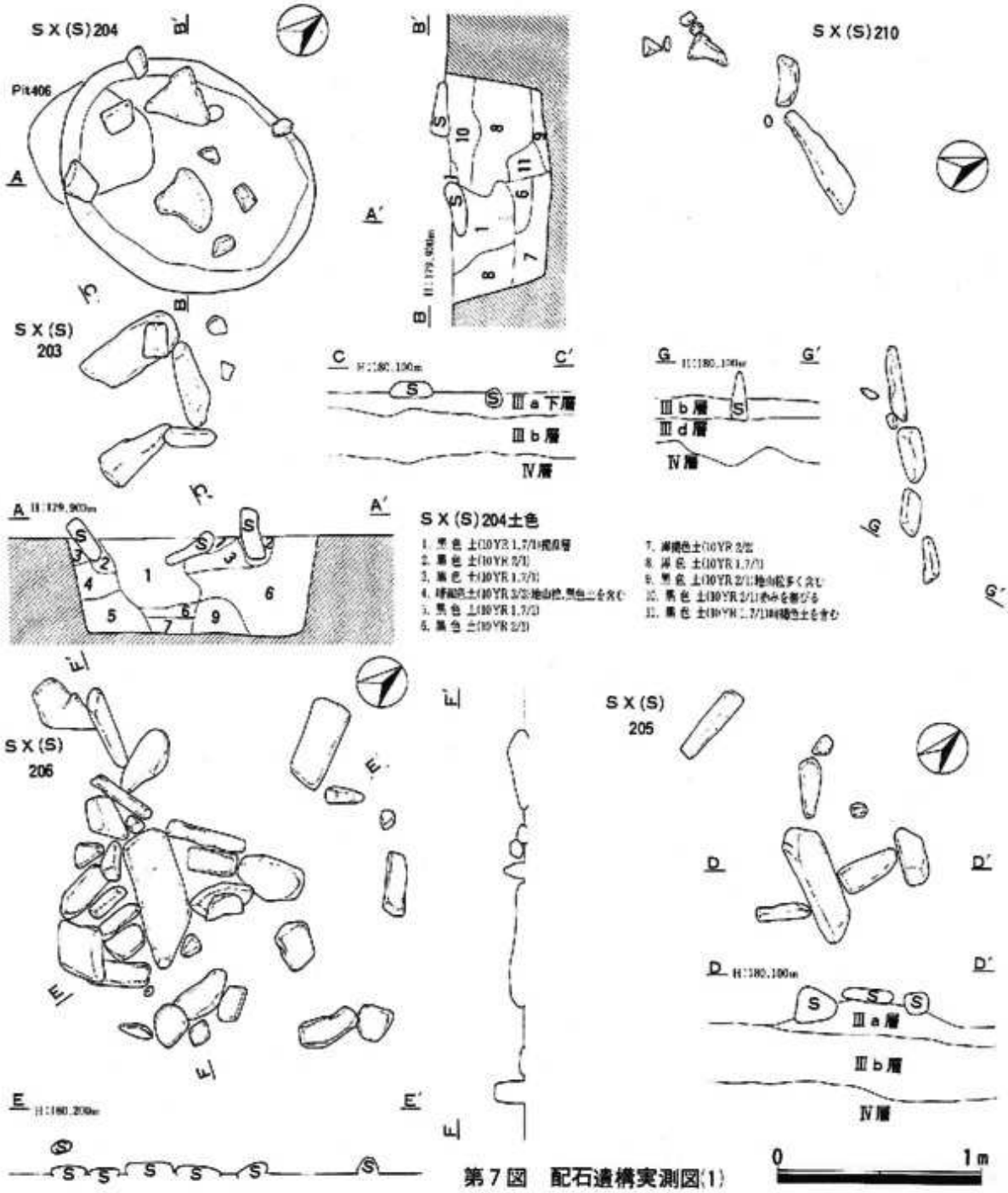
(3)　その他の配石遺構

第203号配石遺構（第7図、11図1～5、12図6、ＰＬ22）

発掘区北西側のＹＩ－93グリッドに位置し、Ⅱb層上位で確認した。70×70cmの範囲に5個の25～50cmの細長の石が「コ」字状に置かれている。下部土壙は確認されなかった。他の配石遺構と比べると構築面が高い事、北西側に隣接する204号配石遺構の南側一部が攪乱を受けている事、東側に201号竪穴住居跡が隣接する事などから、本遺構の石は移動したものと考えられる。配石構築面より10数点の土器片、掻器1点が出土した。

第204号配石遺構（第7図、11図6～11、12図2,3,7,18、13図1、ＰＬ4,21～24）

発掘区北西側のＹＩ－93グリッドに位置し、Ⅱb層下位で確認した。ピット406と重複し、本



第７図　配石遺構実測図(1)

遺構が新しい。10個の石が残存しており、配石は土壙縁辺に長さ10～27cmの細長の石を楕円形に立て並べ、その内部に約30cmの扁平な石を並べ置くものと考えられる。配石の規模は88×75cmを測る。

下部土壙は配石と位置を一致する。平面形は129×103cmの楕円形を呈し、深さ49cm、底面積1.58㎡を測る。長軸方向はN－77°－Eである。底面はⅤ層より成り、やや起伏があり堅くし

まっている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は11ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

土壙内より10点の土器片の他、石鏃2点、掻器、凹石、円盤状土製品をそれぞれ1点出土した。新旧関係及び出土遺物より、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第205号配石遺構（第7図、11図12～14、12図4、8、23、PL21、22）

発掘区中央のYH－93グリッドに位置し、Ⅲa層上位で確認した。本遺構北西側に201号竪穴住居跡が隣接する。133×90cmの範囲に8個の24～59cmの細長の石が雑然と置かれている。下部土壙は確認されなかった。本遺構も203号配石遺構同様、何らかの事由により移動したものと考えられる。

配石構築面より数点の土器片、石鏃、掻器、磨石それぞれ1点を出土した。

第206号配石遺構（第7図、PL4）

発掘区中央北西寄りのYG－93グリッドに位置し、Ⅲb層下位で確認した。配石の規模は192×175cmを測り、33個の石が確認された。範囲内南側に120×126cmの円形のまとまりが見られ、北東部に位置する石は移動したものと考えられる。配石は中央に66×24cmの扁平な石を置き、これと長軸を直交させるように15～39cmの細長の石を並べ置く。さらに縁辺に石を一巡させ、中央の石の長軸方向に細長の石を立てるものである。

配石下部は未調査であるが、ボーリング調査の結果下部土壙の存在が予測され、上部配石と位置を一致するものと考えられる。

周辺の出土遺物及び構築面より、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第210号配石遺構（第7図）

発掘区中央のYF－92グリッドに位置し、Ⅲb層下位で確認した。遺構南西側は未発掘、南東側は攪乱を受けており、11個の石から成る配石の一部のみが確認された。配石は18～55cm大のやや扁平な石を利用し、遺構南東部は石を立てている。石の長軸方向を繋ぐように弧状に配しており、他の配石遺構と趣を異にする。配石下部は未調査である。

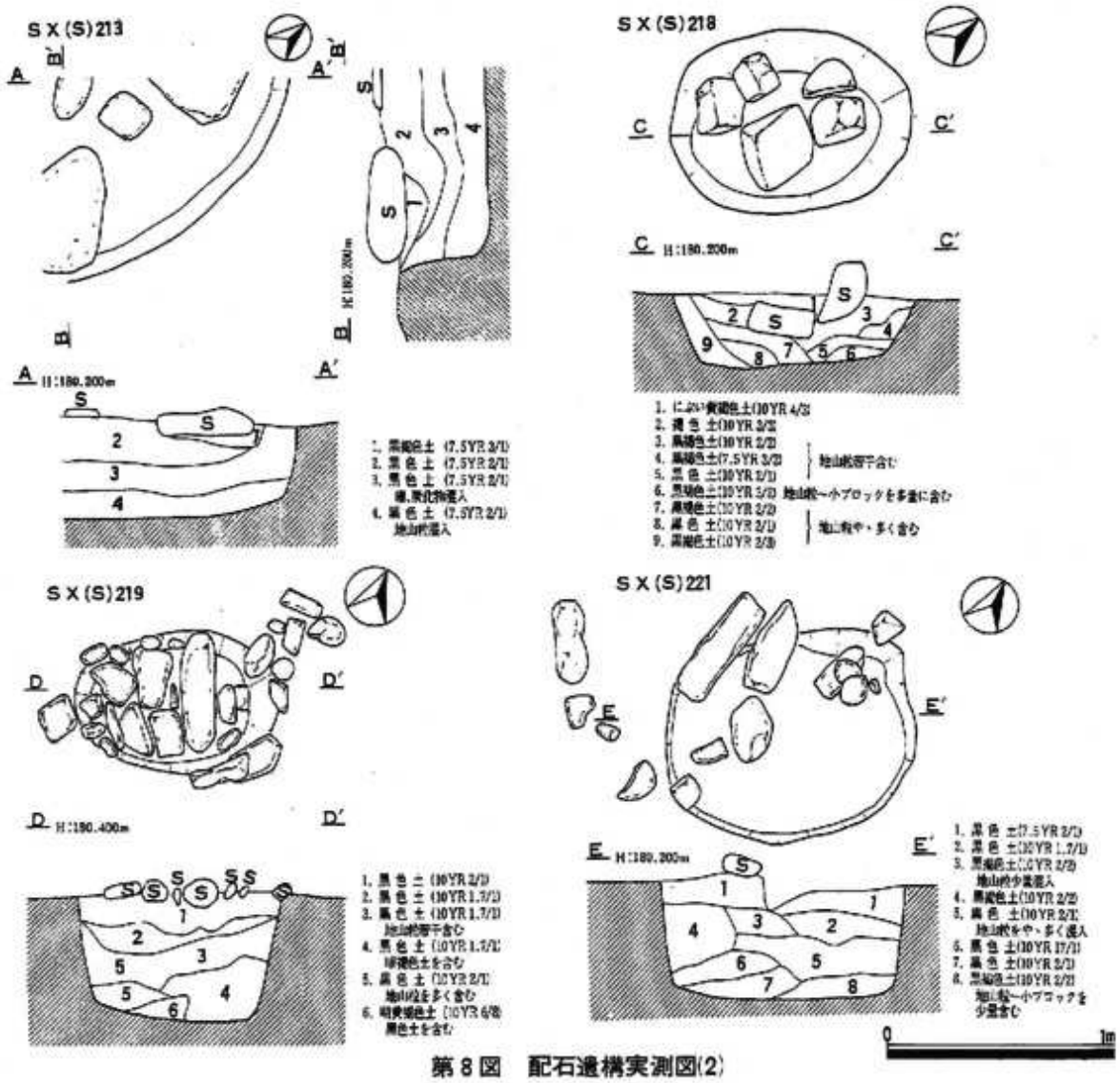
第213号配石遺構（第8図、11図15～23）

発掘区北西端のYL－90グリッドに位置し、Ⅲb層下位で確認した。遺構北西側及び南西側は未発掘である為、全体の1/4程が確認されただけである。配石は20～57cm大のやや扁平な石が4個確認された。

下部土壙は配石と位置を一致する。平面形は円形を呈すると思われ、深さ45cmを測る。底面はⅣ層より成り、ほぼ平坦である。堆積土は4ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

土壙内より23点の土器片が出土した。

出土遺物より、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。



第８図　配石遺構実測図(2)

第218号配石遺構（第８図、９図１、11図24～29、ＰＬ13）

発掘区南東端のＺＶ－89グリッドに位置し、Ⅱd層上面で確認した。ピット24と重複し、本遺構が新しい。配石の規模は72×60cmを測り、17～31cmの５個の石を楕円形に配している。このうち、土壙長軸片側の石は立っている。

下部土壙は配石と位置を一致する。平面形は106×78cmの楕円形を呈し、深さ32cm、底面積0.67㎡を測る。長軸方向はＮ－29°－Ｅである。底面は大きな起伏があり、北東側から南西側に若干傾斜している。堆積土は９ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

土壙底面より復元土器１点、土壙内より17点の土器片を出土した。９図１は底面北東壁寄りから出土した台付土器の台部分である。色調は浅黄橙色を呈する。

出土遺物より、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉～中葉と考えられる。

第219号配石遺構（第8図、11図30～32、ＰＬ4）

発掘区南東端のＺＶ－92グリッドに位置し、Ⅲb層下位で確認した。配石の規模は90×68cmの楕円形を呈し、確認された石は27個を数える。石は整然と配されている。11～53cmの細長の石を長軸方向を同一にして並べ、縁辺に7～21cm大のやや小型の石を並べ置いている。

下部土壙は配石と位置を一致する。平面形は88×63cmの楕円形を呈し、深さ55cm、底面積は0.55㎡を測る。長軸方向はＮ－70°－Ｅである。底面はⅤ層より成り、小さな起伏があり堅くしまっている。堆積土は6ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

土壙内より6点の土器片を出土した。

出土遺物より、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉～中葉と考えられる。

第221号配石遺構（第8図、9図2～4、11図33～47、12図9～11、19、20、24、25、13図2、3、PL.22、23）

発掘区南東側のＺＸ－92グリッドに位置し、Ⅲb層下位で確認した。245号土壙と重複し、本遺構が新しい。配石の規模は125×74cmで楕円形を呈し、15～53cm大の細長の石が14個確認されたが、西側に存在する石は移動したものと考えられる。構築当時の状態は不明である。

下部土壙は配石と位置を一致すると考えられる。平面形は109×88cmの楕円形を呈し、深さ55cm、底面積1.34㎡を測る。長軸方向はＮ－52°－Ｅである。底面はⅤ層より成り、ほぼ平坦で堅くしまっている。堆積土は8ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

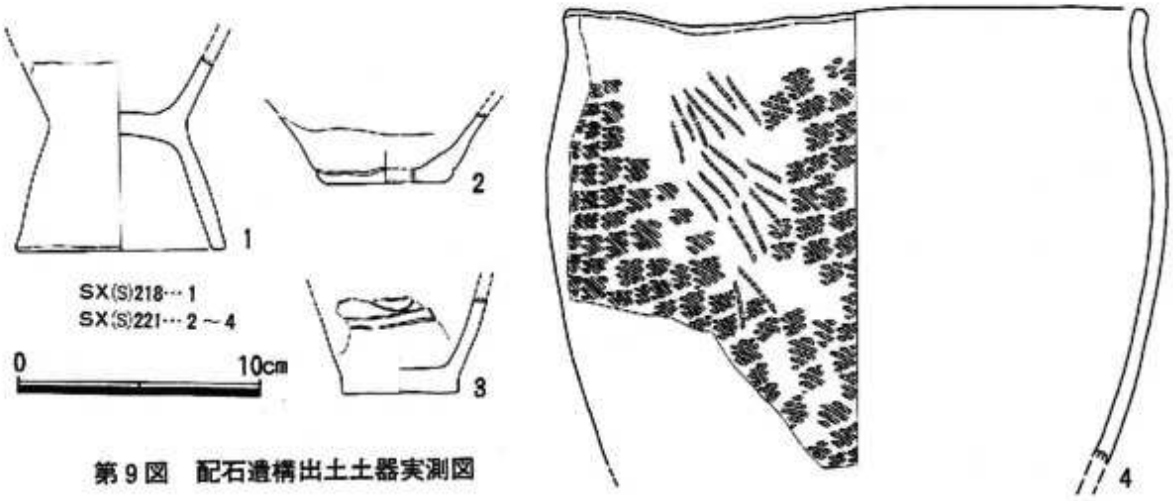
土壙底面直上より復元土器1点（9図4）、線刻礫1点、凹石1点、土壙中位より凹石1点、土壙内より復元土器2点（9図2、3）、80数点の土器片、敲石2点、掻器3点、線刻礫1点を出土した。4は底面直上南壁寄りから出土した深鉢形土器である。頸部以下にＬＲ縄文を施文しており、一部に原体Ｒの撚糸文が見られる。表、内面にはススが付着している。推定口径24cmを計り、色調はにぶい黄橙色を呈する。2、3は土壙内より出土した土器で、それぞれ鉢及び小型深鉢形土器と考えられる。共に沈線文が施文され、色調はにぶい橙色を呈する。2は表面に赤色顔料、内面に黒色顔料が塗布されている。

新旧関係及び出土遺物より、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

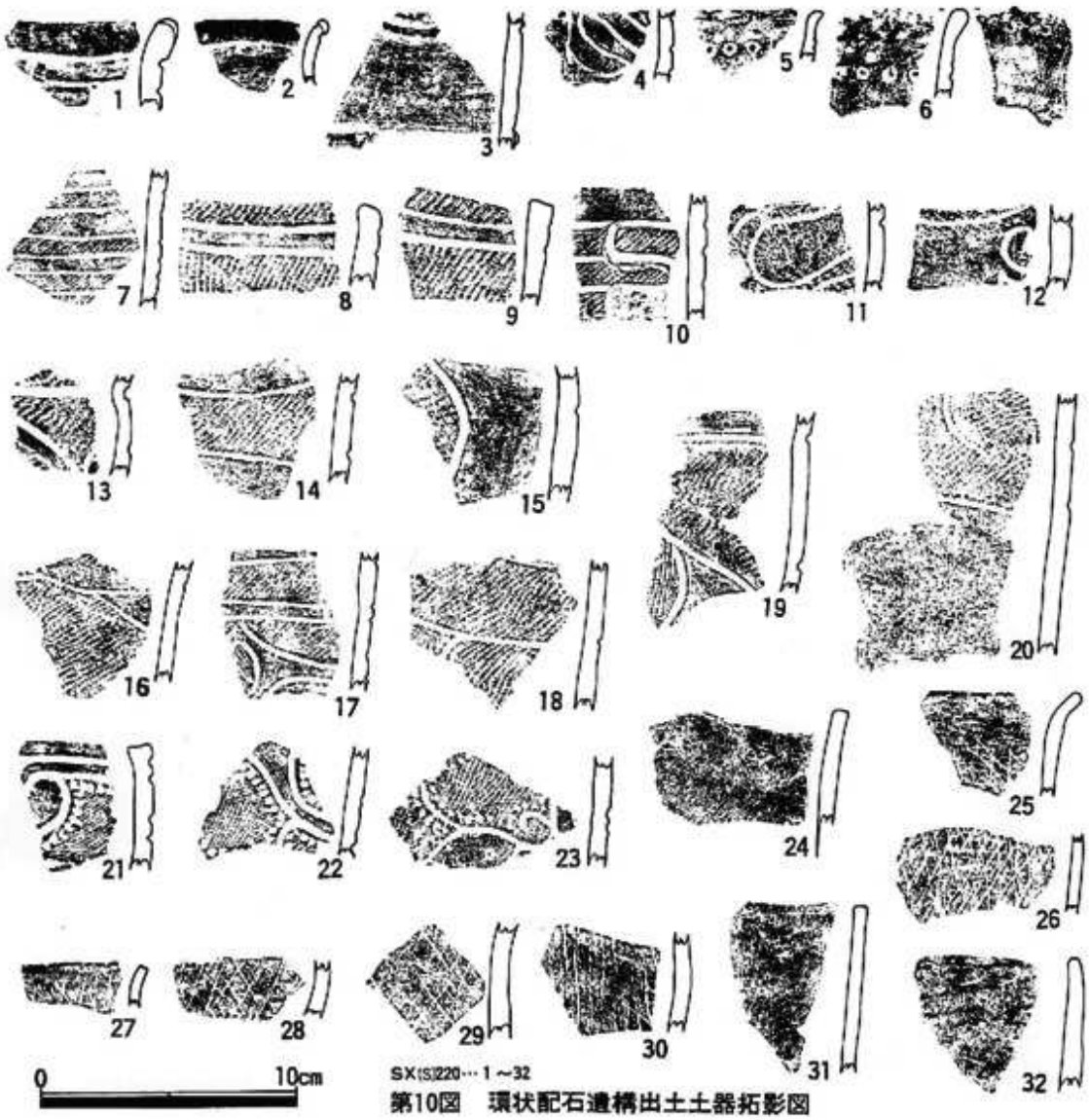
第226号配石遺構（第4図）

発掘区北西端のＹＭ－93グリッド、202号環状配石遺構環帯内に位置し、Ⅲb層で確認した。配石の規模は62×50cmを測り、16～35cm大の石3個と8～14cm大の小型の石5個が確認された。配石構築面で地山粒を含む黒褐色土の100×68cmの隅丸方形プランを確認したが未調査である。また遺構西側に重複して方形プランを確認し、本遺構が新しい。本遺構と202号環状配石遺構との関係は不明である。

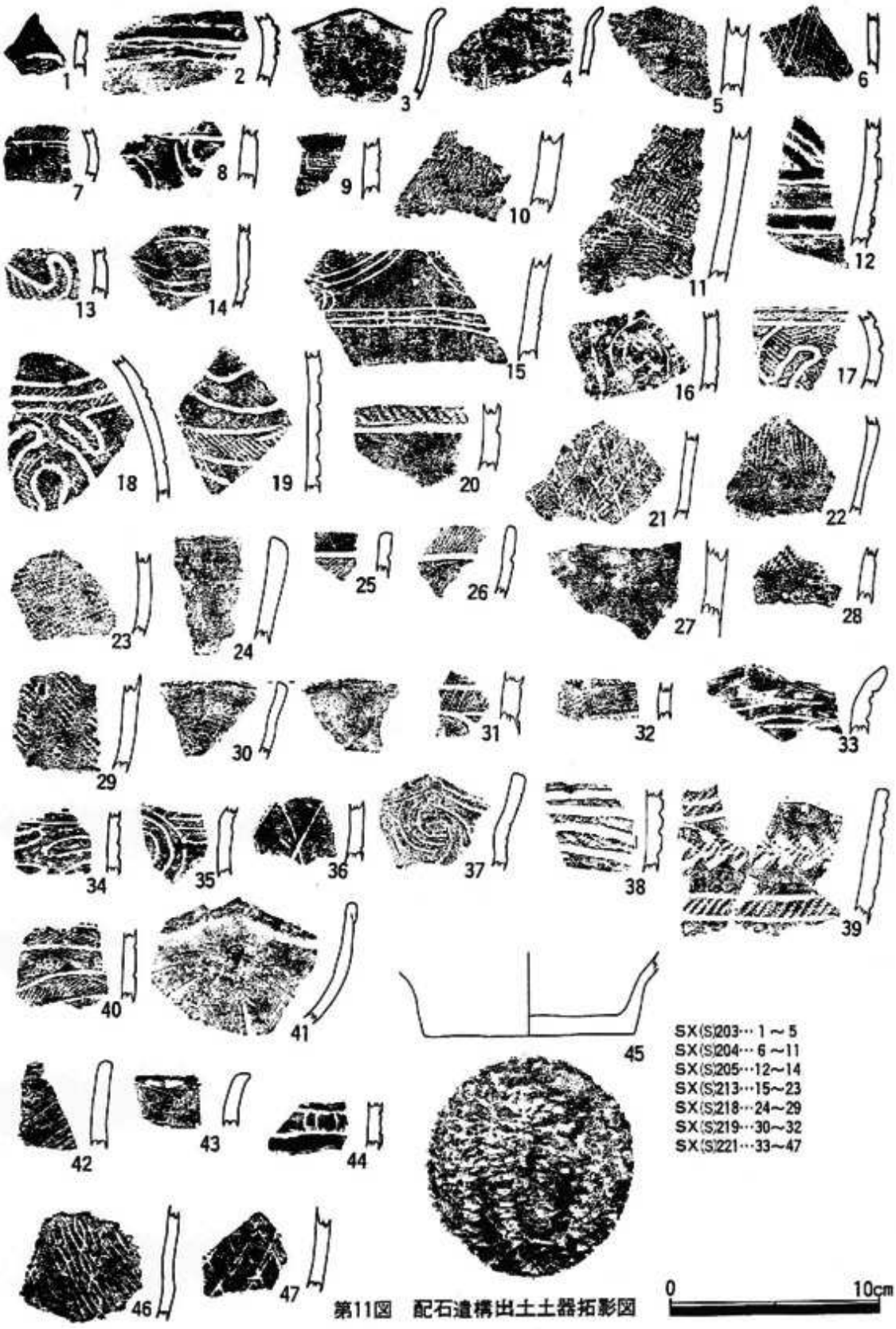
（佐藤　樹）



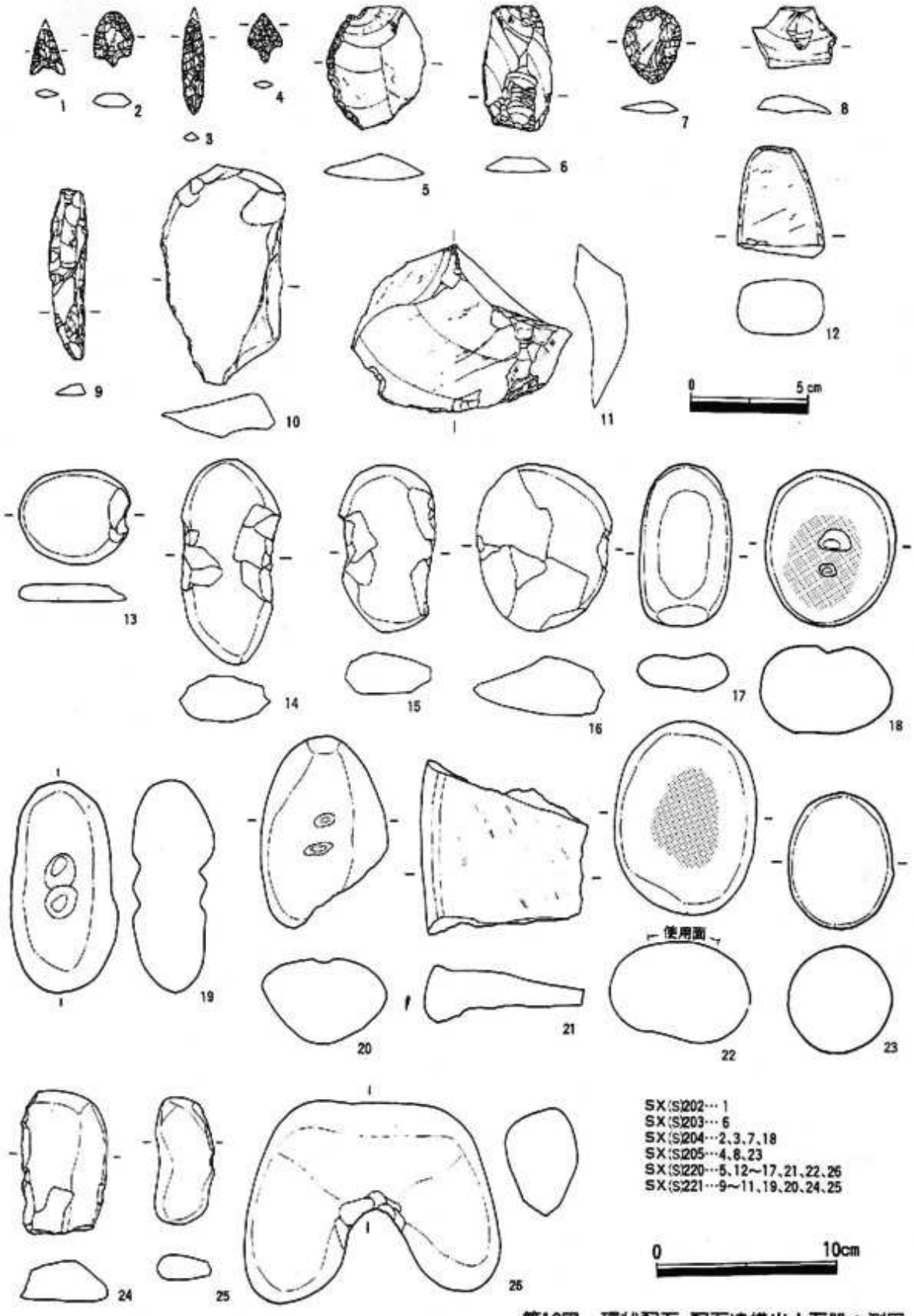
第9図　配石遺構出土土器実測図



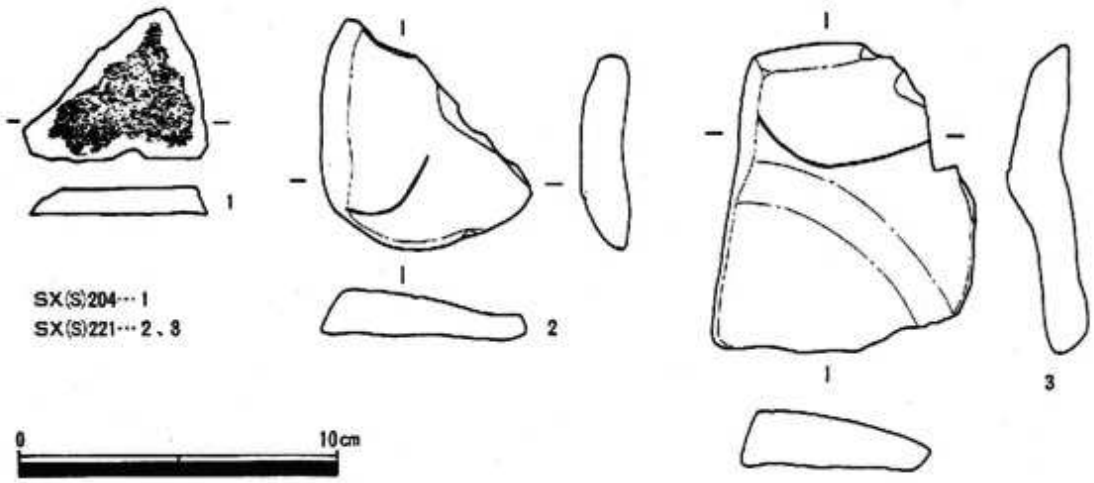
第10図　環状配石遺構出土土器拓影図



第11図　配石遺構出土土器拓影図



第12図　環状配石、配石遺構出土石器実測図



第13図　配石遺構出土土製品、石製品実測図

2．集石遺構

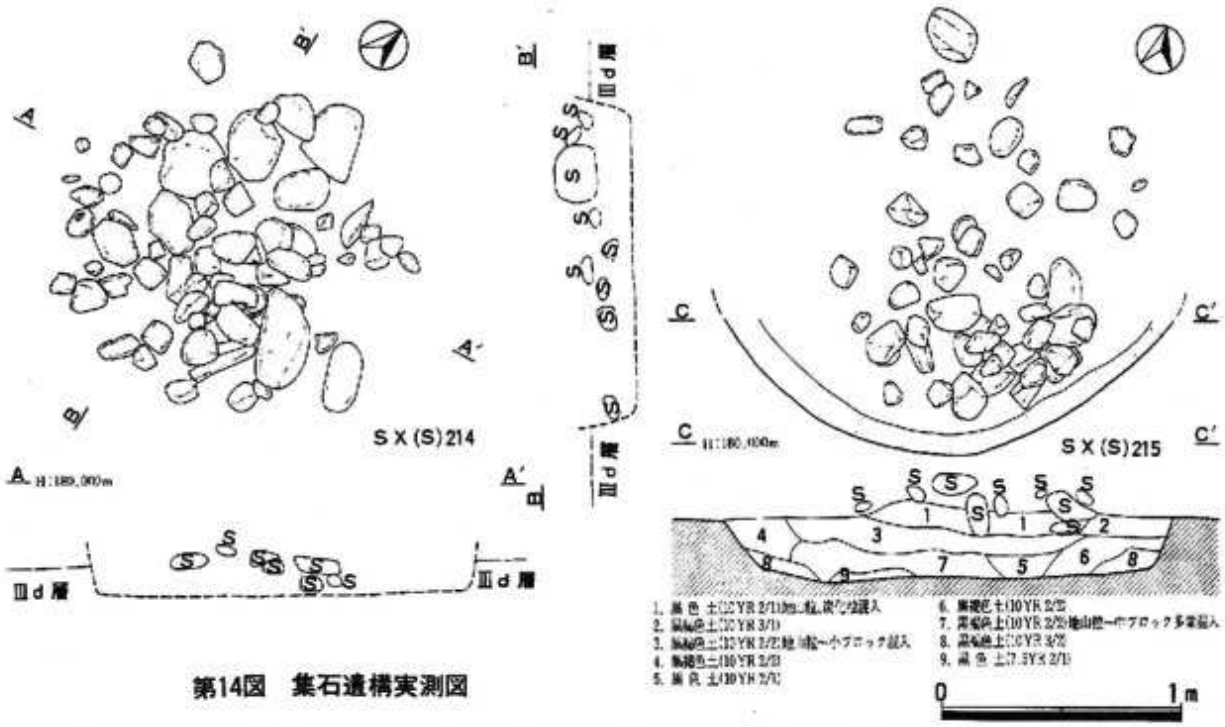
第214号集石遺構（第14図、15図1～16、17図、ＰＬ5、21、22、24）

発掘区北西側のＹＪ－92グリッドに位置する。本遺構の北東側には201号礫群が存在する。Ⅲb層下位で若干の石のまとまりを確認したが、配石遺構とは明らかに形態が異なり、また、礫群との判別がつかなかった。Ⅲd層下位において集石遺構であることを確認し、南半の調査を行った。本遺構は、4～38cm大の60点以上の石を145×157cmほどの範囲内に雑然と積み上げて構築されている。火熱を受けた石が多く、割れているものもある。石と石の間の黒褐色土中には多量の炭化物が混入している。下部土壙については明確にできなかったが、石の最下位はⅣ層直上であり、Ⅳ層上面にも炭化物が分布していることから、本遺構は土壙を伴うものと考えられる。

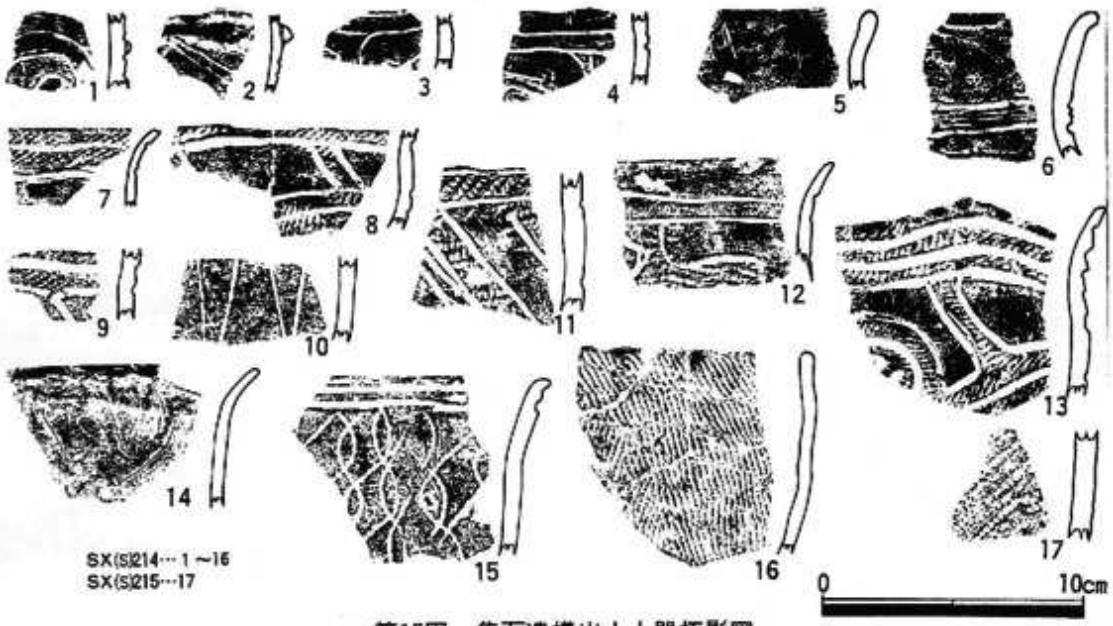
本遺構から227点の土器片、石鏃1点、掻器2点、凹石1点、円盤状土製品3点を出土した。出土遺物より本遺構の時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第215号集石遺構（第14図、15図17、ＰＬ5）

発掘区北西側中央寄りのＹＩ－92グリッドに位置する。216号焼土遺構と重複し、本遺構が古い。Ⅲb層下位で若干の石のまとまりを確認したが、形態が明らかとなったのはⅢd層下位においてであり、南半の調査を行った。集石部は145×155cmほどの範囲内に50点以上の石を雑然とまとめたように構築されている。石は5～28cm大の小型の角礫が多く、火熱を受けたものもある。この集石下に径2mほどの円形または楕円形を呈すると考えられる土壙を検出した。深さは27cmを測る。Ⅴ層を底面とし、ほぼ平坦で堅く、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は10ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。本遺構から5点の土器片を出土した。出土遺物より、本遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。



第14図　集石遺構実測図

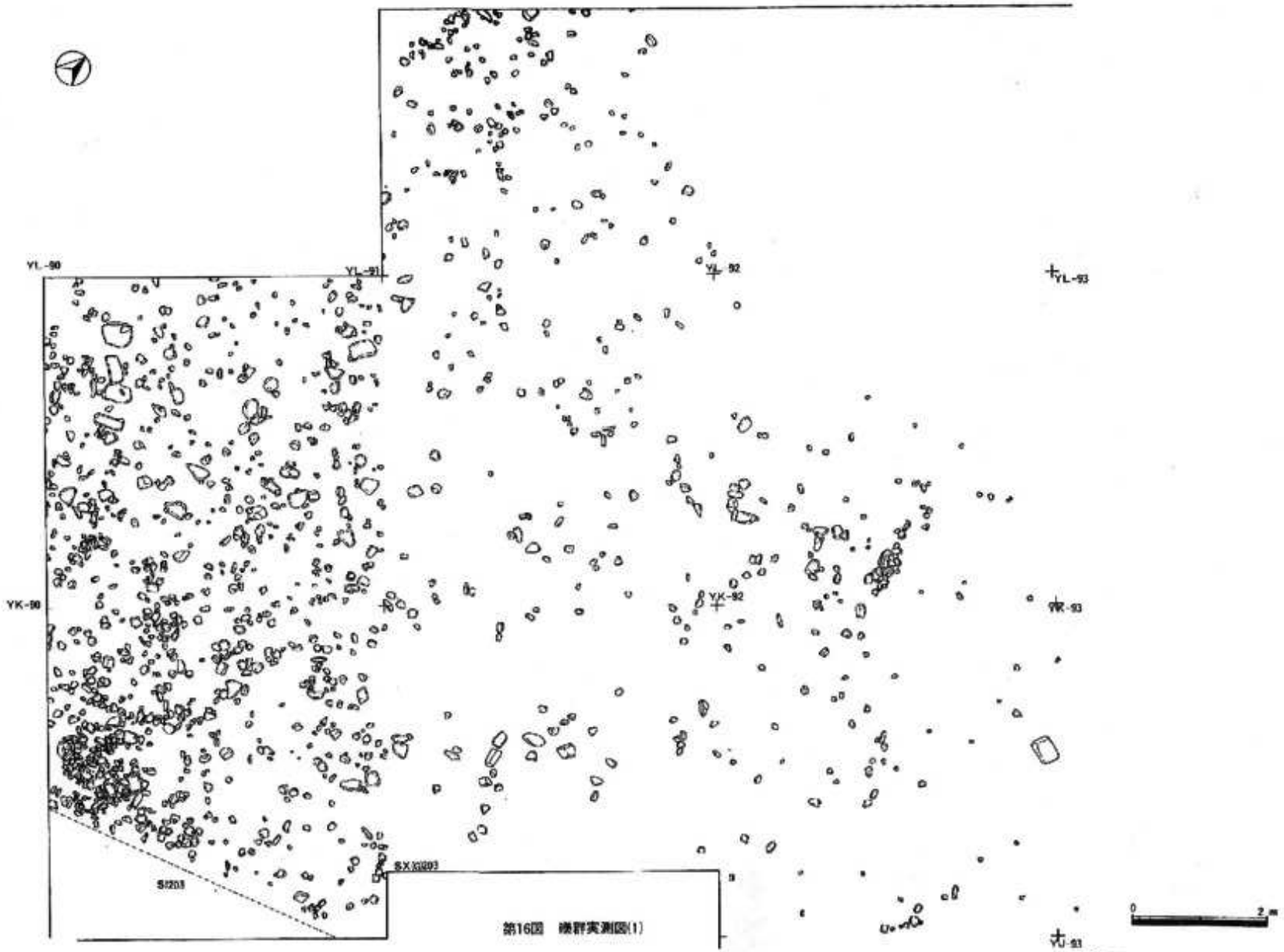


第15図　集石遺構出土土器拓影図

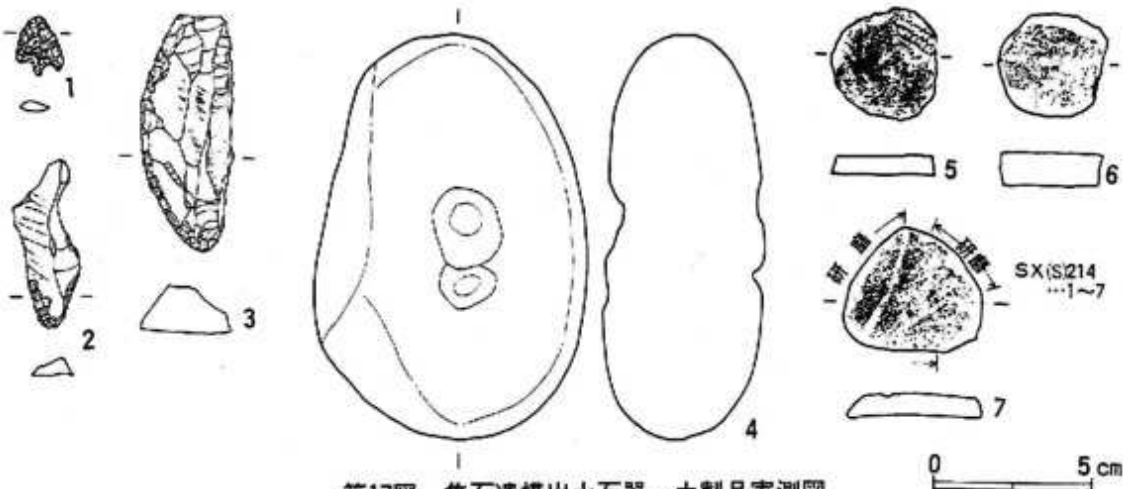
3．礫群（第16、18図、ＰＬ５）

発掘区北西側の３ヵ所から礫群が確認された。

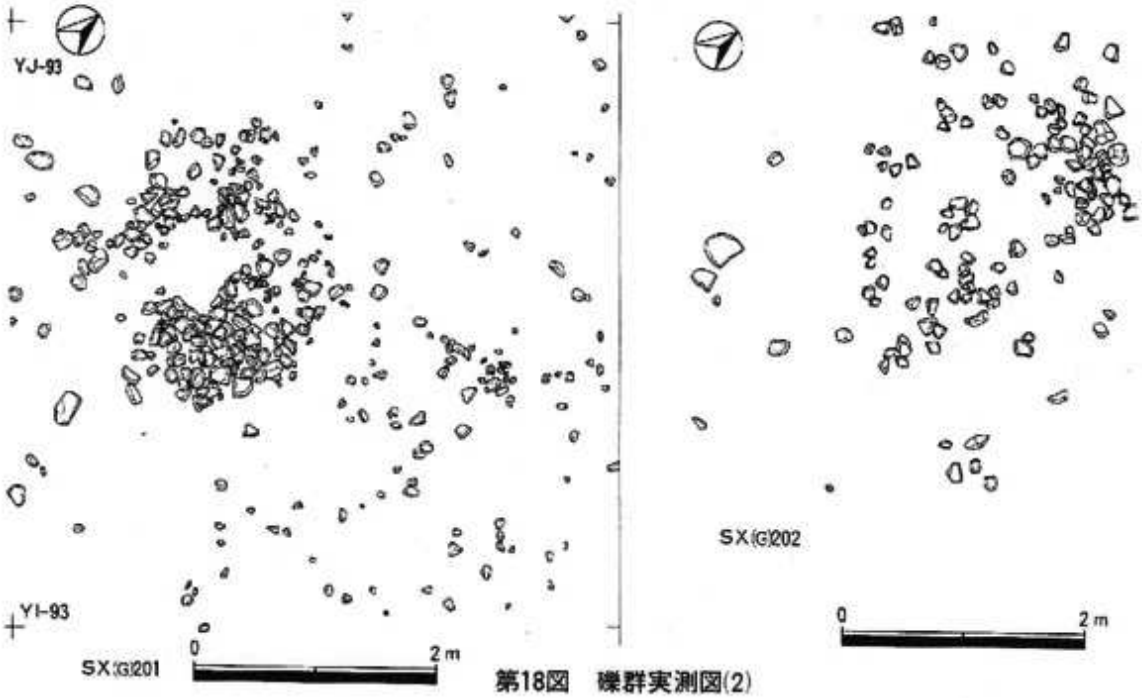
やや中央寄りのＹＪ－93グリッドに位置する201号礫群は、Ⅲb層上位で確認された。260×230㎝の範囲内に２～27㎝大の209点の礫が集中しており、集石遺構とも考えられる。これらの礫の岩質は、石英閃緑玢岩、安山岩、粘板岩、流紋岩などで、ほとんどが長期間に渡って熱を受けた痕跡がある。



第16図　検群実測図(1)



第17図　集石遺構出土石器、土製品実測図



第18図　礫群実測図(2)

202号礫群は北端のＹＫ、ＹＬ－93グリッドの北側に位置する。340×260cmほどの範囲内に4～20cm大の礫が集まっており、さらに北側に延びることも考えられる。

発掘区北西端に広範囲に分布する礫群を203号礫群とした。礫はⅢa～Ⅳ層において確認されるが、特にⅢb層の密度が高い。90ライン以西は調査区域外であり、また91ライン以東は他遺構保存のためⅢd層上面までしか掘り下げていない。そのため分布範囲は明確でないが、北端はＹＬ－92グリッド北側、東端はＹＫ－92グリッド中央と考えられ、南西側ほど密度が高くなる。10～16cm大の角礫が多く、1,500点以上を数える。

（藤井富久子）

4．建物跡（柱穴状ピット群）

(1) 北西部の建物跡と柱穴状ピット群

第201号建物跡（第19～21図、23図2～4、6～9、47図、PL6、22、23、25）

発掘区北西端のYM～YK－90～92グリッド、Ⅲc～Ⅲd層上面で確認された。202号環状配石遺構、201号竪穴遺構、202号建物跡と重複、本遺構は201号竪穴遺構より新しく、202号環状配石遺構より古い。また、本遺構主柱穴上面付近には貼床状に粘土あるいは下位火山灰が踏み固められているため、本遺構は202号建物跡より古いと考えられる。

本遺構は、環状に壁柱穴を有する掘立柱建物跡で、その規模（径）は8.5mを測る。

主柱穴は、ピット72、74、76、77、79の5個で、隣接するピット間隔2.8～3.6mの五角形の配置となる。主柱穴掘り方の規模、深さはほぼ同一で、91～138×72～92cm、136～152cmを測る。また、ピット79を除く4個には、柱穴側に傾斜する浅い掘り込みを伴う。柱を立てる作業を容易にするための工夫であろうか。なお、主柱穴のいずれからも柱痕が確認され、その径は27～31cmを測る。

壁柱穴は、出入口部と考えられる南東部の一部を除き一巡し、その中心は主柱穴の主軸線（主軸方位N－116°－E）上に位置する。出入口両端の特殊ピットを除き、47個の壁柱穴を確認したが、さらに202号環状配石遺構下（未掘部分）に10～11個の柱穴があるものと考えられる。これらの柱穴は径27cm程の規模で、深さ40～74cm、柱穴間は22～50cmを測る。

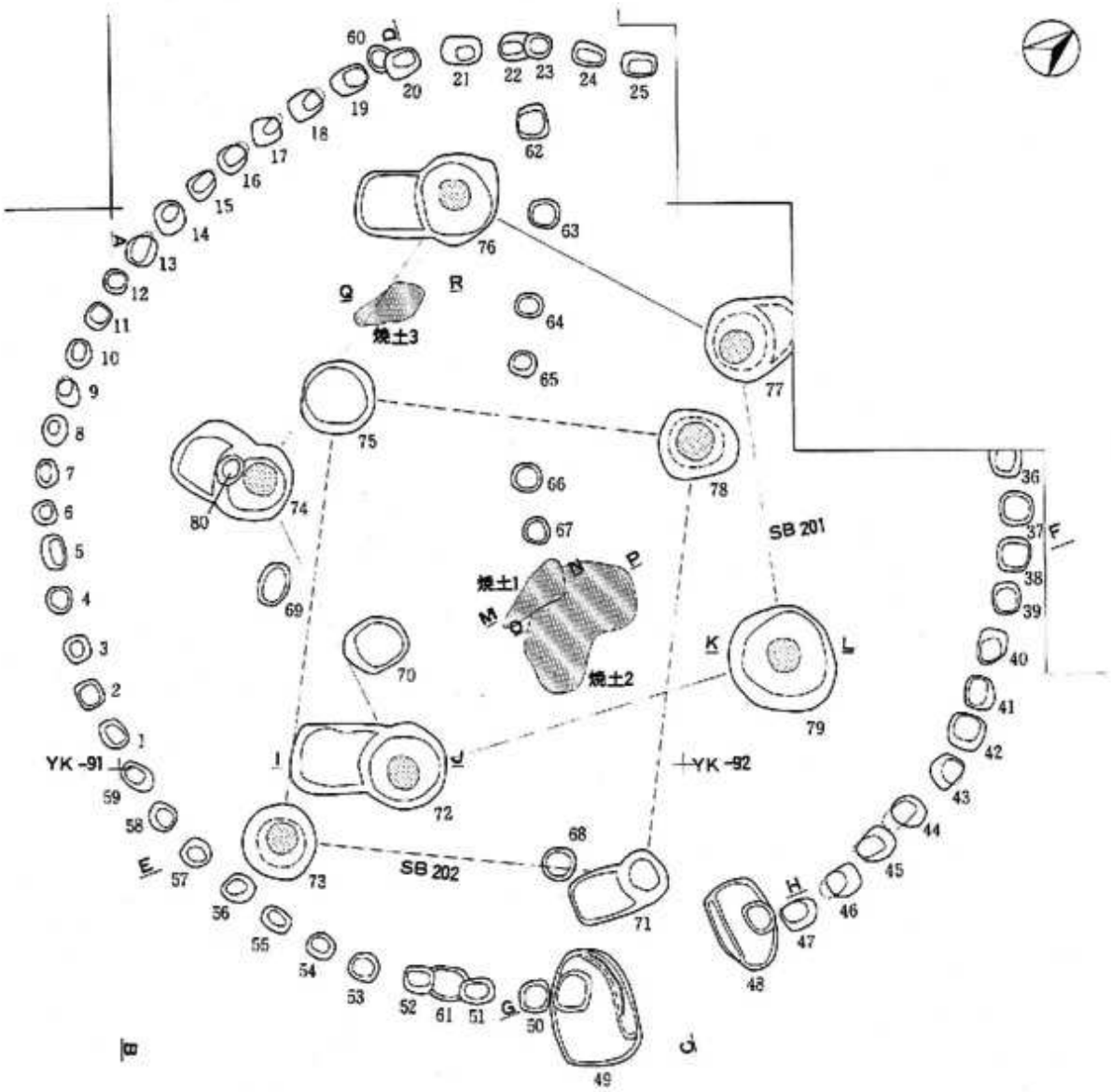
南東部の出入口と考えられる部分の幅は約90cmで、その両端のピットは、他の壁柱穴と形態、規模を異にする。全体としては、84×55cm（Pit48）、105×74cm（Pit49）、深さ31cm、49cmの楕円形を呈し、さらに底面出入口部側には63×12cm、深さ14cm（Pit48）、90×18cm、深さ8cm（Pit49）の溝が、また壁柱穴側には径23cm、38cm、深さ11cm、9cmのピットがある。規模、確認面からの深さ等が壁柱穴と類似していることから、外側（柱穴側）のピットは壁柱穴と考えられる。また、左側のピット（Pit49）の溝部分から幅5mmの板状の炭化材（落葉広葉樹、クリ？）が検出され、この溝が板材を立てるためのものと推察された。

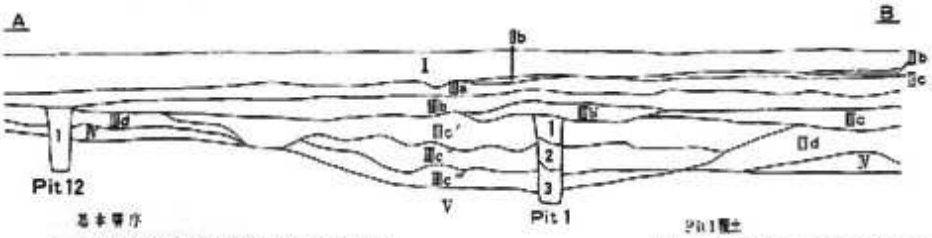
本遺構内3ヵ所で、焼土が確認されたが、このうち、焼土2が本遺構に伴う地床炉と考えられる。本遺構主軸線上、中心より南東寄りに位置し、焼土範囲は127×68cm、厚さは19cmを測る。

本遺構柱穴及び焼土からの出土遺物は総数230数点の土器片、4点の掻器、1点の凹石、2点の円盤状土製品である。これらの遺物及び新旧関係より、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第202号建物跡（第19、20、22図、23図1、5、PL6）

発掘区北西端のYL～YK－91～92グリッド、Ⅲc～Ⅲd層上面で確認された。201号建物跡、





基本層序

Ⅰ 層 黒褐色土(10YR 2/2)大陽浮石を少量混入、しまり有り。
Ⅱb 層 黄褐色火山灰(10YR 5/6)大陽浮石層
Ⅱc 層 黒色土(10YR 2/1)大陽浮石を多量混入
Ⅱa 層 黒色土(10YR 2/1)軽く、しまり有り
Ⅱb 層 黒色土(7.5YR 2/1)下位火山灰、現化粒微量混入
Ⅱb' 層 黒色土(7.5YR 2/1)黒褐色土少量、下位火山灰微量混入
Ⅱc 層 黒褐色土(7.5YR 3/1)下位火山灰を Ⅱb 層より多く混入
Ⅱc' 層 黒褐色土(7.5YR 3/1)下位火山灰少量、赤褐色小礫(2.5YR 4/6, φ5mm程度)、炭化粒微量混入、堅くしまり有り
Ⅱc" 層 黒褐色土(7.5YR 3/1)下位火山灰、赤褐色小礫(φ5~10mm)少量、炭化粒微量混入、堅くしまり有り
Ⅱc" 層 黒褐色土(7.5YR 3/1)下位下山灰微量、赤褐色色小礫(φ5~20mm) Ⅱc" より多く混入、しまり有り。
Ⅲ 層 黒色土(10YR 2/1)下位火山灰、小ブロック少量混入
Ⅳ 層 暗褐色土(10YR 3/3)
Ⅴ 層 黄褐色火山灰(10YR 5/6)中ヶ野火山灰層

Pit 1 覆土

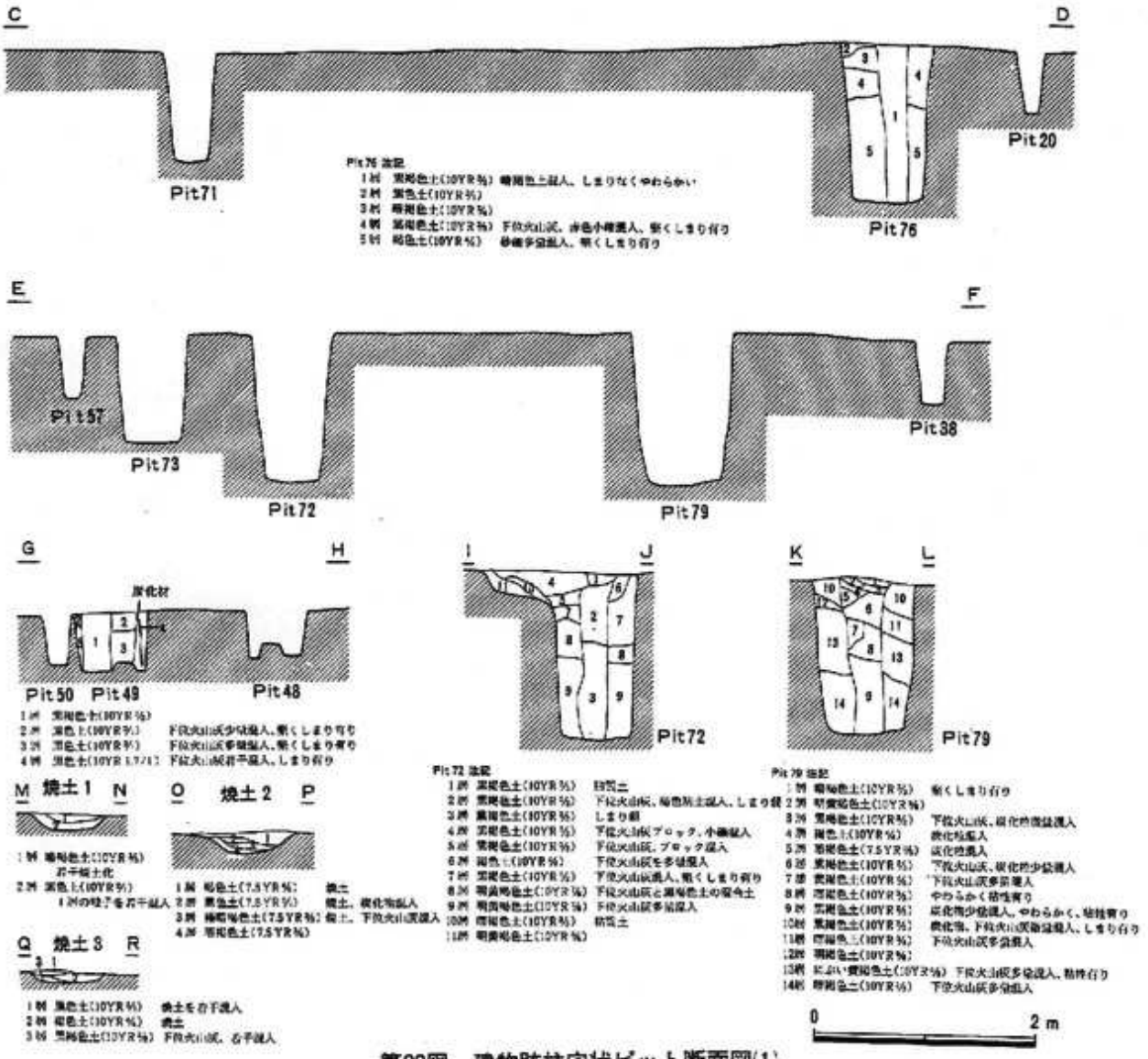
1層 黒褐色土(7.5YR 3/1) 下位火山灰、炭化粒微量混入
2層 黒色土(7.5YR 2/1) 下位火山灰、中ブロック少量、炭化粒微量混入
3層 黒色土(7.5YR 2/1) 下位火山灰、小ブロック少量、にぶい黄橙色土微量混入

Pit 12 覆土

1層 黒褐色土(7.5YR 3/2) 下位火山灰、少ブロック、炭化粒少量混入

0 2m

第19図 建物跡実測図 (1)



第20図　建物跡柱穴状ピット断面図(1)

201号竪穴遺構と重複し、本遺構はいずれよりも新しい。

ピット71、73、75、78の4個の柱穴で構成される長方形を呈する掘立柱建物跡で、長辺4.0m、短辺3.2mを測り、N－52°－Wの長軸方向をもつ。

柱穴掘り方の規模は201号建物跡より若干小さく、65～88×49～65cm、深さ98～114cmを測る。なおピット71は他の柱穴に比べ若干小規模で、浅い掘り込みを伴う。また、ピット73、78からは柱痕が確認され、その径は29cm、32cmを測る。

本遺構中央から若干北寄りに位置する焼土1が、本遺構に伴う地床炉と考えられる。焼土範囲は76×32cm、厚さは15cmを測る。

本遺構柱穴からは、総数60数点の土器片、1点の掻器、半円状扁平打製石器の出土があった。

第1表　第201・202号建物跡柱穴状ピット一覧表

※Pit71、73、75、78はSB202、他はSB201のピット

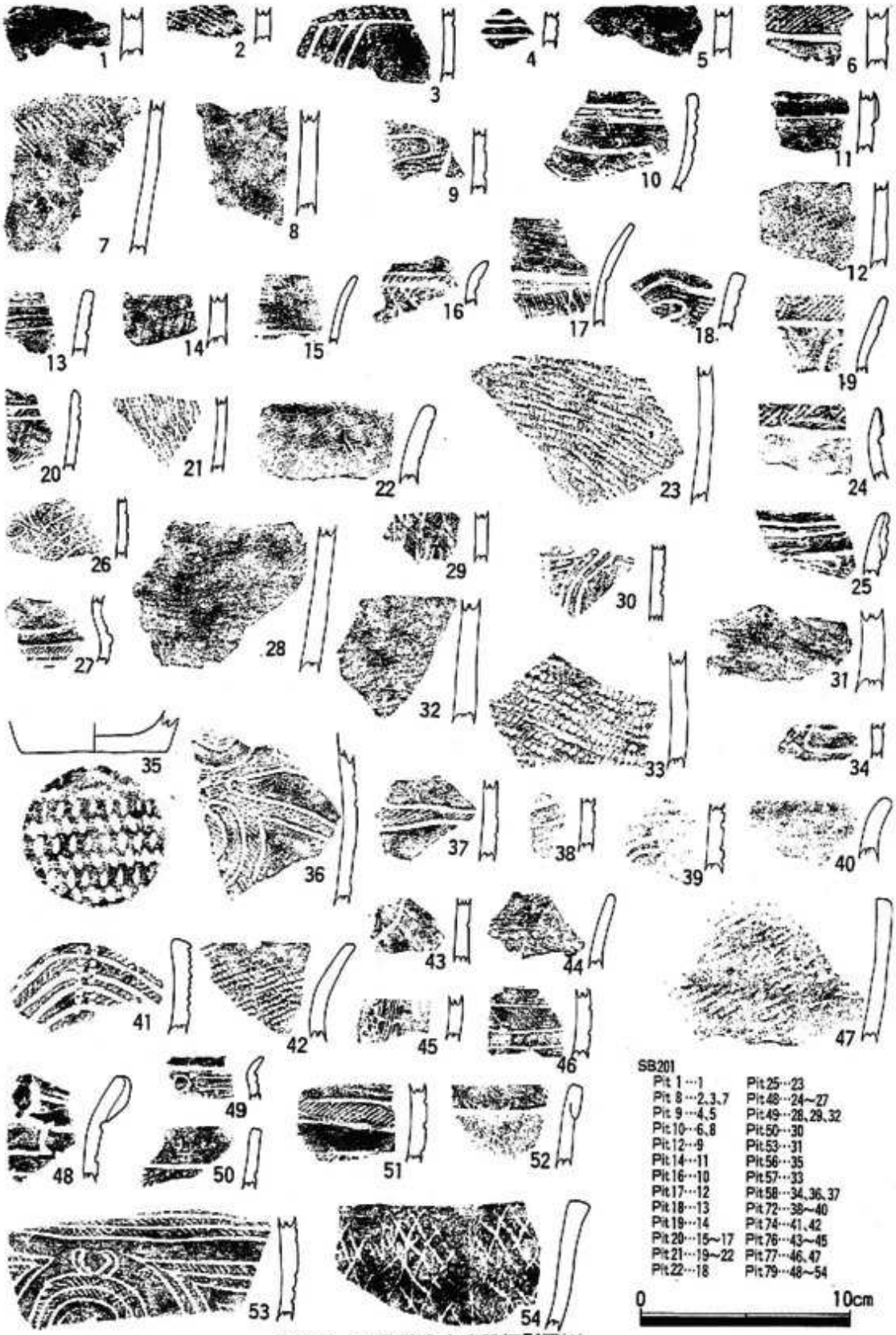
Pit.No.	長径×短径×深さ(cm)	柱痕径(cm)	Pit.No.	長径×短径×深さ(cm)	柱痕径(cm)	Pit.No.	長径×短径×深さ(cm)	柱痕径(cm)	Pit.No.	長径×短径×深さ(cm)	柱痕径(cm)
1	26×23×71.8		19	33×24×54.7		47	33×25×41.7		65	25×23×20.7	
2	26×23×66.7		20	30×26×53.1		48	84×35×31.0		66	27×26×4.8	
3	24×23×64.6		21	36×25×44.9		49	105×74×49.0		67	24×23×5.3	
4	25×23×34.8		22	30×25×41.7		50	28×27×45.0		68	30×29×20.2	
5	31×21×48.9		23	24×22×40.1		51	31×23×43.3		69	40×27×12.2	
6	22×21×49.8		24	30×21×50.8		52	27×24×43.2		70	57×48×34.8	
7	24×20×45.5		25	30×22×52.0		53	27×26×42.2		72	138×78×136.2	31
8	28×22×47.0		36	32×29×53.8		54	26×23×41.3		74	107×75×152.0	29
9	24×20×51.6		37	31×30×50.4		55	27×21×36.2		76	126×81×143.3	27
10	26×23×52.5		38	31×29×36.0		56	28×27×48.4		77	91×72×152.0	28
11	24×21×48.6		39	29×24×55.6		57	28×26×56.0		79	100×92×141.0	28
12	22×21×52.1		40	32×25×52.1		58	27×24×56.9		80	29×22×47.0	
13	29×26×52.4		41	29×26×53.0		59	31×21×55.8				
14	30×28×57.8		42	33×32×68.2		60	25×22×14.2		71	88×49×101.0	
15	27×22×56.9		43	31×25×74.6		61	39×29×30.8		73	67×65×98.0	29
16	27×23×58.0		44	30×27×66.0		62	31×28×47.4		75	65×65×114.4	
17	25×24×60.1		45	33×27×60.5		63	27×26×9.5		78	71×63×102.0	32
18	29×24×65.0		46	29×26×63.1		64	25×21×14.4				

これらの遺物及び新旧関係より、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。なお、半円状扁平打製石器は、本遺構あるいは周辺の遺構構築の際にⅢd層より掘り出されたものが、混入したものと推察される。

北西部の柱穴状ピット群（第24、40、41図）

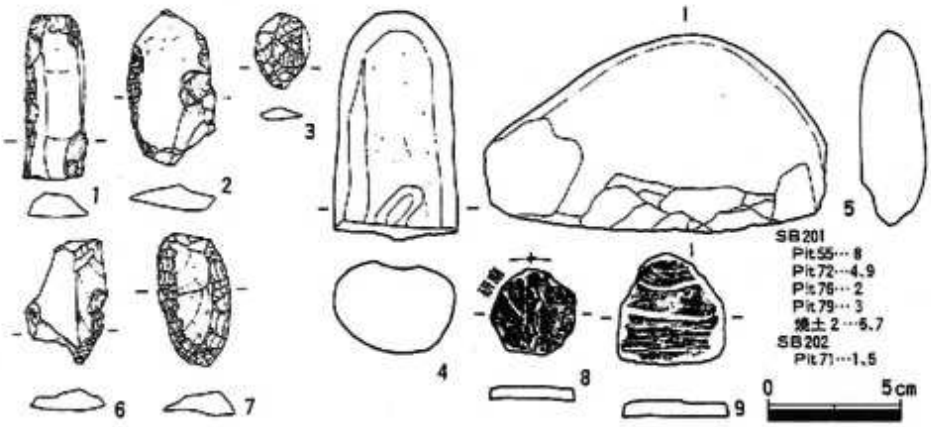
発掘区北西部からは201、202号建物跡を構成する柱穴以外に10個の柱穴状ピット（Pit401～410）が検出された。このうちピット401～407はいずれも規模が大きく、64～118×58～94cm、深さ117～163cmを測る。ほとんどのピットから柱痕が確認されており、これらのピットは、長方形を基調とした掘立柱建物跡を構成する柱穴と考えられる。なお、建物跡としての柱配列を明確にし得なかったのは、ピット周辺の配石遺構等の保存のため、ピット確認面（Ⅲd層上面）まで掘り下げていない部分や歴史時代の住居構築による破壊部分があることによる。以下、その位置、形態、規模等から、これらのピットを4グループに大別し、略述する。

ピット401、402（Aグループ）は、いずれも大規模で、掘り方壁に接するように柱痕が確認されている。両ピットの南西側をⅣ層まで下げて調査したが、関連するピットは確認できなかった。このため、202号環状配石遺構張り出し部と214号焼土遺構付近（下）に推測される2個の柱穴を加えた4本柱の建物跡になるものと考えられる。なお、ピット401は201号建物跡と重複関係にあり、同ピットが古い。



第21図　建物跡出土土器拓影図(1)

第22図　建物跡出土土器拓影図(2)



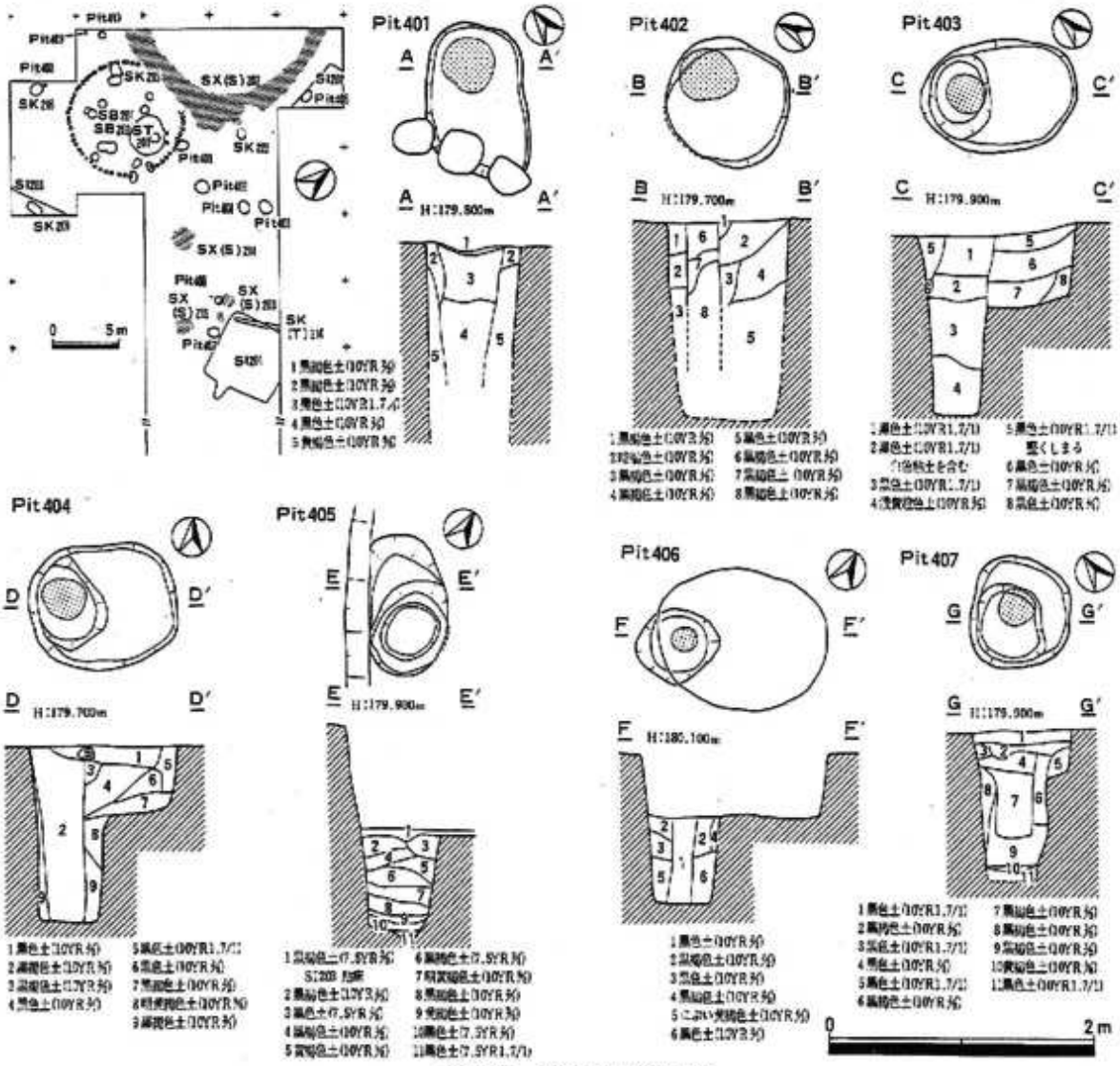
第23図　建物跡出土石器(1)、土製品・石製品実測図(1)

ピット403、404（Bグループ）は、平面形が楕円形を呈し、底面が2段構造となる共通性をもつ。いずれも、北西～西側に深い掘り込み（下段）をもち、その中に柱痕を有する。なお、確認面から上段面までは、それぞれ62cm、52cmを測る。両ピット南西側からは同様のピットは確認されておらず、両ピットは北東側及び北西側あるいは南東側に建物跡を構成する柱穴と考えられる。

ピット405（Cグループ）は、底面が2段構造となり、平面形、規模ともBグループに類似するが、深さが上段で101cm、下段で163cmと大きく異なる。また、Bグループとは9m近く離れているため、同グループとは別の建物跡の柱穴あるいは異種の遺構と考えられる。

ピット406、407（Dグループ）は、前述の3グループから7m程南東方向に離れている。他グループのピットより若干小規模で、64×58cm、85×73cm、深さ113cm、117cmを測る。両ピットから柱痕が確認されたが、その径は19cm、28cmで、掘り方同様他グループより少し小さい。本グループは、両ピットの北東側に延びる建物跡の柱穴と考えられる。

遺物は、ピット401から73点、402より22点、403より13点の土器片、404より9点の土器



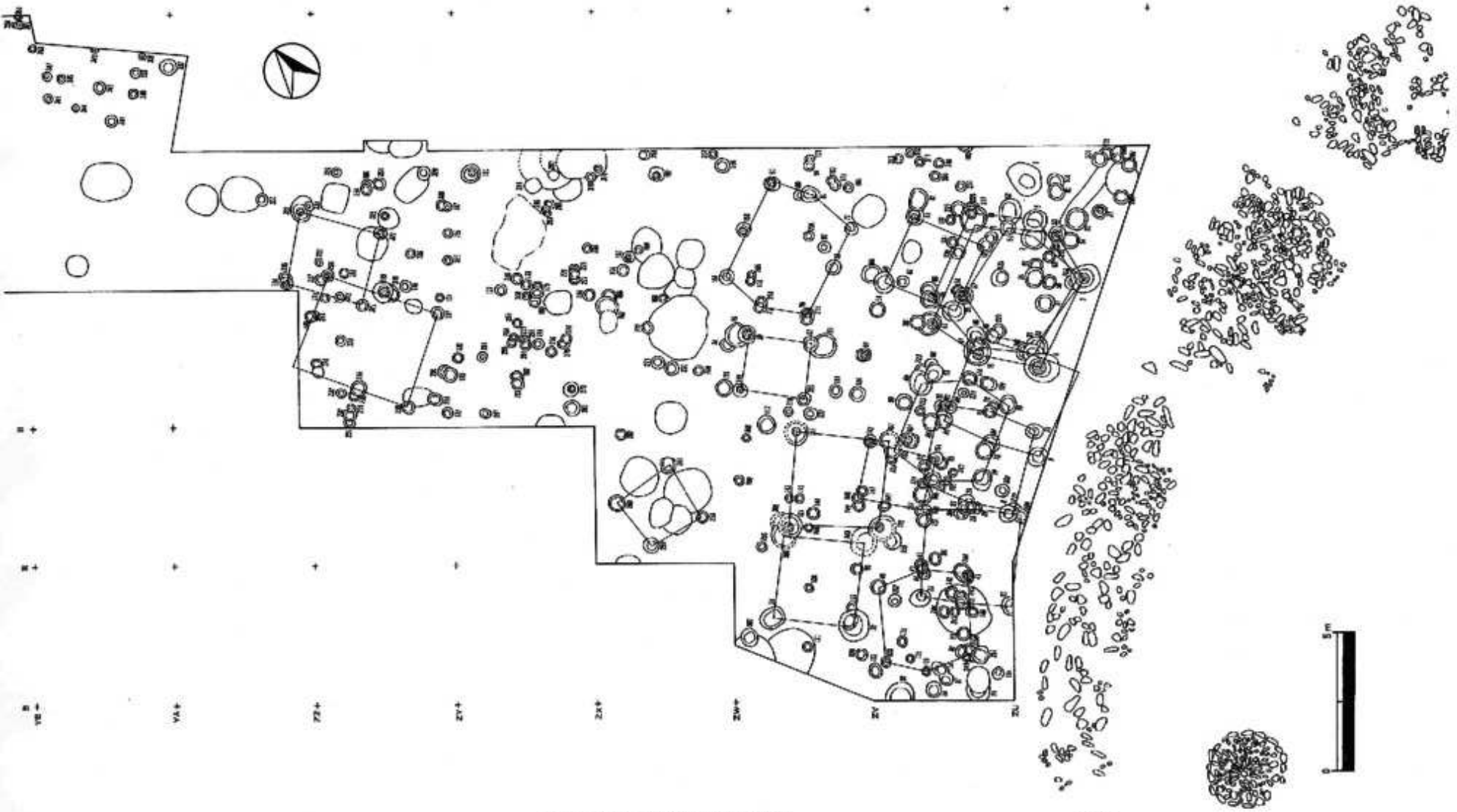
第24図　建物跡実測図(2)

片、1点の鐸形土製品、2点の石製品、405より17点の土器片と1点の掻器、406より3点の土器片、407より51点の土器片、1点の掻器、磨石が出土した。

これらの出土遺物より、7個の柱穴状ピットの構築時期は、いずれも縄文時代後期前葉と考えられる。

(2) 南東部の建物跡と柱穴状ピット群（第25～41図）

発掘区南東部からは317個の柱穴状ピットが検出された。これらのピットはⅢd層上面において確認されている。径24～132cmの円形あるいは楕円形を呈し、深さは9.1～163cmを測る。柱痕の確認されたピットも多く、その規則的な配列から、これらのピットのほとんどは4～8本柱の掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。発掘区域内だけでも30棟以上の建物跡の存在が予想されるが、ここでは柱配列を明確にし得た17棟の建物跡について略述する。



第25図　南東部建物跡柱穴状ピット配置図

第2表　柱穴状ピット一覧表

（※新旧関係は、旧→新で表わす。記号のないものは新旧不明）

ピットNo.	グリッド	長径×短径×深さ(cm)	重複関係	ピットNo.	グリッド	長径×短径×深さ(cm)	重複関係
1	ZU－92	132×114×116.0		47	ZV－91	35×48×114.2	Pit46→Pit47→Pit15
2	ZU－92	88×88×126.3	Pit3→Pit2	48	ZV－91・92	79×71×121.2	Pit66→Pit48
3	ZU－91・92	110×103×103.0	Pit206→Pit3	49	ZV－91	68×65×126.8	Pit65→Pit49
4	ZU－91	128×106×115.5	Pit23→Pit22→Pit4	51	ZU・ZV－92	65×56×116.0	Pit52→Pit51
5	ZU－92	88×80×103.0	Pit5→Pit2;Pit5→SX(S)216	52	ZU・ZV－92	62×77×118.3	Pit52→Pit51
8	ZU・ZV－90	76×62×88.0	Pit209→Pit8;Pit210→Pit8	53	ZU－92	56×54×120.8	Pit54→Pit53
9	ZU－90	64×64×100.8		54	ZU－92	60×60×41.0	Pit54→Pit53
10	ZV－90	78×67×82.9		55	ZU－91・92	72×66×54.2	Pit65→Pit55
11	ZU－91	66×60×108.0		56	ZU－91・92	45×43×41.3	
12	ZV－92	56×50×118.0	Pit13	57	ZV－91	64×58×118.5	Pit58→Pit57
15	ZV－92	46×46×63.2	Pit12	58	ZV－91	35×34×45.1	Pit58→Pit57
14	ZV－92	101×97×111.6	Pit222→Pit14;Pit228→Pit14	59	ZW－91	50×45×120.5	
15	ZV－91	101×96×96.0	Pit46→Pit47→Pit15	60	ZV－91	88×80×97.2	Pit223→Pit60→Pit61
16	ZV－91	59×55×109.6	Pit225→Pit16	61	ZV－91	65×55×96.5	Pit223→Pit60→Pit61
17	ZV－91	44×43×83.4	Pit18→Pit17	62	ZW－91	54×51×131.7	Pit63→Pit62
18	ZV－91	40×36×60.4	Pit18→Pit17	63	ZW－91	103×84×39.9	Pit63→Pit62
19	ZU・ZV－91	63×54×96.7		64	ZV－91	52×48×41.4	
20	ZU－92	74×72×109.9	SX(S)235→Pit20	65	ZU－92	47×44×54.8	Pit55→Pit55
21	ZU－92	46×44×107.9		66	ZV・ZW－92	56×54×34.6	Pit66→Pit48
22	ZU－91	66×50×115.1	Pit23→Pit22→Pit4;Pit207→Pit22	67	ZV－92	40×40×52.7	
23	ZU－91	71×59×118.9	Pit23→Pit22→Pit4;Pit207	68	ZV－91・92	64×59×41.3	Pit68→Pit49
24	ZV－88・89	(130)×89×123.8	Pit24→SX(S)218	69	ZU－92	42×38×71.3	
25	ZV－89	76×62×94.8		70	ZW－91	32×28×65.8	Pit70→Pit239
26	ZU・ZV－89	69×59×83.1		71	ZW－91	44×42×41.7	Pit254
27	ZV－90	44×42×88.6	Pit31→Pit27→Pit28;Pit30→Pit27	72	ZV－92	84×60×31.4	Pit73→Pit72
28	ZV－90	36×38×56.0	Pit31→Pit29→Pit28;Pit31→Pit29→Pit28	73	ZV－92	62×57×122.4	Pit73→Pit72
29	ZV－90	47×45×80.6	Pit31→Pit29→Pit28	74	ZW・ZX－91	50×45×54.0	Pit74→Pit75
30	ZV－90	48×46×67.7	Pit30→Pit27	75	ZW・ZX－91	84×80×40.4	Pit74→Pit75→Pit91
31	ZV－90	61×60×86.2	Pit31→Pit27→Pit28;Pit31→Pit29→Pit28	76	ZV－90	64×62×52.3	Pit84→Pit76
32	ZV－89・90	(102)×96×128.2		77	ZW－92	42×42×71.3	
33	ZW－89	90×77×120.0		78	ZW－92	51×50×89.3	
35	ZV－91	81×74×123.5		79	ZU－90	60×54×90.8	
36	ZV－89	53×54×104.4		80	ZW－92	50×49×68.3	
37	ZV－89	50×40×71.8	Pit38	81	ZW－92	58×56×37.9	Pit108→Pit81
38	ZV－89	44×44×74.7	Pit37	82	ZV－89	32×34×60.4	Pit249，Pit250
39	ZW－89	116×108×165.7	Pit119	83	ZV－89	48×45×40.8	Pit83→SX258
40	ZV・ZW－89	52×50×68.7		84	ZV－90	56×50×90.2	Pit84→Pit76
41	ZV－89	38×34×55.8	Pit41→Pit244	85	ZV－90・91	60×54×37.3	Pit86→Pit85
42	ZV－89・90	43×42×48.8	Pit42→Pit43	86	ZV－90・91	62×58×98.5	Pit92→Pit90→Pit89→Pit86→Pit85
43	ZV－89	45×39×51.3	Pit42→Pit43;Pit44→Pit43	87	ZV－90	40×38×51.6	
44	ZV－89	42×40×50.6	Pit44→Pit43	88	ZV－90	42×42×12.1	Pit154
45	ZV－91	82×82×139.1	Pit45→Pit301	89	ZV－91	42×41×53.7	Pit90→Pit89→Pit86
46	ZV－91	55×46×91.0	Pit46→Pit47→Pit15	90	ZV－91	42×42×72.4	Pit92→Pit90→Pit89→Pit86

ピットNo.	グリッド	長径×短径×深さ(cm)	重複関係
91	ZW−91	66X58X132.1	Pit75→Pit91→SX(F)223→SX(S)222
92	ZV−91	[illegible]X[illegible]X82.3	Pit92→Pit90→Pit86
93	ZU−92	60X58X43.3	Pit104→Pit93
94	ZW−92	39X36X47.3	Pit193→Pit94
95	ZV−89·90	44X43X38.3	
96	ZW−89	40X38X16.8	
97	ZW−92	43X42X59.8	
98	ZV−91	42X[illegible]X77.7	Pit223→Pit96→Pit61
99	ZV−91	60X57X39.0	
100	ZV−92·93	[illegible]X[illegible]X118.8	
101	ZV−90	60X57X105.9	
102	ZV−90	52X50X44.1	Pit140→Pit102；Pit157→Pit102
103	ZW−92	34X34X50.1	
104	ZU−92	60X[illegible]X106.2	Pit104→Pit93
105	ZV−90	70X68X25.0	Pit121
106	ZV−90	58X56X90.7	Pit121
107	ZW·ZX−92	52X46X71.1	
108	ZW−92	34X32X36.7	
109	ZW−92	[illegible]X30X47.8	Pit109→Pit81
110	ZV−89	32X30X56.5	
111	ZW−91	44X43X39.1	
112	ZV−89	42X40X39.4	Pit112→SK258；Pit245
113	ZV−89	51X46X79.2	Pit113→SK258；Pit245
115	ZW−90	34X32X61.2	
116	ZW−90·91	80X76X128.1	
117	ZW−90·91	66X65X51.9	
119	ZW−89	[illegible]X34X69.1	Pit39
120	ZW−89	34X33X63.2	
121	ZV−90	30X30X62.7	Pit105；Pit106
122	ZV·ZW−89	51X45X52.8	
123	ZV−89	36X34X54.1	
124	ZW−91	52X48X33.9	
125	ZV−91·92	60X56X108.5	
126	ZV·ZW−90	[illegible]X[illegible]X121.9	Pit143→Pit126；Pit139
127	ZW−90	[illegible]X[illegible]X140.1	Pit306→Pit127；Pit305
128	ZV−91	52X50X104.7	
129	ZV−91	62X49X53.4	
130	ZV−92	47X46X35.2	
131	ZV−92	34X34X32.9	
132	ZV−92	38X34X41.5	
134	ZV−89	44X40X71.5	
135	ZV−89	29X28X50.5	
136	ZV−89	38X34X48.4	
138	ZW−89	28X27X45.8	
139	ZW−91	52X48X136.2	
140	ZV−90	48X[illegible]X92.4	Pit140→Pit102；Pit157
141	ZV−90	44X36X17.9	
142	ZV·ZW−90	38X36X75.4	
143	ZV·ZW−90	[illegible]X[illegible]X151.1	Pit143→Pit126
144	ZW−90	44X40X42.0	
145	ZW−90	28X26X22.9	
146	ZW−90	38X36X15.6	
147	ZW−90	39X[illegible]X42.9	Pit147→Pit148
148	ZW−90	42X42X82.0	Pit147→Pit148；Pit149→Pit148
149	ZW−90	42X[illegible]X18.3	Pit149→Pit148
151	ZW−90	[illegible]X[illegible]X131.1以上	Pit152
152	ZV−90	66X[illegible]X115.8	Pit153→Pit152；Pit151
153	ZV−90	38X[illegible]X38.7	Pit153→Pit152
154	ZV−90	48X48X73.4	Pit88
155	ZV−91	32X30X22.6	
156	ZV−90	31X31X28.2	
157	ZV−90	36X[illegible]X88.0	Pit157→Pit102：Pit140
158	ZW−92	48X44X79.2	
159	ZV−90	62X[illegible]X54.0	Pit126
160	ZW−92	[illegible]X34X36.0	Pit161
161	ZW−92	[illegible]X37X38.1	Pit160
164	ZX−92	40X38X71.6	
165	ZX−92	42X40X91.2	
166	ZX−91	50X[illegible]X27.3	Pit166→Pit167
167	ZX−91	76X[illegible]X25.9	Pit166→Pit167→SX(F)220
168	ZX−91	30X28X47.4	
169	ZX−92	38X36X27.1	SK247
170	ZW−89	30X28X52.1	Pit170→SK239
171	ZZ−91	32X29X42.1	
172	ZZ−91	40X36X28.4	
173	ZY·ZZ−91	56X52X38.5	Pit295→Pit175
174	ZZ−91	30X26X40.4	
176	ZZ−91·92	40X40X48.5	
177	ZY−91·92	38X36X46.2	
178	ZY−91·92	41X37X68.4	
179	ZY−91·92	40X40X72.4	Pit180，Pit316
180	ZY−91	35X37X57.8	Pit179
181	ZY−91	44X38X31.6	
182	ZY−91	39X35X53.0	Pit182→Pit183
183	ZY−91	46X38X38.0	Pit182→Pit183
184	ZZ−92	32X24X40.5	
185	ZY·ZZ−92	32X32X40.9	
186	ZZ−92	41X[illegible]X42.3	Pit254→Pit186→Pit253
187	ZY·ZZ−92	30X30X40.9	Pit188→Pit187
188	ZZ−92	[illegible]X34X45.2	Pit188→Pit187
189	ZY−92	68X64X117.9	

ピットNo.	グリッド	長径×短径×深さ(cm)	重複関係	ピットNo.	グリッド	長径×短径×深さ(cm)	重複関係
190	ZW−90	34×30×37.2		257	ZZ−92	40×39×33.9	Pit257→Pit256
191	ZX−91	66×60×42.2		258	ZX−90	42×40×58.3	
192	ZX−92	54×54×81.4		259	ZX−90	54×53×54.6	
193	ZW−92	34×28×53.5	Pit195→Pit94	260	ZX−90	58×54×44.6	
200	ZU−92	57×54×92.1	SK(F)242→Pit200	261	ZX−90	54×54×47.2	
201	ZU−92	58×56×109.7	SK(T)235→Pit202→Pit201	262	ZX−90	38×36×16.7	
202	ZU−92	56×54×96.1	SK(T)235→Pit202→Pit201	263	ZY−91	54×54×62.1	
203	ZU−92	48×46	SK(T)235→Pit203；SK(F)242→Pit203	264	ZW−91	30×27×36.4	Pit71
204	ZU−92	49×46	SK(F)242→Pit204	265	ZW−92	32×30×39.0	Pit108
205	ZU−92	32×30×55.8		266	ZX−92	51×47×16.5	
206	ZU−91·92	60×58×89.5	Pit206→Pit 3	267	ZX−92	26×24×41.3	
207	ZU−91	63×61×102.9	Pit207→Pit22；Pit23	268	ZX−92	34×33×56.0	
209	ZU−90	50×48×78.3	Pit209→Pit 8：Pit210	269	ZX−91	35×30×39.3	
210	ZU·ZV−90	69×59×74.2	Pit210→Pit 8：Pit209	270	ZX−91	48×40×53.9	
221	ZV−91	32×30×35.1		271	ZX−91	50×46×54.4	
222	ZW−91	51×46×42.6		272	ZX−91	34×30×44.1	ST202
223	ZV−91	60×60×50.7	Pit223→Pit69；Pit223→Pit98→Pit61	273	ZY−91	50×48×55.3	
225	ZV−91	48×42×58.8	Pit225→Pit16	274	ZY−91	34×34×19.7	Pit275→Pit274
227	ZV−92	99×96×114.7	Pit227→Pit14：Pit228，Pit229	275	ZY−91	36×34×41.6	Pit275→Pit274
228	ZV−92	70×52×107.0	Pit228→Pit14：Pit227，Pit229	276	ZX·ZY−91	44×40×48.8	
229	ZV−92	52×36×19.5	Pit14，Pit229	277	ZY−92	36×32×34.9	Pit278
230	ZV−92	36×36×42.6		278	ZY−92	32×32×45.7	Pit277，Pit279
231	ZZ−91	32×30×16.0	Pit231→Pit232	279	ZY−92	34×32×19.2	Pit278
232	ZZ−91	42×40×72.4	Pit231→Pit232→Pit234	280	ZY−92	33×33×28.8	
234	ZZ−91	30×28×37.9	Pit232→Pit234	281	ZY−91	35×34×37.5	
235	ZZ−91	34×32×29.1	Pit235→Pit236	282	ZY−91	43×42×40.0	
236	ZZ−91	57×53×66.1	Pit235→Pit236	283	ZY−92	40×38×56.0	SK(F)251→Pit283
237	ZZ−91	32×30×31.2		284	ZY−92	61×54	SK252
238	ZW−92	35×32×29.8		285	ZY−92	38×34×47.6	
239	ZW−91	54×42×38.8	Pit70→Pit239	286	ZY−92	34×20×49.9	
240	ZZ·YA−91	38×38×86.3	Pit241→Pit240	287	ZY−92	26×24×31.8	
241	ZZ·YA−91	30×26×26.4	Pit241→Pit240	288	ZY−92	40×38×29.3	
243	ZV−90	29×26×15.2		289	ZY−91	32×30×17.1	
244	ZV−89	84×57×37.7	Pit41→Pit244	290	ZY−91	39×38×23.1	
245	ZV−89	58×54×51.5	SK258，Pit112，Pit113	291	ZY−91	38×36×41.8	Pit293→Pit292→Pit291
246	ZV−89	44×37×34.7	SK258	292	ZY−91	28×26×45.4	Pit293→Pit292→Pit291
247	ZV−89	34×31×34.2	SK258，Pit113	293	ZY−91	36×36×35.8	Pit293→Pit292→Pit291
248	ZV−89	43×38×36.7	Pit248→SK258	294	ZY−91	25×24×36.1	Pit295→Pit294
249	ZV−89	32×31×61.7	Pit82，Pit250	295	ZY−91	39×32×48.3	Pit295→Pit294
250	ZV−89	62×62×41.8	Pit82，Pit249，Pit251	296	ZZ−91	54×50×29.0	Pit296→Pit173
251	ZV−89	62×58×90.6	Pit250	297	ZY−91	30×28×23.8	
252	ZV−89	42×41×43.3		298	ZZ−91	53×44×41.1	SK244→Pit298
253	ZZ−92	44×44×56.1	Pit253→Pit186→Pit254	299	ZZ−91	46×44×52.7	SK244
254	ZZ−92	37×36×32.3	Pit186→Pit254	300	ZY−91	30×28×10.7	
255	ZW−90	34×30×9.1		301	ZV−91	48×46×40.5	Pit45→Pit301
256	ZZ−92	42×41×70.9	Pit257→Pit256	302	ZV−90	50×44×14.2	

ピット No.	グリッド	長径×短径×深さ (cm)	重複関係	ピット No.	グリッド	長径×短径×深さ (cm)	重複関係
303	ZW−91	48×46×127.1		333	ZZ·YA−92	32×29×98.0	Pit333→Pit332
304	ZW−91	30×36×47.6		334	YA−92	45×42×89.9	Pit335→Pit334
305	ZW−90	[illegible]	Pit127；Pit306	335	YA−92	30×[illegible]×39.4	Pit335→Pit334
306	ZW−90	[illegible]	Pit306→Pit127；Pit305	336	YA−92	38×36×97.0	SK231→Pit336
307	ZW−89	64×60×35.3	SK236→Pit307	337	YA·YB−93	58×56×47.9	
308	ZW−90	30×26×18.5		338	YB−93	22×19×23.5	
309	ZV−92	42×36×32.3		339	YB−93	31×31×21.5	
310	ZV−92	42×34×38.9		340	YB−93	32×30×19.9	
311	ZV−92	34×32×36.2		341	YB−93	43×40×17.2	
312	ZV−92	32×28×37.8		342	YB−93	41×39×40.0	
313	ZV−92	32×28×34.6		343	YB−93	24×24×21.0	
314	ZX−92	29×28×42.8	SK249	344	YB−93	20×19×21.7	
315	ZX·ZY−92	25×24×36.7	SK249	345	YB−93	31×28×44.8	
316	ZY−91·92	30×[illegible]×17.7	Pit179	346	YB−93	30×26×21.7	
317	ZZ−91	44×44×56.7		347	YB−93	32×24×33.2	
318	ZZ−91·92	55×50×46.3	Pit318→Pit319	348	YB·YC−93	27×25×13.7	
319	ZZ−91·92	74×70×78.0	Pit318→Pit319	349	YC−93	[illegible]×26×15.8	Pit350
321	ZZ−91	42×39×100.0		350	YC−93	[illegible]×23×29.9	Pit349
322	ZZ−91	31×27×38.0		351	YC−93·94	23×22×27.7	
323	ZZ−91	34×30×28.1		401	YL·YK−92	118×72×[illegible]50以上	Pit401→SB201
324	ZZ·YA−91	38×[illegible]×39.8	Pit324→SX以上207	402	YK−92	99×94×[illegible]	
325	ZY·ZZ−92	30×29×44.2		403	YK−93	118×83×148.0	
326	ZZ−92	34×32×43.2		404	YK−93	112×93×135.0	
327	ZZ−92	40×38×142.1	SK227A→Pit327	405	YL−94	107×[illegible]×163.0	Pit405→SI202
328	ZZ−92	26×22×42.3	Pit328→SK227B	406	YI−93	64×58×113.0	Pit406→SX(S)234
329	ZZ−92	46×43×43.8	SK228→Pit329	407	YI−92·93	85×73×[illegible]1.0	
330	ZZ−92	28×26×34.9		408	YL−90	16×16×43.8	
331	ZZ−92	33×29×36.9		409	YM−91	28×24×25.6	
332	YA−92	98×70×107.0以上	Pit333→Pit332	410	YM−91	62×59×43.8	

第203号建物跡（第26、30、31、35、36、41図、ＰＬ６、７、24、25）

柱穴状ピット群域南東端のＺＶ～ＺＵ−91～92グリッドに位置する。204、205、206号建物跡、216、217号立石遺構、225号焼土遺構と重複し、本遺構は204、205号建物跡より新しく、216、217号立石遺構より古い。ピット２、３、４、15、45、14を柱穴とする６本柱の建物跡で、長辺4.4ｍ、短辺3.9ｍ、張り出し部軸長5.3ｍを測り、Ｎ−67°−Ｅの長軸方位をもつ。柱穴は大規模で、掘り方径82～128㎝、深さ96～139㎝を測る。また、ピット３、４、15、45から径36～48㎝の柱痕が確認されている。本遺構ピットからは167点の土器片と５点の円盤状土製品の出土があった。これらの遺物及び新旧関係から本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第204号建物跡（第26、30、35、40、41図、ＰＬ６、７、23、24、25）

ピット群域南東端のＺＶ～ＺＵ−91～92グリッドに位置する。203、205、206号建物跡、

216、217号立石遺構、225号焼土遺構と重複し、本遺構は205号建物跡より新しく、203号建物跡、216、217号立石遺構より古い。ピット5、206、22、47、49、228を柱穴とする6本柱の建物跡で、長辺4.3m、短辺3.4m、張り出し部軸長5.1mを測り、N−67°−Eの長軸方位をもつ。柱穴掘り方径は55~88cm、深さ90~117cmを測り、ピット49の柱痕径は28cmである。なお、ピット5、47、49の底面からは礎石状に配置された石が確認された。

本遺構ピットからは、32点の土器片と1点の磨製石斧、2点の円盤状土製品の出土があった。これらの遺物及び新旧関係から、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第205号建物跡（第26、30、31、35、36、41図、PL6、7、25）

ピット群域南東端のZV~ZU−91~92グリッドに位置する。203、204、206、207号建物跡、225号焼土遺構と重複し、本遺構は203、204号建物跡より古い。ピット53、23、16、57、51とピット3により消失したと考えられる1個のピットを柱穴とする6本柱の建物跡で、長辺3.2m、短辺3.0m、張り出し部軸長4.4mを測り、N−75°−Eの長軸方位をもつ。柱穴掘り方径は56~71cm、深さは103~119cm、ピット53、57で確認された柱痕径はそれぞれ25cm、31cmを測る。本遺構ピットからは8点の土器片の出土があった。これらの遺物及び新旧関係から、本遺構の時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第206号建物跡（第26、31、32、34、36、40図、PL6、7、10、21）

ピット群域南東部のZV−91~92グリッドに位置する。203、204、205号建物跡、219号配石遺構と重複する。ピット12、35、48、73を柱穴とする4本柱の建物跡で、長辺2.8m、短辺2.6mを測り、N−27°−Wの長軸方位をもつ。柱穴掘り方径は56~81cm、深さは118~124cm、ピット73の柱痕径は25cmである。本遺構ピットからは、1点の小型鉢形土器の他9点の土器片と1点の石鏃の出土があった。34図1はピット35出土の小型鉢形土器で、口径9.4cm、底径7.6cm、器高5.3cmを計る。無文の土器である。これらの遺物から、本遺構の構築時期は縄文時代後期と考えられる。

第207号建物跡（第27、30、32、37図、PL6、7）

ピット群域南東端のZV~ZU−90~91グリッドに位置する。204、205、208、209号建物跡、217号立石遺構と重複し、本遺構は208号建物跡より新しく、204号建物跡、217号立石遺構より古い。ピット207、9、84、86、46と南東側の調査区域外に存在が考えられる1個のピットを柱穴とする6本柱の建物跡で、長辺3.7m、短辺3.3m、張り出し部軸長3.5mを測り、N−27°−Wの長軸方位をもつ。柱穴掘り方径は58~67cm、深さは90~103cmを測る。本遺構ピットからは、8点の土器片の出土があった。これらの遺物及び新旧関係から本遺構の時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第208号建物跡（第27、30、32、35、37、41図、ＰＬ６、７、24）

ピット群域南東端のＺＶ～ＺＵ－90～91グリッドに位置する。207、209、210、213号建物跡と重複し、本遺構は207、213号建物跡より古い。ピット17、79、210、31、121、92を柱穴とする６本柱の建物跡で、長辺3.4ｍ、短辺2.9ｍ、張り出し部軸長3.4ｍを測り、Ｎ－56°－Ｅの長軸方位をもつ。柱穴は径30～61cmで、深さは63～91cmを測る。本遺構ピットからは、９点の土器片と１点の円盤状土製品の出土があった。これらの遺物及び新旧関係より、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第209号建物跡（第27、30～33、35～38、41図、ＰＬ６、７）

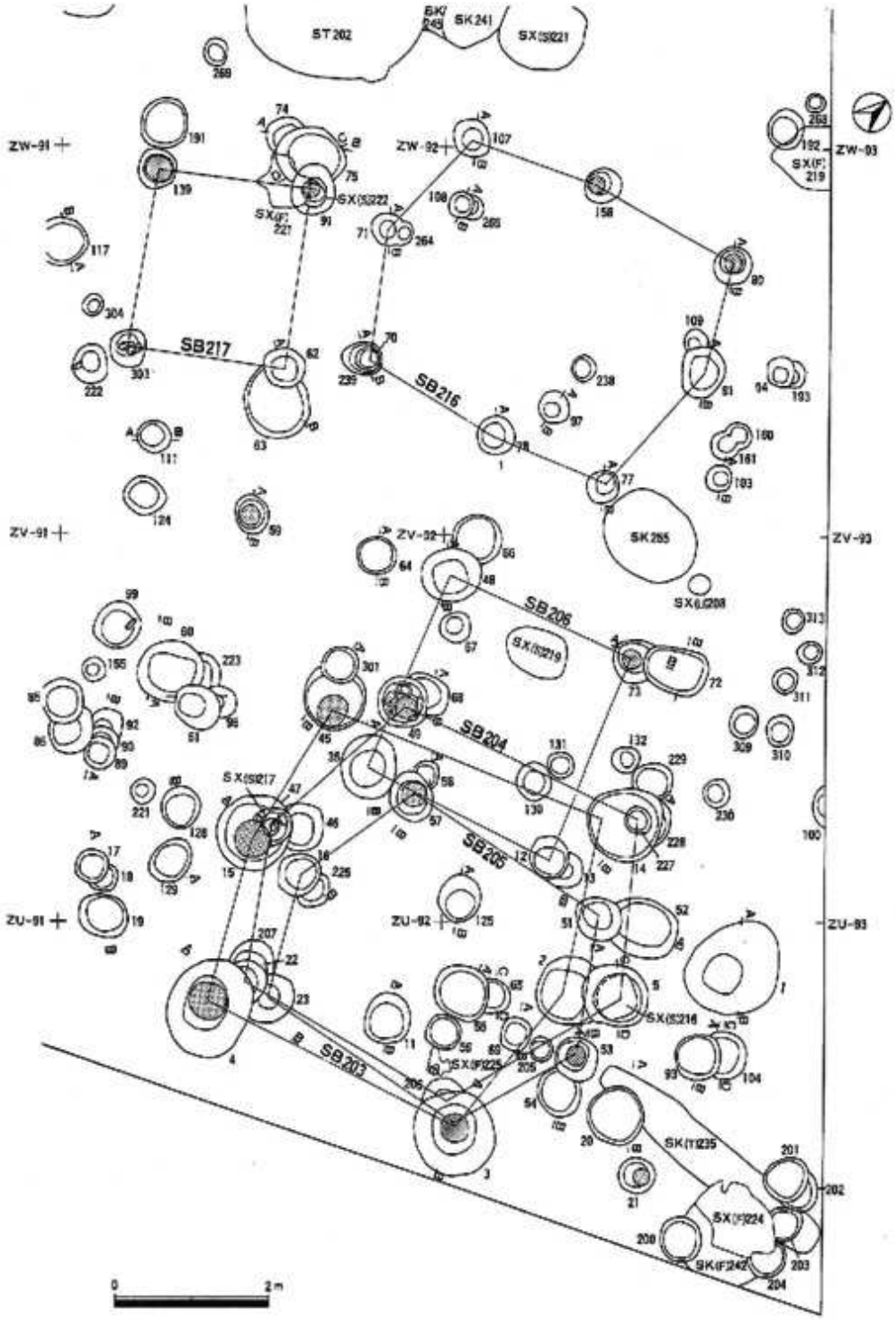
ピット群域南東端のＺＶ－90～91グリッドに位置する。207、208、210、211号建物跡、220号環状配石遺構と重複し、本遺構は220号配石遺構より古い。ピット128、19、10、106、152、60を柱穴とする６本柱の建物跡で、長辺3.3ｍ、短辺2.7ｍ、張り出し部軸長3.9ｍを測り、Ｎ－62°－Ｅの長軸方位をもつ。柱穴径は52～88cmで、深さは83～116cmを測る。本遺構ピットからは、20点の土器片の出土があった。これらの遺物から本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

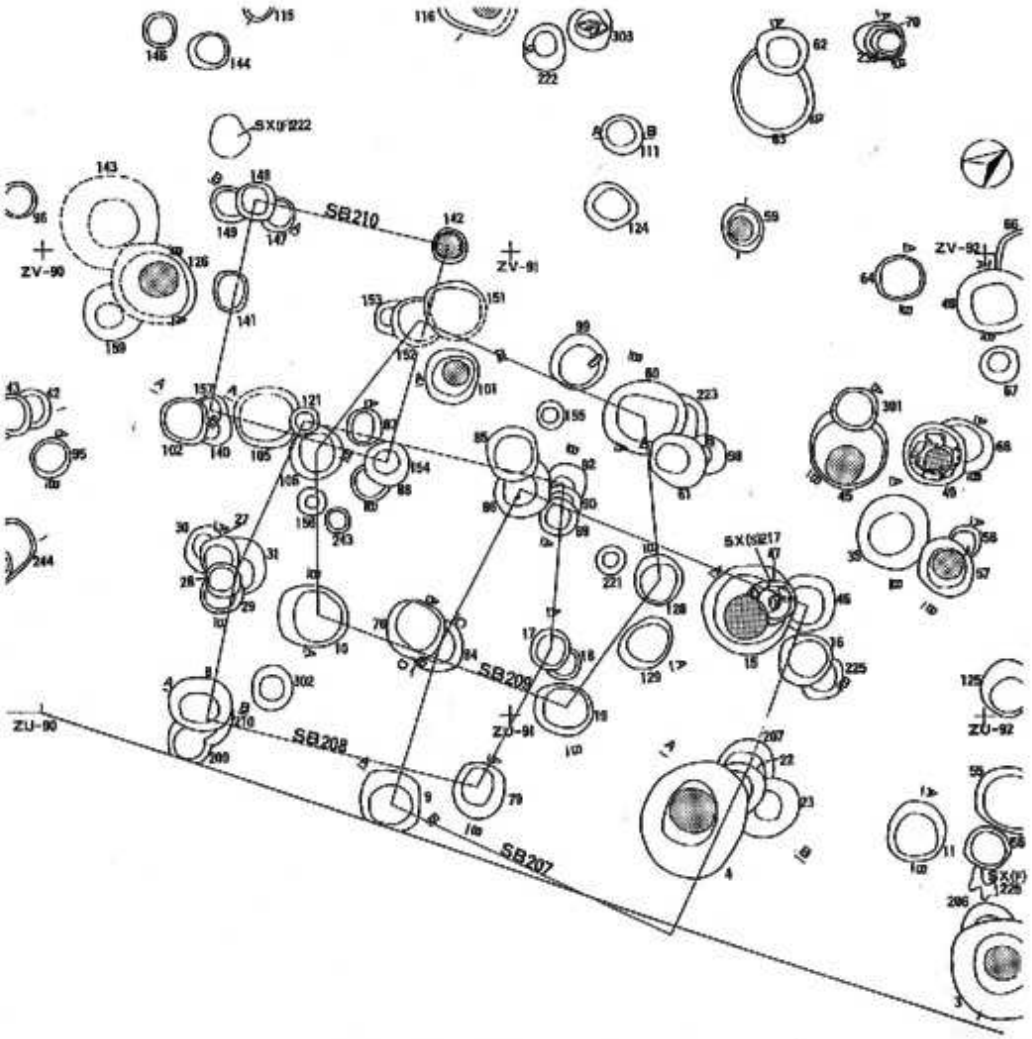
第210号建物跡（第27、33、38図、ＰＬ６、７）

ピット群域南部のＺＷ～ＺＶ－90グリッドに位置する。208、209、211、213号建物跡、220号環状配石遺構と重複し、本遺構は220号配石遺構より古い。ピット154、157、148、142を柱穴とする４本柱の建物跡で、長辺2.4ｍ、短辺2.0ｍを測り、Ｎ－37°－Ｗの長軸方位をもつ。柱穴掘り方径は38～48cmで、深さは73～88cmを測り、ピット142で確認された柱痕径は27cmである。本遺構ピットからは、13点の土器片の出土があった。これらの遺物及び新旧関係から本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第211号建物跡（第28、32、33、37、38、41図、ＰＬ６、７、24）

ピット群域南部のＺＷ～ＺＶ－90グリッドに位置する。209、210、212号建物跡、220号環状配石遺構、222号焼土遺構と重複し、本遺構は212号建物跡より新しく、220号配石遺構より古い。ピット151、126、127、116を柱穴とする４本柱の建物跡で、長辺3.4ｍ、短辺3.3ｍを測り、Ｎ－45°－Ｗの長軸方位をもつ。環状配石遺構保存のため、完掘していないが柱穴掘り方は径67～96cm、深さ122～140cmと考えられる。また、ピット126、127、116で柱痕が確認され、その径は34～42cmと推察される。本遺構ピットからは、18点の土器片と１点の円盤状土製品の出土があった。これらの遺物及び新旧関係より、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。


ST202
SK241
SX(S)221
SB217
SB216
SB206
SB204
SB205
SB203
SK255
SX(S)208
SX(S)219
SX(S)217
SX(S)216
SX(F)224
SK(T)235
SK(F)242
ZW-91
ZW-92
ZW-93
ZV-91
ZV-92
ZV-93
ZU-91
ZU-92
ZU-93
0
2m



第27図　建物跡実測図(4)

第212号建物跡（第28、31、36、38、40図、ＰＬ６、７、21）

ピット群域南部のＺＷ－89～90グリッドに位置する。211号建物跡、220号環状配石遺構と重複し、本遺構はいずれよりも古い。ピット143、39、33、306を柱穴とする４本柱の建物跡で、長辺3.0ｍ、短辺2.9ｍを測り、Ｎ－50°－Ｅの長軸方位をもつ。柱穴は径90～116㎝、深さ120～164㎝を測る。本遺構ピットからは、17点の土器片と１点の石錘の出土があった。これらの遺物及び新旧関係より、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第213号建物跡（第28、30、34、35、37、41図、ＰＬ６、７、24）

ピット群域南端のＺＶ－89～90グリッドに位置する。208、210号建物跡、258号土壙と重複し、本遺構は208号建物跡より新しく、258号土壙より古い。ピット29、209、26、113、25、140を柱穴とする６本柱の建物跡で、長辺3.4ｍ、短辺3.2ｍ、張り出し部軸長3.4ｍを測り、Ｎ－51°－Ｅの長軸方位をもつ。柱穴径は47～76㎝、深さは78～95㎝を測る。本遺構ピットからは小型鉢あるいは深鉢底部他19点の土器片と１点の円盤状土製品の出土があった。これらの遺物及び新旧関係から、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第214号建物跡（第28、31、33、36、37、41図、ＰＬ６、７、24）

ピット群域南端のＺＶ－89グリッドに位置し、213号建物跡、258号土壙と重複する。ピット43、41、250、110、123、40を柱穴とする６本柱の建物跡で、長辺3.2ｍ、短辺2.8ｍ、張り出し部軸長3.7ｍを測り、Ｎ－41°－Ｅの長軸方位をもつ。柱穴径は32～62㎝、深さは42～63㎝を測る。本遺構ピットからは、31点の土器片と１点の円盤状土製品の出土があった。これらの遺物から、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第216号建物跡（第26、31、32、36、37、38図、ＰＬ６、７）

ピット群域中央から若干南東寄りのＺＸ～ＺＷ－91～92グリッドに位置する。ピット77、78、70、107、158、80を柱穴とする６本柱かピット71、81を加えた８本柱の建物跡と考えられる。長辺3.7ｍ、短辺3.3ｍ、張り出し部軸長4.5ｍを測り、Ｎ－68°－Ｅの長軸方位をもつ。柱穴の径は、いずれも32～68㎝で大差ないが、６本柱を構成するピットの深さが67～79㎝に対し、張り出し部軸線上のピット71、81は38～42㎝で浅い。本遺構ピットからは、14点の土器片の出土があった。これらの遺物から、本遺構の構築時期は縄文時代後期と考えられる。

第217号建物跡（第26、31、32、36～38、41図、ＰＬ６、７、24）

ピット群域中央から若干南東寄りのＺＷ－91グリッドに位置する。222号立石遺構、221号焼土遺構と重複し、本遺構はいずれよりも古い。ピット62、303、139、91を柱穴とする４本柱の建物跡で、長辺2.3ｍ、短辺2.1ｍを測り、Ｎ－41°－Ｗの長軸方位をもつ。柱穴掘り方径は48～66㎝、深さは127～136㎝を測る。また、ピット139、91で柱痕が確認され、径はそれぞれ、34㎝、22㎝である。なお、ピット303の中位から14～20㎝大の石３点が確認されている。

本遺構ピットからは、36点の土器片と1点の円盤状土製品の出土があった。これらの遺物及び新旧関係から、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第218号建物跡（第28、33、34、39、41図、ＰＬ6、13、24、28）

ピット群域中央から若干南西寄りのＺＸ－90グリッドに位置し、238、243号フラスコ状土壙、237、256号土壙と重複する。ピット258、259、260、261を柱穴とする4本柱の建物跡で長辺2.2ｍ、短辺2.2ｍを測り、N－83°－Wの長軸方位をもつ。柱穴径は42～58cm、深さは45～58cmを測る。本遺構ピットからの出土遺物は多く、4個体の復元土器の他73点の土器片と2点の円盤状土製品の出土があった。34図5、6は小形深鉢形土器底部で、底径は、5が6.4cm、6が7.0cmを計る。5の底面には網代痕を有する。なお両土器内面には茶褐色樹脂が付着していた。8は深鉢形土器底部で、底径は17cmを計る。9は平口縁の深鉢形土器で、口径24.4cm、底径11.0cm、器高34.5cmを測る。口縁部から胴部下半までＬＲ縄文が施文されている。

これらの遺物から、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第219号建物跡（第29、33、39図、ＰＬ6、24）

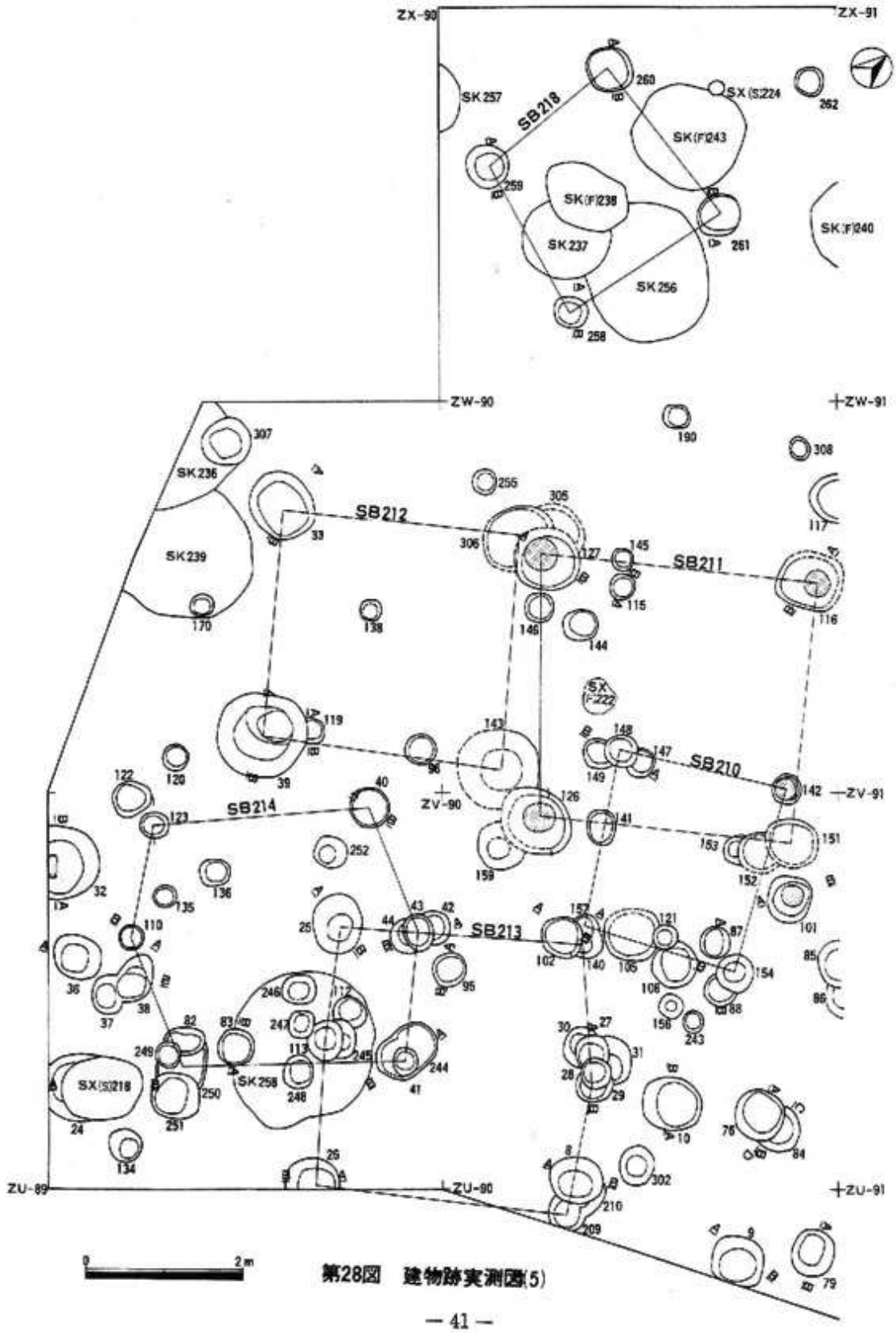
ピット群域北西部のＺＺ－91～92グリッドに位置し、220号建物跡、225号立石遺構、207号埋設土器遺構、244号土壙と重複する。ピット317、299、236、256、319と北西側の発掘区域外に存在が考えられる1個の6本柱、あるいは短辺中央に位置するピット240、それと対になる未確認のピット1個を加えた8本柱の建物跡と考えられる。長辺4.2ｍ、短辺3.6ｍを測り、N－30°－Wの長軸方位をもつ。柱穴掘り方径は38～74cm、深さは53～78cmを測る。またピット256、319から柱痕が確認され、それぞれの径は24cm、26cmである。

本遺構からは、30点の土器片の出土があった。これらの遺物から、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

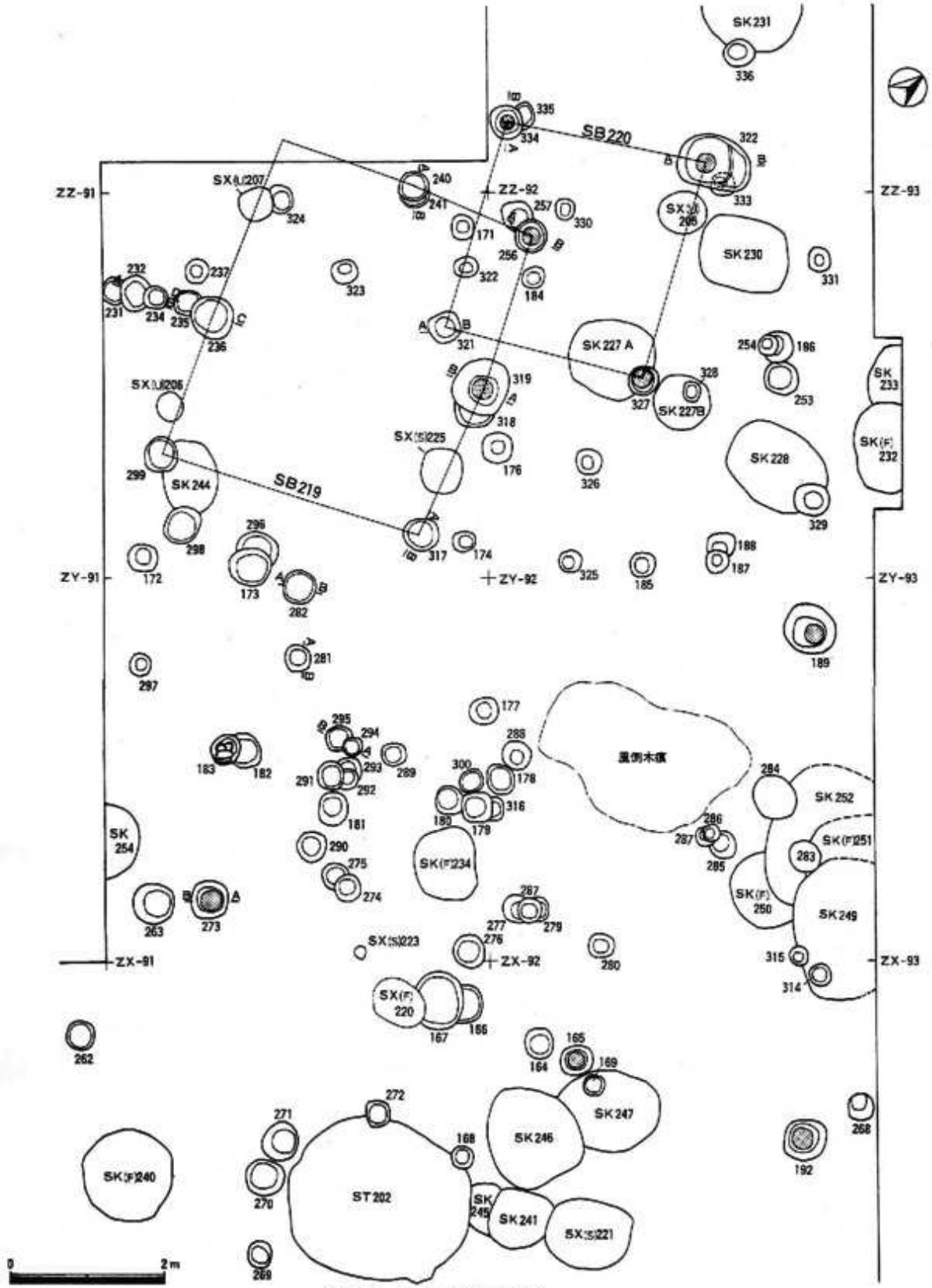
第220号建物跡（第29、33、39図、ＰＬ6、24）

ピット群域北西部のＹＡ～ＺＺ－91～92グリッドに位置する。219号建物跡、227Ａ号土壙、205号埋設土器遺構と重複し、本遺構は227Ａ号土壙より新しい。ピット327、321、334、332を柱穴とする4本柱の建物跡で、長辺2.9ｍ、短辺2.7ｍを測り、N－33°－Wの長軸方位をもつ。柱穴掘り方径は40～70cm、深さは90～142cmを測る。ピット321を除くピットから柱痕が確認され、その径は18～25cmである。本遺構柱穴からは、33点の土器片の出土があった。これらの遺物及び新旧関係から、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉～中葉と考えられる。

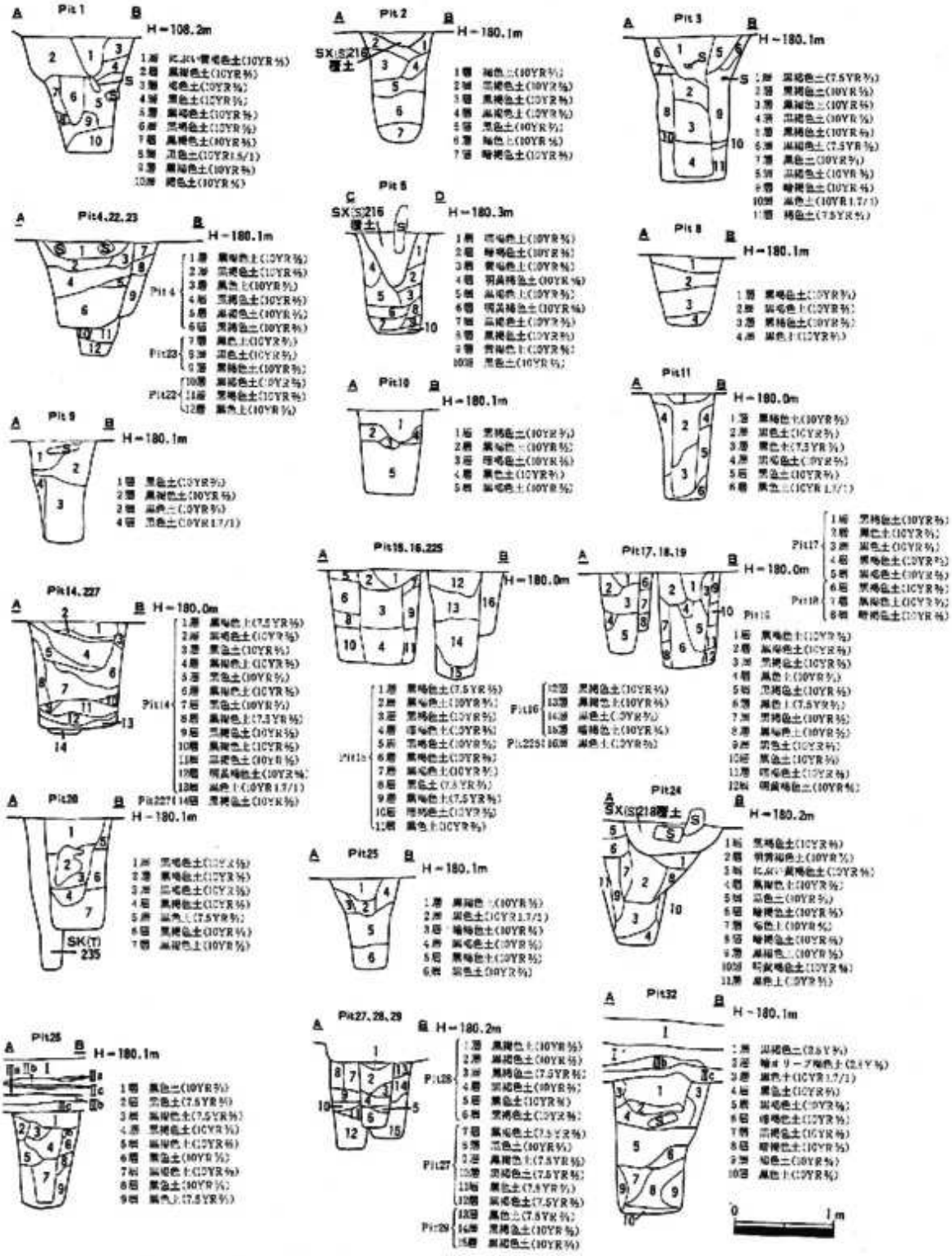
（秋元信夫）



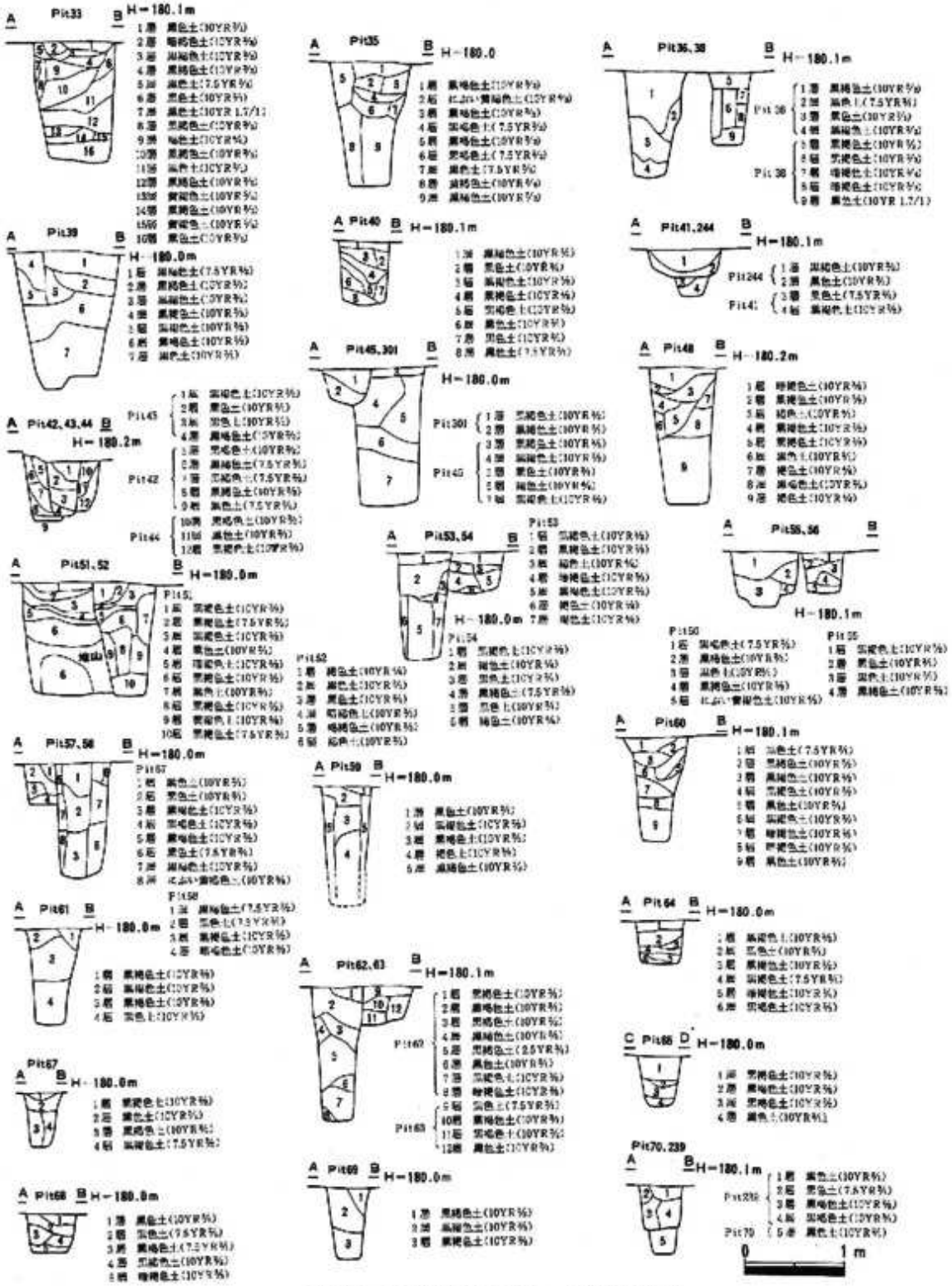
第28図　建物跡実測図(5)



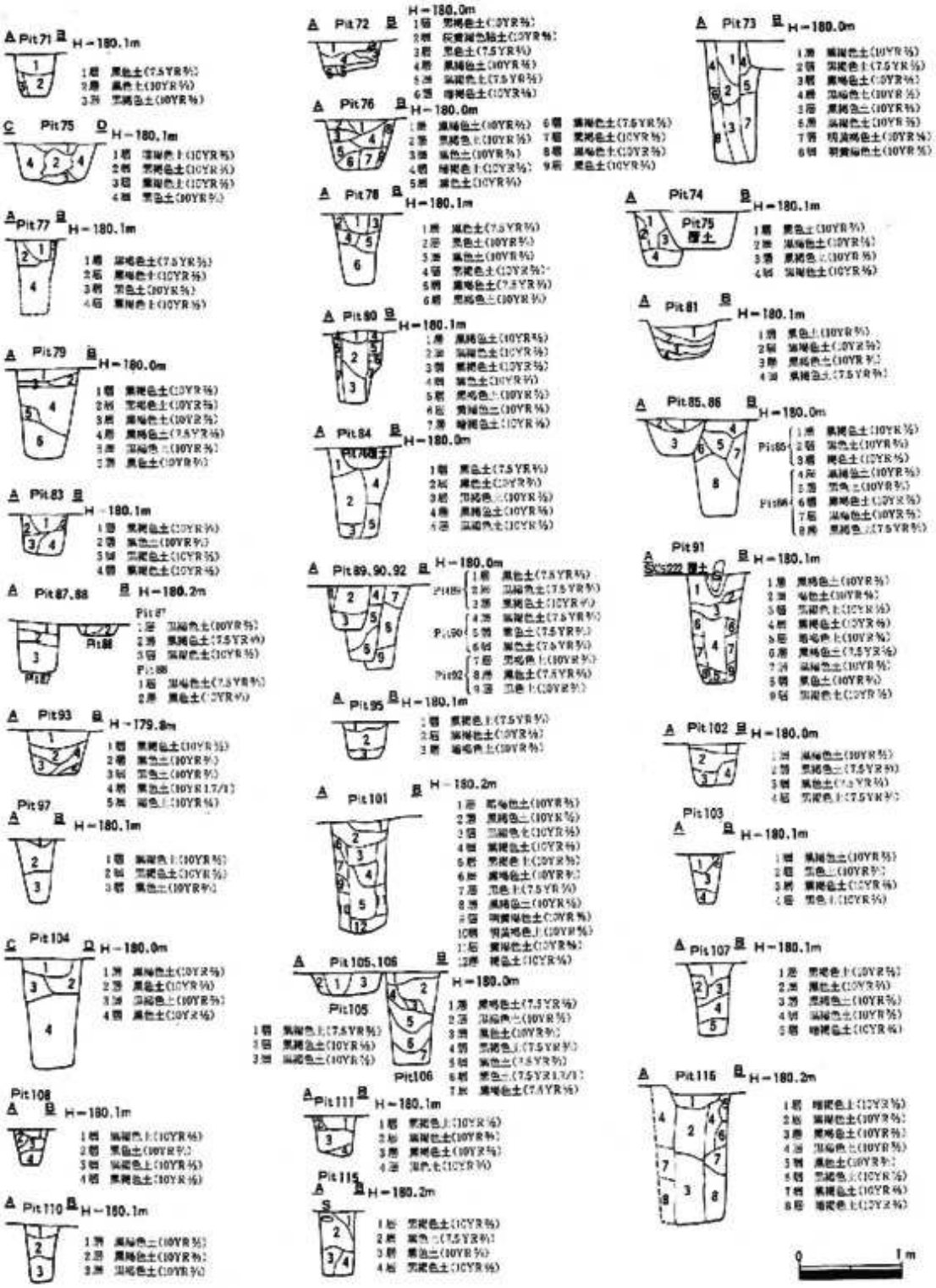
第29図　建物跡実測図(6)



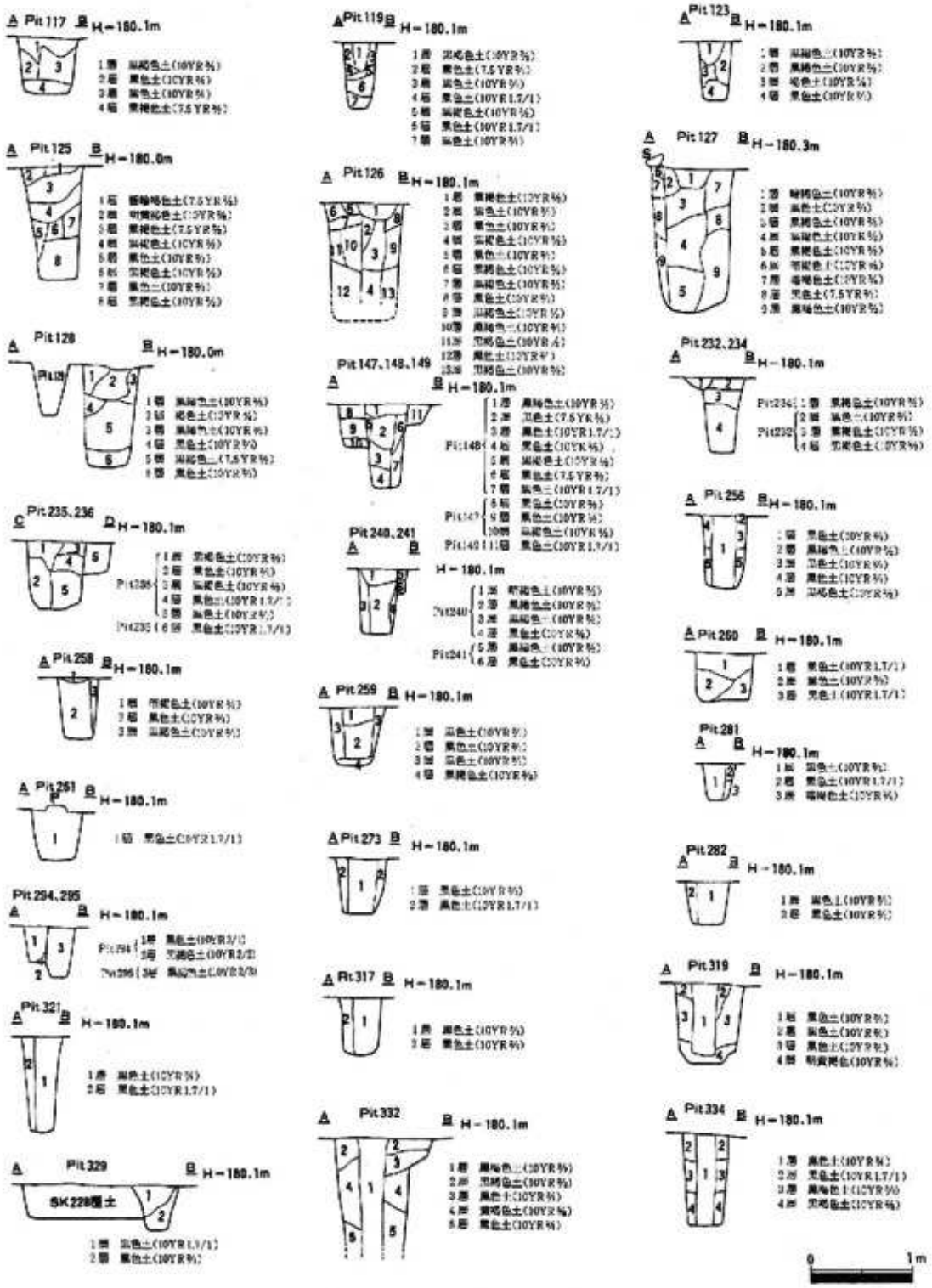
第30図　建物跡柱穴状ピット断面図(2)



第31図　建物跡柱穴状ピット断面図(3)



第32図　建物跡柱穴状ピット断面図(4)



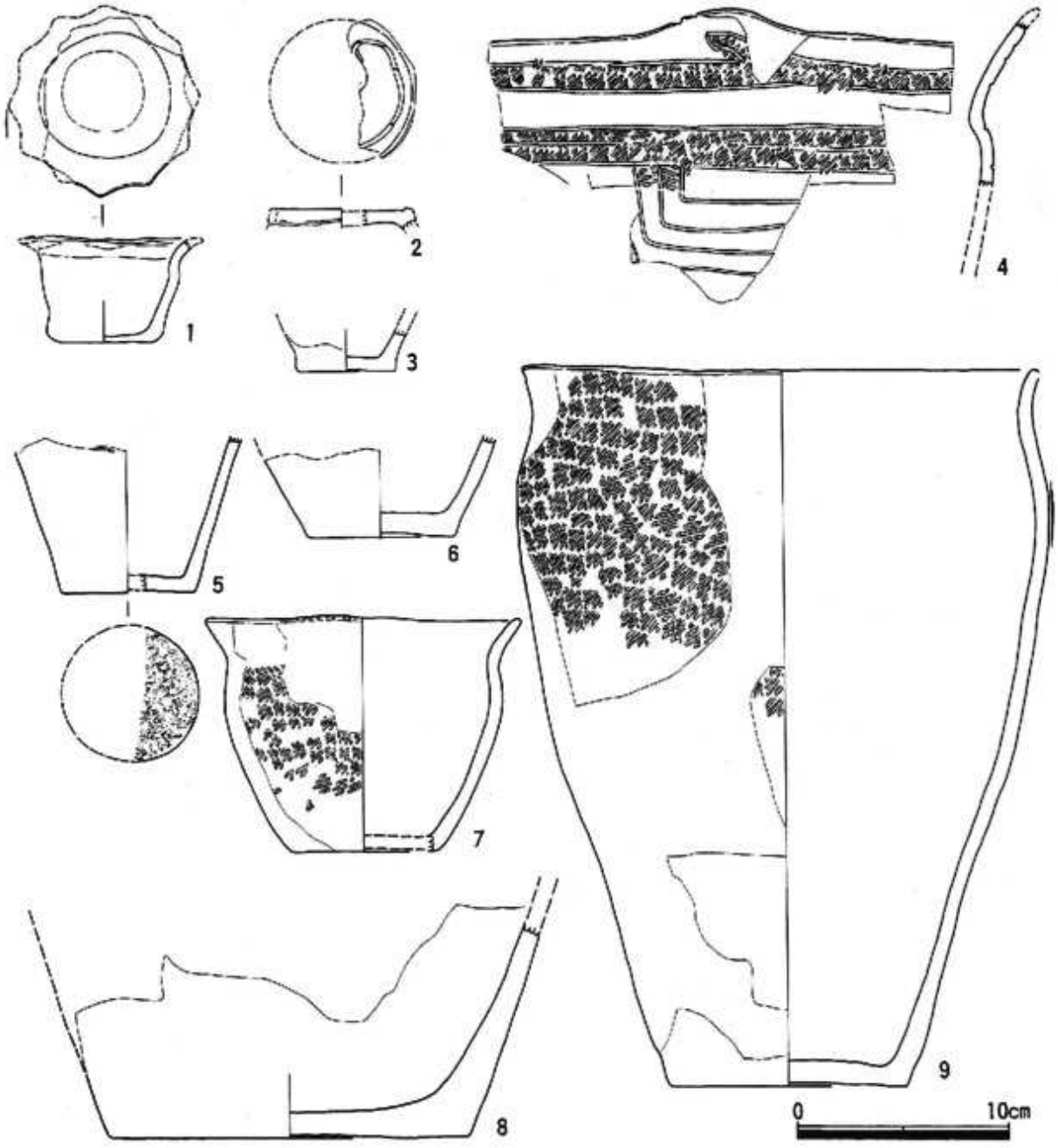
第33図　建物跡柱穴状ピット断面図(5)

第３表　南東部の建物跡一覧表

※張り出し部をもつプランのうち、張り出し部軸長が長辺より長いものは張り出し部軸方向を長軸方向とした。

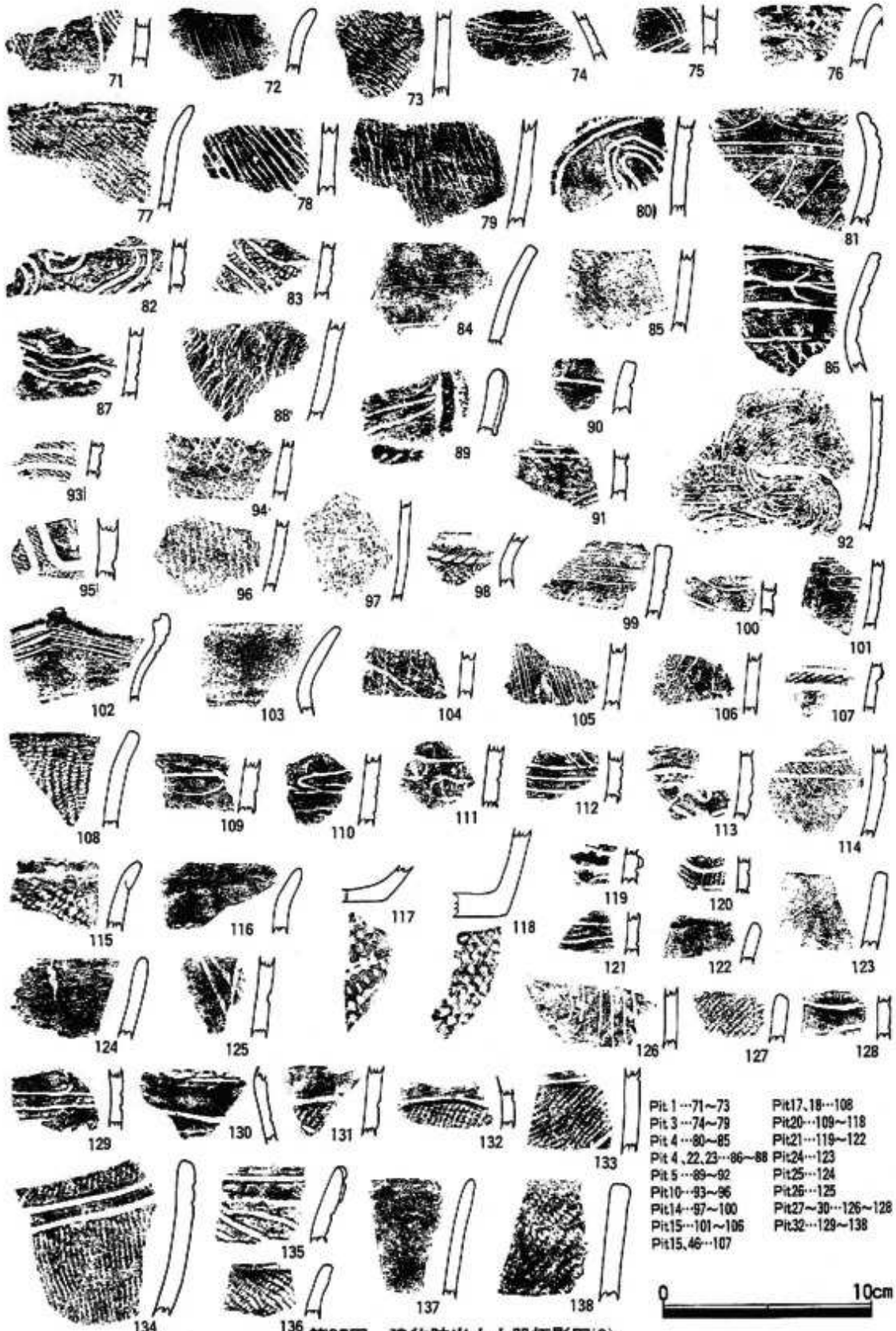
建物跡No.	形態	柱穴数	柱穴 番号	柱穴 規模、深さ(cm)	柱痕(cm)	長辺長(m)	短辺長(m)	張り出した部軸長(m)	長軸方向	新旧関係
SB 203	Ⅱ類	6	Pit 2	68×68×126.3						
			Pit 3	110×103×103.0	36×36	4.3(Pit 4－Pit45)	3.6(Pit 4－Pit 3)	5.3(Pit15－Pit 2)	N－67°－E	SB205→SB204→SB203→SX(S)216
			Pit 4	128×106×115.5	48×46	4.5(Pit 3－Pit14)	4.1(Pit45－Pit14)			SB203→SX(S)217
			Pit 15	101×96×96.0	48×47					SB206、SX(F)225
			Pit 45	82×82×139.1	42×37					
			Pit 14	101×97×111.6						
SB 204	Ⅱ類	6	Pit 5	88×80×103.0						
			Pit 206	80×58×89.5		4.2(Pit22－Pit49)	3.5(Pit49－Pit228)	5.1(Pit47－Pit 5)	N－67°－E	SB205→SB204→SB203
			Pit 22	59×54×115.1		4.4(Pit206－Pit228)	3.3(Pit22－Pit206)			SB204→SX(S)217
			Pit 47	53×48×114.2						SB204→SX(S)216
			Pit 49	68×66×116.8	28×28					SB206、SX(F)225
			Pit 228	70×52×107.0						
SB 205	Ⅱ類	6	Pit 53	56×54×110.8	25×24					
			(Pit 3)	110×103×103.0	36×36	3.2(Pit23－Pit57)	2.9(Pit57－Pit51)	4.4(Pit16－Pit52)	N－75°－E	SB205→SB204→SB203
			Pit 23	71×59×118.9		3.2(Pit 3－Pit51)	3.0(Pit23－Pit 3)			SB206、SB207、SX(F)225
			Pit 16	59×55×109.6						
			Pit 57	64×58×118.5	31×30					
			Pit 51	63×56×116.0						
SB 206	Ⅰ類	4	Pit 12	56×50×118.0						
			Pit 35	81×74×122.5		2.8(Pit35－Pit48)	2.6(Pit48－Pit73)		N－27°－W	SB203、SB204、SB205
			Pit 48	79×71×121.2		2.8(Pit12－Pit73)	2.6(Pit35－Pit12)			SX(S)219
			Pit 73	60×57×122.4	25×24					
SB 207	Ⅱ類	6	Pit 207	67×61×102.9						
			Pit 9	64×64×109.8		3.7(Pit 9－Pit86)	3.3(Pit86－Pit46)	3.5(Pit84－Pit207)	N－27°－W	SB207→SB204→SX(S)217
			Pit 84	58×50×90.2						SB208→SB207
			Pit 86	62×58×98.5						SB205、SB209
			Pit 46	65×60×91.0						
SB 208	Ⅱ類	6	Pit 17	44×43×83.4						
			Pit 79	60×54×90.8		3.4(Pit210－Pit121)	2.9(Pit121－Pit92)	3.4(Pit31－Pit17)	N－55°－E	SB208→SB213
			Pit 210	59×55×74.2		3.4(Pit79－Pit92)	2.9(Pit210－Pit79)			SB208→SB207
			Pit 31	61×60×86.2						SB209、SB210、
			Pit 121	30×30×62.7						
			Pit 92	38×36×82.3						
SB 209	Ⅱ類	6	Pit 128	52×50×104.7						
			Pit 19	63×54×98.7		3.3(Pit10－Pit152)	2.6(Pit152－Pit60)	3.9(Pit106－Pit128)	N－62°－E	SB209→SX(S)220
			Pit 10	78×67×82.9		3.2(Pit19－Pit60)	2.8(Pit10－Pit19)			SB207、SB208、SB210、SB211
			Pit 106	58×56×90.7						
			Pit 152	58×65×115.8						
			Pit 60	86×80×97.3						
SB 210	Ⅰ類	4	Pit 154	48×48×73.4						
			Pit 157	38×36×88.0		2.4(Pit154－Pit142)	2.0(Pit148－Pit142)		N－37°－W	SB210→SX(S)220
			Pit 148	42×42×82.0		2.3(Pit157－Pit148)	2.0(Pit157－Pit154)			SB208、SB209、SB211、SB213
			Pit 142	38×36×75.4	27×26					

建物跡No.	形態	柱穴数	柱穴 番号	規模、深さ(cm)	柱痕(cm)	長辺長(m)	短辺長(m)	張り出した部分長(m)	長軸方向	新旧関係
SB211	Ⅰ類	4	Pit 151	67×64×131.1以上						
			Pit 126	89×62×121.9	40×37	3.4(Pit151−Pit116)	3.4(Pit127−Pit116)		N−45°−W	SB212→SB211→SX(S)220
			Pit 127	86×84×140.1	42×41	3.4(Pit126−Pit127)	3.2(Pit126−Pit151)			SB209、SB210、SX(S)222
			Pit 116	80×76×128.1	34×32					
SB212	Ⅰ類	4	Pit 143	100×100×151.1						
			Pit 39	115×108×163.7		3.0(Pit33−Pit306)	2.9(Pit39−Pit33)		N−50°−E	SB212→SB211→SX(S)220
			Pit 33	90×77×120.0		3.0(Pit39−Pit143)	2.9(Pit143−Pit306)			
			Pit 306	69×64×163.2						
SB213	Ⅱ類	6	Pit 29	47×33×80.6						
			Pit 209	62×48×78.3		3.3(Pit26−Pit25)	3.1(Pit25−Pit140)	3.4(Pit113−Pit29)	N−51°−E	SB98→SB20→SK38
			Pit 26	69×58×83.1		3.4(Pit209−Pit140)	3.3(Pit26−Pit209)			SB210
			Pit 113	51×46×79.2						
			Pit 25	76×63×94.8						
			Pit 140	48×38×92.4						
SB214	Ⅱ類	6	Pit 43	45×39×51.3						
			Pit 41	38×34×55.8		3.2(Pit41−Pit40)	2.7(Pit123−Pit40)	3.7(Pit110−Pit43)	N−41°−E	SB213、SK258
			Pit 250	60×62×41.8		3.1(Pit250−Pit123)	2.8(Pit250−Pit41)			
			Pit 110	32×30×56.5						
			Pit 123	36×34×54.1						
			Pit 40	52×50×63.7						
SB216	Ⅱ類または Ⅴ類	6、8	Pit 77	42×42×71.3						
			Pit 78	51×50×69.3		3.8(Pit107−Pit80)	3.2(Pit70−Pit107)	4.5(Pit71−Pit81)	N−68°−E	
			Pit 70	32×28×66.8		3.5(Pit70−Pit77)	3.3(Pit77−Pit80)			
			Pit 107	52×46×71.1						
			Pit 158	48×44×79.2	21×21					
			Pit 80	50×49×68.3	24×22					
			Pit 81	68×56×37.9						
			Pit 71	44×42×41.7						
SB217	Ⅰ類	4	Pit 62	54×51×131.7						
			Pit 303	48×46×127.1		2.3(Pit62−Pit91)	2.0(Pit139−Pit91)		N−41°−W	SB217→SX(F)221→SX(S)222
			Pit 139	52×48×136.2	34×32	2.3(Pit303−Pit139)	2.1(Pit303−Pit62)			
			Pit 91	66×58×132.1	22×22					
SB218	Ⅰ類	4	Pit 258	42×40×58.3						
			Pit 259	54×53×54.6		2.3(Pit261−Pit260)	2.0(Pit259−Pit260)		N−83°−W	SK(F)238、SK(F)243
			Pit 260	58×54×44.6		2.1(Pit258−Pit259)	2.3(Pit258−Pit261)			SK237、SK256
			Pit 261	54×54×47.2						
SB219	Ⅱ類または Ⅳ類	6、8	Pit 317	44×44×56.7						
			Pit 299	46×44×52.7		4.2(Pit317−Pit256)	3.6(Pit299−Pit317)		N−30°−W	SB220、SX(S)225
			Pit 236	57×53×66.1						SX(U)207、SK244
			Pit 256	42×41×70.9	24×23					
			Pit 319	74×70×78.0	26×26					
			Pit 240	38×38×66.3						
SB220	Ⅰ類	4	Pit 327	40×38×142.1	25×24					
			Pit 321	42×39×100.0		3.0(Pit327−Pit332)	2.7(Pit321−Pit327)		N−33°−W	SK227A→SB220
			Pit 334	45×42×89.9	18×19	2.8(Pit321−Pit334)	2.6(Pit334−Pit332)			SB219、SX(U)205
			Pit 332	98×70×107.0	25×24					

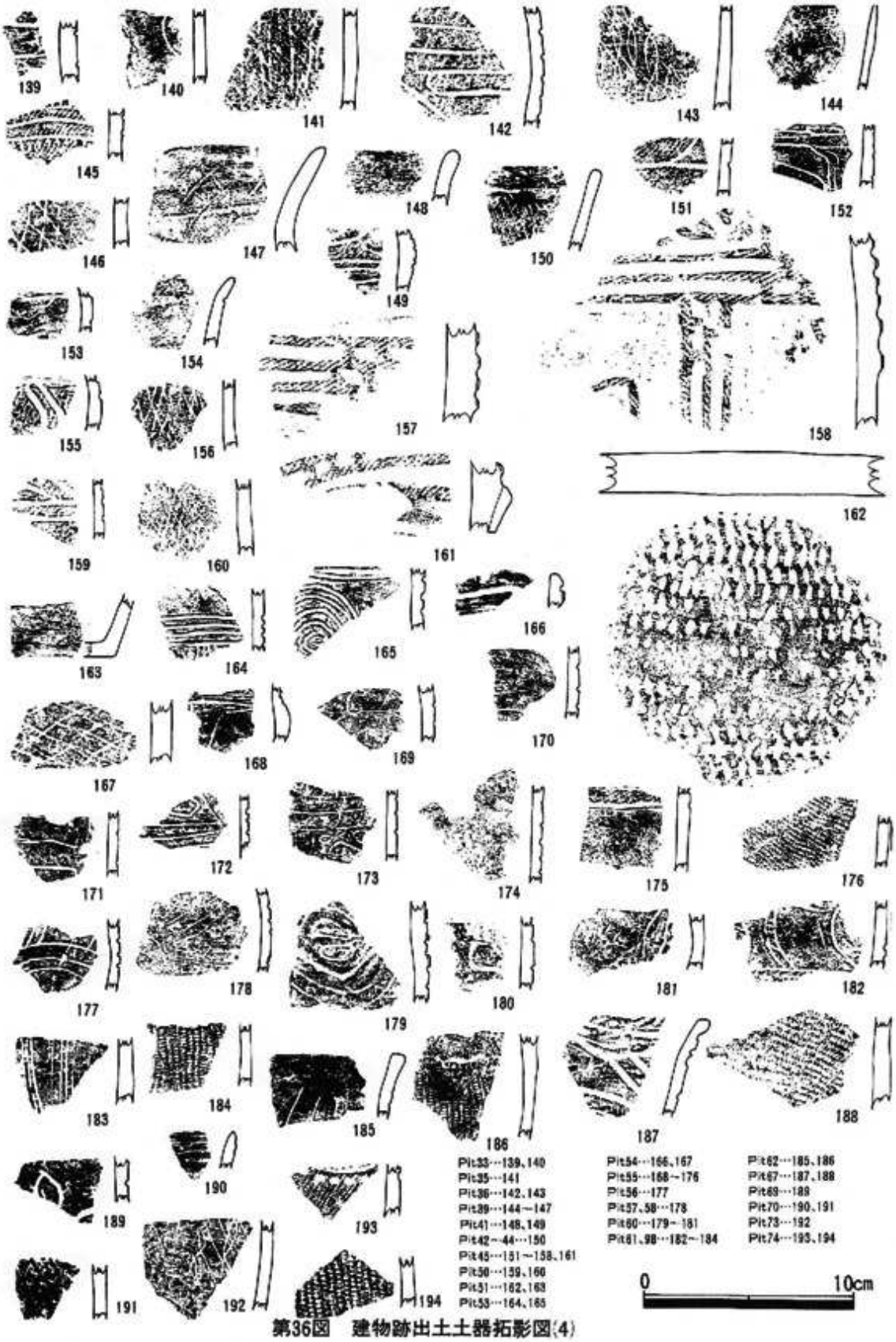


(Pit 35…1　Pit 125…2　Pit 140…3　Pit 144…4
Pit 259…5,6　Pit 260…9　Pit 261…8　Pit 273…7)

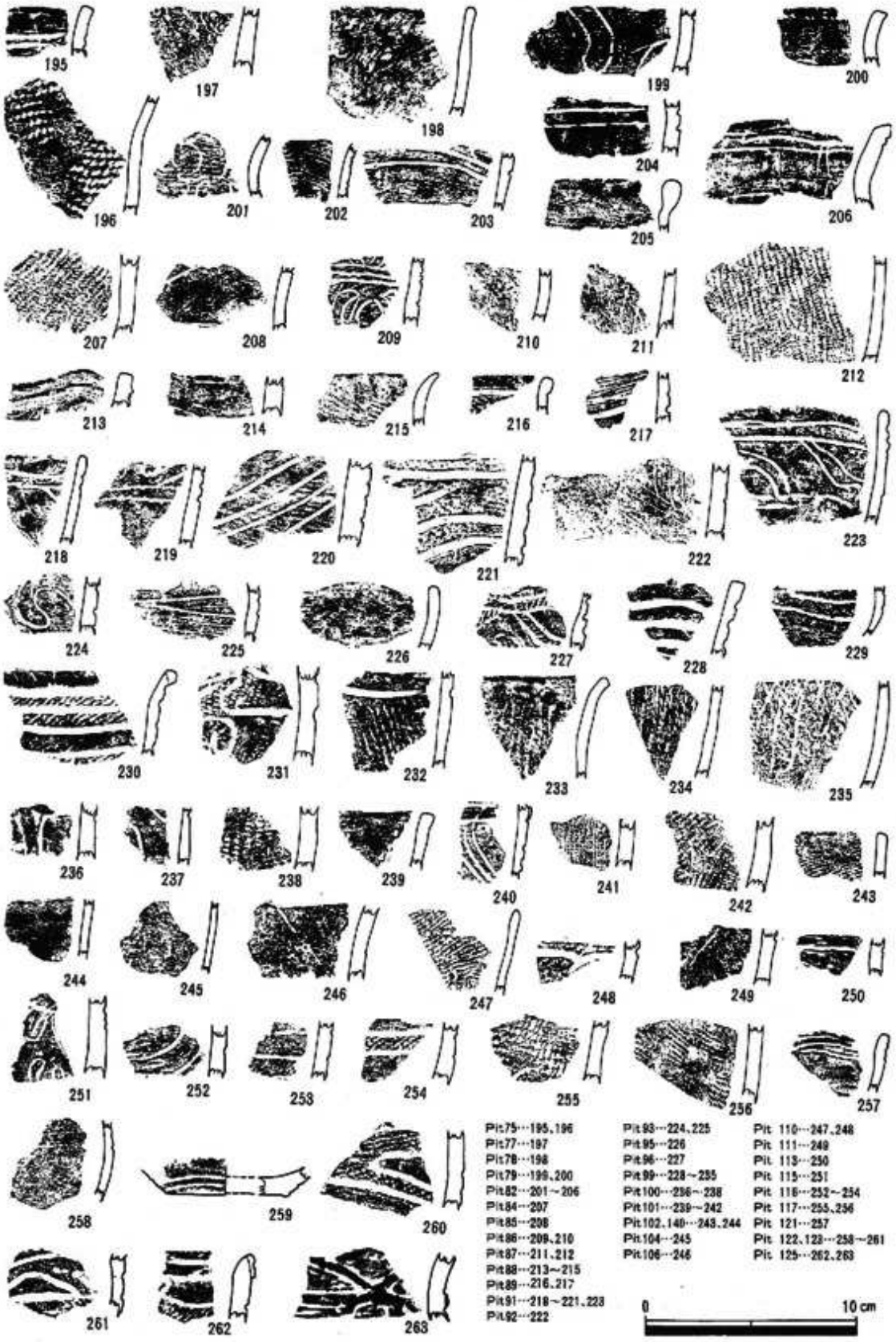
第34図　建物跡出土土器実測図



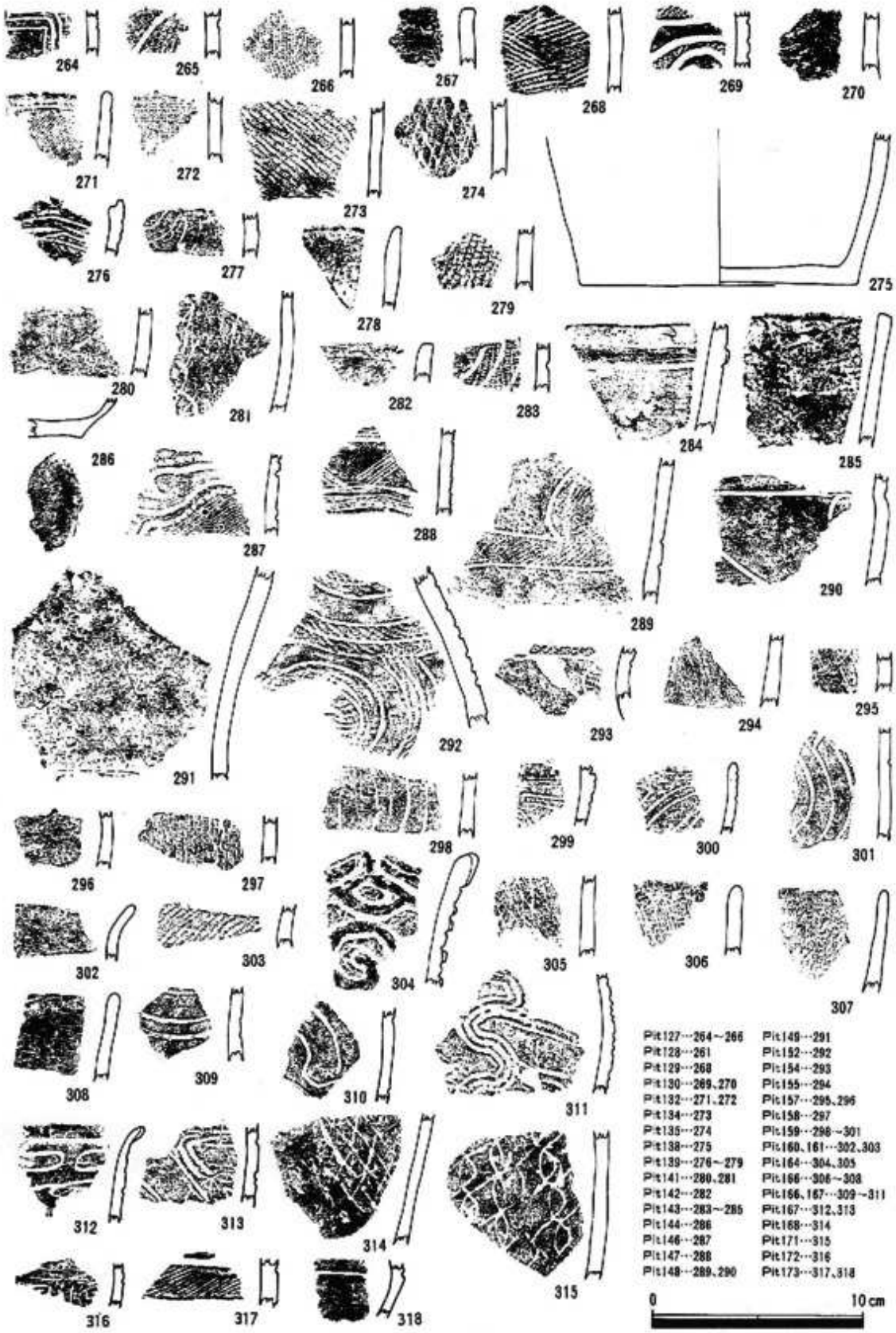
第35図　建物跡出土土器拓影図(3)



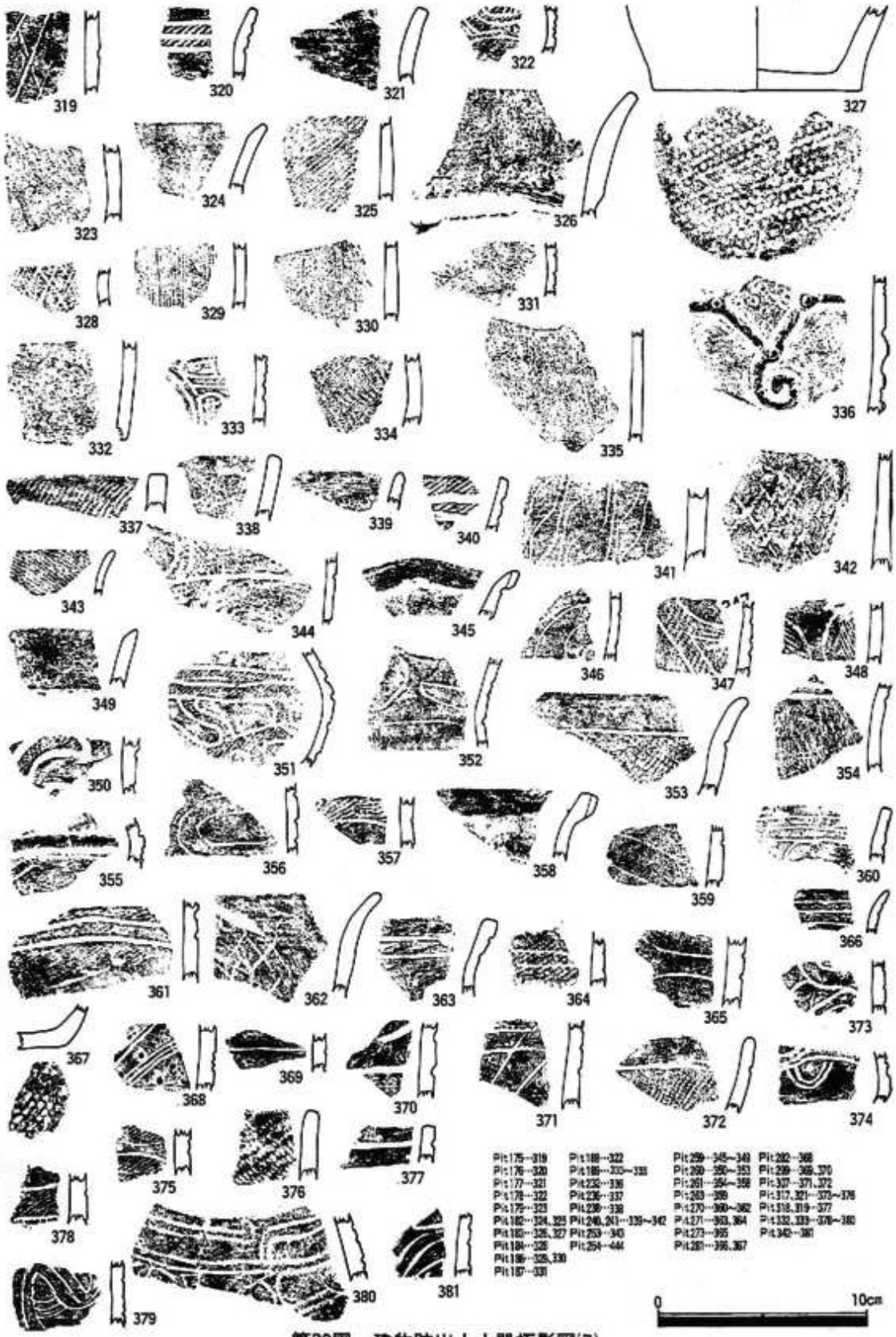
第36図　建物跡出土土器拓影図(4)



第37図　建物跡出土土器拓影図(5)

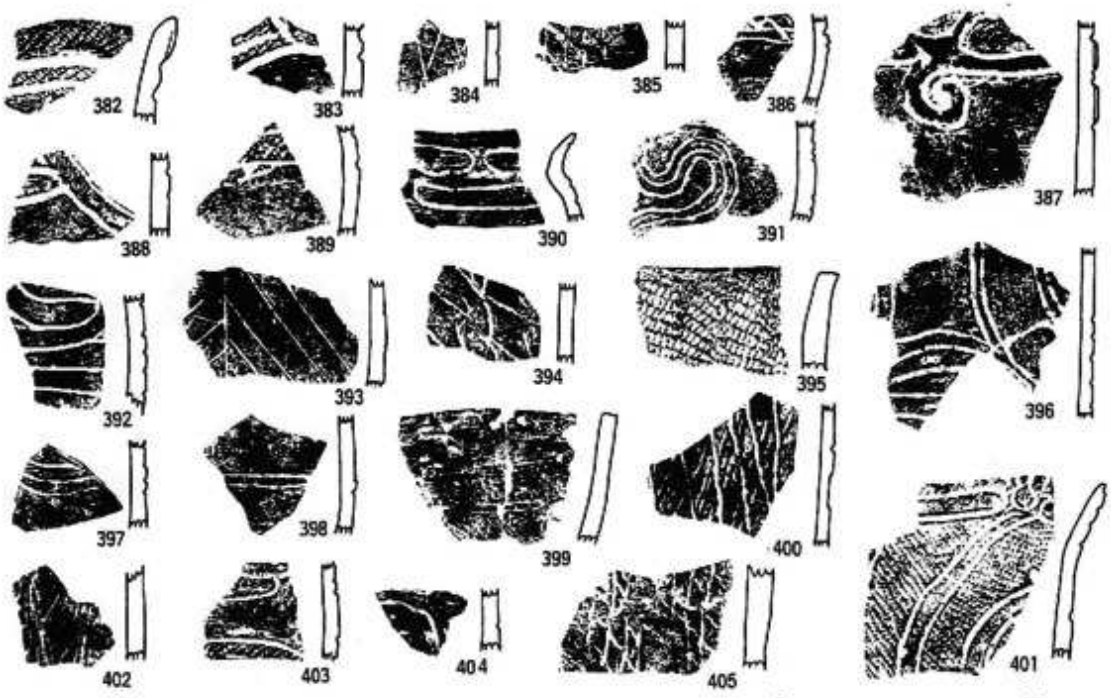


第38図　建物跡出土土器拓影図(6)

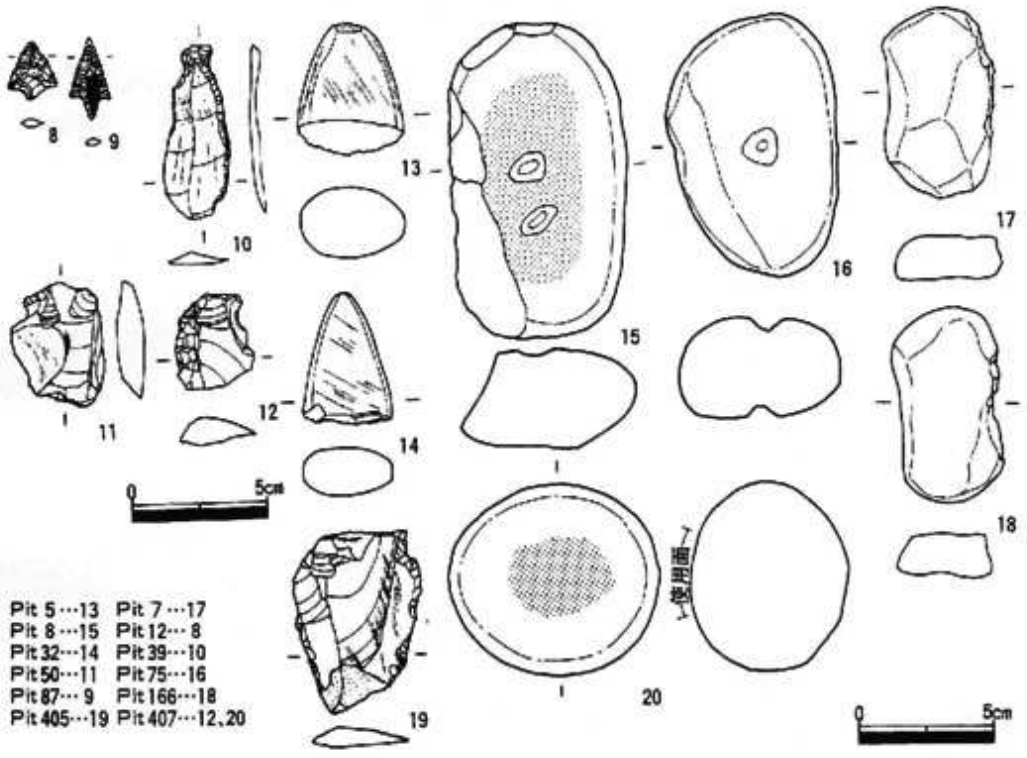


Pit175…319
Pit176…320
Pit177…321
Pit178…322
Pit179…323
Pit182…324, 325
Pit183…326, 327
Pit184…328
Pit186…325, 330
Pit187…331
Pit188…322
Pit189…333~335
Pit232…336
Pit236…337
Pit238…338
Pit240, 241…339~342
Pit253…343
Pit254…444
Pit259…345~348
Pit260…350~353
Pit261…354~358
Pit263…359
Pit270…360~362
Pit271…363, 364
Pit273…365
Pit281…366, 367
Pit282…368
Pit299…369, 370
Pit307…371, 372
Pit317, 321…373~376
Pit318, 319…377
Pit332, 339…378~380
Pit342…381

第39図　建物跡出土土器拓影図(7)

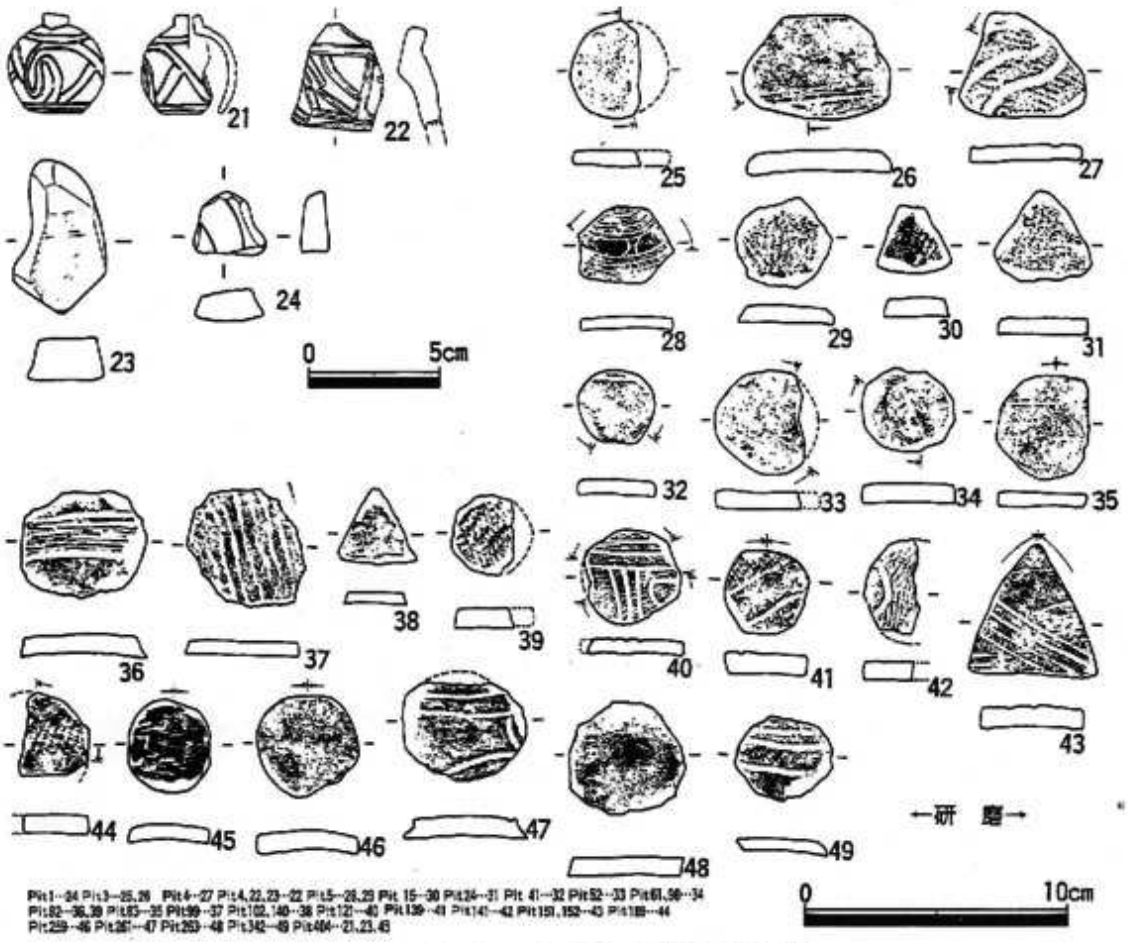


Pit402…382～386
Pit403…387～389
Pit404…390～396
Pit406…397
Pit407…398～402
Pit410…403～405



Pit 5…13　Pit 7…17
Pit 8…15　Pit12… 8
Pit32…14　Pit39…10
Pit50…11　Pit75…16
Pit87… 9　Pit166…18
Pit405…19　Pit407…12,20

第40図　建物跡出土土器拓影図(8)、石器実測図(2)



第41図　建物跡出土土製品・石製品実測図(2)

5．石囲炉

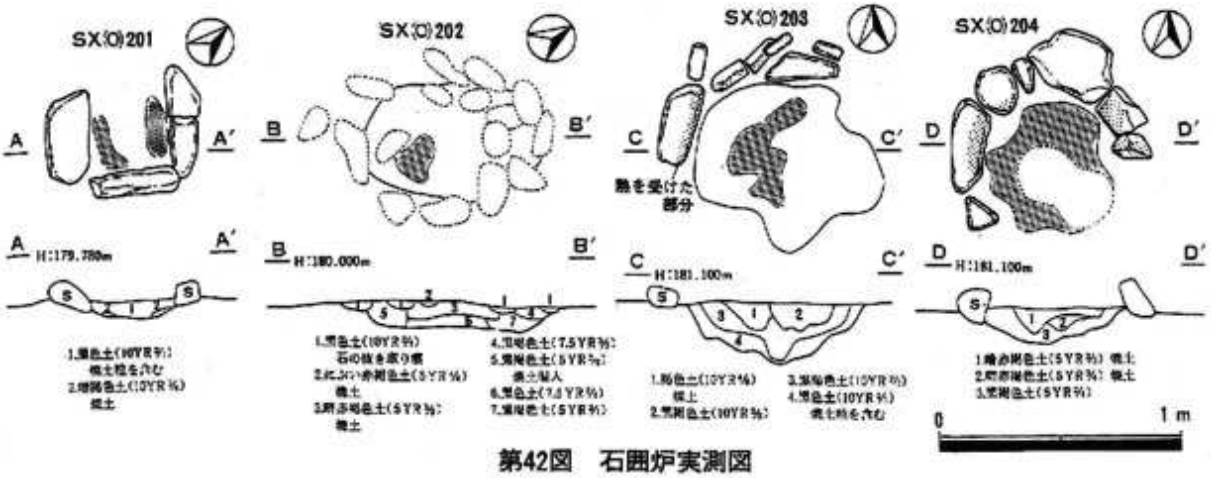
第201号石囲炉（第42図、ＰＬ５）

本遺構は、調査区中央部西寄りのＹＦ－90グリッドのⅢb層下位で確認された。64×47cm規模の石囲炉で、36～47cm大の石３個が「コ」状に残存していた。炉内の東縁部と西縁部の二カ所で７×26cm、厚さ約２cmの焼土が確認された。

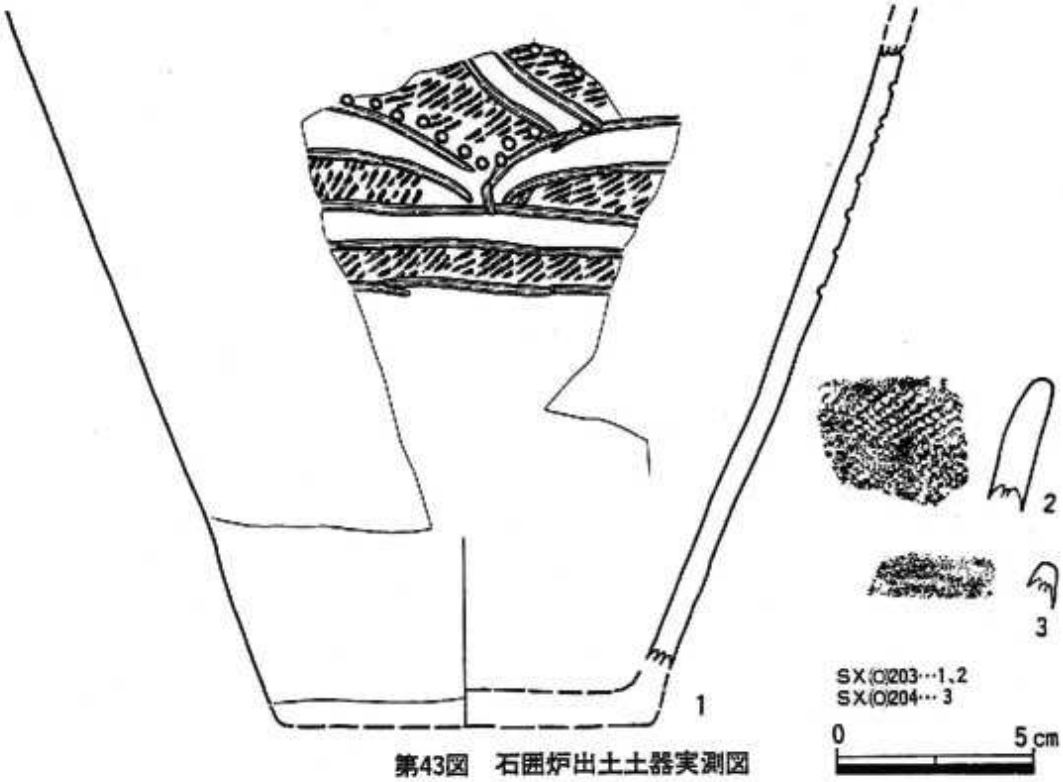
遺物の出土はないが、確認面及び周辺の遺物より、本遺構の時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第202号石囲炉（第42図、ＰＬ５）

調査区北西部のＹＭ－92グリッドのⅢb層下位において、石の抜き取り痕と焼土を確認した。抜き取り痕より本遺構は、13～29cm大の石を106×84cmの楕円形に配置した石囲炉と考えられる。なお北側半分は二重構造となるものと推測される。炉内中央部西寄りで21×15cm、厚さ３～７cmの焼土が確認された。本遺構から遺物の出土はなかった。



第42図　石囲炉実測図



第43図　石囲炉出土土器実測図

第203号石囲炉（第42図、43図1、2）

本遺構は、調査区ほぼ中央のＹＧ－93グリッドのⅢb層下位で確認された。91×90cm規模の石囲炉で、不整楕円形を呈し、北西部に14～35cm大の石７個が残存していた。石材は石英閃緑玢岩である。炉内中央で43×36cm、厚さ約11cmの焼土が確認された。炉内より７点の土器片が出土した。１は深鉢形土器の胴下半部である。３条の平行沈線により区画された文様帯には弧状文、曲線文が施文されている。沈線間にはＬ縄文が充填され、沈線に沿って刺突が施されている。２は深鉢口縁部で、ＲＬ縄文を施文している。

出土遺物及び確認面より、本遺構の時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第204号石囲炉（第42図、43図3、PL5）

本遺構は、調査区ほぼ中央のYE、YF－93グリッドのIIb層下位で確認された。96×76cm規模の石囲炉で12～38cm大の石7個が北西部に「半円」状に残存していた。炉石に沿って「半円」状に59×53cm、厚さ4～10cmの焼土が確認された。本遺構より3点の土器片が出土した。

出土遺物及び確認面より、本遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

（馬淵正弘）

6．焼土遺構

第201号焼土遺構（第44図、47図1、2）

発掘区北西端のYK－91グリッドに位置し、IIb層下位で確認した。92×66cmの焼土粒及び多量の炭化物を含む黒褐色土範囲内南側に、77×44cmの不整形を呈する焼土が検出された。厚さは約7cmを測る。焼土及び黒褐色土中より5点の土器片を出土した。構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第202号焼土遺構（第44図）

発掘区北西端のYK－91グリッドに位置し、IIb層下位で確認した。41×33cmの焼土粒を含む黒褐色土範囲内ほぼ中央に、23×15cmの楕円形を呈する焼土が検出された。厚さは約2cmを測る。遺物は出土しなかった。

第203号焼土遺構（第44図、47図3～6、48図1、PL21）

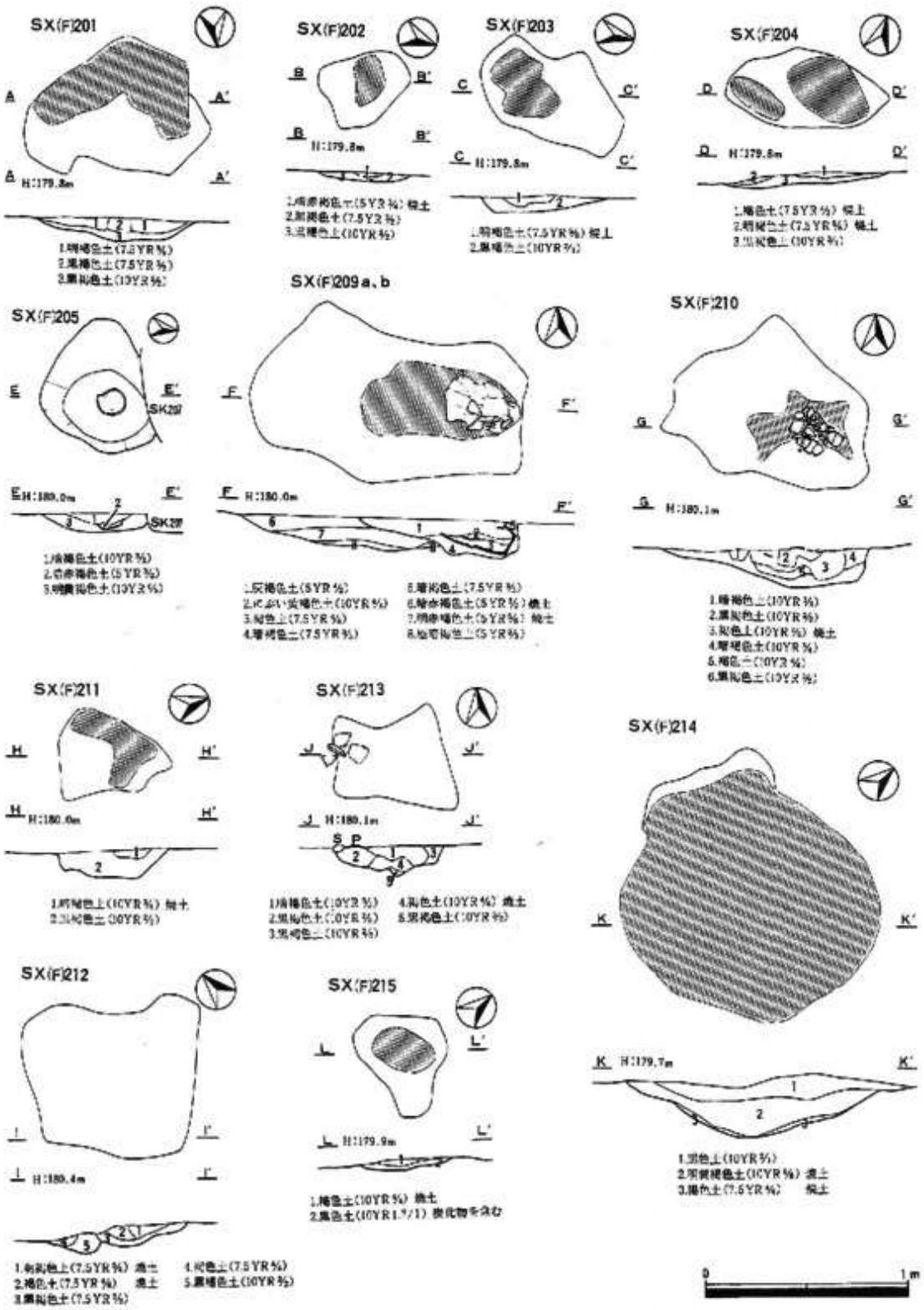
発掘区北西端のYL－90グリッドに位置し、IIb層下面で確認した。76×47cmの焼土粒及び炭化粒をやや多く含む黒褐色土範囲内南側に、37×24cmの焼土が検出された。厚さは約5cmを測る。焼土及び黒褐色土中より4点の土器片、黒褐色土中南西側より石鏃1点が出土した。構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第204号焼土遺構（第44図、47図7～12）

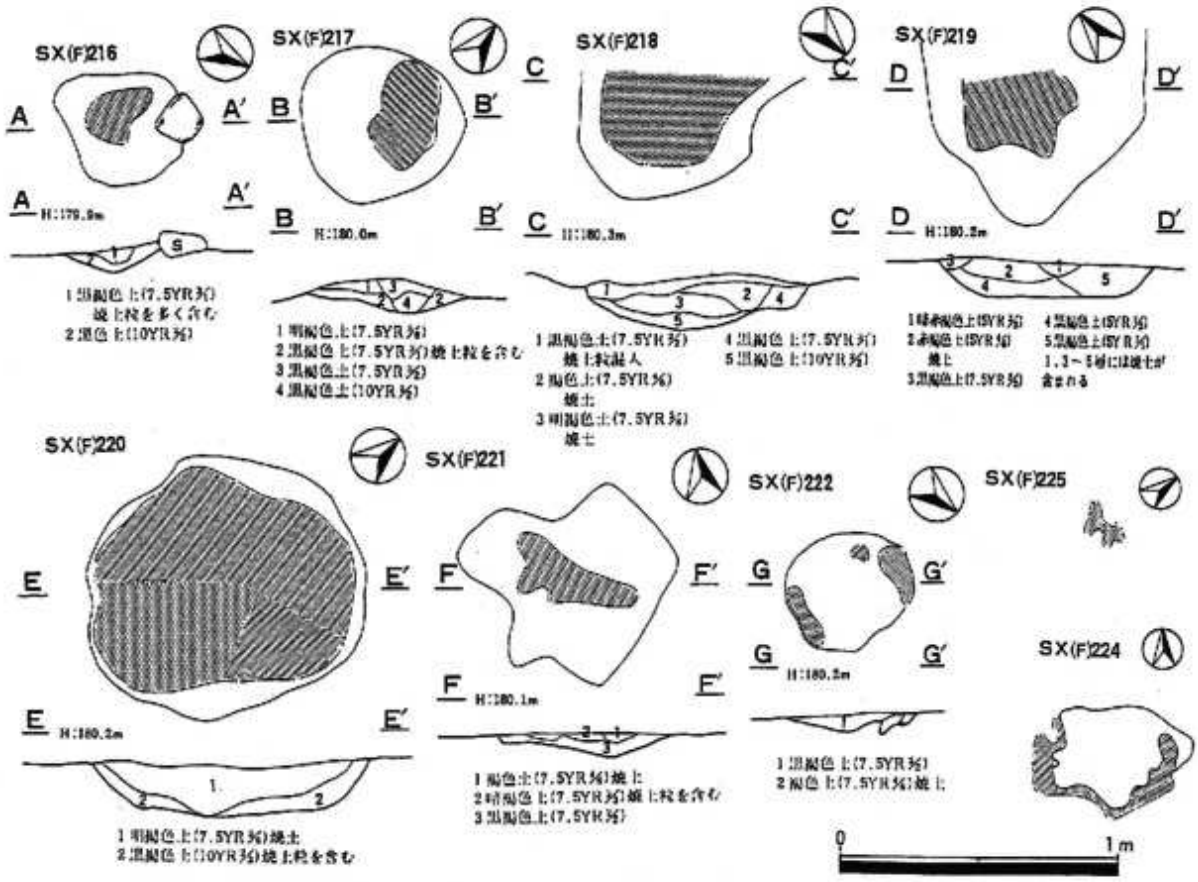
発掘区北西端のYK－90グリッドに位置し、IIb層下位で確認した。80×39cmの焼土粒を含む黒褐色土の楕円形範囲内に、36×30cm、31×13cmの焼土が2ヵ所検出された。厚さは共に3cmを測る。焼土及び黒褐色土中より13点の土器片を出土した。47図8、11、12は焼土北西側からの出土である。構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第205号焼土遺構（第44図、46図1、47図13）

発掘区中央北西寄りのYG－92グリッドに位置し、IIa層で確認した。207号土坑と重複し、本遺構が古い。浅い掘り込みを有し、61×58cmの円形を呈し、深さ10cmを測る。底面中央から土器底部が出土しており、その内部には焼土が堆積していた。46図1は底面から出土した土器底部で、底径10.6cmを計り、色調はにぶい黄橙色を呈する。その他、堆積土中より3点の土器



第44図　焼土遺構実測図(1)



第45図　焼土遺構実測図(2)

片が出土した。構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第209ａ号焼土遺構（第44図、46図３、ＰＬ13）

発掘区中央のＹＤ－92グリッドに位置し、Ⅲb層下位で確認した。209ｂ号焼土遺構と重複し、本遺構が新しい。掘り込みを有し、78×65cmの隅丸方形を呈し、深さ19cmを測る。底面に厚さ約４cmに土を入れ深鉢形土器を斜位に設置している。焼土は71×35cmの楕円形を呈し、厚さ９cmを測る。46図３は設置していた土器で、胴部には原体Ｒの連鎖状撚糸文が施文されており、底径11.6cmを計る。色調はにぶい黄橙色を呈する。構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第209ｂ号焼土遺構（第44図）

発掘区中央のＹＤ－92グリッドに位置し、Ⅲb層下位で確認した。209ａ号焼土遺構と重複し、本遺構が古い。焼土範囲は径80cm以上で、厚さ約７cmを測る。遺物は出土しなかった。

第210号焼土遺構（第44図、46図２、47図21、ＰＬ13）

発掘区中央のＹＥ－93グリッドに位置し、Ⅲb層下位で確認した。102×82cmの焼土粒を含む黒褐色土範囲内東側に、47×26cmの不整形を呈する焼土が検出された。厚さは約14cmを測る。46図２は焼土中央より横位につぶれた状態で出土した深鉢形土器である。４個の頂部を有し、

隆沈文により区画された胴部はさらに斜位の楕円形文により4区画される。区画内には弧状文、曲線文が隆沈文により施文されている。口径18.8cm、底径17.2cm、器高19.8cmを計り、色調は橙色を呈する。その他に土器片1点を出土した。構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第211号焼土遺構（第44図、47図22～24、48図2）

発掘区中央のＹＣ－92グリッドに位置し、Ⅲd層上面で確認した。55×43cmの焼土粒を含む黒褐色土範囲内北西側に、42×28cmの不整形を呈する焼土が検出された。厚さは約4cmを測る。焼土及び黒褐色土中より4点の土器片の他、石鏃1点を出土した。構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第212号焼土遺構（第44図、47図25、26）

発掘区北西端のＹＭ－91、92グリッドに位置し、Ⅲb層下位で確認した。202号環状配石遺構と重複し、本遺構が古い。焼土粒を含む黒褐色土範囲は85×80cmの不整方形を呈する。焼土の厚さは約7cmを測る。焼土及び黒褐色土中より2点の土器片を出土した。構築時期は縄文時代後期と考えられる。

第213号焼土遺構（第44図、47図27、28）

発掘区中央のＹＦ－92グリッドに位置し、Ⅲb層下位で確認した。粘土粒を含む黒褐色土範囲は54×50cmの不整形を呈し、焼土の厚さは約6cmを測る。焼土及び黒褐色土中より5点の土器片を出土した。構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第214号焼土遺構（第44図、47図29～40）

発掘区北西側のＹＫ－93グリッドに位置し、Ⅲb層下位で確認した。127×121cmの円形を呈する焼土が検出され、厚さは18cmを測る。焼土中には10cm前後の石が多量混入していた。焼土より50数点の土器片を出土した。構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第215号焼土遺構（第45図）

発掘区北西側のＹＫ－93グリッドに位置し、Ⅲb層下位で確認した。50×47cmの焼土粒及び多量の炭化粒を含む黒色土範囲内中央に、31×19cmの楕円形を呈する焼土が検出された。厚さは約3cmを測る。遺物は出土しなかった。

第216号焼土遺構（第45図）

発掘区北西側のＹＩ－92グリッドに位置し、Ⅲb層下面で確認した。215号集石遺構と重複し、本遺構が新しい。49×44cmの焼土粒を含む黒色土範囲内中央に26×19cmの焼土が検出された。厚さは約5cmを測る。遺物は出土しなかった。

第217号焼土遺構（第45図、47図41、42）

発掘区北西側中央寄りのＹＨ－92グリッドに位置し、Ⅲb層下面で確認した。58×56cmの焼土粒及び炭化粒を含む黒褐色土範囲内北側に39×24cmの楕円形の焼土が検出された。厚さは約7

cmを測る。焼土及び黒褐色土中より6点の土器片を出土した。構築時期は縄文時代後期と考えられる。

第218号焼土遺構（第45図、47図43、48図3、PL22）

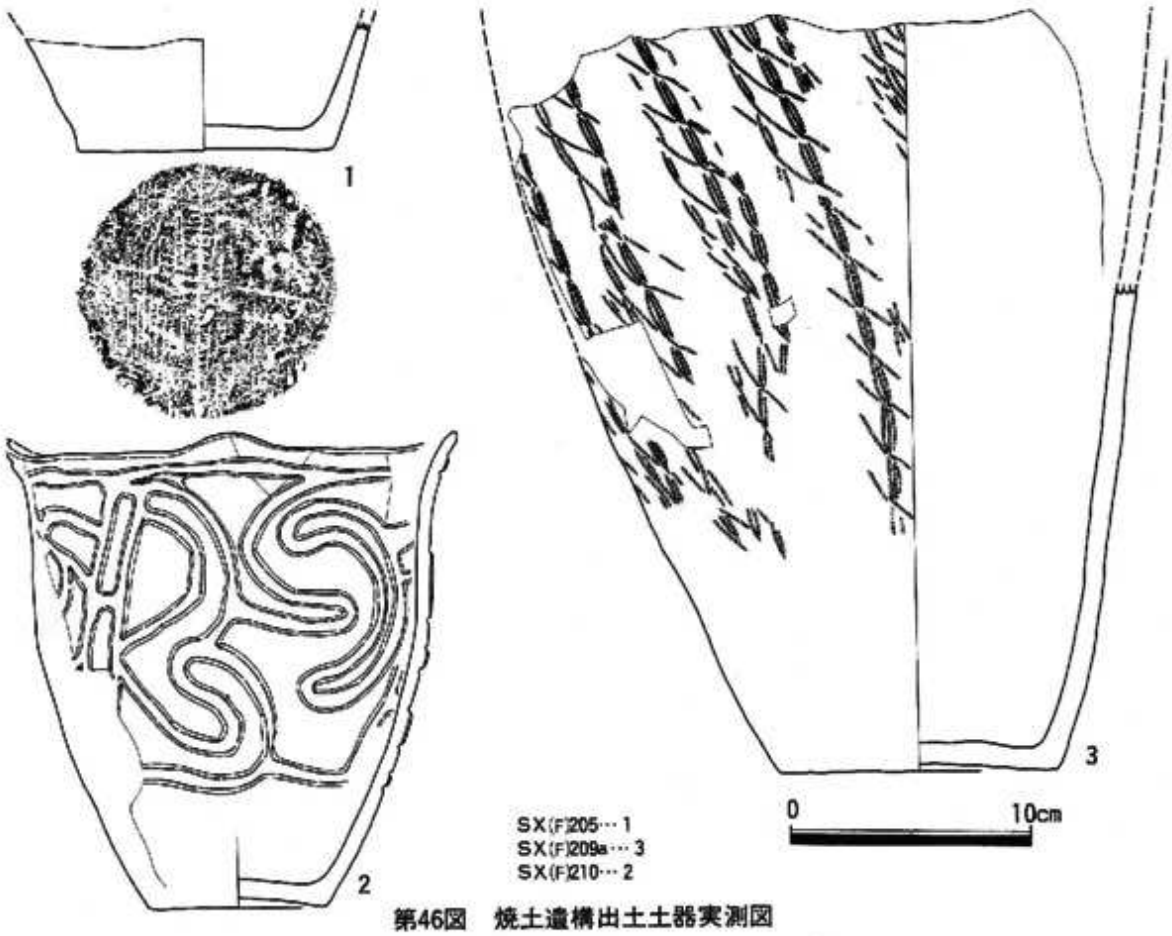
発掘区北西側中央寄りのYI－92グリッドに位置し、Ⅲb層下面で確認した。遺構南西側は未発掘である。径80cmの焼土粒及び多量の炭化粒を含む黒褐色土範囲内中央に径57cmの焼土が検出された。厚さは12cmを測る。焼土及び黒褐色土中より1点の土器片、掻器1点を出土した。構築時期は縄文時代後期と考えられる。

第219号焼土遺構（第45図）

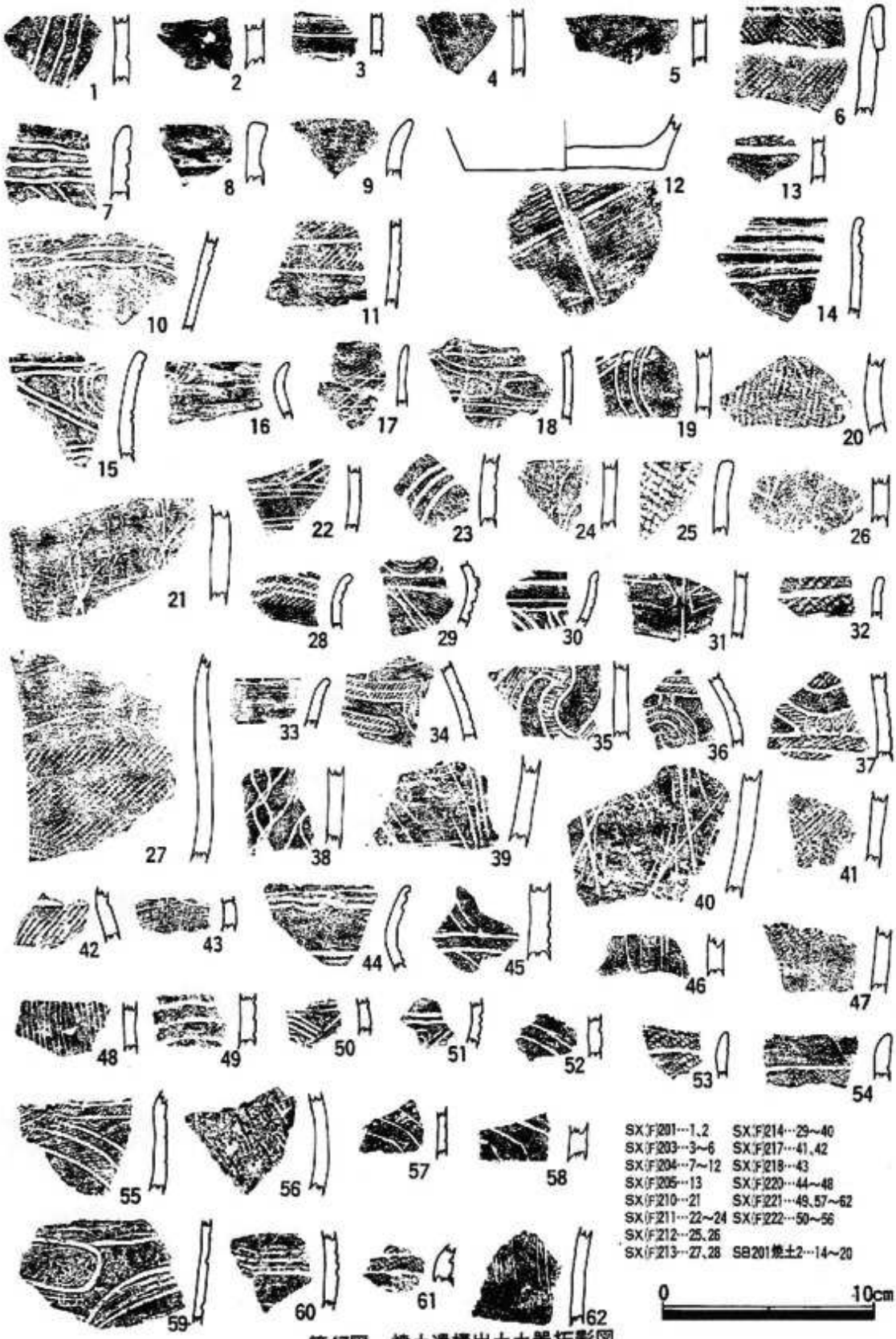
発掘区南東側のZW、ZX－92グリッドに位置し、Ⅲb層下面で確認した。遺構北東側は未発掘である。径79cmの焼土粒を含む黒褐色土範囲内中央に、径40cmの焼土が検出された。厚さは7cmを測る。遺物は出土しなかった。

第220号焼土遺構（第45図、47図44~48）

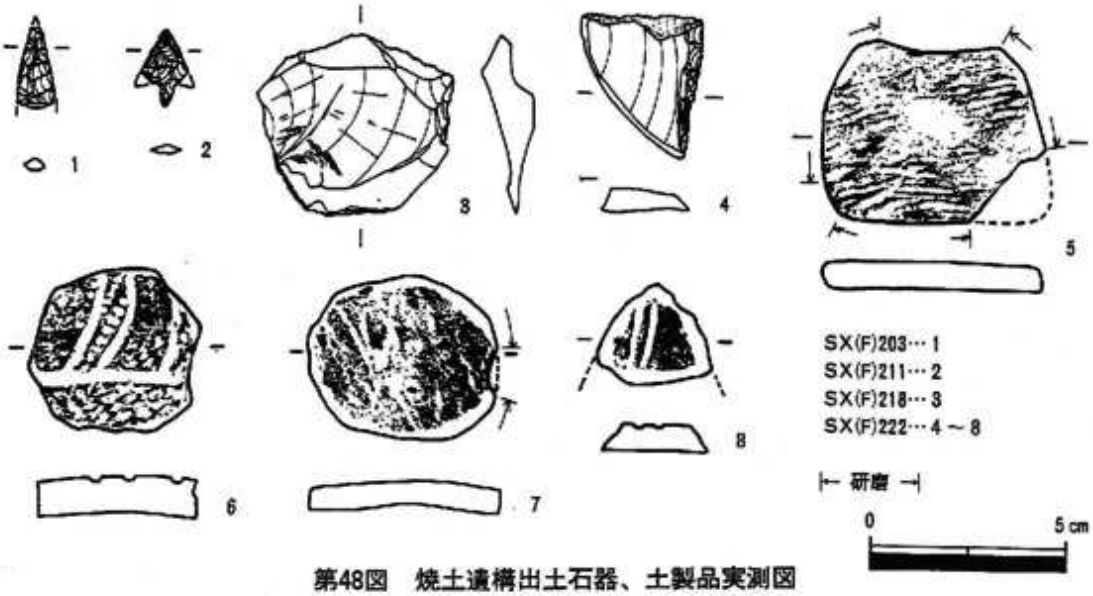
発掘区南東側のZX、ZY－91グリッドに位置し、Ⅲb層下位で確認した。ピット167と重複し、本遺構が新しい。100×95cmの焼土粒及び炭化粒を含む円形の黒褐色土範囲内に、93×78



第46図　焼土遺構出土土器実測図



第47図　焼土遺構出土土器拓影図



第48図　焼土遺構出土石器、土製品実測図

cmの焼土が検出された。厚さは18cmを測る。焼土及び黒褐色土中より11点の土器片を出土した。構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第221号焼土遺構（第45図、47図49、57～62）

発掘区南東側のＺＷ－91グリッドに位置し、Ⅱd層上面で確認した。222号立石遺構、ピット91と重複し、本遺構はピット91より新しく222号立石遺構より古い。71×71cmの焼土粒を含む暗褐色土範囲内中央に、47×20cmの焼土が検出された。厚さは3cmを測る。焼土及び暗褐色土中より20点の土器片を出土した。構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第222号焼土遺構（第45図、47図50～56、48図4～8、ＰＬ22、24）

発掘区南東側のＺＷ－90グリッドに位置し、Ⅱd層上面で確認した。45×40cmの焼土粒及び炭化粒を含む黒褐色土範囲内に、3ヵ所の焼土が検出された。西側の焼土はそれぞれ22×10cm、6×5cm、厚さは共に5cmを測る。東側の焼土は22×6cmを測る。焼土及び黒褐色土中より約20点の土器片の他、掻器1点、円盤状土製品4点を出土した。構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第224号焼土遺構（第45図）

発掘区南東端のＺＵ－92グリッドに位置し、Ⅱd層上面で確認した。235号Ｔピット、242号フラスコ状土壙、ピット203、204と重複し、本遺構はいずれよりも新しい。60×43cmの焼土粒を含む範囲内南側縁周に幅約10cmの焼土が検出された。

第225号焼土遺構（第45図）

発掘区南東端のＺＵ－91、92グリッドに位置し、Ⅱd層上面で確認した。焼土は16×12cmの不整形を呈し、厚さ約3cmを測る。　（佐藤　樹）

7．竪穴遺構

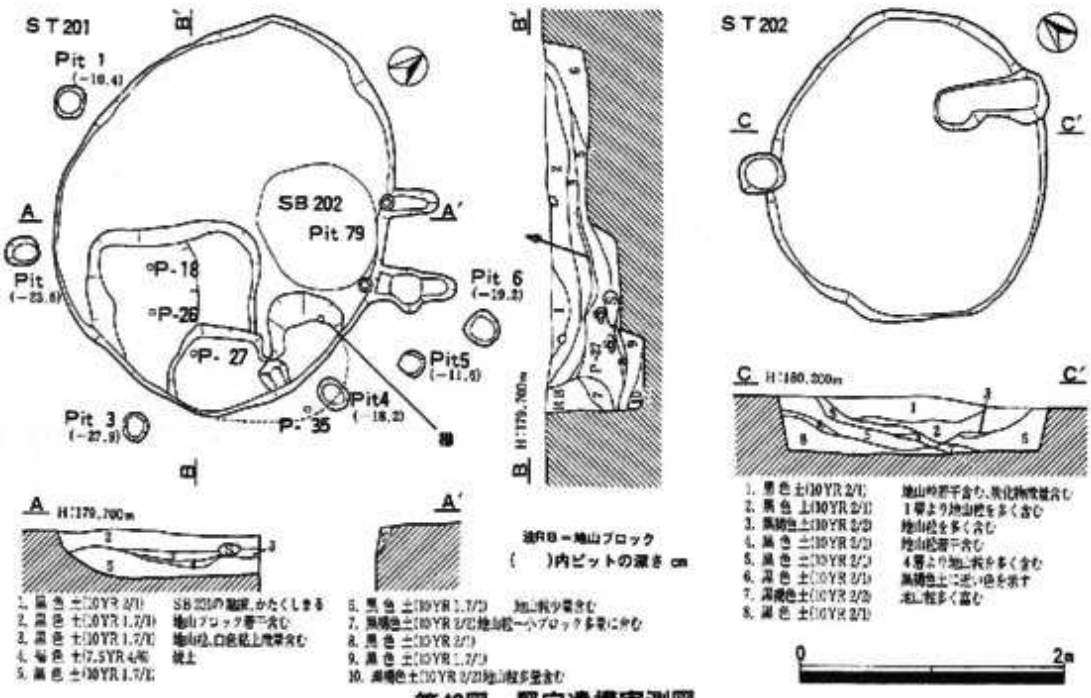
（第49図、50図1～8、51図、53図1～12、15、16、
54図1～11、15～19、PL8、13、21～24、26）

第201号竪穴遺構

調査区北西側、YK、YL－91、92グリッドに位置する。201号建物跡調査時にこれに伴う焼土1、2、ピット79と重複する黒色土の落ち込みを確認した。本遺構が古い。

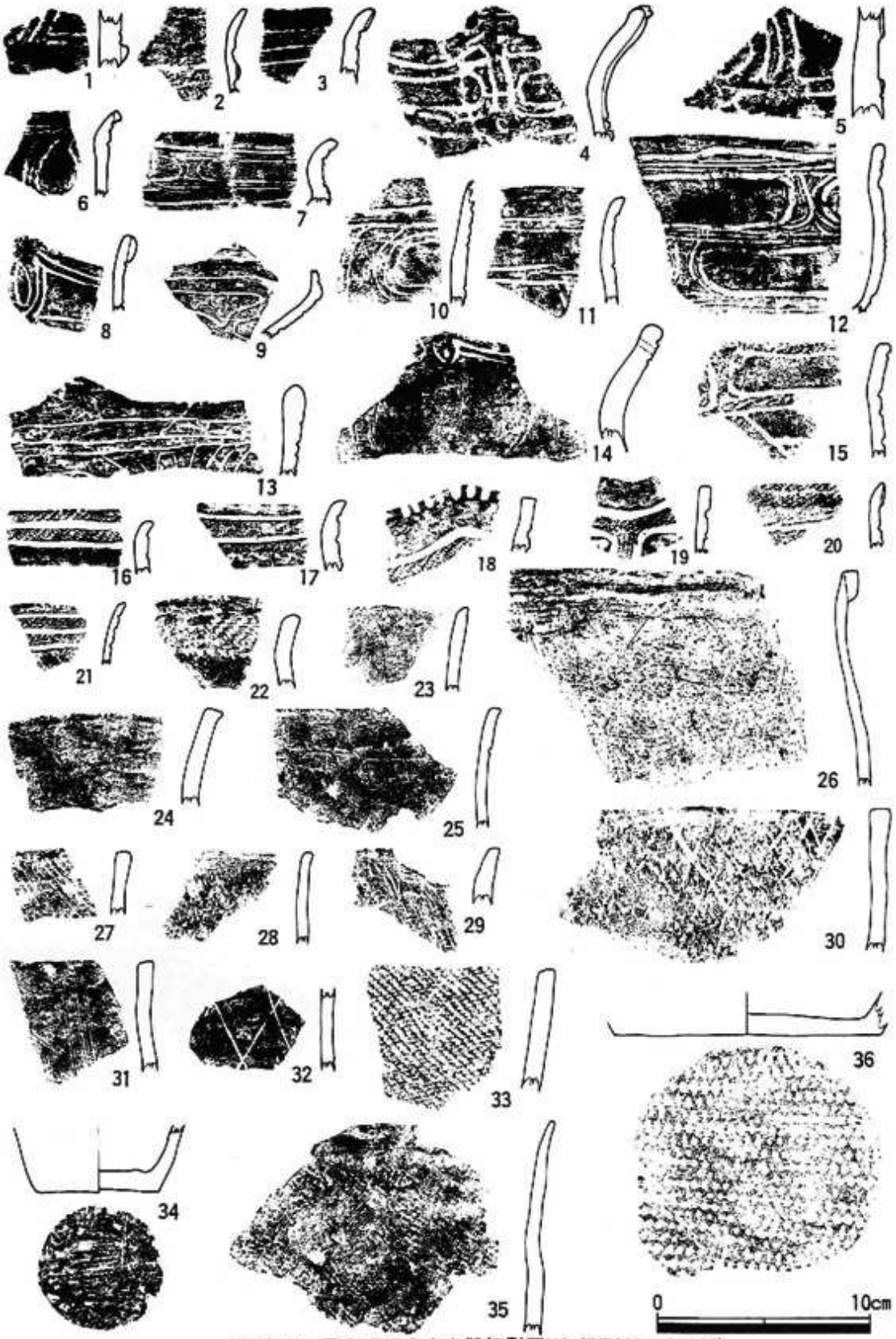
平面形は楕円形を呈し、その規模は径296×248cm、深さ19～33cm、底面積5.46㎡を測る。長軸方向はN－17°－Eである。Ⅴ層上位を底面とする。底面は南側へ向けゆるやかに傾斜しているが平坦で、やや軟弱である。底面南側に径150×130cm、底面からの深さ36～46cm程の凹地がみられた。この凹地は面積2.11㎡を測り、高低差や礫の位置から3ブロックに分割することができる。この他、底面東壁際に1対のピットと壁外に延びる短かい溝状の掘り込みがみられ、その構造から判断して出入口施設と考えられる。出入口方向はN－44°－Eである。壁は底面よりやや外傾して立ち上がるが、凹地部分は一部フラスコ状の立ち上がりを呈する。堆積土は10ブロックに区分できた。堆積土中の混入土などから判断して人為堆積と考えられる。竪穴外の西側から出入口南側にかけて、等間隔に配置されたピット1～6が本竪穴に伴う柱穴と考えられる。

竪穴内からダンボール½箱の土器破片と復元土器8点（50図1～8）、石器14点、土偶、鐸形土製品、土製装飾品各1点、円錐状土製品12点、櫛1点が出土した。50図1～3は底面及び堆積土中、4～8は凹地から出土したものである。1はミニチュア土器で縦位に展開する曲線文が施文され、底部付近にL縄文の圧痕文がみられる。2は台付土器底部で平行沈線文が施文され



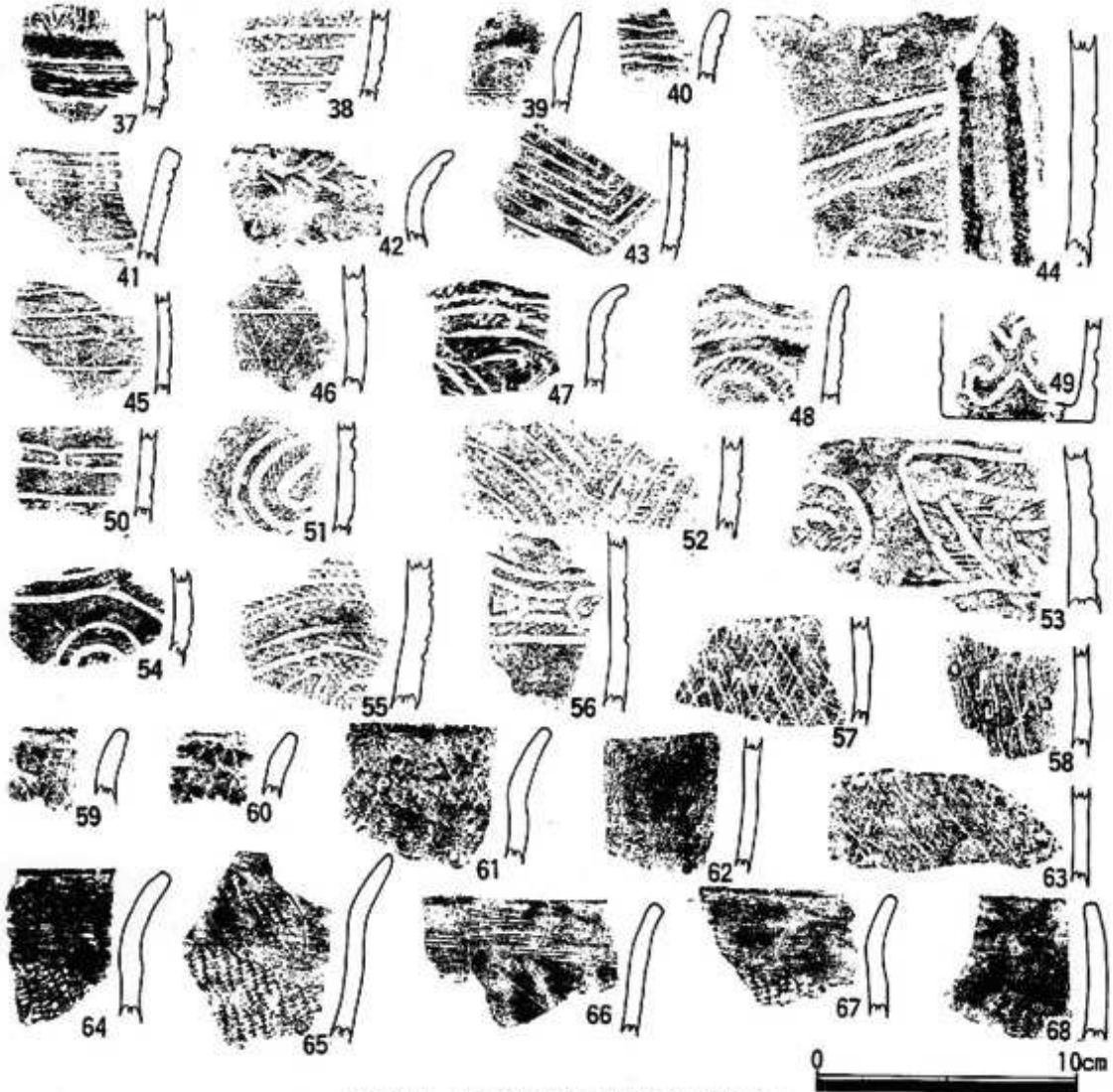
第49図　竪穴遺構実測図

第50図　竪穴遺構出土土器実測図 (ST201…1～8　ST202…9)



第51図　竪穴遺構出土土器拓影図(1) (ST201…1～36)

ている。3は平口縁の壺形土器で口径10.7cmを計る。胴部上半に文様帯をもち、沈線による入組状曲線文を主体とする文様が施文されている。色調はにぶい褐色を呈する。4は6つの波頂部をもつ壺形土器で、口唇部直下からL縄文が施文されている。色調は浅黄橙色を呈し、器外面には赤色顔料が塗布されている。5は広口壺形土器で2つの波頂部をもつ。胴部上半に入組状曲線文を主体とする文様が施文されているもので、平行沈線間にはLR縄文が充填されている。器高12.8cm、色調は灰黄褐色を呈する。6は4つの波頂部をもつ壺形土器である。胴部上半に文様帯をもち、入組状曲線文を主体とする文様が施文されている。沈線間にはLR縄文が充填されている。器高14.8cm、焼成はやや不良、色調は浅黄橙色を呈する。7は平口縁深鉢形土器で口縁部上端より網目状撚糸文が施文されている。原体はL縄文、色調はにぶい黄橙色を呈する。8は6つの波頂部に棒状工具横位押圧文を有する広口壺形土器である。胴部上半に入



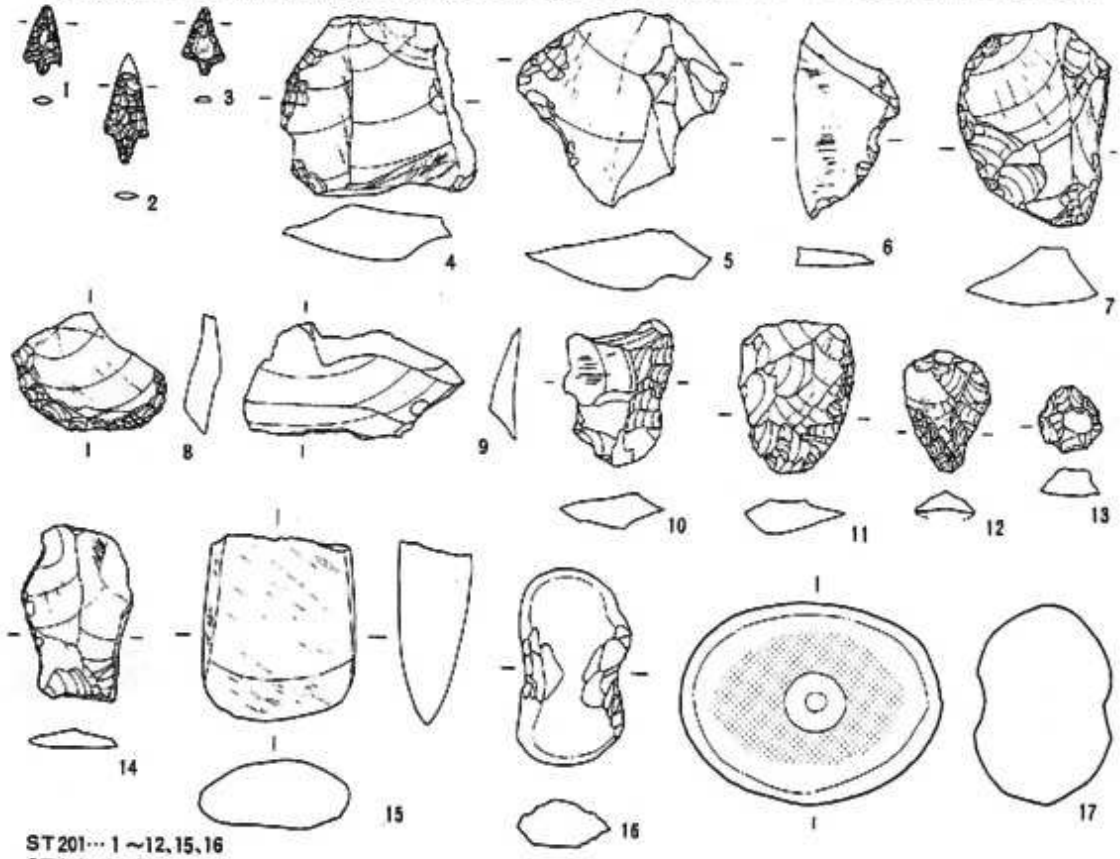
第52図　竪穴遺構出土土器拓影図(2)　(ST202…37～68)

組状曲線文を主体とする文様を展開するもので、沈線間にＬＲ縄文が充填されている。口径21.7cm、色調は橙色を呈する。土偶は堆積土上位、鐸形土製品は下位、土製装飾品は中位からの出土である。54図４は凹地内堆積土上位から出土した櫛で、頭部のみが残存する。頭頂部は湾曲し、現存長7.4×4.0cm、厚さ0.4cm程を計る。木質部はすべて朽ち果てており赤色顔料と可塑材が残っている。これらから推定して、幅0.2cm程の細い棒をわずかな間隔を置いて並べ、頭部を作り出す部分に可塑材をつめて櫛全体に赤色顔料を塗布したものと思われ、いわゆる「結歯式」と呼ばれるものと考えられる（赤色顔料については、第Ⅵ章２参照）。

構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第202号竪穴遺構（第49図、50図９、52図、53図13、14、17、54図12～14、ＰＬ８、22～24）

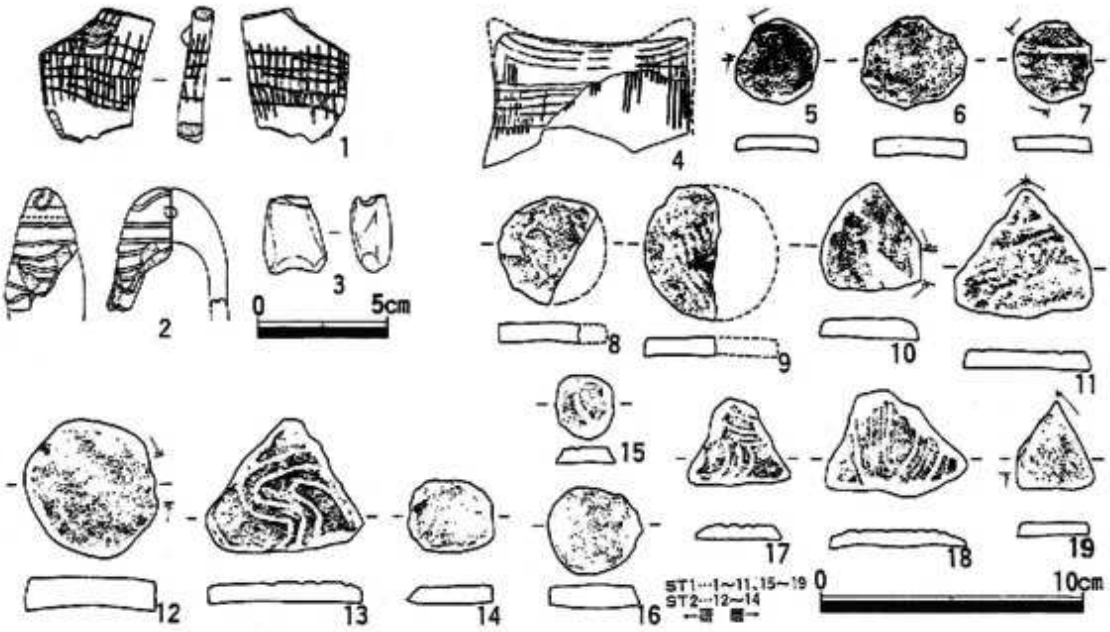
調査区南東部、方座環状列石際より広がる柱穴状ピット群がやや希薄となるＺＸ－91グリッドに位置する。Ⅲd層上面において245号土壙、ピット272と重複して確認された。245号土壙より新しく、ピット272とは不明である。平面形は径238×207cm、深さ32～43cm、底面積3.53㎡を測る。長軸方向はN－52°－Eである。Ⅴ層上位を底面とし、こまかな起伏がみられるが平坦な感じを受け、堅くしまる。底面南東壁際に深さ15cm程のダルマ状を呈する凹地が存在



ST201…１～12、15、16
ST202…13、14、17

第53図　竪穴遺構出土石器実測図

0　5cm



第54図　竪穴遺構出土土製品・石製品実測図

する。壁は底面よりやや外傾して立ち上がる。堆積土は８ブロックに区分された。人為堆積である。竪穴付近において数個のピットを確認したが、本竪穴に伴うものかは不明である。

遺構内よりダンボール¼箱と復元土器１点（50図９）の他、掻器２点、円盤状土製品３点が出土した。９は無文の平口縁深鉢形土器で、器高21.8cmを計る。焼成は良好、色調はにぶい褐色を呈する。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。　（藤井安正）

８．土壙

（１）Ｔピット

第210号Ｔピット（第55、57図、ＰＬ９）

調査区北西側、ＹＩ－93グリッドに位置する。201号竪穴住居跡（平安時代）床面調査時に確認した。ピット構築面はIId層上面である。ピット西側上部は201号住居跡によって頸部下まで消失している。規模は確認されているだけで362×59cm、深さ132～150cmを測る。長軸方向はN－54°－Eである。堆積土は６層に区分され、自然堆積である。Ⅵ層（鳥越軽石質火山灰層）を底面とし、底面はゆるやかな起伏をもち、軟弱である。壁は長軸端が垂直に立ち上がるのに対し、横断面は漏斗状を呈する。

ピット内より６点の土器破片が出土した。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第235号Tピット（第55図、ＰＬ９）

発掘区南東端のＺＵ－92グリッドに位置し、Ⅶd層上面で確認した。242号フラスコ状土壙、ピット20、201～203、224号焼土と重複し、本遺構はいずれよりも古い。規模は350×57cm、深さ155cmを測る。壁は下半部がほぼ垂直に立ち上がり、上半部はやや膨らみ袋状を呈する。Ⅵ層を底面とし、底面はほぼ平坦で軟弱である。堆積土は８ブロックに区分でき、下半部は自然堆積、上半部は人為堆積を呈すると考えられる。

遺物は出土しなかった。

（２）フラスコ状土壙

第204号フラスコ状土壙（第55図、61図1、2、65図2、5、7、9～11、68図14、15、PL21、22、24）

調査区西端、ＹＦ、ＹＧ－90グリッドに位置し、Ⅶd層上面において確認した。203号土壙、205号フラスコ状土壙と重複し、205号フラスコ状土壙より新しく、203号土壙より古い。

口縁部は径110cm程の円形を呈する。底径は124×94cmの形の歪んだ楕円形を呈し、深さ104cm、底面積0.98㎡を測る。堆積土は13ブロックに区分され、人為堆積である。Ⅵ層（鳥越軽石質火山灰層）上位を底面とする。底面は大きくゆるやかな起伏をもち、軟弱である。壁の南側一部は203号土壙に切られ、消失している。

土壙内より53点の土器破片と石鏃、石匙各１点、掻器４点、円盤状土製品２点が出土した。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第205号フラスコ状土壙（第55図、61図３～５、65図８、ＰＬ22）

調査区西端、ＹＦ、ＹＧ－90グリッドに位置し、Ⅶd層上面において確認した。204号フラスコ状土壙、206号土壙と重複し、206号土壙より新しく、204号フラスコ状土壙より古い。

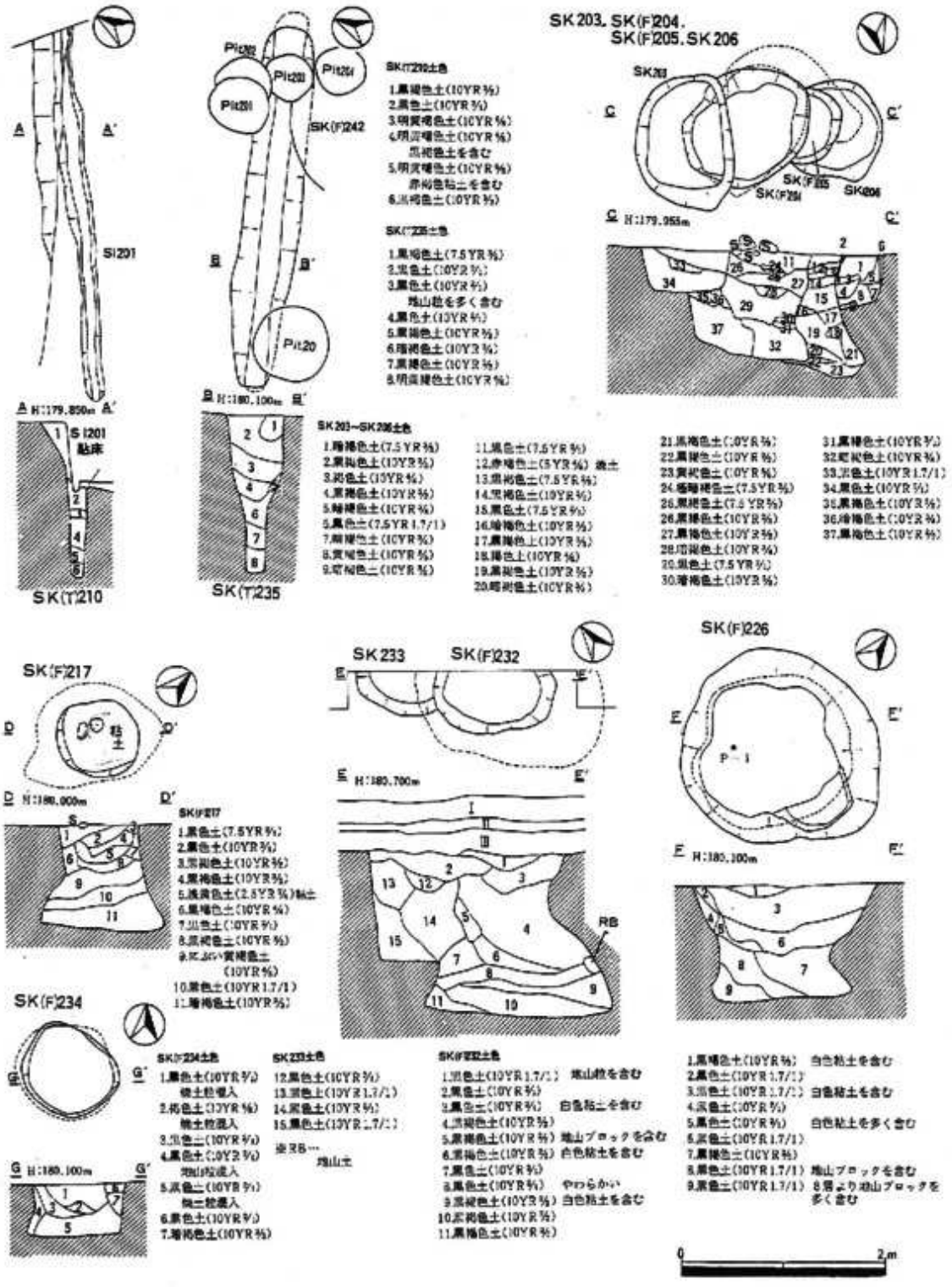
本土壙は204号フラスコ状土壙によりその南半を消失しているが、残存する部分から口縁部は径74cm以上を測る円形を呈するものと考えられる。深さは119cmを測る。堆積土は13ブロックに区分され、堆積状態、混入土などから上位５ブロックについては自然堆積、下位８ブロックは人為堆積である。Ⅵ層上位を底面とする。底面はゆるやかな起伏をもち、やや軟弱である。底面北側には貼床が施されていた。壁はゆるやかな曲線を描いて立ち上がるが、東壁一部では垂直に立ち上がる。

土壙内より６点の土器破片と掻器１点が出土した。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第217号フラスコ状土壙（第55図、58図１、２、ＰＬ９、13）

発掘区ほぼ中央のＹＣ、ＹＤ－92グリッドに位置し、Ⅶd層上面で確認した。口縁部は80×76cmの円形を呈し、底径140×99cm、深さ104cm、底面積1.03㎡を測る。確認面下約30cmに45×44cmの不整円形を呈する厚さ約10cmの粘土が確認された。底面はⅥ層より成り、軟弱でやや起



第55図　Tピット、フラスコ状土壙実測図(1)

伏がある。また底面から240個以上の4～10cmの自然石が敷きつめられた様相で出土した。堆積土は11ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

土壙中位より復元可能土器2点（58図1、2）、土壙内より数点の土器片、凹石1点を出土した。1、2は9層より出土した土器である。1は鉢と考えられる土器の胴下半部を再利用しており、割れ口には研磨が施されている。2条の平行沈線により区画された文様帯内には沈線により弧状文、曲線文が施文されている。器内部には茶褐色樹脂状凝固物が付着している（第Ⅵ章2参照）。2は深鉢形土器の胴下半部で、横位沈線文により底部付近まで区画された文様帯には円形文、楕円形文等が施文されている。色調は1がにぶい黄橙色、2がにぶい褐色を呈する。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第226号フラスコ状土壙（第55図、58図3～5、8、61図6～17、65図3、4、12～18、66図36、43、67図1、9、68図16～26、PL13、21～24）

調査区中央部、YC、YD－92グリッドにまたがって位置し、Bd層上面において白色粘土粒を含む黒褐色土の落ち込みを確認した。口縁部は210×188cmの東側一部が突出した楕円形を呈する。底径は163×156cm、深さ113cm、底面積1.86㎡を測る。長軸方向はN－80°－Wである。堆積土は9ブロックに区分され、人為堆積である。Ⅵ層上位を底面とする。底面はゆるやかな起伏をもち西側へ傾斜し、軟弱である。土壙東側の頸部には75×30cm、確認面からの深さ40cm程の半円状の掘り込みがみられ、出入口としての機能を有するものと考えられる。

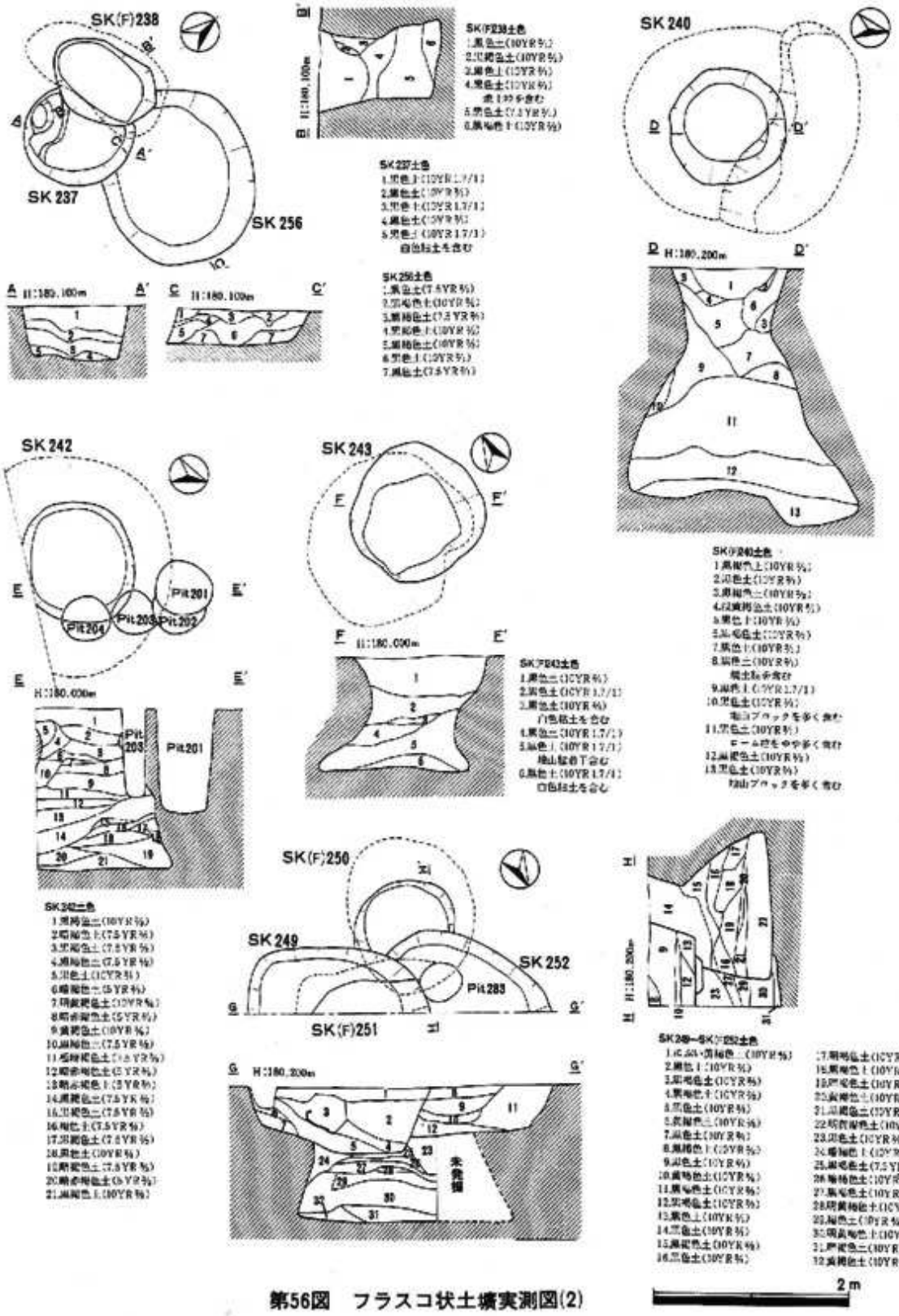
土壙内より、復元土器4点（58図3～5、8）とダンボール1/3箱の土器破片、掻器7点、石錘、磨石各1点、茸状土製品1点、円盤状土製品11点、円盤状石製品1点が出土した。3は無文のミニチュア土器破片、4は壺形土器口縁部破片である。5は口縁部を欠く壺形土器で、胴部上半に擦り消し沈線文で曲線文が施文されている。底径6.8cm、色調は浅黄橙色を呈する。8は平口縁の深鉢形土器で口縁部上端から胴部下半にかけてRL縄文が施文されている。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第232号フラスコ状土壙（第55図、58図6、7、61図18～44、65図19、66図47、67図8、68図27～30、PL22、24、26）

調査区南東側、万座環状列石際より広がる柱穴状ピット群がやや希薄となるZZ－92、93グリッドに位置する。Bd層上面において233号土壙と重複して確認された。本土壙が新しい。土壙の東側部分は未発掘である。口縁部は120cm以上を測る楕円形を呈する。底径は176cm、深さ155cmを測る。堆積土は12ブロックに区分され、人為堆積である。Ⅵ層中位を底面とし、平坦で軟弱である。

土壙内より310点余の土器破片と復元土器2点（58図6、7）のほか、掻器、敲石各1点、円盤状土製品4点、円盤状石製品1点が出土した。6は口唇部に3つの小突起をもつ壺形土器口縁部破片で、LR縄文施文後、平行沈線文が施されている。色調はにぶい橙色を呈する。7



第56図　フラスコ状土壙実測図(2)

は深形土器破片で、無文化されている。

構築時期は、縄文時代後期前葉～中葉と考えられる。

第234号フラスコ状土壙（第55図、58図9、10、62図45～48、65図20、PL22）

調査区南東側、万座環状列石際より広がる柱穴状ピット群がやや希薄となるZY－91グリッドに位置する。Bd層上面において焼土粒をわずかに含んだ黒色土の落ち込みを確認した。口縁部は93×78cmの楕円形を呈する。底径は120×94cm、深さ50cm、底面積0.70㎡を測る。堆積土は7ブロックに区分され、人為堆積である。V層中位を底面とし、こまかな起伏をもつが平坦な感じを受け、堅くしまっていた。壁は東側一部がやや外傾して立ち上がるほかは、わずかにフラスコ状を呈する。

土壙内より10点程の土器片と復元土器（58図9、10）2点のほか、掻器1点が出土した。9は浅鉢形土器底部で、平行沈線文が施文されている。10は壺形土器の口縁部破片である。口縁部上端に沈線を巡らし文様帯を区画する。LR縄文が施文されている。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第238号フラスコ状土壙（第56図、58図11,14、62図49～66、66図40,48、67図10,12、68図31～33,PL13,23,24）

調査区南東側、万座環状列石際より広がる柱穴状ピット群がやや希薄になり始めるZX－90グリッドに位置する。Bd層上面において237号土壙と重複して確認された。本フラスコ状土壙が新しい。口縁部は径114×77cmの楕円形を呈する。底径は147×80cm、深さ122cm、底面積0.98㎡を測る。長軸方向はN－71°－Eである。堆積土は6ブロックに区分され、人為堆積である。VI層上位を底面とする。底面はII縁部位置と比べて北西側に偏在し、ゆるやかな起伏をもち、軟弱である。壁は北西部がきれいなフラスコ状を呈するのに対し、南東部はやや外傾して立ち上がる。

土壙内より復元土器2点（58図11、14）と250点程の土器破片のほか、凹石、敲石各1点、円盤状土製品3点が出土した。11は8つの頂部をもつ浅鉢形土器で、器高5.8cm、口径12.5cm、底径5.8cmを計る。頸部と胴部中半に平行沈線文で文様帯を区画し、相対する2条の弧状沈線文で上・下文様帯を連結させている。沈線間にはL縄文が充填されている。色調は浅黄橙色を呈する。14は壺形土器で、底径7.6cmを計る。胴部最張部やや下半に沈線文を巡らし、文様帯を区画するもので、波状曲線文が施文されている。沈線間にはRL縄文が充填されている。色調は灰黄褐色を呈する。これら遺物のほか土壙中位から赤色顔料塊と黒色樹脂塊が出土した（第VI章2参照）。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第240号フラスコ状土壙（第56図、59図15～26、60図27～31、62図67～87、65図6、21～28、66図35、37、38、44～46、67図2、7、68図34～46、PL14、21～24、26）

調査区南東側、万座環状列石際から広がる柱穴状ピット群がやや希薄になるZX－90、91グ

リッドに位置し、Ⅱ層上面において確認した。口縁部は径121×117cmの円形を呈する。底径は236×197cm、底面積4.03㎡を測る。堆積土は14ブロックに区分され、人為堆積である。Ⅵ層中位を底面とし、西側が一段低くなる二段構造を呈し、確認面から底面上段までの深さ232cm、下段まで262cmを測る。上段は平坦であるのに対し、下段は壁際に向けゆるやかな傾斜をもつ。上・下段とも軟弱である。

土壙内より復元土器17点（59図15～26、60図27～31）、ダンボール1箱の土器破片のほか掻器、磨製石斧、石錘、磨石計14点、土製装飾品1点、円盤状土製品13点が出土した。25、26は下段底面より出土した。25は注ぎ口を欠く片口土器で、器高15.5cm、口径11.0cm、底径6.0cmを計る。胴部上半に二段の文様帯を区画し、この文様帯を結ぶように同心円状に弧状沈線文が施文されている。3つの頂部内面にはボタン状の粘土の貼り付けがみられる。色調は浅黄橙色を呈する。26は4つの頂部をもつ深鉢形土器で、胴部上半にＬＲ縄文施文後、平行沈線文で入組文が主文様として展開されている。器高25.3cm、口径24.0cm、底径7.8cm、色調は浅黄橙色を呈する。20、22、29は上段底面出土のもので、20は平口縁の無文浅鉢形土器で、器高5cm、色調は浅黄橙色を呈する。22は小型鉢形土器で口唇部から胴部下半までＬＲ縄文が施文されている。器高11.6cm、色調はにぶい褐色を呈する。29は口縁部上端から胴部下半にＬＲ縄文が施文されている平口縁の深鉢形土器である。色調はにぶい橙色を呈する。15～19、21、23、24、27、28、30、31は土壙堆積土中位～下位にかけて出土したものである。15～17は壺形土器である。15は撚糸圧痕文が文様帯を区画するもので、胴部にＬ縄文が施文されている。色調はにぶい黄橙色を呈する。16は胴部上半に文様帯をもつもので、主要文様として曲線文が施文されている。色調はにぶい黄橙色を呈する。器内・外面に赤色顔料が塗布されている。17は胴部上半に平行沈線文による入組状曲線文が施文されているもので、沈線間にはＬ縄文が充填されている。色調は灰黄褐色を呈する。18は6つの橋状把手をもつ壺形土器口縁部破片である。19は平口縁の無文鉢形土器で、器高5.0cm、色調はにぶい橙色を呈する。21は平口縁の無文浅鉢形土器で器高8.2cm、口径18.5cmを計る。色調はにぶい橙色を呈する。器内・外面に赤色顔料が塗布されている。23は6つの頂部に刻み目が施される浅鉢形土器で、胴部にはＬＲ縄文が施文されている。口径25.9cm、色調はにぶい橙色を呈する。24は片口土器の注ぎ口部分である。27は波状口縁の無文浅鉢形土器で、器高6.7cm、色調はにぶい橙色を呈する。28は平口縁の深鉢形土器で、器高22.4cm、色調は灰黄褐色を呈する。30は平口縁の深鉢形土器で、口縁部上端からＬＲ縄文が施文されている。器高32.1cm、色調はにぶい橙色を呈する。31は平口縁の深鉢形土器で、胴部上半に文様帯をもち、擦り消し沈線文で入組文が施文されている。底面に網代痕がみられる。器高36.4cm、色調はにぶい黄橙色を呈する。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第242号フラスコ状土壙（第56図、58図12、13、63図88～110、65図29、66図41、PL9、22、24）

発掘区南東端のZU－92グリッドに位置し、Ⅶd層上面で確認した。遺構南側は未発掘である。235号Tピット、ピット200、203、204、224号焼土と重複し、本遺構は235号Tピットより新しく、他の遺構より古い。口縁部は推定114×123cmの楕円形を呈し、推定底径224×220cm、深さ162cmを測る。底面はⅥ層より成り、やや軟弱で平坦である。底面直上より15～32cmの自然石が4個出土した。堆積土は21ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

土壙下位より復元土器1点（58図13）、土壙内より復元土器1点（58図12）、約250点の土器片、掻器、凹石をそれぞれ1点、円盤状土製品9点を出土した。13は土壙下位より出土した無文の把手付鉢形土器で、口径11.0cm、底径7.6cm、器高8.9cmを計る。色調は灰黄褐色を呈する。12は土壙内より出土した無文のミニチュア土器で、4個の頂部を有する波状口縁である。底径3.0cmを計り、色調はにぶい黄橙色を呈する。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第243号フラスコ状土壙（第56図、63図111～134、65図30～33、67図6、11、13、68図56～63、PL22、25）

調査区南東側、方座環状列石際から広がる柱穴状ピット群がやや希薄となるZX－90グリッドに位置する。Ⅶd層上面において224号立石遺構と重複して確認された。本土壙が古い。口縁部は径144×136cmの円形を呈する。底面の径180×164cm、深さ110cm、底面積2.14㎡を測る。堆積土は6ブロックに区分でき、人為堆積である。Ⅵ層上面を底面とし、ゆるやかな起伏をもち、軟弱である。

土壙内より250点程の土器破片と掻器4点、円盤状土製品8点、円盤状石製品1点、球状石製品2点が出土した。このほかに炭化したクリ6個、トチノキ56個、ドングリ1個が出土した（第Ⅵ章3参照）。構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第250号フラスコ状土壙（第56図、63図135～140、64図141～150、65図1、34、66図42、PL22、25、26）

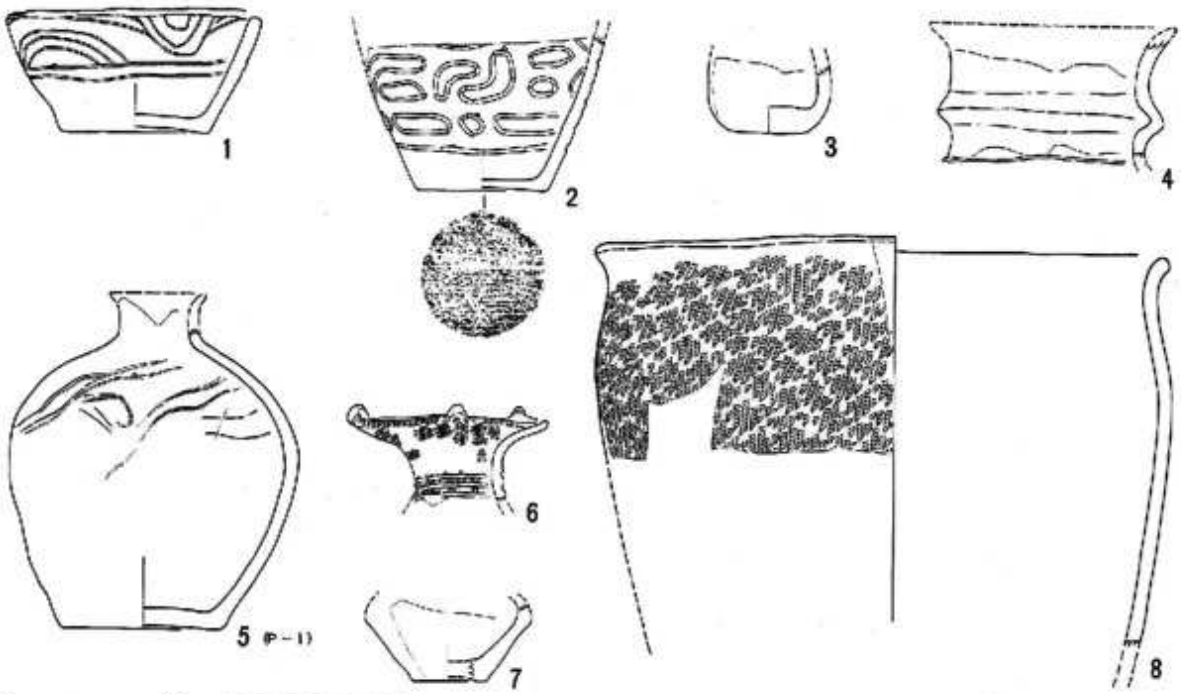
発掘区南東部のZY－92グリッドに位置する。確認面はⅣ層下面であるが、これは地山がマウンド状となっている為で、近傍の土壙の確認面とほぼ同一レベルである。遺構北西側は未調査である。251号フラスコ状土壙、249、250号土壙、ピット283と重複し、本遺構は251号フラスコ状土壙より新しいと考えられ、他の遺構より古い。推定口径100×98cm、推定底径128×160cm、深さ124cmを測る。底面はⅥ層より成り、やや軟弱で起伏がある。また70×57cmの大型の自然石が250、251号両フラスコ状土壙の底面に跨がっている。堆積土は10ブロックに区分でき、人為堆積と考えられる。土壙内より炭化したクリ1個、クルミ5個が出土した（第Ⅵ章3参照）。

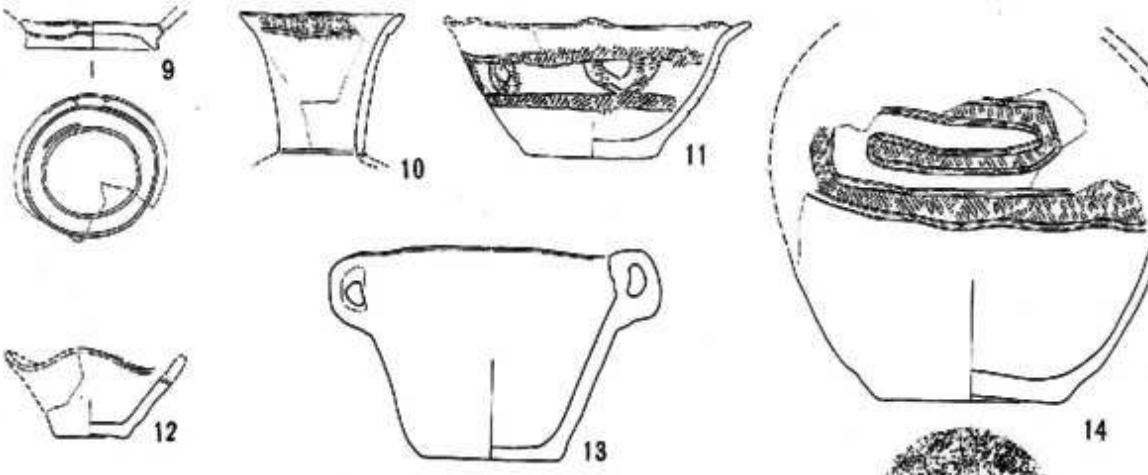
本遺構及び251号フラスコ状土壙、249、250号土壙内より約300点の土器片、円盤状土製品5点、円盤状石製品3点を出土した。

SK(T)210…1～5

0 5cm

第57図　Tピット出土土器拓影図

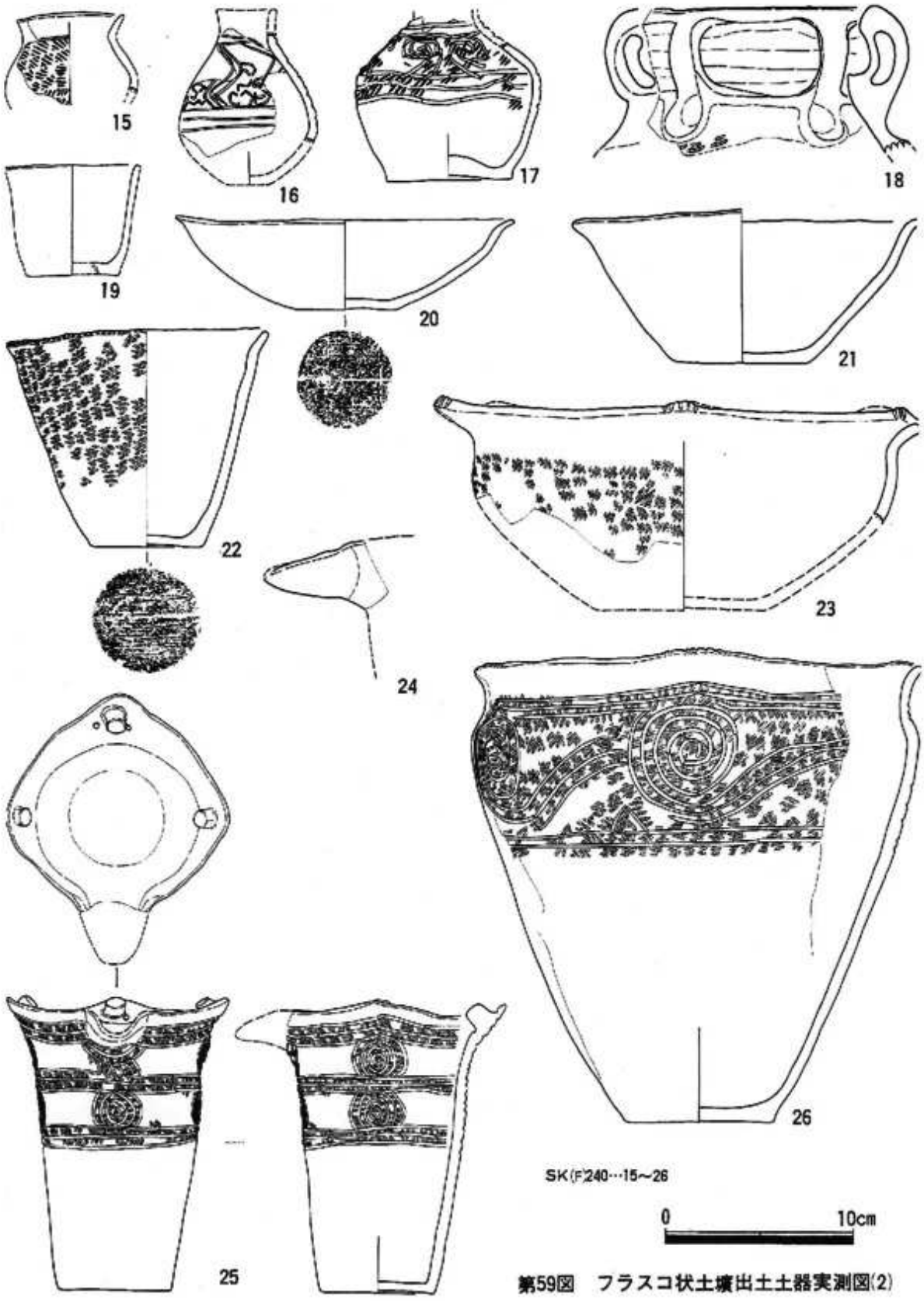




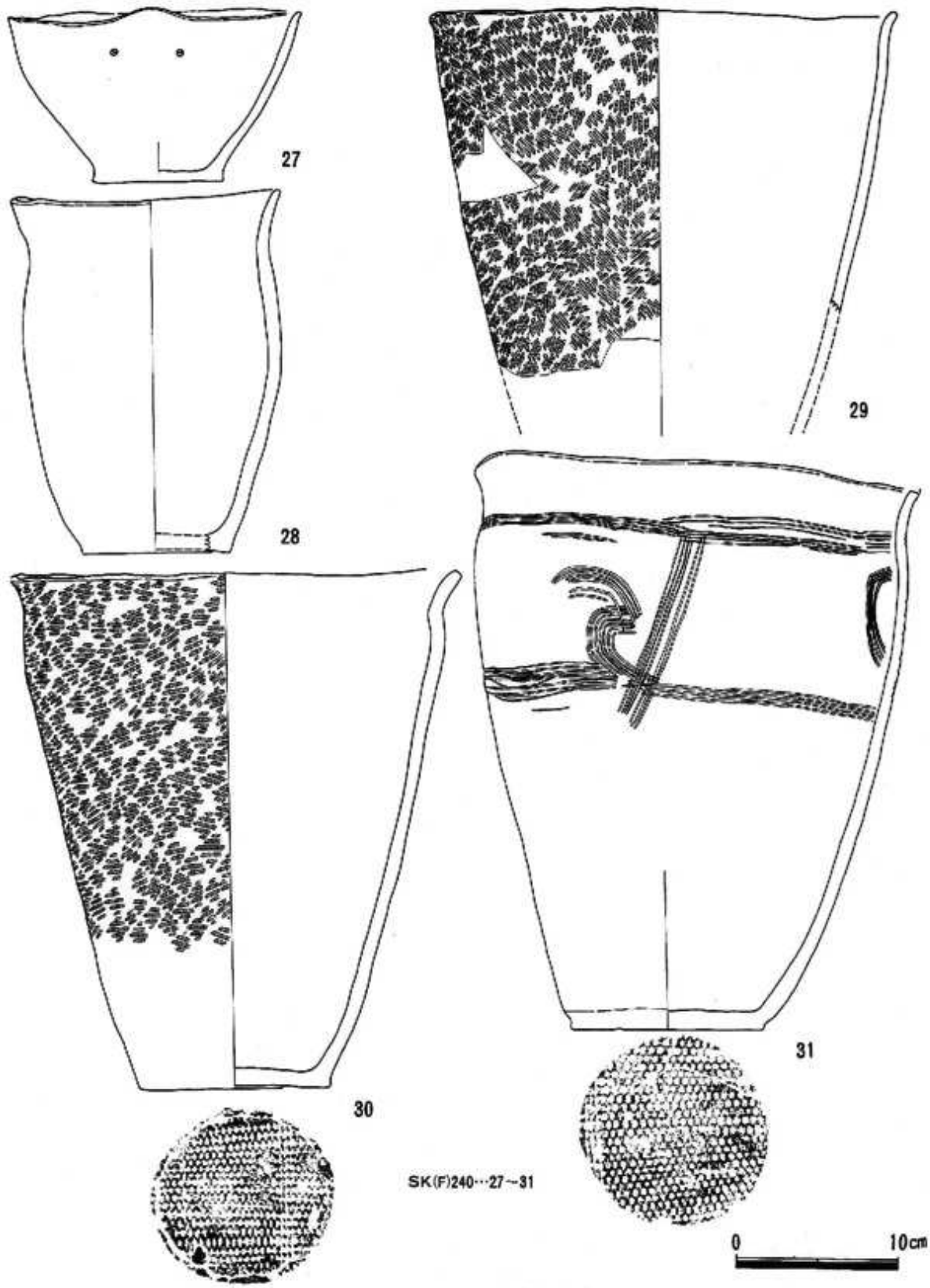
SK(F)217…1、2　SK(F)226…3～5、8　SK(F)232…6、7
SK(F)234…9、10　SK(F)238…11、14　SK(F)242…12、13

0 10cm

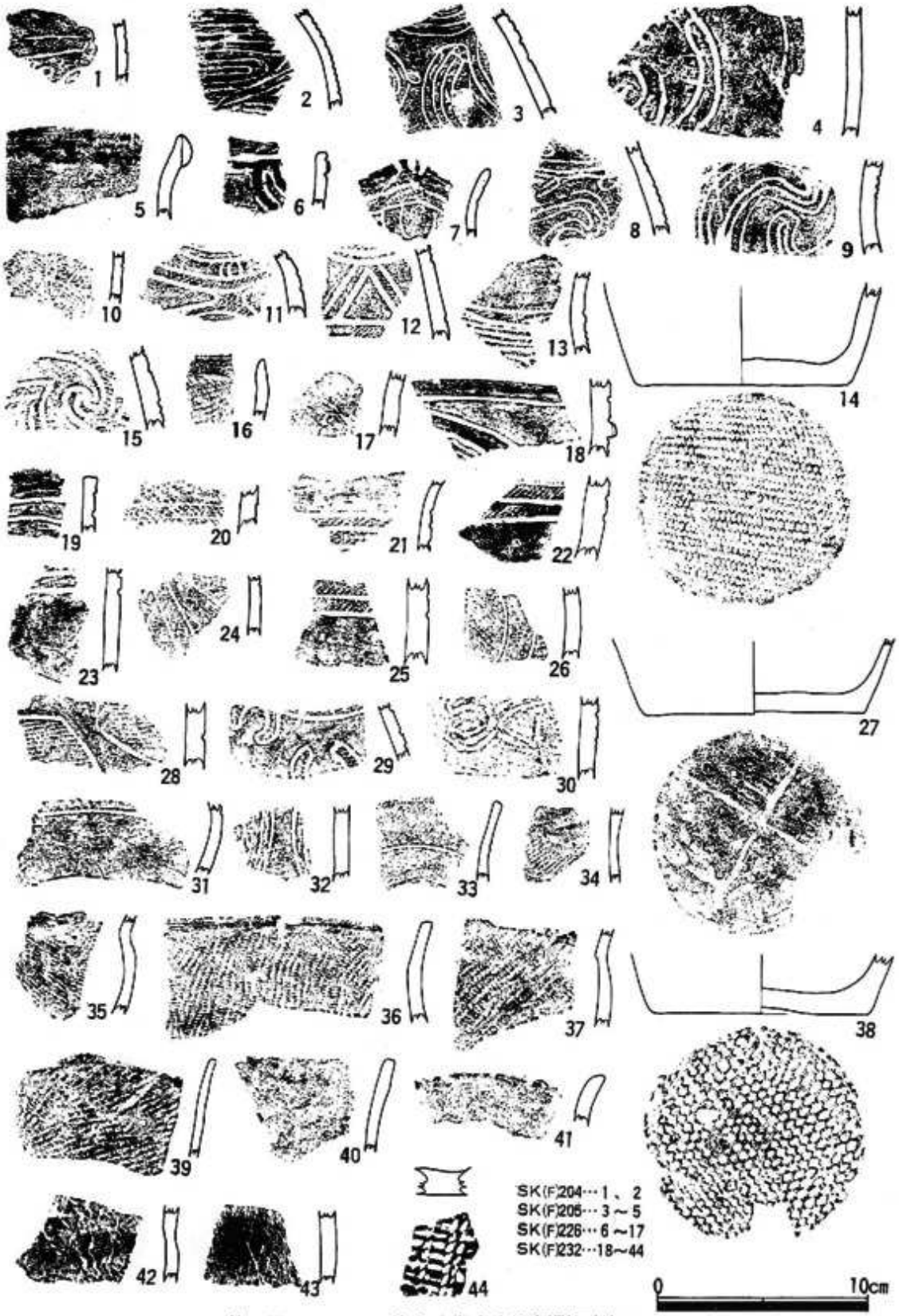
第58図　フラスコ状土壙出土土器実測図(1)



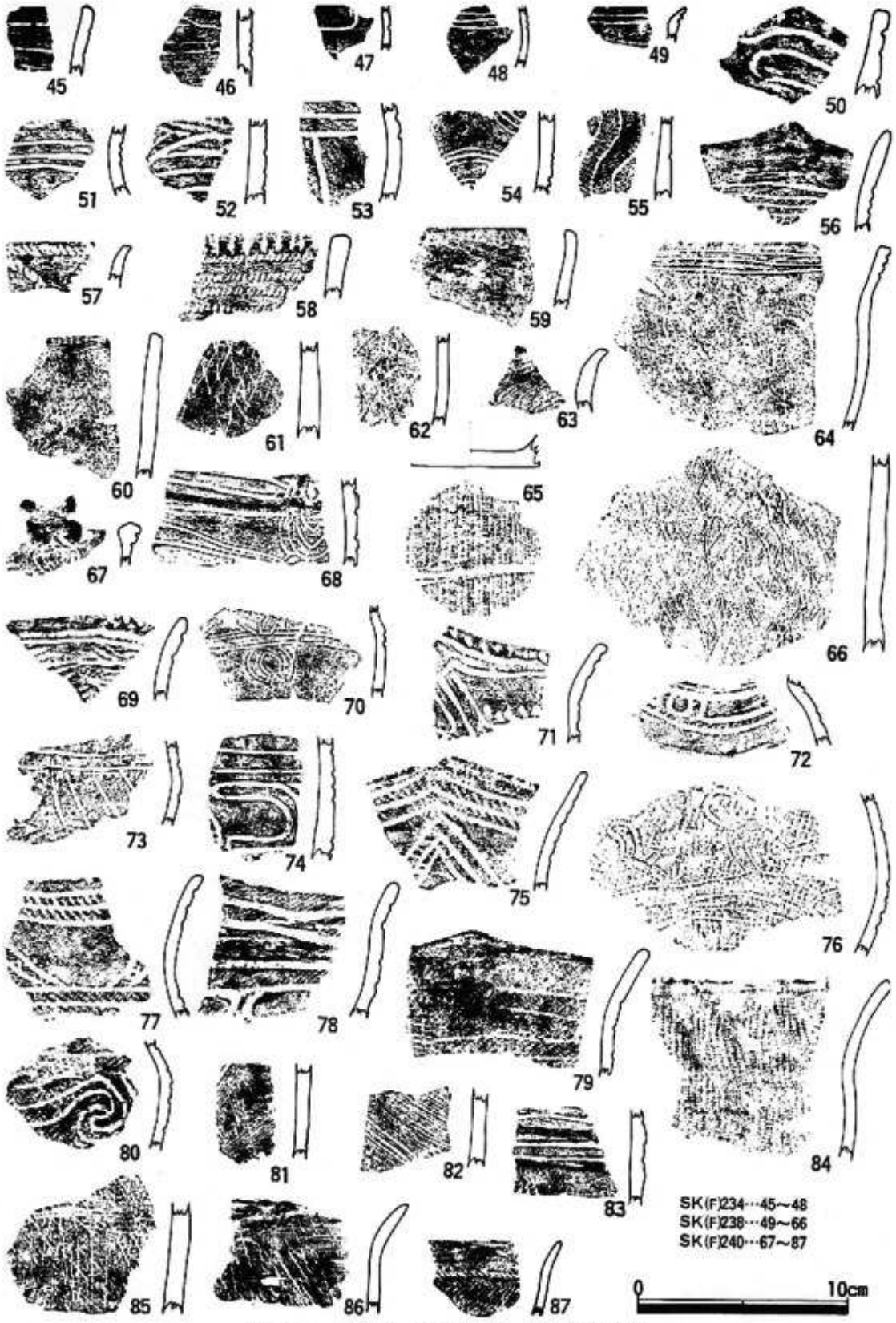
第59図　フラスコ状土壙出土土器実測図(2)



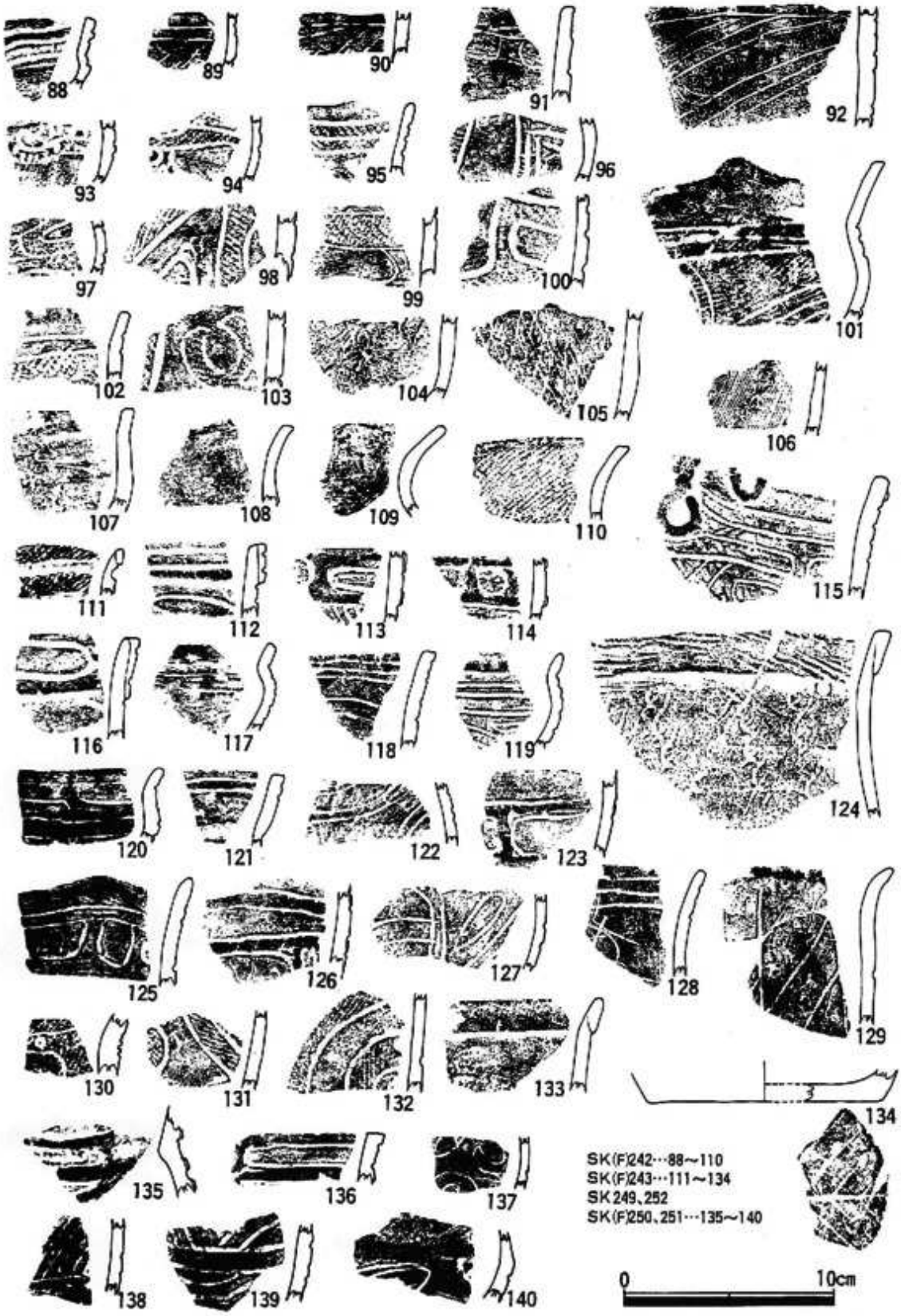
第60図　フラスコ状土壙出土土器実測図(3)



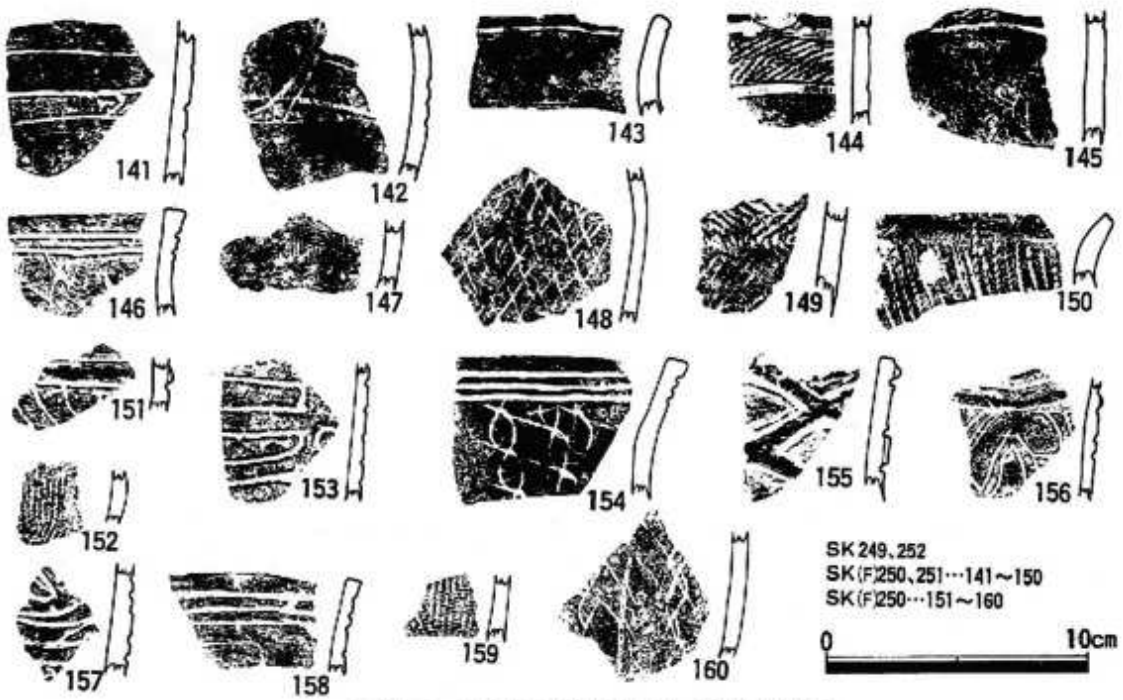
第61図　フラスコ状土壙出土土器拓影図(1)



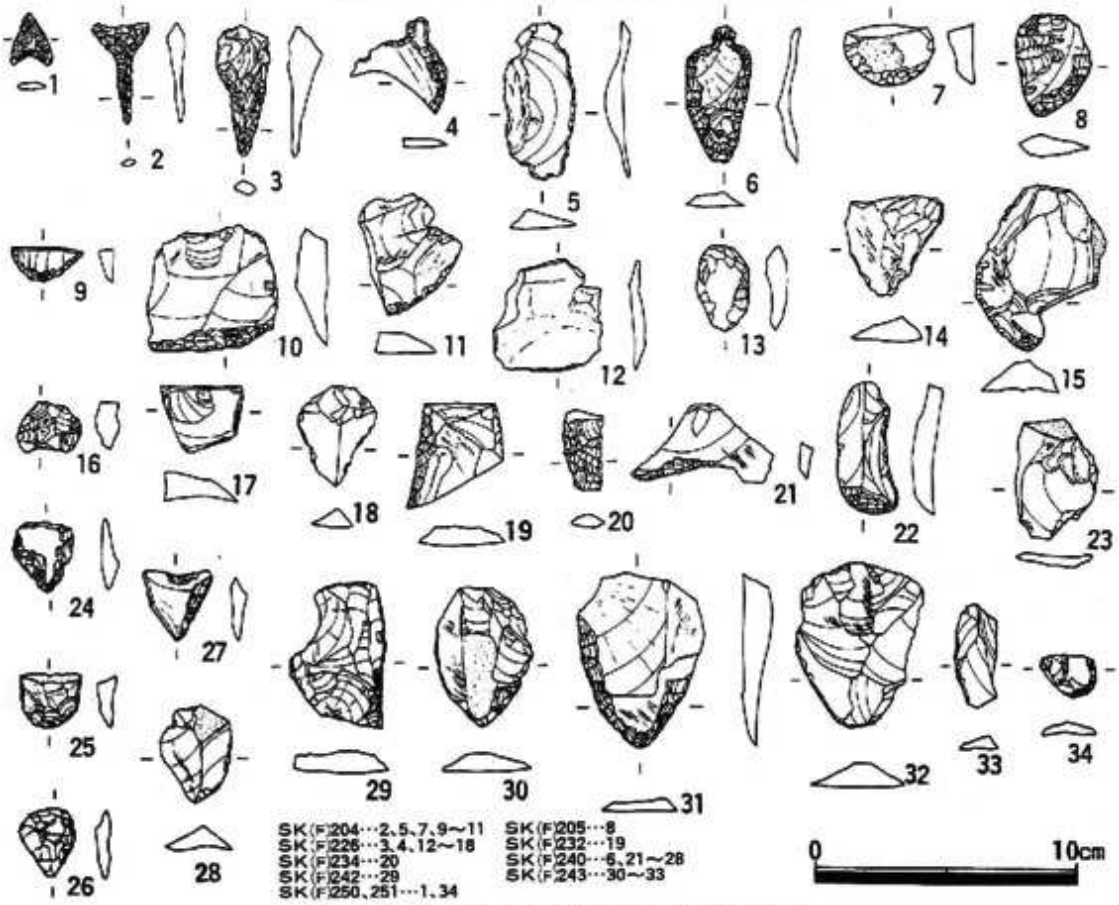
第62図　フラスコ状土壙出土土器拓影図(2)



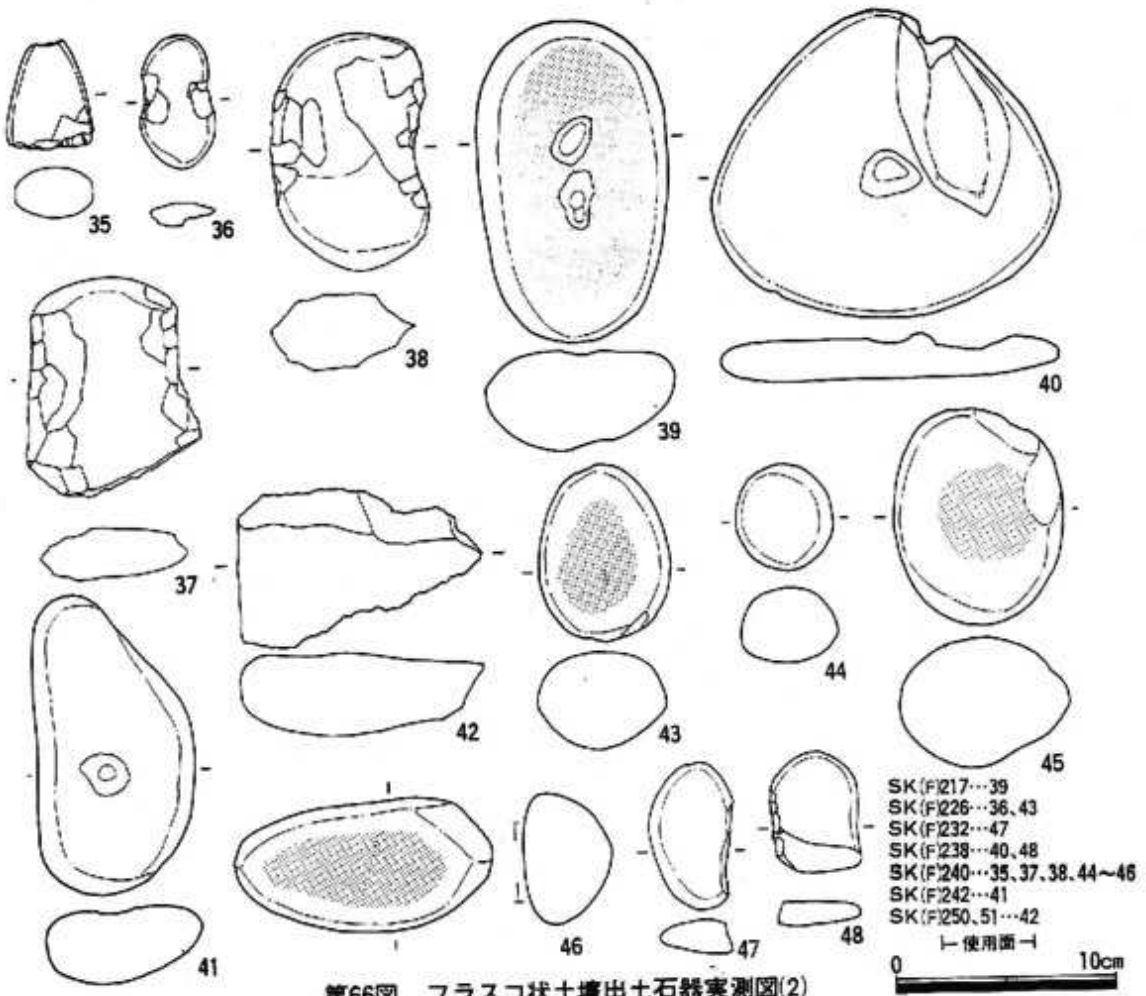
第63図　フラスコ状土壙出土土器拓影図(3)



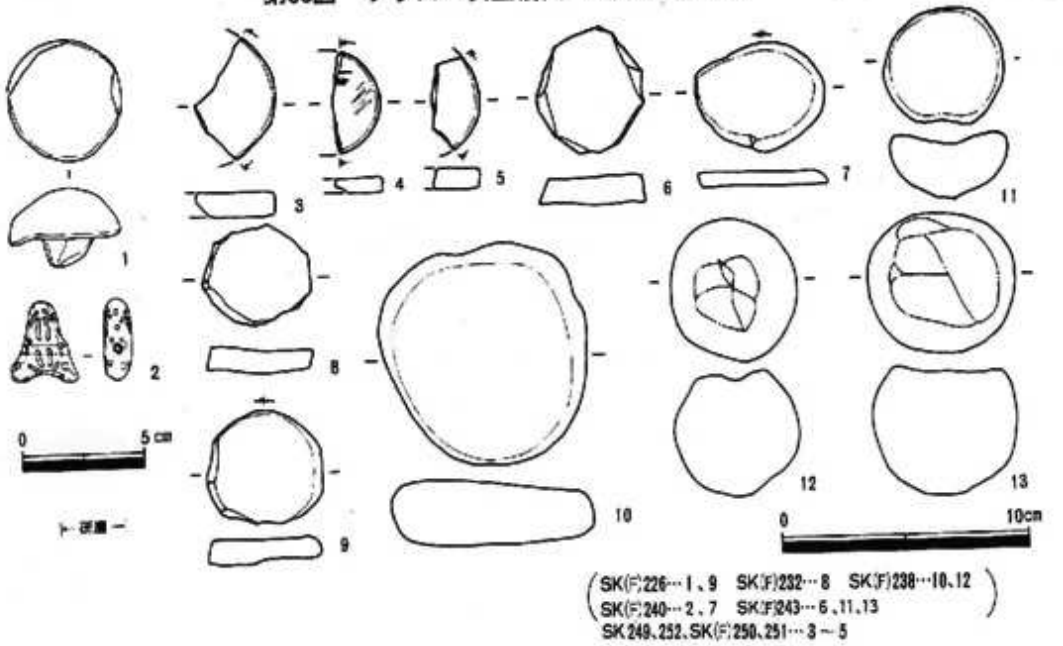
第64図　フラスコ状土壙出土土器拓影図(4)



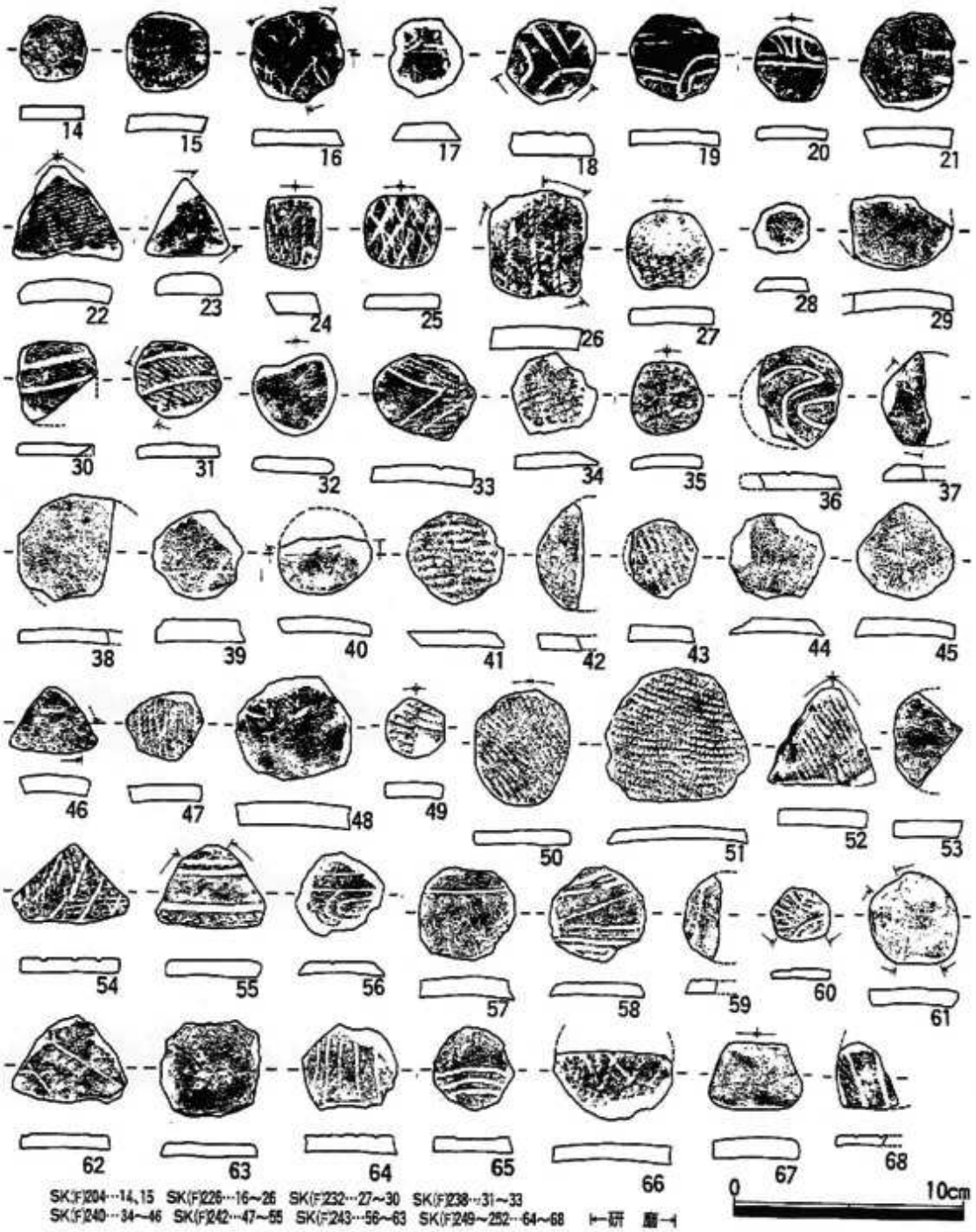
第65図　フラスコ状土壙出土石器実測図(1)



第66図　フラスコ状土壙出土石器実測図(2)



第67図　フラスコ状土壙出土土製品・石製品実測図(1)



第68図　フラスコ状土壙出土土製品・石製品実測図(2)

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第251号フラスコ状土壙（第56図）

発掘区南東側のＺＸ、ＺＹ－92グリッドに位置し、249、252号土壙底面で確認した。遺構南東側は未発掘で、北西側は未調査である。250号フラスコ状土壙、249、252号土壙、ピッ

ト283と重複し、本遺構は250号フラスコ状土壙より古いと考えられ、他の遺構より古い。推定底径216cm、深さ134cmを測る。底面はⅥ層より成り、軟弱で大きな起伏がある。堆積土は10ブロックに区分でき、人為堆積を呈すると考えられる。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

(3) 土　壙

第201号土壙（第69図、72図1、3、75図1～14、80図1、14、19、20、82図1、2、11、PL14、21、22、25）

調査区西端、YG、YH－90グリッドに位置する。土壙として明確にプランを把握できたのはⅣ層上面である。

土壙はやや形の歪んだ楕円形を呈し、径169×137cm、深さ37cm、底面積0.98㎡を測る。長軸方向はN－7°－Eである。堆積土は地山粒を少量含んだ黒色土の単一層で、人為堆積である。Ⅴ層上位を底面とする。底面はこまかな起伏をもち、堅くしまっていた。壁は底面よりゆるやかに外傾する。

土壙内より復元土器2点（72図1、3）と250点程の土器破片、石鏃、石錐各1点、掻器2点、土製装飾品、円盤状土製品、円盤状石製品各1点が出土した。1は4つの波頂部をもつ無文の鉢形土器で、器高8.5cmを測る。焼成はやや良好で、色調は灰黄褐色を呈する。3は平口縁の深鉢形土器で、器高32.9cmを測る。口唇部から胴部下半にかけLR縄文が施文されている。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第202A号土壙（第69図、75図15～21、80図2、3、21、26、81図40、82図9、PL21、22、27）

調査区西端、YG－90グリッドに位置し、Ⅶd層上面において確認した。202B、C号土壙と重複し、本土壙が新しい。

平面形は辺が丸みを帯びた方形を呈し、径121×116cm、深さ76cm、底面積0.78㎡を測る。長軸方向N－44°－Eである。堆積土は8層に区分され、自然堆積である。Ⅴ層中位を底面とする。底面はこまかな起伏をもつが、平坦な感じを受け、堅くしまっていた。壁は底面よりやや外傾して立ち上がる。

土壙内より210点程の土器破片と石鏃、掻器各2点、石皿1点、三角形石製品1点が出土した。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第202B号土壙（第69図）

調査区西端、YG－90グリッドに位置し、Ⅶd層上面において確認した。202A号土壙と重複し、土壙西半を消失している。本土壙が古い。

平面形は、その残存部分からみて円形または楕円形を呈すると考えられ、径115cm、深さ51cmを測る。堆積土は3層に区分され、人為堆積である。Ⅴ層上位を底面とし、大きな起伏がみられた。壁は底面よりやや外傾して立ち上がる。

遺物は出土しなかった。構築時期は重複する202Ａ号土壙及び周辺の出土遺物から、縄文時代後期前葉と考えられる。

第202Ｃ号土壙（第69図、75図22、23、80図22）

調査区西端、ＹＦ、ＹＧ－90グリッドに位置し、Ⅱd層上面において202Ａ号土壙と重複して確認された。本土壙が古い。

平面形は楕円形を呈し、径144×105cm、深さ43cm、底面積0.98㎡を測る。長軸方向はＮ－38°－Ｅである。堆積土は地山ブロックを多量に含む黒色土の単一層で、人為堆積である。Ⅴ層上位を底面とする。底面はこまかい起伏がみられ、堅くしまっていた。壁は底面よりやや外傾して立ち上がる。

土壙内より190点程の土器破片と搔器1点が出土した。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第203号土壙（第55図、72図7、75図34、35、81図39、40、ＰＬ14、24）

調査区西端、ＹＦ－90グリッドに位置し、Ⅱd層上面において確認した。204号フラスコ状土壙と重複し、本土壙が新しい。

平面形は楕円形を呈し、径135×95cm、深さ42cm、底面積0.67㎡を測る。長軸方向はＮ－8°－Ｅである。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。Ⅴ層上位を底面とし、ゆるやかな起伏をもち、幾分北側へ傾斜し、堅くしまっている。壁は底面よりやや外傾して立ち上がる。

土壙内より復元土器1点（72図7）と10点程の土器破片、磨石1点が出土した。7は土壙上面より出土した平口縁の深鉢形土器で、口縁部上端から胴部下半にかけて撚糸文が施文されている。原体はＲ縄文。器高32.4cm、口径26.6cm、底径11.6cmを計る。色調は褐色を呈する。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第206号土壙（第55図）

調査区西端、ＹＧ－90グリッドに位置し、Ⅱd層上面において205号フラスコ状土壙と重複して確認された。本土壙が古い。

本土壙は、205号フラスコ状土壙と重複するため、その南側一部を消失している。平面形は円形を呈すると考えられ、径94cm、深さ52cmを測る。堆積土は9ブロックに区分され、人為堆積である。Ⅴ層上位を底面とする。底面はこまかな起伏をもち、堅くしまっていた。壁は底面よりやや外傾して立ち上がる。

遺物は出土しなかった。構築時期は、重複する土壙、周辺出土の遺物から、縄文時代後期前葉と考えられる。

第215号土壙（第69図）

調査区北西端、ＹＭ－91グリッドに位置し、Ⅱc層下位において201号建物跡のピット20、21、60、76と重複して確認された。本土壙が最も古い。

平面形は楕円形を呈し、径160（推定）×79cm、深さ35cmを測る。長軸方向はN－75°－Wである。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。Ⅴ層上位を底面とする。底面はこまかな起伏をもち、堅くしまっていた。壁は底面よりやや外傾して立ち上がる。

遺物は出土しなかった。構築時期は、重複する201号建物跡、周辺出土遺物より、縄文時代後期と考えられる。

第216号土壙（第69図、ＰＬ９）

発掘区北西端のＹＬ－90に位置し、Ⅳ層上面で粘土粒の混入した黒色土の楕円形プランを確認した。規模は97×79cm、深さ37cm、底面積0.44㎡を測り、長軸方向はN－18°－Wである。底面はⅤ層より成り、小さな起伏があって堅くしまっている。壁は北側はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は8ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。遺物は出土しなかった。

第218号土壙（第69図、72図２、76図57～73、80図４～６、15、ＰＬ14、21、25、26）

発掘区中央のＹＣ－92グリッドに位置し、Ⅱd層上面で確認した。平面形は144×121cmの楕円形を呈し、深さ42cm、底面積0.90㎡を測る。長軸方向はN－49°－Wである。底面はⅣ層より成り、大きな起伏があり、やや軟弱である。壁はやや緩やかに立ち上がる。土壙内より6～30cmの自然石が45個出土した。堆積土は8ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

土壙内より復元土器1点（72図２）、約550点の土器片、石鏃3点、石錐1点、円盤状土製品3点、円盤状石製品1点を出土した。２は深鉢形土器胴下半部で、底径5.0cmを計り、色調はにぶい黄橙色を呈する。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第219号土壙（第69図、72図４、76図74～76、ＰＬ15、23）

発掘区中央のＹＢ－92グリッドに位置し、Ⅱd層上面で確認した。平面形は80×80cmの円形を呈し、深さ20cm、底面積0.25㎡を測る。底面はⅣ層より成り、平坦でやや軟弱である。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は2ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

土壙中位より復元土器1点（72図４）、土壙内より20数点の土器片の他、掻器1点を出土した。４は1層下位より出土した深鉢形土器である。口縁部直下から胴部上半にＬＲ縄文が施文されている。口径は20cmを計り、色調はにぶい黄橙色を呈する。

構築時期は縄文時代後期前葉～中葉と考えられる。

第220号土壙（第69図、72図5、6、73図8、77図77～94、80図7、8、16、18、25、27、81図36、Pl.10、15、21、23、25、26）

発掘区中央のＹＢ－92グリッドに位置し、Ⅱd層上面で確認した。平面形は176×137cmの楕

円形を呈し、深さ40cm、底面積1.20㎡を測る。長軸方向はN－57°－Wである。底面はV層より成り、大きな起伏があり、堅くしまっている。壁はやや緩やかに立ち上がる。堆積土は3ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

土壙底面より凹石1点、土壙中位より復元土器1点（72図5）、土壙上位より復元土器1点（73図8）、土壙内より復元土器1点（72図6）、約280点の土器片、石錘2点、石鏃1点、掻器3点、円盤状土製品5点、円盤状石製品1点を出土した。72図5は土壙中位北壁際より横転状態で出土した片口土器である。7個の頂部を有する波状口縁で、2条の平行沈線により区画された胴上半部に文様帯を有する。磨消縄文技法により入組状曲線文が施文されている。地文はLR縄文で、口径9.8cm、底径6.2cm、器高5.7cmを計る。8は土壙上位北壁際より出土した折り返し口縁の無文鉢形土器で、推定口径10.6cm、推定底径4.6cm、器高6.5cmを計る。器内面には黒色樹脂状凝固物が付着している（第Ⅵ章2参照）。6は土壙内より出土した深鉢と考えられる土器で、6個の頂部を有する波状口縁である。頸部には3条の平行沈線文が施文されており、地文はLR縄文である。推定口径21cmを計る。色調は5、6が灰褐色、8がにぶい黄橙色を呈する。77図94は底面、79は底面直上、83は下位からの出土である。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第221号土壙（第69図、77図95～99、81図41、42、82図20）

発掘区中央のYD－92グリッドに位置し、Bd層上面で確認した。平面形は115×110cmの円形を呈し、深さ64cm、底面積0.64㎡を測る。底面はV層より成り、ほぼ平坦で堅くしまっている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は13ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

土壙内より20数点の土器片、磨石2点、円盤状土製品1点が出土した。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第222号土壙（第69図）

調査区北西側、YL－92グリッドに位置する。Bd層下位において粘土粒を多量に含んだ黒褐色土の落ち込みを確認した。本土壙は202号環状配石遺構張り出し部と重複しているため、土壙北半は未発掘である。本土壙が古い。平面形は楕円形を呈するものと考えられ、径64cm、深さ20cmを測る。堆積土は人為堆積である。Bd層下位を底面とし、平坦で軟弱である。壁は底面よりやや外傾して立ち上がる。

遺物は出土しなかった。土壙周辺の出土遺物から構築時期は縄文時代後期と考えられる。

第223号土壙（第69図、73図13、77図100～102、81図37、PL10、15）

発掘区中央のYD－92グリッドに位置し、Bd層上面で確認した。平面形は127×103cmの楕円形で、深さ36cm、底面積0.67㎡を測る。長軸方向はN－77°－Wである。底面はⅣ層から成り、小さな起伏があり、やや軟弱である。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は6ブロックに区分で

SK 201
SK 202A
202B
202C
SK 215
SB201 Pit60
SB201 Pit20
SB201 Pit76
SB201 Pit21
SK 216
SK 218
SK 219
SK 220
SK 221
SK 222
SK 223
SK 224
0
2m

第69図　土壙実測図(1)

き、人為堆積を呈する。

土壙中位より復元土器1点（73図13）、土壙上位より凹石1点、土壙内より20数点の土器片を出土した。13は土壙中位南西壁際より出土した折り返し口縁の深鉢形土器で、頸部から胴部¾までLR縄文が施文されている。口径24cmを計り、色調は灰黄褐色を呈する。77図100は底面からの出土である。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第224号土壙（第69図、73図9、77図103～110、80図9、81図38、43、82図21、PL21、23）

調査区中央部、YC－92グリッドに位置し、Ⅱd層上面で確認した。平面形は楕円形を呈し、径128×107cm、深さ30cm、底面積0.81㎡を測る。長軸方向はN－78°－Eである。堆積土は2ブロックに区分され、15cm程の礫が多量に混入していた。人為堆積である。Ⅴ層上位を底面とし、こまかな起伏がみられるが平坦な感じを受け、堅くしまっていた。壁は底面よりやや外傾して立ち上がる。

土壙内より復元土器1点（73図9）と250点程の土器破片の他、石鏃、磨石、凹石各1点、円盤状土製品1点を出土した。9は鉢形土器底部で底面に網代痕がみられる。色調は明赤褐色を呈する。土器内には茶褐色樹脂状凝固物が付着していた（第Ⅵ章2参照）。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第225号土壙（第70図、77図111、112、PL25）

発掘区中央のYD－92グリッドに位置し、Ⅱd層上面で確認した。平面形は136×90cmの楕円形で、深さ39cm、底面積0.47㎡を測る。長軸方向はN－79°－Wである。底面はⅣ層より成り、大きな起伏があり、やや軟弱である。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は4ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

土壙内より数点の土器片、円盤状土製品1点が出土した。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第227A号土壙（第70図、77図113～118、80図10、11、82図23、PL21、25）

調査区南東側、万座環状列石際より広がる柱穴状ピット群が希薄になったZZ－92グリッドに位置する。Ⅱd層上面においてピット327と重複して確認された。本土壙が古い。

平面形は楕円形を呈し、径110×100cm、深さ60cm、底面積0.55㎡を測る。長軸方向はN－59°－Eである。堆積土は6ブロックに区分され、人為堆積である。Ⅴ層中位を底面とする。底面は皿状を呈し、こまかな起伏をもち、堅くしまっている。壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がる。

土壙内より100点程の土器破片と、石鏃2点、円盤状土製品1点が出土した。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第227B号土壙（第70図、78図119、120、PL25）

調査区南東側のZZ－92グリッド、227A号土壙の東側に位置し、Ⅶd層上面において確認した。本土壙は柱穴状ピット328と重複し、本土壙が新しい。

平面形は円形を呈し、径76×74cm、深さ34cm、底面積0.30㎡を測る。堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。Ⅴ層上位を底面とし、こまかな起伏をもち、堅くしまっていた。底面においてピット328を確認した。壁は底面よりやや外傾して立ち上がる。

土壙内より10点程の土器破片、円盤状土製品1点が出土した。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第228号土壙（第70図、78図121～126、80図12、81図33、PL21）

調査区南東部、万座環状列石際から広がる柱穴状ピット群がやや希薄になるZZ－93グリッドに位置し、Ⅶd層上面において確認した。本土壙は柱穴状ピット329と重複し、本土壙が古い。

平面形は楕円形を呈し、径134（推定）×101cm、深さ34cm、底面積0.91㎡を測る。長軸方向はN－78°－Eである。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。Ⅴ層上位を底面とし、ゆるやかな起伏をもち、堅くしまっている。壁は底面よりやや外傾して立ち上がる。

土壙内より50点程の土器破片と、石鏃、凹石各1点が出土した。

構築時期は、縄文時代後期前葉～中葉と考えられる。

第229号土壙（第70図、78図127～134、80図17、28、82図10、PL10、23、27）

調査区南東側、万座環状列石際より広がる柱穴状ピット群が希薄になるYA－92グリッドに位置し、Ⅶd層上面において確認した。

平面形は楕円形を呈し、径117×108cm、深さ36cm、底面積0.73㎡を測る。長軸方向はN－2°－Eである。堆積土は2ブロックに区分され、人為堆積である。Ⅴ層上位を底面とし、ゆるやかな起伏をもつが平坦な感じを受け、堅くしまっていた。壁は底面よりやや外傾して立ち上がる。

土壙内より100点程の土器破片と、石錐、掻器各1点、石製品1点が出土した。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第230号土壙（第70図、73図10、11、78図135～138、82図24、PL21）

調査区南東側、万座環状列石際より広がる柱穴状ピット群が希薄になるZZ－92グリッドに位置し、Ⅶd層上面において確認した。平面形は楕円形を呈し、径118×95cm、深さ26cm、底面積0.78㎡を測る。長軸方向はN－53°－Eである。堆積土は2ブロックに区分され、人為堆積である。Ⅴ層上位を底面とし、平坦で堅くしまっていた。壁は外傾して立ち上がる。

土壙内より20点程の土器破片と円盤状土製品1点が出土した。図化できたものは73図10、11で、10は2つの波頂部をもつ深形土器口縁部破片で、色調はにぶい黄褐色を呈する。11はミニチュア土器底部付近の破片である。底径7.0cm、色調は褐灰色を呈する。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第231号土壙（第70図、78図139～159、80図29、81図34、44、82図5、25～29、PL10、23、25）

調査区南東側、万座環状列石際より広がる柱穴状ピット群が途絶えるＹＡ－92グリッドに位置し、Ⅱd層上面において確認した。本土壙は柱穴状ピット336と重複し、本土壙が古い。平面形は楕円形を呈し、径144×130cm、深さ58cm、底面積1.33㎡を測る。長軸方向はＮ-44°-Ｗである。堆積土は8ブロックに区分され、人為堆積である。Ⅴ層中位を底面とし、平坦で堅くしまっていた。壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がる。

土壙内より100点余の土器破片と、掻器、凹石、磨石各1点、円盤状土製品5点、円盤状石製品1点が出土した。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第233号土壙（第55図、78図160～162、82図30）

調査区南東側、万座環状列石際から広がる柱穴状ピット群のやや希薄となるＺＺ－92、93グリッドに位置し、Ⅱd層上面において232号フラスコ状土壙と重複して確認された。本土壙が古い。また東側は調査区域外にあるため、平面形及び口縁部径は不明である。深さ106cmを測る。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。Ⅴ層下位を底面とし、平坦で堅くしまっていた。壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がる。

堆積土中より15点程の土器破片、円盤状土製品1点が出土した。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第236号土壙（第70図、78図163～165）

発掘区南東端のＺＷ－89グリッドに位置し、Ⅱd層上面で確認した。239号土壙、ピット307と重複し、本遺構は239号土壙より新しく、ピット307より古い。遺構西側は未発掘である。底面はⅣ層より成り、平坦でやや軟弱である。壁はやや緩やかに立ち上がり、深さ24cmを測る。堆積土は7ブロックに区分でき、全体的に多量の炭化粒を含み人為堆積と考えられる。

土壙内より10数点の土器片を出土した。

構築時期は、縄文時代後期前葉～中葉と考えられる。

第237号土壙（第56図、78図166～174、80図13、82図7、31～34、PL21、25）

調査区南東部、万座環状列石際より広がる柱穴状ピット群が希薄になり始めるＺＷ－90グリッドに位置し、Ⅱd層上面において確認した。本土壙は238号フラスコ状土壙、256号土壙と重複し、本土壙との新旧関係は、256号土壙が古く、238号フラスコ状土壙が新しい。平面形は楕円形を呈し、径109×86cm、深さ56cm、底面積0.6㎡を測る。長軸方向はＮ－68°－Ｅである。堆積土は5ブロックに区分され、人為堆積である。Ⅴ層中位を底面とし、こまかな起伏がみられ堅くしまっていた。底面南西部に縁を巡らした施設がみられた。壁は底面から外傾して立ち

上がる。

土壙内より90点程の土器破片と石鏃1点、有孔石製品1点、円盤状土製品4点が出土した。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第239号土壙（第70図、73図12、78図175～183、PL15）

発掘区南東端のZW－89グリッドに位置し、Ⅱd層上面で確認した。236号土壙、ピット170と重複し、本遺構はいずれよりも古い。遺構西側は未発掘である。平面形は短軸176cmの楕円形を呈すると考えられ、深さ58cmを測る。底面はⅣ層より成り、小さな起伏がありやや軟弱で、南東側から北西側に傾斜している。壁は緩やかに立ち上がる。なお、確認面下34cmに多量のチップを含む炭化物層が確認された。規模は径14cm、厚さ約1cmを測る。堆積土は6ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

土壙内より復元土器1点（73図12）、約120点の土器片を出土した。12は無文の浅鉢形土器で、口径17.5cm、底径7.4cm、器高8.9cmを計る。色調は浅黄橙色を呈する。78図182は土壙下位、179は2層からの出土である。なお、土壙内より炭化したクルミ1個、クリ1個、ドングリ類1個、トチノキ2個が出土した（第Ⅵ章3参照）。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第241号土壙（第70図、79図184～192、80図30、81図45、82図6、8、35～37、PL23、26）

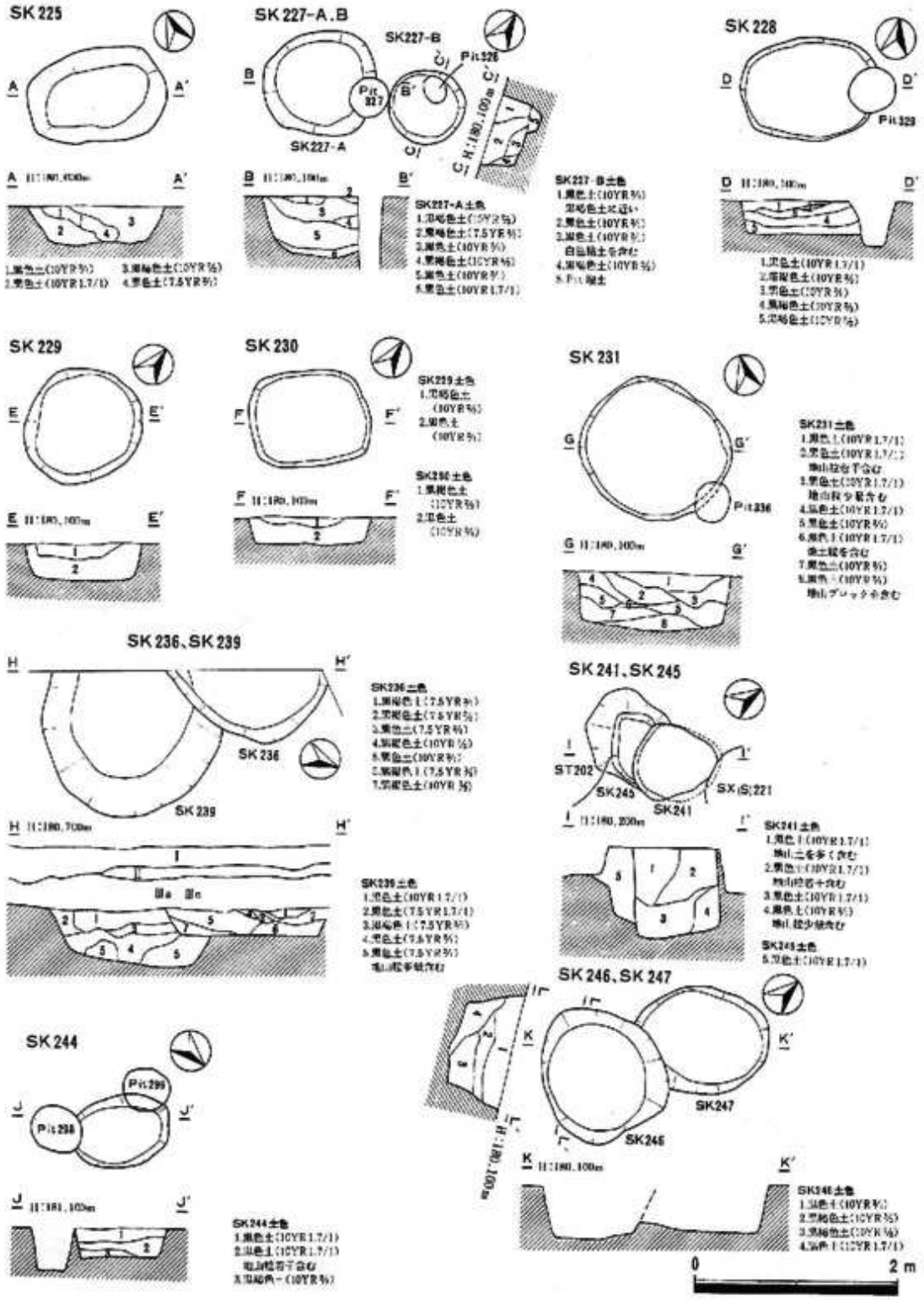
調査区南東側、万座環状列石際より広がる柱穴状ピット群が希薄になり始めるZX－91、92グリッドにまたがって位置する。Ⅱd層上面において221号配石遺構、245号土壙と重複して確認された。新旧関係は221号配石遺構より古く、245号土壙より新しい。平面形は円形を呈し、径76cm、深さ88cm、底面積0.45㎡を測る。堆積土は4ブロックに区分され、人為堆積である。Ⅴ層中位を底面とする。底面はゆるやかな起伏をもち、堅くしまっていた。壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がるが、部分的にフラスコ状を呈する所もある。

土壙内より90点程の土器破片と搔器1点、円盤状土製品3点、有孔石製品1点、円盤状石製品1点が出土した。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第244号土壙（第70図、79図193～196）

調査区南東側、方座環状列石際から広がる柱穴状ピット群が希薄となり始めるZZ－91グリッドに位置し、Ⅱd層上面においてピット298、299と重複して確認された。新旧関係はピット298より古く、ピット299とは不明である。平面形は楕円形を呈し、径94×71cm、深さ28cm、底面積0.37㎡を測る。長軸方向はN－52°－Wである。堆積土は3ブロックに区分され、人為堆積である。Ⅴ層上面を底面とする。底面はこまかな起伏をもち、堅くしまっていた。壁は底面よりやや外傾して立ち上がる。


SK 225
SK 227-A.B
SK227-B
SK227-A
Pit 326
Pit 327
SK 228
Pit 329
SK 229
SK 230
SK 231
SK 236、SK 239
SK 236
SK 239
SK 241、SK 245
ST202
SK245
SK241
SX(S)221
SK 244
Pit 299
Pit 298
SK 246、SK 247
SK247
SK246
0
2 m

第70図　土壙実測図(2)

土壙内より60余点の土器破片が出土した。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第245号土壙（第70図、79図197～199、82図38、39、ＰＬ25）

調査区南東側、万座環状列石際より広がる柱穴状ピット群がやや希薄となり始めるＺＸ－91、92グリッドにまたがり位置する。Ⅶd層上面において202号竪穴遺構、241号土壙と重複して確認された。新旧関係は本土壙が古い。平面形は円形を呈するものと考えられ、径80cm、深さ74cmを測る。堆積土は人為堆積である。241号土壙によりその大半を消失しているが、Ⅴ層上面を底面とし、底面は中央に向かってゆるやかに傾斜し、堅くしまっていた。壁はやや外傾して立ち上がるが、一部強く外傾する所もみられる。

土壙内より20点程の土器破片、円盤状土製品２点が出土した。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第246号土壙（第70図、73図14、15、79図200～218、80図31、32、ＰＬ15、23）

発掘区南東側のＺＸ－91、92グリッドに位置し、Ⅶd層上面で確認した。247号土壙と重複し、本遺構が新しいと考えられる。平面形は132×120cmの楕円形を呈し、深さ60cm、底面積0.78㎡を測る。長軸方向はＮ－77°－Ｗである。底面はⅤ層より成り、大きな起伏があり堅くしまっている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は４ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

土壙内より復元土器２点（73図14、15）、約240点の土器片、石器２点、円盤状土製品６点を出土した。14は無文の浅鉢形土器で、口径20cmを計る。15は鉢と考えられる土器の口頸部である。頂部には粘土紐を張り付けている。折り返し口縁上には平行沈線が巡り、頸部には沈線により楕円形文、曲線文が施文されている。色調はそれぞれにぶい橙色、にぶい褐色を呈する。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第247号土壙（第70図、79図219～228）

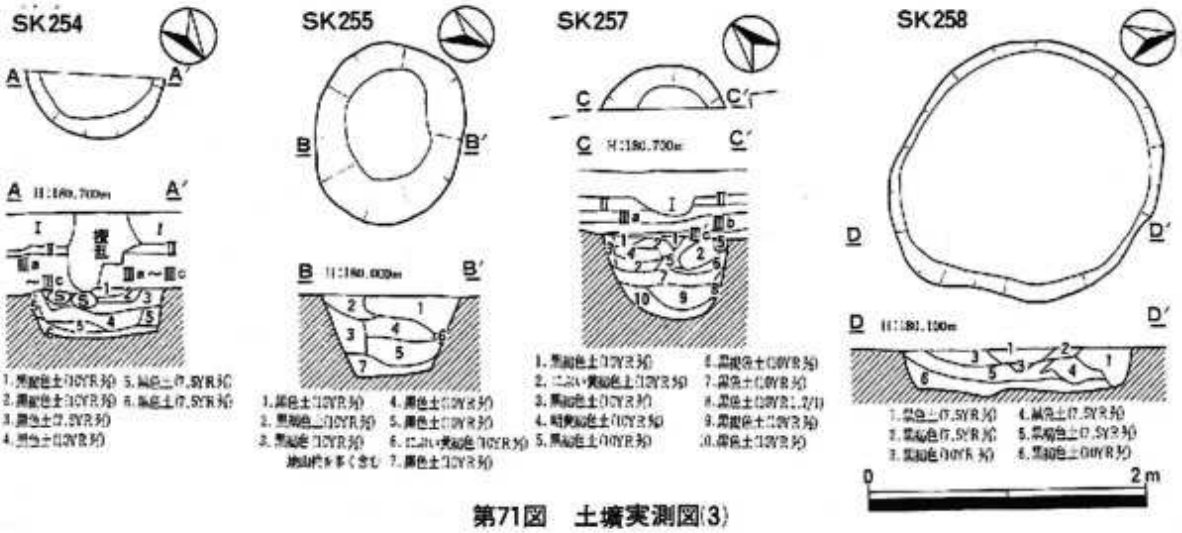
発掘区南東側のＺＸ－92グリッドに位置し、Ⅶd層上面で確認した。246号土壙、ピット169と重複し、本遺構は246号土壙より古いと考えられる。平面形は133×106cmの楕円形を呈し、深さ50cm、底面積0.78㎡を測る。長軸方向はＮ－45°－Ｅである。底面はⅤ層より成り、小さな起伏があり堅くしまっている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は人為堆積を呈すると考えられる。

土壙内より200点弱の土器片を出土した。また黒色樹脂塊を出土した（第Ⅵ章２参照）。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第249号土壙（第56図、74図18）

発掘区南東側のＺＸ、ＺＹ－92グリッドに位置する。確認面はⅣ層下面であるが、これは地山がマウンド状となっている為で、近傍の土壙の確認面とほぼ同一レベルである。250、251



第71図　土壙実測図(3)

号フラスコ状土壙、252号土壙、ピット314、315と重複し、本遺構はいずれの土壙よりも新しい。遺構南東側は未発掘である。平面形は推定径184cmの楕円形を呈すると考えられ、深さ66cmを測る。長軸方向はN－62°－Wである。底面は南東側から北西側に傾斜しており、起伏がある。堆積土は7ブロックに区分でき、人為堆積を呈すると考えられる。

74図18は3層より横転状態で出土した深鉢形土器で、原体Rの網目状撚糸文が口縁部直下より胴部以まで施文されている。推定口径26.0cm、底径11.4cm、器高35.5cmを計り、色調はにぶい橙色を呈する。

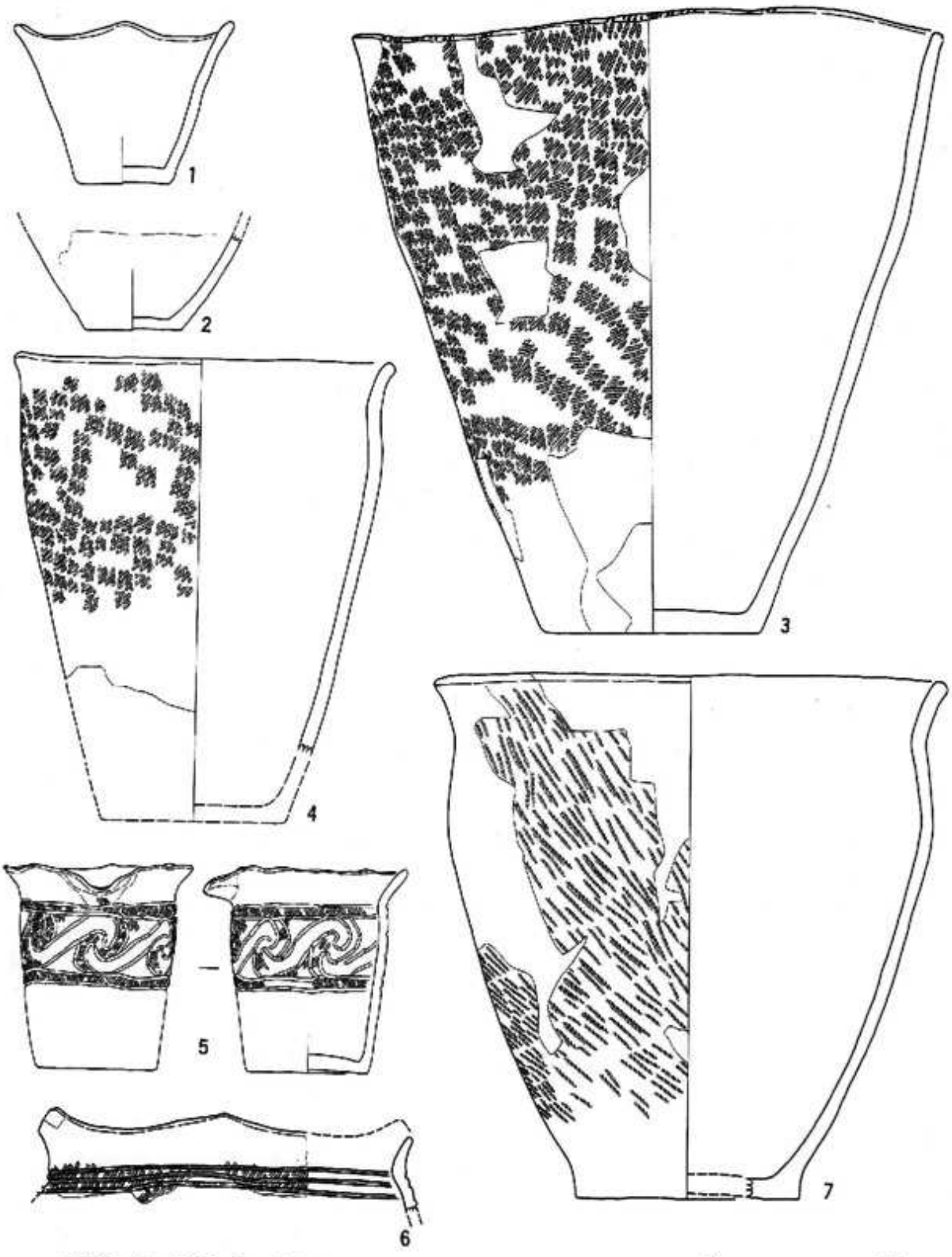
構築時期は、縄文時代後期前葉である。

第252号土壙（第56図、73図16、17）

発掘区南東側のＺＹ－92グリッドに位置する。確認面はⅣ層下面であるが、これは地山がマウンド状となっている為で、近傍の土壙の確認面とほぼ同一レベルである。250、251号フラスコ状土壙、249号土壙、ピット283、284と重複し、本遺構は250、251号フラスコ状土壙より新しく、249号土壙、ピット283より古い。遺構北東側は未発掘である。平面形は楕円形を呈すると考えられ、深さ48cmを測る。底面はほぼ平坦である。堆積土は5ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

73図16、17は土壙内より出土した深鉢形土器で、16は6個の頂部を有する波状口縁で、2条の平行沈線により区画された胴上半部に文様帯をもつ。文様帯は頂部間で6区画され、区画内には磨消縄文技法を用いて入組状曲線文が施文され、刺突が施される。地文はＲＬ縄文である。17は6個の頂部を有する波状口縁の無文土器で、口径19.3cm、底径7.9cm、器高24.9cmを計る。色調は共に灰褐色を呈する。

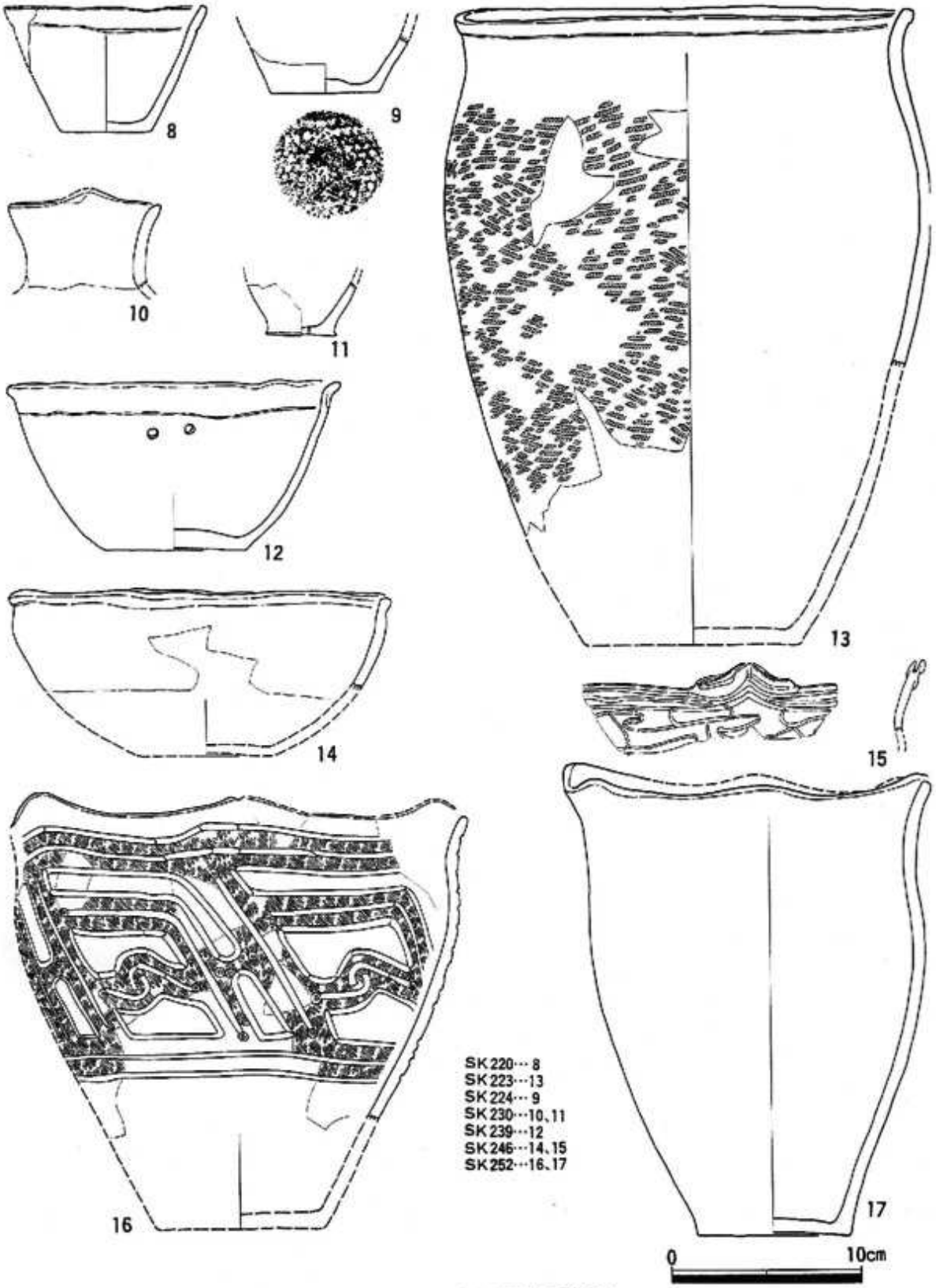
構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。



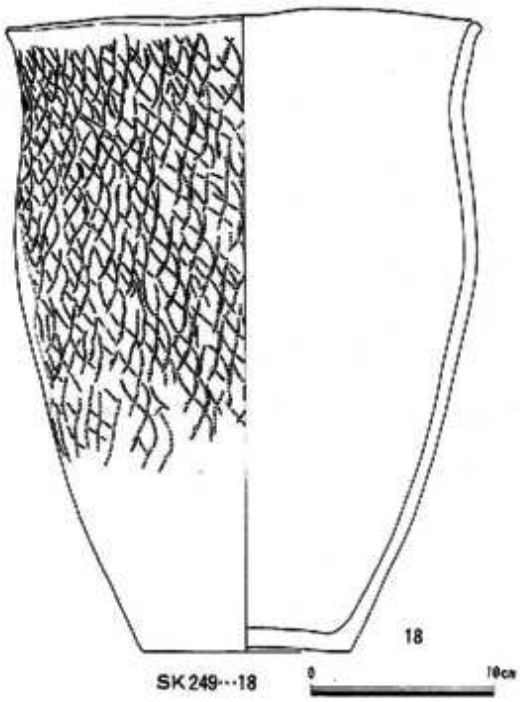
SK201…1、3　SK203…7　SK218…2
SK219…4　SK220…5、6

0　10cm

第72図　土壙出土土器実測図(1)



第73図　土壙出土土器実測図(2)



第74図　土壙出土土器実測図(3)

第254号土壙（第71図、79図229～231）

発掘区南東側のＺＹ－91グリッドに位置し、Ⅱd層上面で確認した。遺構南西側は未発掘である。平面形は径98cmの円形を呈すると考えられ、深さ36cmを測る。底面はⅤ層より成り、堅くしまっている。堆積土は６ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

土壙内より10数点の土器片を出土した。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第255号土壙（第71図）

発掘区南東側のＺＶ、ＺＷ－92グリッドに位置し、Ⅱd層上面で確認した。平面形は128×105cmの楕円形を呈し、深さ58cm、底面積0.38㎡を測る。長軸方向はＮ－86°－Ｅである。底面はⅤ層より成り、堅くしまり、北側から南側へ若干傾斜している。壁は直線的である。堆積土は７ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

遺物は出土しなかったが、確認面及び周辺の出土遺物より、構築時期は縄文時代後期と考えられる。

第256号土壙（第56図、79図232～238）

発掘区南東側のＺＸ－90グリッドに位置し、Ⅱd層上面で確認した。238号フラスコ状土壙、237号土壙と重複し、本遺構はいずれよりも古い。平面形は178×152cmの楕円形を呈し、深さ36cm、底面積1.58㎡を測る。長軸方向はＮ－68°－Ｗである。底面はⅤ層より成り、ほぼ平坦である。堆積土は７ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

土壙内より60数点の土器片を出土した。

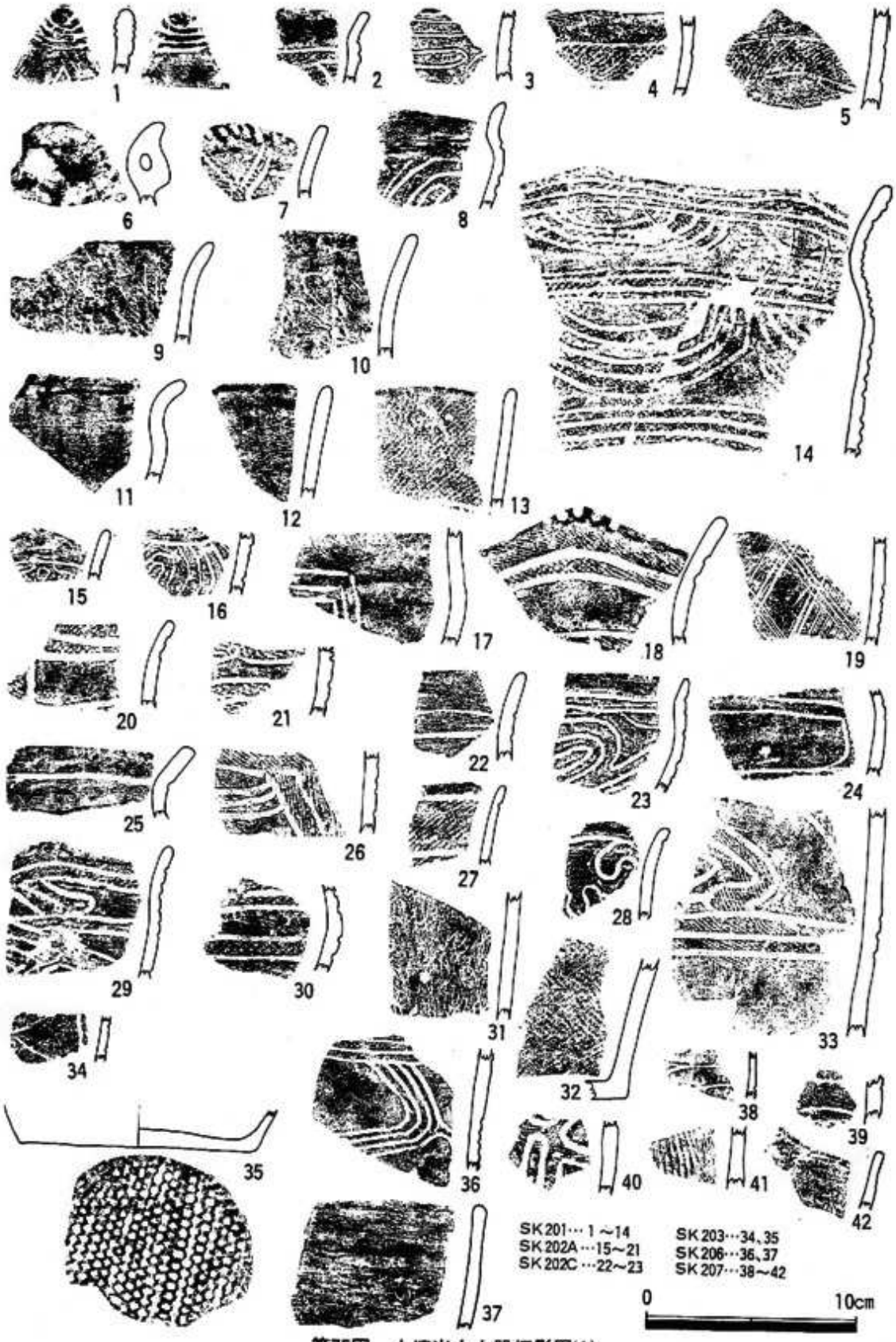
構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

第257号土壙（第71図、79図239、240）

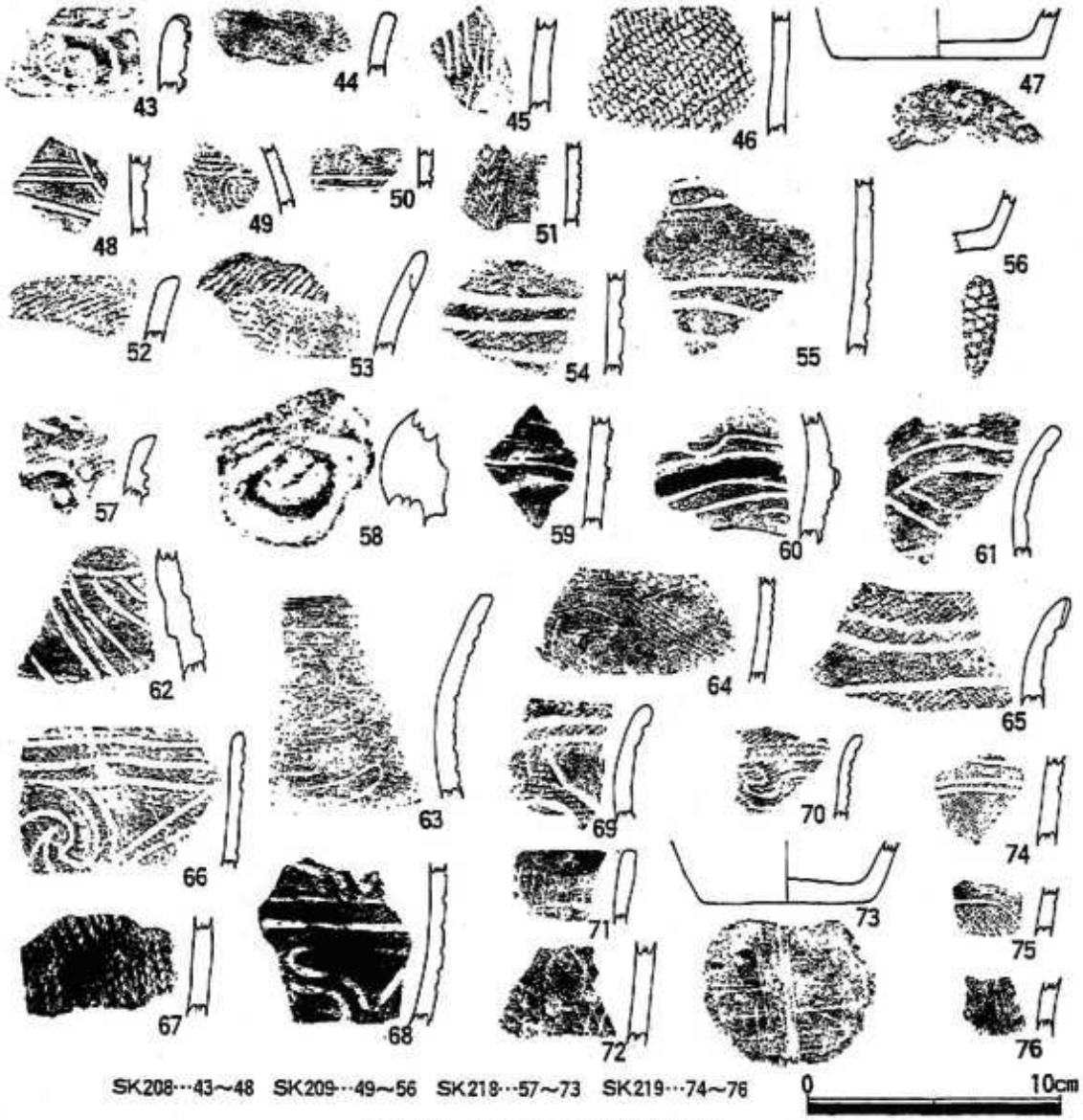
発掘区南東側のＺＸ－90グリッドに位置し、Ⅱd層上面で確認した。遺構南西側は未発掘であり、遺構の一部を確認したのみである。底面はⅤ層より成り、鍋底状を呈し、深さ59cmを測る。堆積土は10ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

土壙内より10数点の土器片の他、円盤状土製品１点を出土した。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。



第75図　土壙出土土器拓影図(1)



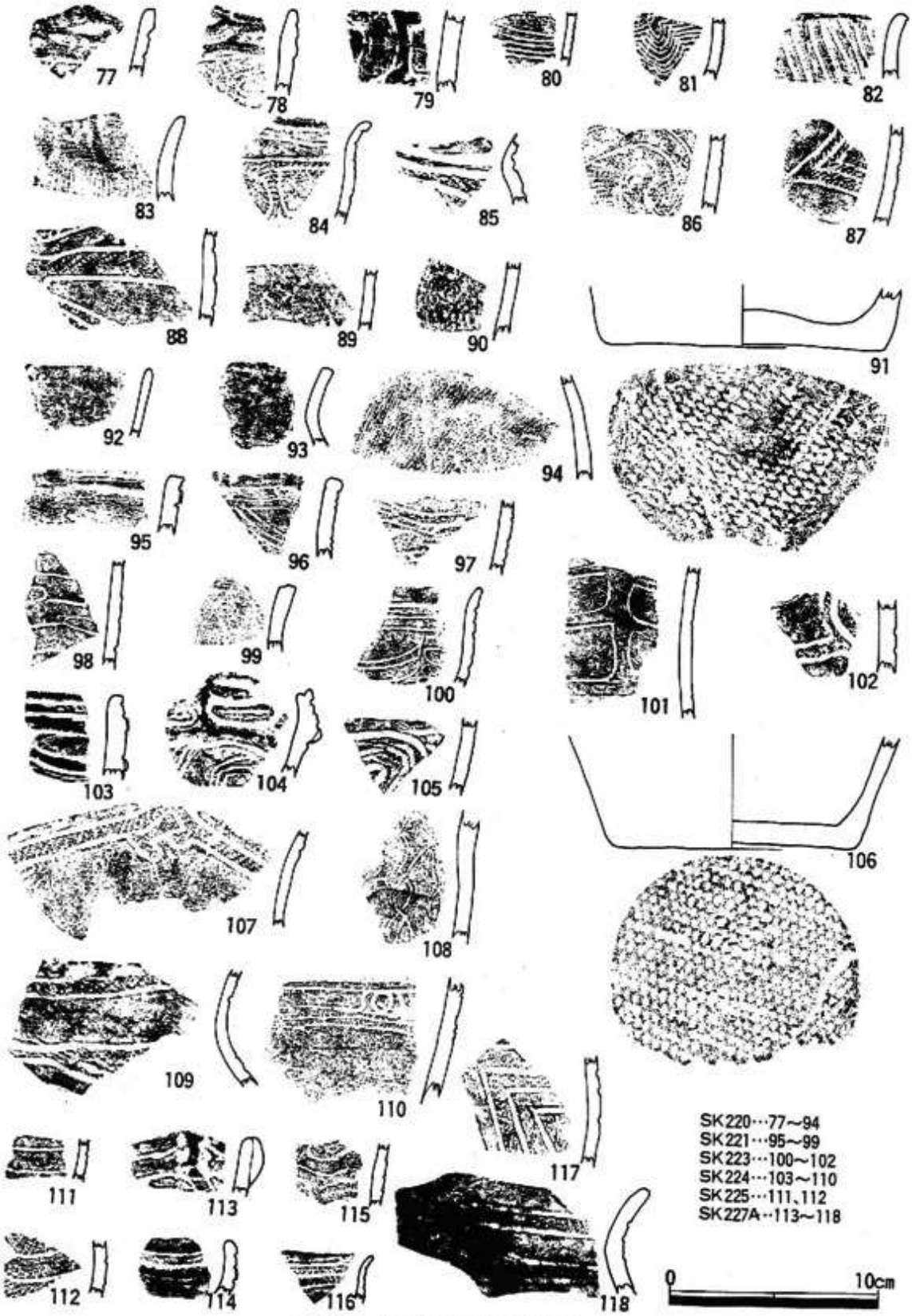
第76図　土壙出土土器拓影図(2)

第258号土壙（第71図、79図241～245）

発掘区南東端のZV－89グリッドに位置し、Ⅲd層上面で確認した。ピット83、112、113、245～248と重複し、本遺構はピット113、248より新しく、その他のピットより新しいと考えられる。平面形は260×181cmの楕円形を呈し、深さ31cm、底面積2.29㎡を測る。長軸方向はN－22°－Wである。底面はⅤ層より成り、大きな起伏がある。堆積土は6ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。

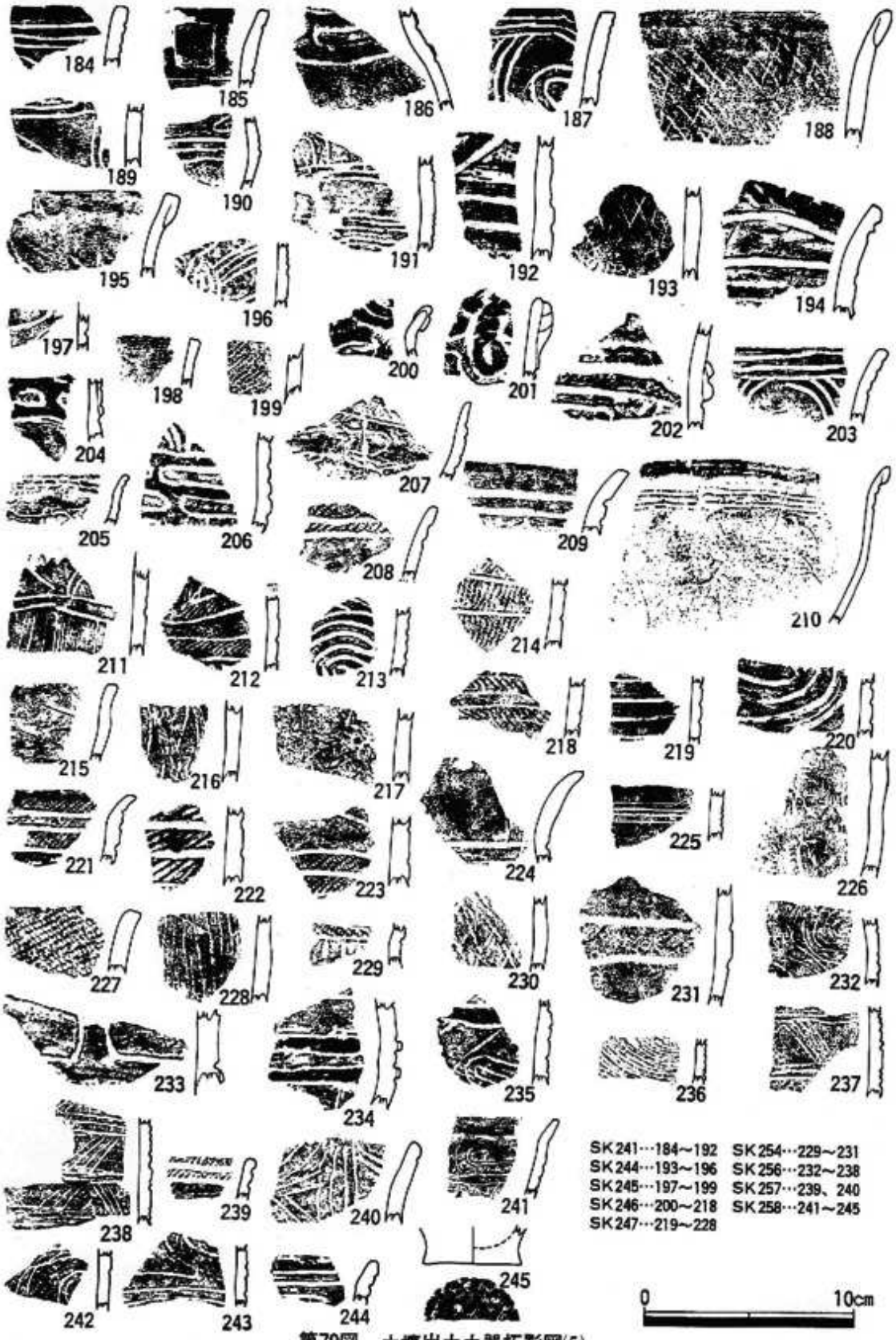
土壙内より10数点の土器片を出土した。また、炭化したクリが331点出土した（第Ⅵ章3参照）。

構築時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。　（藤井安正、佐藤　衞、藤井富久子）

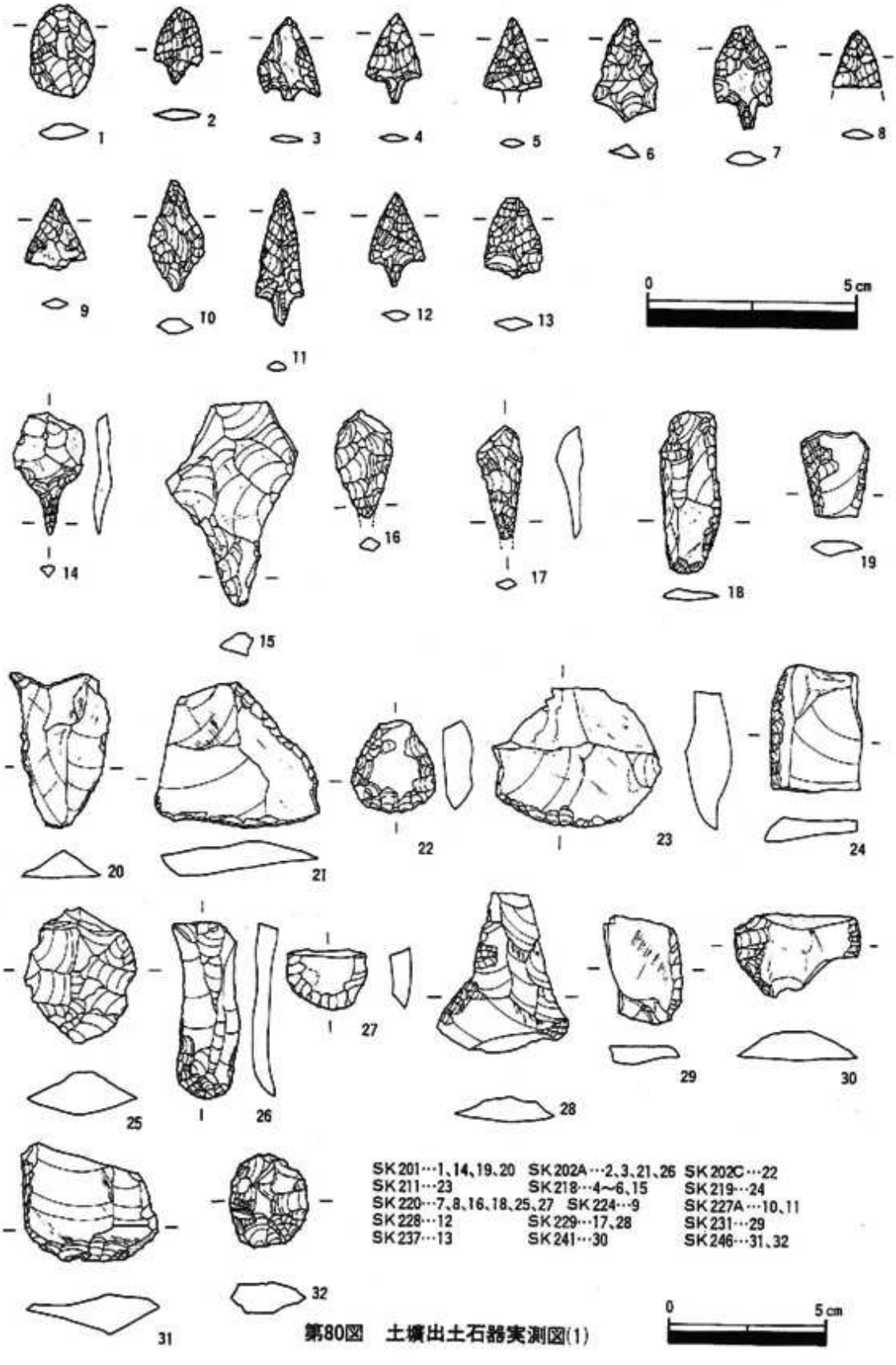


第77図　土壙出土土器拓影図(3)

第78図　土壙出土土器拓影図(4)

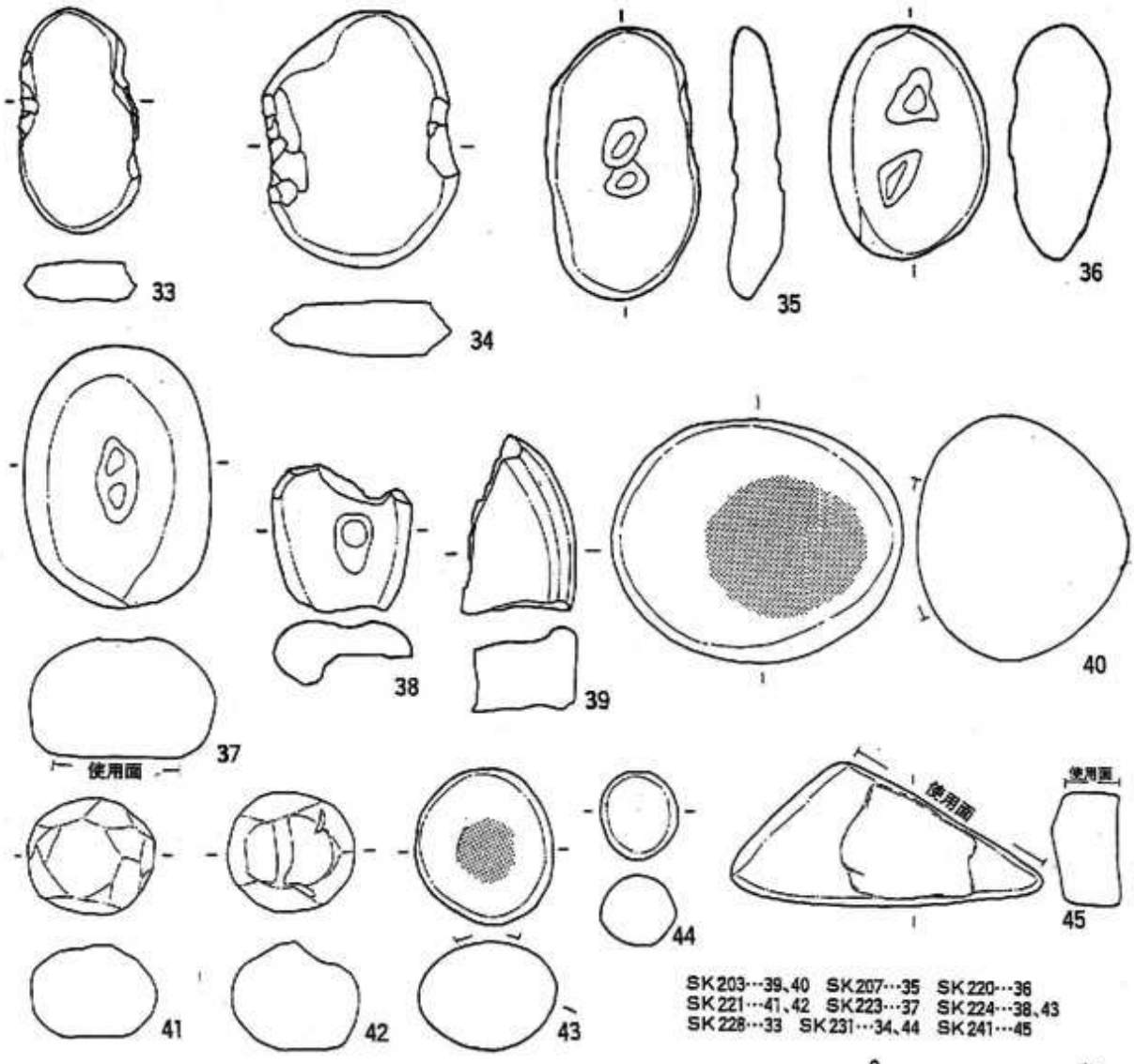


第79図　土壙出土土器拓影図(5)



SK201…1、14、19、20　SK202A…2、3、21、26　SK202C…22
SK211…23　SK218…4～6、15　SK219…24
SK220…7、8、16、18、25、27　SK224…9　SK227A…10、11
SK228…12　SK229…17、28　SK231…29
SK237…13　SK241…30　SK246…31、32

第80図　土壙出土石器実測図(1)



第81図　土壙出土石器実測図(2)

9．埋設土器遺構

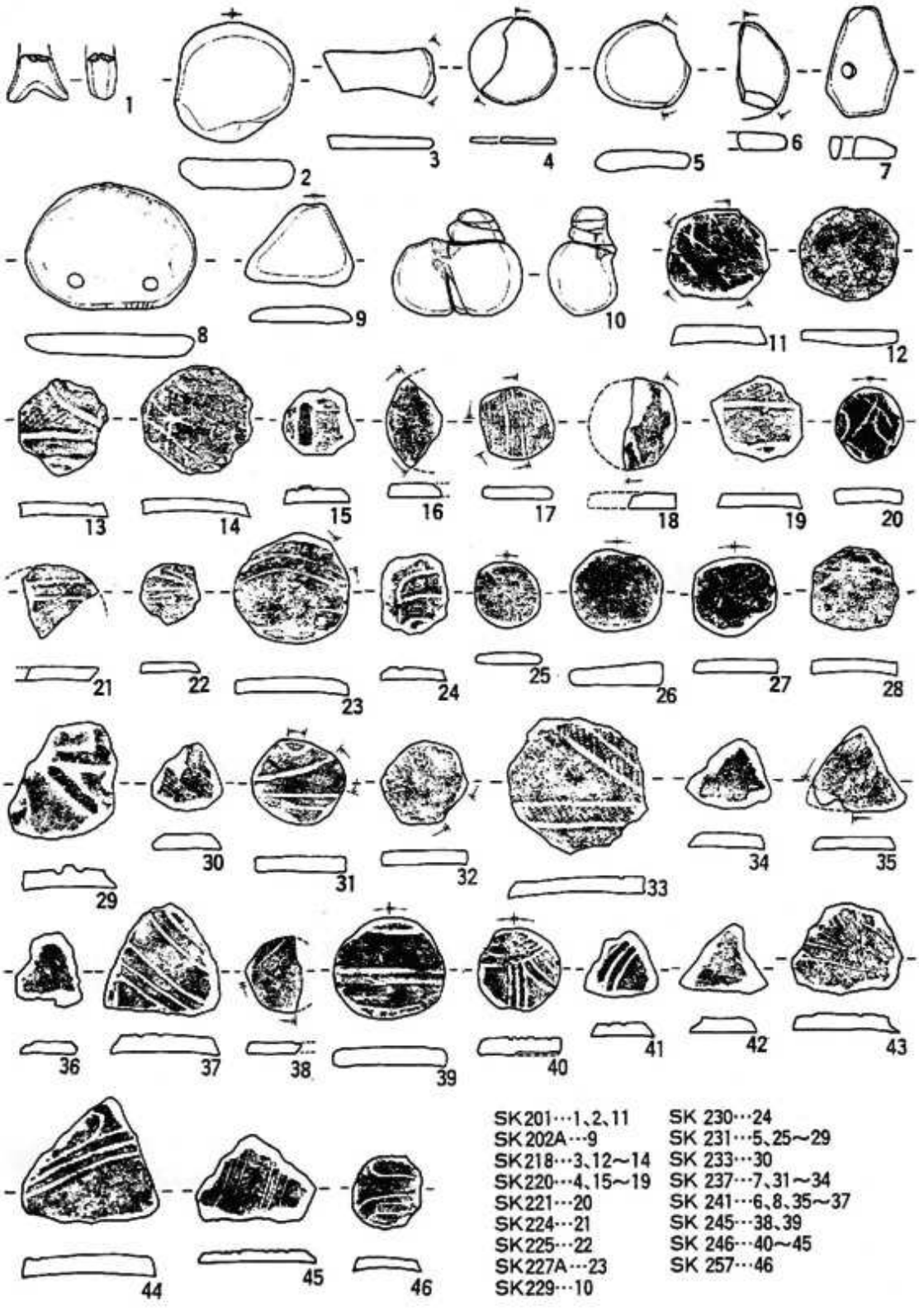
第201号埋設土器遺構（第83図、84図1、PL10、15）

調査区北西端、YL－90グリッドに位置し、Ⅲb層下位において確認した。土器は径34×32cm、深さ31cmの掘り方に正立に埋設されていた。土器は4つの頂部をもつ波状口縁の深鉢形土器で、口縁部に擦り消し沈線文による長方形文、胴部上端から下半にR縄文の網目状撚糸文が施文されている。器高39.2cm、口径24.4cmを計る。焼成は良好、色調はにぶい褐色を呈する。

時期は、縄文時代後期前葉と考えられる。

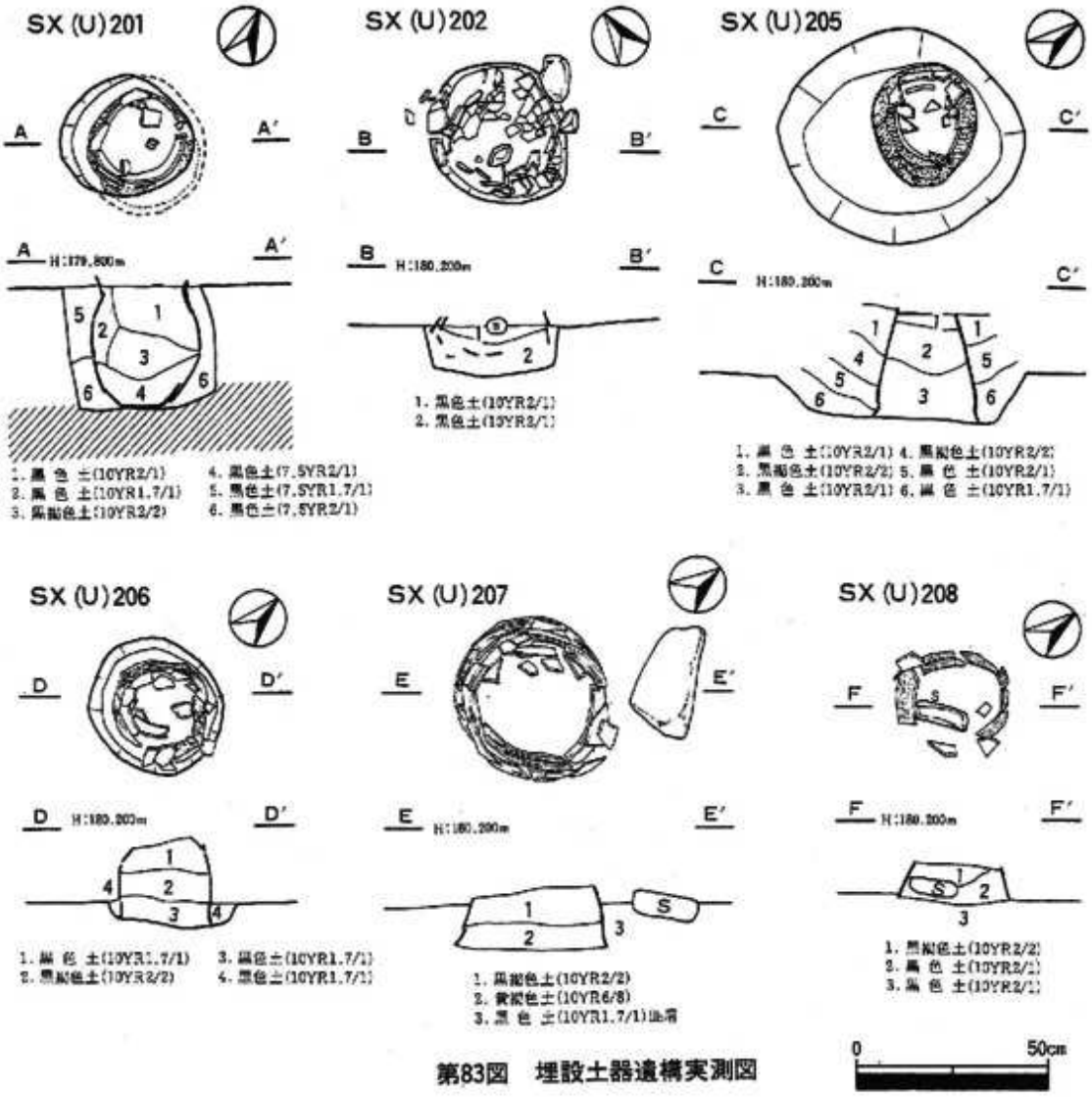
第202号埋設土器遺構（第83図、84図2、3、PL10、15）

調査区北西側、YJ－93グリッド、Ⅲb層上位において確認した。土器は径40×36cm、深さ13



SK201…1、2、11
SK202A…9
SK218…3、12～14
SK220…4、15～19
SK221…20
SK224…21
SK225…22
SK227A…23
SK229…10
SK 230…24
SK 231…5、25～29
SK 233…30
SK 237…7、31～34
SK 241…6、8、35～37
SK 245…38、39
SK 246…40～45
SK 257…46

第82図　土壙出土土製品・石製品実測図　0　10cm



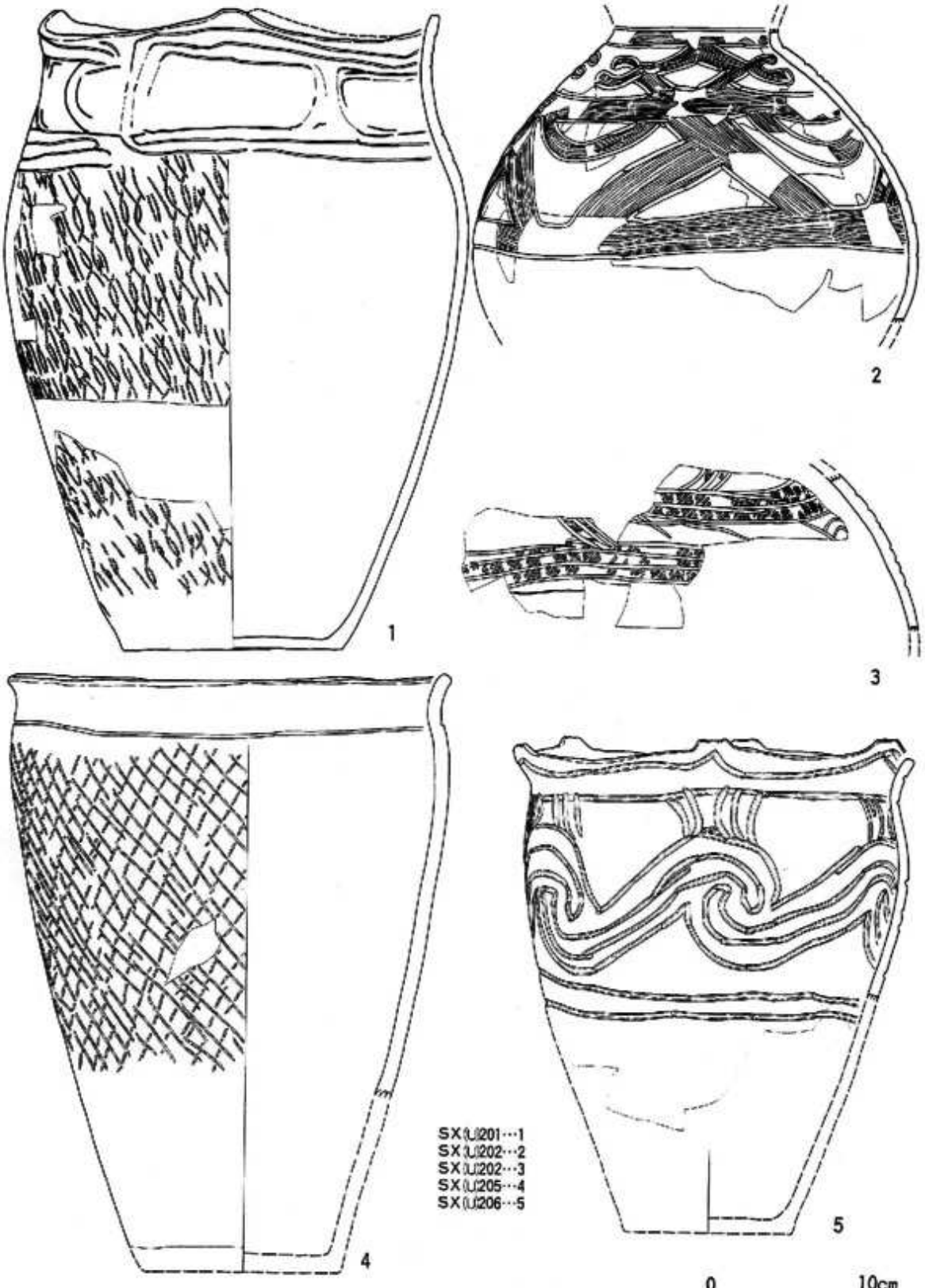
第83図　埋設土器遺構実測図

cmの掘り方内に、口縁部と胴部下半を欠く２つの壺形土器を埋設するもので、84図２を倒立させ、これを被うように84図３を正立に置いた状態で確認された。２は櫛目状沈線文で二段の文様帯を区画するもので、上段に花弁状文、下段には横位連続三角形文、弧状文が施文されているものである。色調は灰黄褐色を呈する。３は帯状文による入組状曲線文が施文され、沈線間にはＬＲ縄文が充填される。色調は浅黄橙色を呈する。

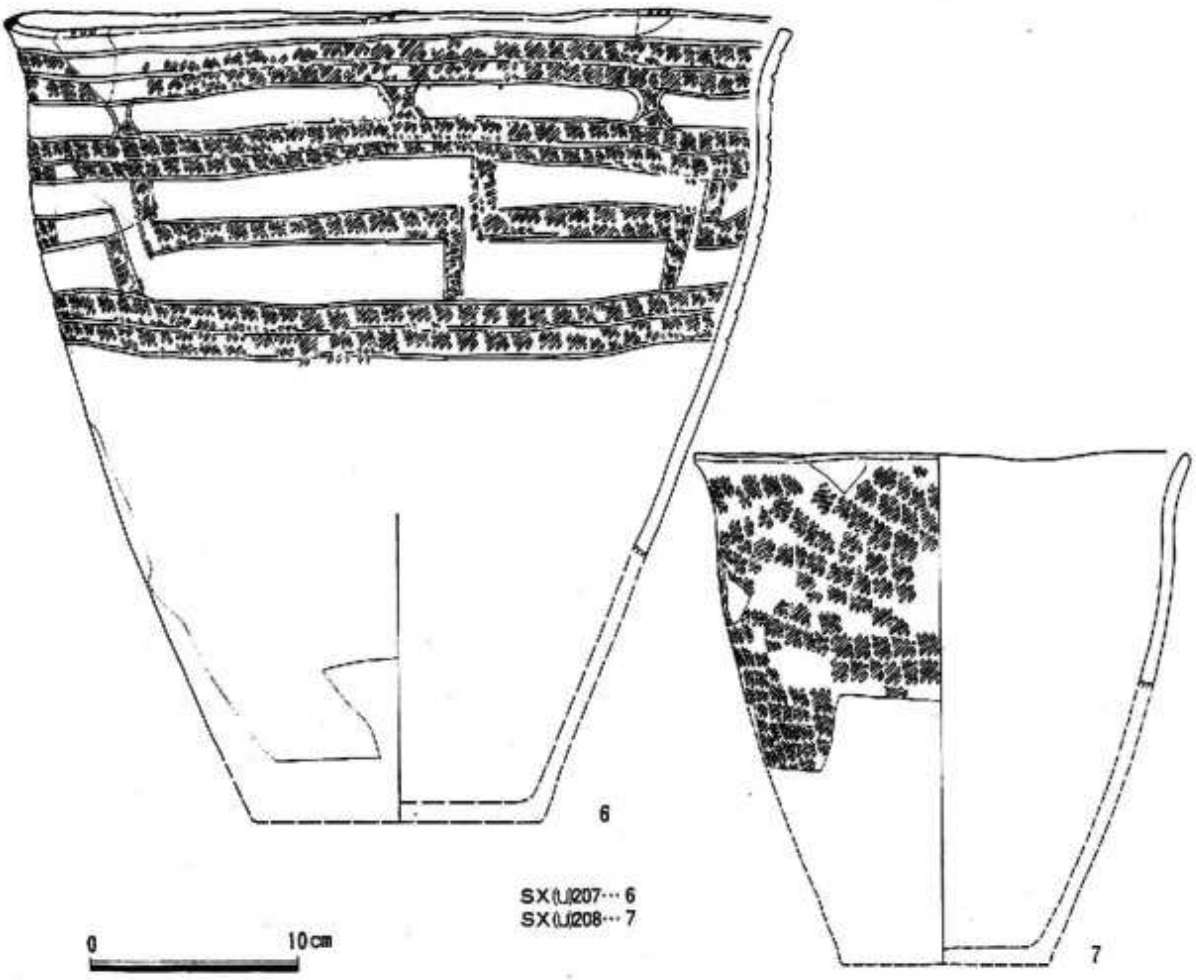
時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第205号埋設土器遺構（第83図、84図４、ＰＬ11、15）

調査区南東側、万座環状列石際より広がる柱穴状ピット群が希薄となるＺＺ－92グリッドに



第84図　埋設土器実測図(1)



第85図　埋設土器実測図(2)

位置し、Bd層上面において確認された。土器は径63×56cm、深さ10cmの掘り方内に倒立状態で埋設されていた。土器は平口縁の深鉢形土器である。頸部に沈線文を巡らし文様帯を区画する。口縁部は無文化され、胴部にはL縄文の網目状撚糸文が施文されている。口径27.1cm、焼成は良好、色調はにぶい褐色を呈する。

時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第206号埋設土器遺構（第83図、84図5、PL11、15）

調査区南東側、万座環状列石際より広がる柱穴状ピット群が希薄になったZZ—91グリッドに位置し、Bd層上面において確認された。土器は径36cm、深さ5cmの掘り方内に倒立に埋設されていた。土器は6つの頂部をもつ波状口縁の深鉢形土器である。口縁部と胴部上半に平行沈線文を施し文様帯を区画しており文様帯には沈線により入組状曲線文が施文されている。口径24.3cm、焼成はやや不良、色調はにぶい黄橙色を呈する。

時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第207号埋設土器遺構（第83図、85図6、PL11、15）

調査区南東側、万座環状列石際より広がる柱穴状ピット群が希薄となるZZ－91グリッドに位置する。Ⅲd層上面においてピット324と重複し、本遺構が新しい。土器は倒立して検出された。平口縁の深鉢形土器で、口唇部8ヵ所に3条の棒状工具横位押圧文が施されている。文様帯は口縁部、胴部上半に区画され、文様帯には口唇部の押圧文を支点とし、口縁部には長方形文、胴部には階段状文が施文されている。沈線間にはLR縄文が充填される。口径38.1cm、焼成は良好、色調は灰黄褐色を呈する。

時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第208号埋設土器遺構（第83図、85図7、PL15）

調査区南東側、万座環状列石際より広がる柱穴状ピット群が密集するZV－92グリッドに位置し、Ⅲd層上面において倒立した状態で確認した。土器は平口縁の深鉢形土器で、口縁部直下よりLR縄文が施文されている。口径24cm、色調はにぶい褐色を呈する。

時期は縄文時代後期と考えられる。　（藤井安正）

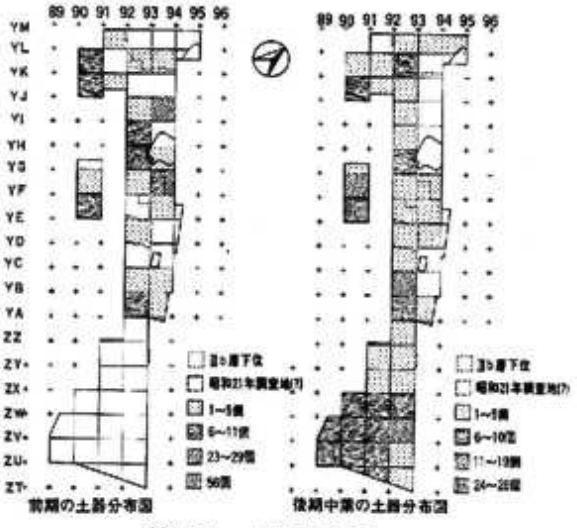
10．遺構外出土遺物

（1）土　器（第86～95図）

D区遺構外からは77点の復元土器とダンボール箱33箱の土器片の出土があった。これらの土器は、縄文時代早期、前期、後期に位置づけられるもので、その大半は後期前葉のものである。

歴史時代の遺構構築による遺物包含層の消失や、上部遺構保存のため同一層まで調査が及んでいない部分があり、単純に比較できないが、概ね、早、前期の土器は発掘区中央部から北西側に偏在し、後期前葉の土器は全域に分布するが、北西部の分布密度が高い。これに対し、後期中葉の土器は、やはりほぼ全域に分布するが、南東部及び中央部の密度が高い。

これらの土器は層位的には、明らかに撹乱と考えられるⅠ～Ⅱ層出土の土器を除くとⅢa～Ⅳ層からの出土であり、全体としてはⅢa～Ⅲb層の出土が多い。縄文時代の文化層が薄いこと、遺構構築時に下層の土器が掘り出され、混在している地点があることなどから、出土土器と層序との関係は明確にできなかった。ただ、早期の土器がⅢd層下位、前期の土器がⅢb～Ⅲd層、後期の土器がⅢa～Ⅲb層からの出土が多いという傾向はつかむことができる。



付図1　土器分布図

第Ⅰ群　早期の土器（第86図）

早期の土器は、ＹＫ－90グリッド、Ⅲd層下位より１点（第86図１）出土した。貝殻沈線文系の土器の尖底部と考えられる。胎土には小礫、石英を多量混入、焼成はやや不良、色調はにぶい橙色を呈する。なお、貝殻沈線文系の土器は、昭和50年の分布調査において、本発掘区近傍より２点出土している。

第Ⅱ群　前期の土器（第92図）

本群には、前期末の円筒下層ｄ式の土器を一括した。口頸部文様帯の幅及び文様により細分した。

１類　幅の狭い口頸部に絡条体圧痕による平行文を有するもの（10、18、19、27）

口頸部の文様帯の幅は1.5～2.2㎝と狭い。３～４段に絡条体圧痕文（原体Ｒ）を施文、その直下には綾絡文を有する。胴部には横位方向の羽状縄文が施文されている。18の口頸部には絡条体圧痕懸垂文もみられる。いずれも平口縁である。焼成はやや不良、色調は灰黄褐色、にぶい黄褐色を呈する。

２類　幅の広い口頸部に撚糸、絡条体圧痕による平行文を有するもの（１～９、11、12、15、16、20、22～26、28）（12、23は同一個体、２、５、６、９、24は同一個体、15、28は同一個体）

口頸部文様帯の幅は2.5～4.0㎝で、４～７段に撚糸あるいは絡条体圧痕文が施文される。口頸部下に微隆起帯を有するものが多く、その帯上に斜位竹管文、刺突文、撚糸圧痕文を有する。22～26は、いずれも波状口縁の土器で、その頂部から懸垂文が垂下している。懸垂文は隆起線（22、23、25）によるものと、絡条体圧痕によるものがあり、前者口頸部には撚糸圧痕（原体Ｒ、ＬＲ）、後者には絡条体圧痕（原体Ｒ）平行文が施文されている。また本類土器の口唇部には、撚糸、絡条体圧痕文を刻み目状に施文しているものが多い。胴部文様には、木目状撚糸文、単節斜縄文、縦位の羽状縄文等が施文されている。

本類の土器の焼成はやや不良で、色調はにぶい黄橙色、灰黄褐色、浅黄橙色等を呈する。

３類　口頸部に斜方向の絡条体圧痕文を有するもの（13、14、17、21）

４点は同一個体で、波状口縁下には２段の撚糸圧痕文（原体ＲＬ）、口唇部にはＲＬ縄文が施文されている。微隆起帯までの口頸部には、上端に２段、下端に１段の絡条体圧痕文（原体Ｒ）を施文、その間に７～８段で傾斜を逆とする斜方向の絡条体圧痕文（原体Ｒ）を有する。なお微隆起帯上には斜方向の竹管文を有する。胴部には羽状縄文（原体ＬＲ＋ＲＬ）が施文されている。焼成はやや不良、色調は灰褐色を呈する。

本群１類は円筒下層d_1式、２、３類は同d_2式と考えられる。

第Ⅲ群　後期初頭～前葉の土器（第86～91、93図）

本群は縄文時代後期初頭から前葉に位置づけられる土器で、東北地方北部の前十腰内、十腰

内Ⅰ式、南部の南境式に比定できる。施文技法、主要文様により次のように細分した。

1類　隆線文、隆沈文の土器（第86図14、93図35、39、40）

35は深鉢胴部片で、縦、横方向の隆線文が施文されている。焼成は良く、浅黄橙色を呈する。

14、39、40は隆沈文を有する土器類で、14は壺、39、40は深鉢あるいは壺と考えられる。14には円文、楕円形文、39、40には渦巻文が施文されている。いずれも焼成は良く、にぶい黄橙色、褐灰色を呈する。ＹＭ－91グリッド、Ⅲb～Ⅲc層の出土である。

2類　地文上に沈線文が施文された土器（第88図22、24、28、90図42、43、93図56）

22は小型の鉢あるいは深鉢の底部で、Ｌ斜縄文上に3条の横位方向の沈線文がみられる。24は台付土器台部で、ＬＲ縄文上に3条の沈線による曲線文が施文されている。

28は波状口縁の鉢形土器で、口縁部は外反する。口縁部と胴部中央の平行沈線により区画された文様帯には花弁文と階段状文が交互に施文されている。地文はＬＲ斜縄文、焼成はやや良好で、色調は浅黄橙色を呈する。42は台付土器で、成形後足部以外を切り取って4個の足部を作り出している。器外面には平行沈線文、長方形文が施文されている。地文はＬＲ縄文、焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。

56は深鉢胴部片で、ＬＲの地文上に沈線により、縦位楕円連結文とその間を結ぶ平行線文が施文されている。焼成は比較的良く、色調はにぶい黄橙色を呈する。ＹＨ－92グリッド、Ⅲa層中位の出土である。

3類　沈線文を主体とする土器（第86図2～13、15、87図17～21、90図40、41、91図61、93図36～38、41～50、60、62～66）

本類には無文地に沈線文が施文された土器を一括した。口縁部文様や文様帯区画に隆沈文が使用されているものや、格子目状沈線文等も本類とした。文様により次のように細分した。

a．縦位連結文等で器面を区画する土器類（86図2、5、9、12、93図42、44、47、48、50）

懸垂文（2）、「S」字連結文（9）、縦位楕円連結文（42、50）などを等間隔に配置、その間を2～3条の弧状、直線状あるいは曲線状の平行沈線で連結している土器類である。本類には深鉢、鉢、壺、台付鉢等があり、いずれも文様帯の幅が広く底部付近まで及ぶ。なお、42、50の平行沈線間には刺突文が伴う。焼成は良く、色調は灰褐色、にぶい橙色、黒褐色等を呈する。

b．曲線文、直線文が無方向に展開する土器類（86図3、4、6～8、13、15、87図17）

口縁部には平行沈線文や円文をはさんだ長方形文（4、8）が施文される。また口唇部や口縁部に貼り付け文を有するもの（6、7、13）もある。胴部文様帯は広く底部付近にまで及び、1～2条の沈線文を無方向に展開させている。15は壺の胴～底部片で、無方向に展開する平行沈線による曲線文内に沈線が充填されている。本類には浅鉢、鉢、深鉢、壺等があるが、いずれも焼成は良く、色調はにぶい橙色、にぶい黄橙色、橙色等を呈する。

c．曲線文や幾何学文が横位方向に展開する土器類（86図10、11、87図18～20）

入組状曲線文、波状曲線文等が横位方向に展開する土器類で、これらの文様は壺においては胴部上半、深鉢、鉢においては口縁部から胴部上半に限定される。曲線文は２～３条の平行沈線文により構成されている。19は深鉢で、口縁部には円文をはさんだ長方形文、胴部上半には２段の入組状文を主体とする文様が施文されている。

本類の土器には深鉢、鉢、壺等があり、いずれも焼成は良い。また色調はにぶい黄橙色、にぶい橙色、明赤褐色等を呈する。

d．格子目状沈線文の土器（87図21）

21は平口縁の鉢形土器で、口径22.8cm、器高20.4cmを計る。口縁部に無文部を有し、格子目状沈線文は口頸部から胴部下半まで施文される。また底面には網代痕を有する。焼成は良く、色調は明褐灰色を呈する。器表面には煤を付着している。ＹＬ～ＹＫ－90、Ⅲb～Ⅲd層からの出土である。

e．沈線文系の土器（90図40、41、91図61、93図60、62～66）

小破片のために文様構成がつかめないが、器形、文様の特異なものを一括した。

40はミニチュアの鉢あるいは深鉢の底部で、底面に変形楕円文が施文されている。41は壺形の切断土器で底径4.6cmを計る。胴下部に３条の平行沈線文を有する。61は台付土器台部で、長方形の透しを有する。60は壺底部片で、内面に花文が施文されている。62、63は片口土器の片口部、64は鉢の底部、65、66は蓋と考えられる。

４類　磨消縄文を主体とする土器（第88図23、25～27、29～34、89図35～39、90図45、46、93図51～55、57～59、61）

a．縦位方向の文様を有する土器（35）

35は２つの橋状把手を有する深鉢形土器で、波状口縁頂部には５条の刻み目状沈線文を有する。口縁部は無文で、胴部文様帯は３条の沈線文により上下に２分され、その間に円文が施文されている。帯状文様内にはＬＲ斜縄文が充填されている。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。ＹＤ－93グリッド、Ⅲb層下位の出土である。

b．無方向の曲線文を有する土器（25）

25は平口縁の鉢形土器で、口縁部に花弁状文、体部全面に無方向の曲線文、直線文が施文されている。これらの文様は平行沈線で施文され、体部文様内にはＬＲ縄文が充填されている。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。ＹＬ－90グリッド、Ⅲb層下位の出土である。

c．幾何学文、曲線文が横位方向に展開する土器（29、30、32、34、36～38）

本類には幾何学文、曲線文が横位方向に展開する土器類を一括した。これらの文様は２～３条の沈線により区画された胴部上半に限定される。階段状文のもの（29、36～38）、波状曲線

文のもの（30、34）、長方形文のもの（32）等がある。これらの文様は2～3条の沈線により施文され、LR、RL縄文が充填されている。本類には深鉢、鉢、壺等があり、深鉢、鉢の口縁部は外反し、波状口縁頂部に3～8条の刻み目状沈線文を有するものもある。焼成は良好なものが多く、色調はにぶい黄橙色、浅黄橙色、にぶい橙色を呈する。

d．入組状曲線文が横位方向に展開する土器（26、31、33、39、45、46）

本類には横位方向に展開する入組状曲線文を特徴とする土器類を一括した。これらの文様は胴部上半に限定される。入組文が完成していないもの（31）、2段の入組状曲線文を施文しているもの（33）、刺突文を伴うもの（39）、空間部分に幾何学文を補充するもの（45）、磨消部分が反転しているもの（46）等がある。これらの文様は幅の狭い2～3条の沈線により施文され、LR、RL、L縄文が充填されている。深鉢は口縁部が外反し、波状口縁頂部に3～8条の刻み目状沈線を有するものもある。壺は平口縁で、口縁部は無文となる。本類には深鉢、壺の他に鉢もあり、焼成はいずれも良好で、色調はにぶい黄橙色、にぶい橙色、にぶい褐色等を呈する。

第Ⅳ群　後期中葉の土器（第86、94、95図）

本群は縄文時代後期中葉の土器であり、東北地方北部の十腰内Ⅱ・Ⅲ式、南部の宝ヶ峯式に比定できる。全体の器形や文様を考察できるほど復元できた資料もないため、主に施文技法により細分した。

1類　磨消縄文に刺突が伴う土器（94図78～91、95図92～97）

曲線的な磨消縄文を構成する沈線に沿って、連続刺突文が付加されている土器類で、刺突は磨消縄文側に施文される。刺突には竹管あるいは棒状工具が用いられ、刺突の方向は器面に垂直なものと沈線文方向へ傾斜するものとがある。地文にはLRの細縄文が多用されている。焼成は非常に良く、色調はにぶい黄橙色、灰褐色、灰黄褐色等を呈する。

2類　口縁部付近に幅の狭い平行沈線文を有する土器（94図77、95図98～104）

5～7段の平行沈線には「S」字状あるいは波状の懸垂文が付加される。また長楕円形を交互に施文、同様の効果を出しているもの（77、101、103、104）もある。平行沈線部の地文にはLR、RL縄文が使用されている。鉢、深鉢とも口縁部で若干内彎するか直線的に外傾する器形で、大型深鉢には立体的で大きな装飾突起がつく（77）。本類の土器の焼成も非常に良く、色調はにぶい黄橙色、灰褐色、灰黄褐色を呈する。

3類　磨消縄文の土器（第94図69、72～76、95図105～130）

磨消縄文による曲線文が施文された土器類で、細縄文が多用されている。Ⅲ群3類が2～3条の平行沈線により構成される幅の狭い帯状の磨消縄文であるのに対し、本類は1条の沈線により自由に施文されている。地文にはLR縄文の他にRL縄文も若干使用されている。幅の広

い帯状文、幾何学文、曲線文、入組状文等が施文されている。また深鉢口縁には立体的な大きな装飾突起がつくもの（69、72～76）もある。比較的薄手のものが多く、焼成も非常に良い。色調はにぶい黄橙色、褐灰色、にぶい赤褐色等を呈する。

4類　沈線文の土器（第86図16、94図70、95図131～134）

斜行沈線文、矢羽根状沈線文、刻み目状沈線文等の土器を一括した。

16は3個の装飾突起を有する注口浅鉢形土器である。口縁部が内彎し、口径は25.2cm、器高は16.5cm位と考えられる。体部上端には微隆起帯を有し、その上には沈線による斜方向の刻み目文を施文している。口縁部文様帯は鋸歯状に区画され、その中には斜方向の平行沈線文が充填されている。また1つの突起下には注口部を有し、他の2つの突起下には波状（変形「S」字）の隆帯文を有する。なお、体部は無文である。焼成は非常に良く、色調はにぶい褐色を呈する。YF－90グリッド、Ⅲb～Ⅲd層の出土である。

131は壺あるいは注口土器の口頸部片で、平行沈線間に矢羽根状に沈線が施文されている。焼成は良好で、色調は褐灰色を呈する。ZY－92グリッド、Ⅲb層の出土である。

132は壺あるいは注口土器の口縁部片で、口縁と平行に微隆起帯を有し、その上に斜方向に刻み目状の沈線文を有する。薄手で、焼成は非常に良く、色調はにぶい黄褐色を呈する。YF－90グリッド、Ⅲb層からの出土である。

133、134は同一個体で、壺あるいは注口土器の口頸部と胴部である。胴部上半から口縁部にかけ、沈線により曲線文を施文、その区画文内に平行沈線文が充填されている。非常に薄手で、焼成も良く、色調は黒褐色を呈する。YF－90グリッド、Ⅰ～Ⅲb層の出土である。

5類　羽状縄文の土器（第95図136、137）

鉢の口頸部から胴部上半の破片と考えられる。平行沈線下に横位方向の羽状縄文を有する。同一の原体による、回転方向を変えて作り出された羽状縄文で、原体にはRL縄文が使用されている。薄手で、焼成は良く、色調はにぶい黄橙色を呈する。

第Ⅴ群　後期初頭～中葉の土器（第90、91、95図）

本群には後期初頭から中葉に位置づけられる条痕文、撚糸文、縄文・無文の土器を一括した。

1類　条痕文の土器

本類の土器はすべて深鉢で、平口縁のものが多い。条痕は縦位あるいは縦位に近い斜位で、口縁部に無文部を有し、胴部にのみ施文するものと、口縁部上端から胴部下半まで施文するものがある。焼成は良好なものが多く、色調は灰褐色、にぶい橙色等を呈する。

2類　撚糸文の土器（第90図47、95図138、139）

単軸絡条体の回転圧痕文を本類とした。撚糸文、網目状撚糸文、連鎖状撚糸文に細分される。

本類の土器は、ほとんど深鉢で、大型のものが多い。ゆるい波状口縁か平口縁で、胴部上半が張り出し、口縁部が外反するものが多い。撚糸文のものは、口頸部に2～3条の平行沈線等の境界文を有し、胴部にのみ撚糸文を有するものの他に、口縁部上端から撚糸文が施文されるものがあるが、網目状撚糸文、連鎖状撚糸文の土器は、口縁部に無文帯を有するものがほとんどである。なお、軸に巻かれる条は、撚糸文ではL縄文、網目状撚糸文、連鎖状撚糸文ではR縄文が多用されている。本類の土器の焼成は良好なものが多く、色調はにぶい褐色、灰褐色を呈するものが多い。

3類　縄文の土器（第90図44、48～50）

口頸部の撚糸圧痕文や平行沈線文以外に文様を有せず、縄文を主文様とする土器類を本類とした。撚糸圧痕文が無文部分と縄文部分を画するもの（48）、沈線文が無文部分と縄文部分を画するもの、撚糸圧痕文や沈線文等の区画文を有しないが、口縁部を無文帯とするもの（50）、口縁部ほぼ上端から縄文が施文されるもの（49）等がある。本類の原体にはLR、RL、L縄文が使用されている。なお、撚糸圧痕文の原体には胴部縄文と同一種類のものが使用されている。また、48の口唇部には、胴部と同一のL縄文が施文されている。

本類の土器には、小型の深鉢、鉢もみられるが、そのほとんどは大型の深鉢である。平口縁あるいは4つの頂部をもつゆるやかな波状口縁で、口縁部が外反するものが多い。焼成は良好なものが多く、色調は灰褐色、にぶい褐色、にぶい黄橙色等を呈する。

4類　無文の土器（第90図51、91図52～60、62～75）

本類には、深鉢、鉢、浅鉢、台付土器、注口土器等があり、比較的小型のものが多い。深鉢は平口縁か波状口縁で、後者には頂部に2～3条の棒状工具側面圧痕文を施文しているもの（75）がある。底部から外傾して口縁に至るものと口頸部で若干くびれ、口縁が外反する器形を呈するものがある。鉢、浅鉢は、平口縁かゆるい波状口縁で、ミニチュアや小型土器が多い。口縁部で若干くびれ、口縁が外反するもの（59）、底部から口縁まで直線的に外傾するもの（54、57、71）、外彎、外傾するもの（63）、口縁部付近から直立に立ち上がるか若干内彎するもの（52、53、54、60）がある。なお63の波状口縁部には孔を有し、底部には内から外側に棒状工具を刺してあけた孔15～17個がある。64、65は底部片であるが、同様の孔を有している。壺は平口縁で、胴部の張りの小さい細長のものが多い。また比較的小型のものが多い。72、73は注口土器注口部である。

本類の土器は焼成が良好で、にぶい黄橙色、浅黄橙色、にぶい橙色、褐灰色等を呈する。

（秋元信夫）